毎十名を以て一小組とし、小組に書記一人を置く。毎十小組を以て一大組とし、大組には書記一人を置く。いづれも總書記これを選定し、社長に申請し、その許可を經て委任す。

第十九條　各職業團體中の區分左の如し。(1)農人協會。園農、小作農及び自作農社員の集合を農人協會と稱す。(2)工人協會。產業工人、手工業工人、社員の集合を商人協會と稱す。(3)商人協會。大小商人社員の集合を商人協會と稱す。(4)教職員協會。教育界中の教職員の集合を教職員協會と稱す。(5)交通職工協會。電燈、電話、鐵道、郵政、航業等の社員集合を交通職工協會と稱す。(6)自由職業者協會。新聞記者、醫師、辯護士、著作家等の社員集合を自由職業者協會と稱す。

以上各協會は均しく總書記一人、助理員一人を置く。社長は社員中よりこれを委任す。

毎十人を一小組とし、書記一人を置く。十小組を一分會とし、書記一人を置く。小組書記及び分會書記は均しく總書記これを選定して社長に申請し、その許可を得て委任す。

第二十條　陸海空軍の幹部區分左の如し。(1)陸海軍幹部は總書記一人、助理員二人を置く。社長は社員中よりこれを選任す。別に原有編制に依り、師部、團部、連部、班部に分ち、一單位毎に書記一人を置く。總書記これを選定し、社長に申請し、その許可を經て任命す。(2)海軍幹部は總書記一人、助理員二人を置く。社長は社員中よりこれを選任す。別に每一軍艦、或は陸戰隊は一隊毎に書記一人を置く。陸戰隊以下の組織は陸軍編制に照して辦理し、書記は均しく總書記より選定し、社長に申請し、その許可を經て任命す。(3)空軍幹部は總書記一人、助理員一人を置く。社長は社員中よりこれを選任す。別に每隊の書記一人を設け、均しく總書記これを選定し、社長に申請し、その許可を經て任命す。

第二十一條　海外各級幹部の特別組織に關しては、別にこれを定む。

第四章　會　議

第二十二條　評議會。評議會は諮問機關とし、定員なく、社長は社員中よりこれを任命す。社務の大計、財政監督に關する討論を行ひ、社長主席となる。半年に一回開會す。

第二十三條　各種會議。全國大會議、總事務處會議及び各級幹部聯席會議に分つ。(1)全國大會議。社長秘書、總事務處各部正副主任、各省、各團體、各軍隊の總書記を以て出席人員とし、社長主席となる。每年一回開會す。(2)總事務處會議。社長秘書、總事務處各部正副主任を以て出席人員とし、每月一回開會、社長を以て主席とす。(3)各級幹部聯席會議。書記これを召集し、每週一回開會、書記を以て主席とす。

第五章　信　條

第二十四條　本社信條を立つること左の如し。(1)凡そ個人所有の動產及び不動產は入社の際總事務處に登記すべく、もし一定額を超過する時は本社はその全部及び一部を徵集して本社の積立金とす。(2)貪臟舞弊或は賄賂接受等のことあるべからず。(3)生活は儉樸を求むべく、外國貨及び奢侈品を使用するを許さず。(4)嫖、賭、阿片吸引等の腐敗行爲あるべからず。(5)密かに營利事業に投資することを得ず。(6)一夫一妻制度を實行す。

第二十五條　凡そ社員は本社信條の義務履行の責を有す。

第六章　紀　律

第二十六條　凡そ本社社員は、均しく本社紀律を嚴守する事の義務あり。もし左記の一に違反する者は嚴重なる制裁を受くるものとす。(1)密かに他團體に加入せるもの。(2)本社內に別に小團體を組織せるもの。(3)公然本社社長に背叛せるもの。(4)本社の秘密を暴露せるもの。(5)本社の名譽を妨害する行爲あるもの。(6)本社社章を遵守せざるもの。(7)信條に違反せるもの。

第二十七條　本社社員にして、もし本社紀律に違反せるものあり、紀律部の調査を經てその事實確實なるものは、その情節の輕重を酌量し、左記罰則を執行す。(紀律部執行細則は、別にこれを定む。)(1)警告。(2)有期又は無期の社籍停止。(3)社籍辭

除。(4)徒刑。(5)死刑。

第二十八條　凡そ社員にして社籍を解除せられたる者は、本社の叛徒と認めてその公權を剝奪し、且つその一切の政治運動を防止す。

第七章　經　費

第二十九條　社員入社の時は、社金若干元を納付するものとす。

第三十條　本社社長、社員はその毎月收入の多寡に依り、累進法を以て毎月所得稅を納入するものとす。

三十元以下納入不要	
三十一元—五十元	百分の一
五十一元—一百元	五
一百一元—一百五十元	一〇
一百五十一元—二百元	一五
二百一元—二百五十元	二〇
二百五十一元—三百元	二五
三百一元—三百五十元	三〇
三百五十一元—四百元	三五
四百一元—五百元	四〇
五百一元—六百元	四五
六百一元—七百元	五〇
七百一元—八百元	五五
八百一元—一千元	六〇

第三十一條　本總章解釋の權は社長に屬す。

讀者の眉目を清くするため左に同社組織系表を示す。

- 社長
  - 評議會
  - 全國大會
  - 總務處會議
  - 各級幹部聯席會議
  - 黨務秘書
  - 內政秘書
  - 外交秘書
  - 軍事秘書
  - 財政秘書
  - 總務處
    - 總務部正副主任
    - 組織部正副主任
    - 宣傳部正副主任
    - 通訊部正副主任
    - 紀律部正副主任
    - 各團體書記
  - 省社—縣社—市社—鄉社—村社—區社
  - 小學生團
  - 中學生團
  - 大學生團
  - 農人協會
  - 工人協會
  - 商人協會
  - 教職員協會
  - 交通職工協會
  - 自由職業者協會
  - 陸軍幹部—師部—團部—連部—班部
  - 海軍幹部
  - 空軍幹部

社の宗旨及び組織は、右記救亡社組織條例(又は藍衣社總章)に依つて明かであるが、更に一層深く同社の意圖を理解するためには、同社の政策方面を詳しく檢討しなければならない。これについては、從來種種の報道があるが、先づ第一に三健運動を、第二に六大政策を、第三に一九三二年八月六日の第三次幹部會議決議事項を知らなければならない。

三健運動とは、(一)健軍運動、(二)健黨運動、(三)健財運動の三つを指す。健軍運動の要綱は左の通りである。

(一)諸將領の行動監視。

(二)諸將領既得實權の奪取。

(三)軍隊のファッシスト化。(湖北省を試辦省區に指定したとの報がある。)

健黨運動の要綱は左の通りである。

(一)國民黨内の雜系雜色を整理し、黨務を藍衣社の勢力下に置く。

(二)國民黨總理制度の復活。

(三)地方黨部に社内精鋭分子を扶植し、各級黨部の實權を握る。

健黨運動に於いて最注意すべきは、國民黨總理制度の復活である。國民黨は孫文死後、總理として適當の人物なく、一面國父孫文に對し永久の敬意を表すため、總理の位を永久に空位にして置くことに、國民黨總章で決定してゐる。然るに藍衣社は、今やこの國民黨總章の修正を企圖してゐるといふ。總章の修正は全國代表大會の職權であり、從つてこれは一九三三年開會の五全大會まで待たなければならぬ。蔣派が五全大會(國民黨第五次全國代表大會)を目指して躍起運動を開始し、各級黨部の實權を掌握せんとしつつあるのは、同大會に於いて、(一)黨總理制の復活、(二)國民政府主席の權限擴張を主張せん腹であることは明白である。この企圖の成功すると否とは、藍衣社が國民黨内の小組織たるに止まるか、將又國民黨そのものを脱離して、新ファッシスト團體となるかの關係で、この意味に於いて、健黨運動は最重視さるべきである。

健財運動の要綱は左の通りである。

(一)地權の平均。(この點はすでに我等が總章に於いて見たところである。)

(二)國營事業の名に於いて借款を起し、ファッシスティ運動の經濟的基礎を確立す(擔當者は宋子文。)。

次ぎに六大政策の内容は左の通りである。

(一)宣傳政策。邵元冲、陳布雷、程天放等が責任者となり、既述の宣傳機關を驅使し、論調の統一と宣傳戰線の調整を謀る。

(二)銀行政策。上海の金融ブルヂョアジイ、買辦階級の抱込み策で、宋子文が擔當してゐるといふ。

(三)教育政策。朱家驊、陳果夫、楊公達、何浩若等が擔當し、左傾思想抑壓、藍化教育の徹底に力を注いでゐる。

(四)對外政策。伊太利及び獨逸のファッシスト團體と結ぶこと。そのため獨逸に劉文島を、伊太利に孔祥熙を派遣した。獨逸にはその外ファッシスト練習班を送る計畫もある。

(五)對内政策。藍化運動の反對者は、すべてこれを反革命者と認め、黨外に驅逐し、政敵として撲滅する。共產黨自首法を勵行し、特別機關を設置して自首せしめ、藍化教育を施して入社させる。紅軍を政敵勢圏内へ驅逐する。

(六)恐怖政策。偵察方面は特高、軍事偵探二部に分ち、特高は谷建中を、軍事偵探は王柏齡を主任に、調査、情報偵察を行はせてゐる。剿反方面は既述の鐵血隊がその下に屬してゐる。

八月六日、漢口怡和村で開かれた第三次幹部會議には、蔣介石、蔣堅忍、鄂悌、鄧文儀等十名出席、主席蔣介石は「予は社會から獨裁の名を冠せられてゐるが、今日の政局の混亂は全くこの獨裁を行ふことが出來ない點に、その原因がある。予は四億の國民の幸福のために、獨裁以て中國革命遂行の責任と、建國の任務を遂げようと思つてゐる。救國の途は一あつて二なし。然るに社務進行に當り、同志が工作を愼まず、内部の樞機が外間に洩れたのは遺憾である。今後は機密の嚴守に留意せられたい。」と述べ、左の四項を決議した。

(一)普通黨務の整理は、陳果夫これに當るべく、左翼分子驅除は、中央黨部内同志の工作を信頼する。軍隊内に於いては、軍師旅長の權力を制限し、藍社勢力下に導くこと。

(二)軍隊の黨化教育が急務である。上海自由講座大學(張群を校長とするファッショ政治學校で、上海佛界霞飛路に在る)卒業生を、訓練教官として至急各軍隊に派遣すること。

(三)綱紀の肅清。同志の自由交通を禁じ、内部機密の漏洩を防止する。

(A)黄埔同學にして藍社に參加せざるものを反藍者と認め、警戒に附し、反動行爲ありたるときは處刑す。

(B)各地大小報の論調を監査し、社務を妨害するものは適當に處置すること。

(C)民衆團體運動に對しては、對抗戰線の機關を活動せしめ、彈壓と教化の二方面より、團體構成　崩壞、内面爆破に努め、

苟しくも黨務黨則に觸るるものは反革命罪に問ふ。

總章、三健運動、六大政策及び八・六決議を檢討するときは、藍衣社の全貌を掴むことは困難でない。要するに蔣介石は、再革命を決意したのであつて、孫文の中華革命黨組織と、その撰を一にする心境に在るものと斷じて大過なきもののごとくである。

五　左翼戰線を破る

藍衣社成立の報は何時とはなしに外間に洩れた。各方面とも怪訝の念を以てこれを迎へ、天津の「大公報」のごときは、七月下旬、蔣介石に對し、「貴下はファッシスト黨を組織したとのことであるが、事實かどうか。」との質問書を提出したが、蔣はこれに對し、「予は生きては中國國民黨員たり、死しては黨鬼たらんのみ。」(註一三)と白ばつくれた回答を與へた。大公報のごとき中立の立場に在る新聞すら、かやうな關心を示したほどであるから、藍衣社組織は、その政敵たる汪兆銘派に、異常の衝撃を與へたことは勿論である。汪派は蹶起となつて對抗運動を開始した。その第一の現はれは、黄埔同學救國團の公開狀である。この團體は黄埔軍官學校出身者中の汪兆銘派に依つて組織せられたものであるが、前記大公報の質問と前後して、左のごとき辛辣な公開狀を發した。

昨年以來の外侮、内亂、水災、匪禍は、貴下の六年間に亘る專政の結果に外ならない。貴下としては速かに下野して國民に謝すべきであるのに、却つて不良の徒を利用してファッシスト黨を組織せんとするは、上、總理の遺囑に悖り、下、同志の期待に背くものである。我等は貴下に對し、左の諸項を質問せざるを得ない。

(一)貴下は何故に黄埔同學を自己擁護に利用し、革命を顧みざるや。

(二)貴下は國民黨の領袖たるに拘はらず、何故に黨外にファッシスト黨を組織し、國民革命を破壞せんとするや。

(三)三民主義の鼓吹には、暴力政策を用ふべからざるに拘はらず、貴下は何故に鐵血隊を以て民衆を壓迫するや。

(四)貴下は皇帝となり、人生の富貴を極めんと欲すとも、黄埔同學を利用して、革命軍人の名を汚すことなかれ。

(五)若し革命救國のためファッシスト黨を組織すとならば、よろしく抗日のために出兵すべし。

(六)ファッシスト黨唯一の手段は暗殺に在るが、貴下は三千の手兵を以て、四億民衆を悉く殺し得と思惟せるや。

(七)ファッシスト黨の經費は一ケ年百二十萬元に達すといふが、貴下の江淮の細民が、日日樹皮草根を常食とせる窮狀を顧念せることありや。

(八)貴下はファッシスト黨の組織を關知せずといふも、何故中央軍官學校の軍官特別研究班、教育總隊及び團警班に對して、ファッショ的訓練をなすや。

(九)貴下はムッソリイニを敬慕すといふ。伊太利政府内部は、ムッソリイニの親戚を以て充滿し、ムッソリイニ家の天下たるの觀ありや否や。

(一〇)貴下はファッシスト黨を敬慕するも、各國ファッシスト黨は、對外不抵抗主義を國民に强制するや否や。

この質問に對して、蔣は、藍衣社の祕密決議(註一四)に基き「予はファッシズムは大嫌ひである。」といふ回答を與へただけだつたであるが、同紙の質問に對し、蔣は左の通り回答してゐる。

(註一三)胡霖、張熾章等、日本通にして且つ支那に於ける元老記者の組織せる天津大公報は、支那に於いて殆んど第一位の新聞

中國革命の組織と方略とは孫總理の定めた組織と方略とを以てのみ、國民革命の使命を完成し得る。若し外國の革命方略に倣はんとし、中國の民族性と相反する組織を用ひんか、ただに革命の成功を期し得ないのみか、國家と民族も亦、これを許容し得ない。現在、中國革命の失敗せる所以のものは、孫總理に背叛した反革命分子が、國民黨固有の組織と方略とを破壞した

からである。この固有唯一の革命組織を恢復せずして、ファッシストの組織に倣ひ、これを中國に强行せんとするは、共産黨が支那を赤化せんとするに異ならない。予は生きては中國國民黨員たり、死しては黨鬼たらんのみ。中國革命の組織には、國民黨の組織があるのみであり、中國革命の方略にも亦、國民革命の方略があるのみである。これこそ、中國革命完成に向つての唯一無二の途徑である。これ以外の組織は、絶對に反對である。予唯一の志望は、民國十三年に於ける國民黨の革命精神、國民革命の組織、方略を復興し、以て三民主義の實現を期するに在る。

（註一四）藍衣社秘密決議の一項に、「反對派の攻擊に對しては、これを相手にせず、蔣及中央幹部に於いて、談話發表の必要ある時は、正反對の表示をなし、以て反對派に口實を失はしむること。」といふのがある。

まことにアッサリと片附けられたものである。改組派には業を煮やした。さうして第二段、第三段の策に取掛つた。先づ眼に着くのは宣傳陣、文藝陣の活躍である。改組派には首領汪兆銘はじめ、陳公博、顧孟餘以下、曾仲鳴、唐有壬、林伯生、黄廷凱等、能文の士が少くなく、これらの連中が、中華日報、南華評論、南華文藝等に據つて、「國民黨は藍衣社に滅ぶ。」といふ中心スロオガンを掲げ、一齊にファッショ攻擊に進んだ壯觀は、近年稀れに見るところであつた。これにつづいて行はれようとした對抗手段は（一）顧孟餘（鐵道部長）及び陳孚木（左派學生運動の指導者）に依つて計畫された全國交通工人の團結で、蔣の行ふことあるべきクウデタアに對抗して、全國鐵道の總罷業を行ふことになつてゐるといふ。（二）は各級黨部への浸蝕である。（三）は暴を以て暴に報ゆる激烈手段で、藍衣社の鐵血隊に對抗して、盟血隊を組織し、領袖擁護に當らしむることである。

かくて蔣汪兩派の對抗は、三月以來異常に激烈を極めたが、軍界に實力を有しない汪派は、漸次蔣派のため壓迫せられ、六七月頃にはほとんど手も足も出ないくらゐに押しつめられた。鐵血隊活躍の噂はますます高くなり、クウデタアの謠言盛んに行はれ、汪兆銘の身邊危しとのデマさへ亂れ飛ぶに至つたので、汪も終に下臺を覺悟し、八月六日、張學良に對し、有名な「刺し違へ電報」を發し、夜逃げ同樣に南京を去つたのである。右通電は張學良を痛罵し、失地恢復に努力することなくして、徒らに軍費を要求することを非難してゐるが、眞意はソンナことに在るのではなく、全く蔣派のクウデタアを怖れたからで、果して、張學良驅逐の目的を達しなかつたに拘はらず、（學良は北平綏靖公署主任を認められたが、公署の後に出來た北平軍事分會は依然として學良派が多數を占めてゐる。）自分は結局下野外遊（十月二十二日上海發渡佛）の餘儀なきに至つた。陳公博、顧孟餘等は、尙政府部内に殘つてゐるが、機を見て無臺を下る準備怠りなく、改組派の左翼戰線は、跳梁半歲餘にして、藍衣社の鎧袖一觸、もろくも潰滅し去つたのである。

六　ファッショは藍衣社の專賣か？

左翼戰線を蹴散らして、藍衣社の勢焰正に冲天の慨があるが、支那にファッシステイを打ち立てんとするもの、ただ一藍衣社あるのみであらうか。藍衣社以外に、ファッシズム運動を試みようとしてゐるものはないであらうか。これを民國政界の分野に檢して、北支那に中國青年黨及び中國國家主義青年團の存在を發見する。

一九二三年十二月、それは孫文及び中國國民黨の聯俄容共政策成熟の秋であつたが、その頃巴里に留學してゐた學生曾琦、李璜周太玄、張子桂等に依つて、國家主義團體「中國青年黨」並びにその外廓團體たる「中國國家主義青年團」が組織された。宗旨は反共産、排一黨專制であつた。南京に在つてこれに呼應したものに、陳啓天、余家菊の一派があり、翌一九二四年十月曾琦、李璜の歸國とともに、兩派合體して機關誌「醒獅週報」の發刊を見た。爾後黨勢に一進一退あり、はじめ中部支那を根據としたものが今日では北支那を根據とし、約三萬の黨員を擁してゐる。反共産（反階級鬪爭）、排國民黨（反一黨專制）の旗印しは今日でも變りはないが、伊太利に於けるファッシスト勃興徑路に見れば、この團體なども、充分支那ファッシストたる可能性がある。果せるかな藍衣社新興の際、黨、團の代表者は南京に入り、藍衣社との提携を策し、一氣に支那ファッシステイ樹立に邁進しようとしたのであるが、藍衣社は上述の如く、先づ國民黨内の小組織として進行し、（一）黨總理制の復活、（二）國民政府主席の權限擴張の二目的を達するに於いては、必ずしも國民黨を飛び出さなくてもいい。失敗した場合、はじめて新黨を組織しようといふ、二段構へであるので、青年黨・團代表者は、今日はまだ提携の時期でないとして、藍衣社との提携を斷念したといふ（註一五）。これに依つて觀れば、

支那ファッシステイ運動は、目下のところ藍衣社の專賣であり、それも「黨內小組織運動」といふ「擬裝段階」に在るわけで、眞正ファッシステイ運動は、藍衣社の第一段の構へが失敗したとき、はじめて開始されるのだといふ豫想が成立するわけである。

（註一五）最近南京を視察した有力な支那通某氏は、某倶樂部席上で視察團を試み、ファッショ運動に言及して左の通り語つてゐる。

黃埔同學會の連中が、蔣を守立てて强力な政權を作るといふ意味に於いて藍衣社を組織した。これをファッショだファッショだといふのだから、蔣個人の獨裁强力政權なら贊成だといつて、これと提携して一緒に結束したものが、例の國家主義青年黨です。黨の加入に依つて、藍衣社は勢ひを增した。ところが藍衣社の主張は、國民黨黨部の獨裁で、强力な政權を作りたいといふのであり、それでは國家主義青年黨が共鳴するわけに行かない。彼等は國民黨部の獨裁政治でやつて行かうといふ考へはない。蔣介石はあれだけの經歷を經、あれだけの人格者であるから、先づおのれの主義に共鳴するなら、蔣を立てて行かうそれなら矢張り强力な政權でなければならぬ。蔣をムツソリイニに擬し、さうしてファッショ運動をやらうといふのが、國家主義青年黨をはじめ、藍衣社以外のファッショ派の考へなのである。しかしながら肝腎の中心をなすところの蔣の乾兒である廣東の黃埔軍官學校を出たところの中心人物は、僅かに五十人か六十人くらゐである。それではどうしても個人の獨裁、强力な政權を立てるといふことは出來ない。いへば國民黨の黨議に違背するといふのです。頭の中で思つてゐても、主張することは出來ない。主張すれば反革命で首をチョン切られるのです。そこで國家主義青年黨と一諸にやらうといつても、一緒にやることが出來ないといふことが判つたので、國家主義青年黨の人人は、離れてしまつたのである。（『國際事情』三四五）

第二節　藍衣社の正體

藍衣社が生れるまで

九・一八事件の直後、一九三一年の十月、流石に焦慮してゐる蔣介石に對して、劉健群から、「貢獻一點整理本黨的意見」といふ建議書が提出せられた。劉は焦頭爛額の危機を叫び、中國國民黨の弱點を指摘し、黨建て直しのために、强力なる組織を必要とすると、いひ切つたのである。劉は貴州人で、蔣直系將領の第一人者である何應欽と同鄕であり、その推薦によつて、孫の知遇を受けた男である。

江浙人の巧慧さはないが、ヒタ向きに押して來る貴州人劉の純情に、蔣は眼がしらの熱くなるのを覺えた。さうでなくても、下地は嫌ひでない。彼の敵、共產黨人は、彼を罵しつて「ボナパアテイスト」といつたが、それは正しい批判で、一九二七年の淸黨以來、とつくに「黨・國すなはち我」といふ境地に達してゐた彼である。

「うまく、いひ當てよつたナ。」と、苦笑しつつ、――一瞬の後には、眉をあつめて、黨內の新小組織を、頭の中に組み立ててゐた彼だつた。

今日、全支那を震撼せしめつつある藍衣社。中華ソヴエート共和國政府の、國家政治保衞局――俗稱「赤ド」――と相對して、白色ゲ・ペ・ウと稱せられ、白色テロの本源と目せられてゐる機關は、かうした、彼の一念から生じたのである。ゲ・ペ・ウといふは語弊なしとせぬが、ヂヤアナリステイックには通るだらう。

新組織結成を決心した蔣介石が、その工作人員として着眼したのは、――否、蔣に、さうした意圖のあることを察して、進んで買つて出たのが、C・C團と、黃埔系であつた。C・C團は、革命の元勳、故陳其美の甥、陳立夫、陳果夫兄弟を中心とする一派である。蔣が、陳其美の系統であることは、もはや周知の事實であるが、その關係上、彼は陳兄弟を引立て、一九二六年頃から、國民黨中央黨部における工作を一切彼等に一任した。彼等も蔣の付託に背かなかつた。蔣の中央黨部における勢力は、兩陳の努力によつて、このときますます堅固となつて行きつつあつた。蔣が、第一にこの派を思つたのは當然のことである。

一方、黃埔軍官學校は、これ亦周知のごとく、蔣の武力の發祥地であり、その卒業生團體たる黃埔同學會、そのやや廣義な團體

である勵志社は、C・C派浙江財閥とともに、蔣派政治的勢力の根源でもある。しかも、この層には、急進分子多く、中にも賀衷寒などは、早くから知られてゐた。

で、この兩派が中心となつて、一九三一年秋も終りの頃、「中國棒喝黨」といふ祕密結社が產れた。

首腦の面々

この中國棒喝黨こそ、藍衣社の前身である。首腦部にあつたのは、C・C團の陳立夫、陳果夫、黃埔系の賀衷寒、鄧悌、蔣堅忍、曾擴情、康澤、杜心樹、潘佑强、蕭贊育、桂永清、劉吟堯、鄧文儀、鄒必民、胡宗南、（以上十三人を、十三太保といふ）戴笠、孫常鈞、それに例の劉健群等であつた。

藍衣社と改稱されたのは、一九三二年三月上旬で、藍衣社總章三十一ヶ條が、同時に制定された。それから今日まで、約二年半首腦部の顏觸れにも相當變更があつた。記述の便宜上、この項で、一括して披露する。

一九三四年一月頃の情報によると、現首腦部は左のごとくである。

社　長　蔣介石

副社長　張學良

委　員　何應欽　陳果夫　吳敬恒　張治中　錢大鈞　曾養甫　劉健群　徐錫根　劉湘　熊式輝　劉峙　張繼　楊永泰　何成濬　邵力子　朱紹良　賀耀祖　戴天仇　羅文幹　毛炳文　徐會之　韓復榘　谷正倫　宋美齡　陳立夫

秘書長　陳立夫

吳敬恒だとか、戴天仇だとか、羅文幹だとか、やや疑はしい人物が、委員の中に包含されてをり、無條件に信用出來ないが、中央部の組織としては、先づこの邊に落附くのが當然だらう。地方部の首腦部を同年六月頃の報告によつて、拾ひ出して見る。

（A區）　江蘇、浙江、福建、江西、安徽五省を管轄してゐるといはれる。オルグ陳文炳（黃埔系）。

（B區）　廣東、廣西、雲南、貴州。

（C區）　湖北、湖南、四川、寧夏。オルグ張。

（D區）　甘肅、陝西、山西。オルグ邵力子。

（E區）　河北、山東、察哈爾、綏遠、熱河。オルグ蔣伯誠、王天木、周仁鳳。

（F區）　滿洲國內における秘密工作。

（G區）　新疆、青海、西藏、蒙古。

以上の二つの表で、中央、地方に亘つて、大體首腦部の見當がつくが、私としては、これらの情報を、怪しいと斷定するわけではないが、少し腑に落ち兼ねる點があるので、少し想像をも交へ、左に表示して見る。

要するに藍衣社なるものは、蔣介石、宋美齡を總大將とし、外樣系の張學良を副とし、その下にC・C團の陳立夫、陳果夫、直系將領、黃埔系の陳文炳、賀衷寒、鄧悌（以下いはゆる十三太保）、蔣系文治派の邵力子、朱家驊、周佛海、張道藩、陳布雷、程天放等學者としての高一涵、楊公達、陶希聖、何浩若等、青帮の杜月笙、王天木等、特殊技術人材としての顧順章（もと共產黨中央委員、歸順して反共探偵に從事してゐる）、谷建中（鄧演達の逮捕者）等を幹部としたもので、中心勢力は宋美齡、陳立夫兄弟、陳文炳、賀衷寒等にあるものと推測せられるのである。

宋美齡
蔣介石
張學良
陳立夫
張　群
陳果夫
蔣伯誠
邵力子
張道藩
陳布雷
張治中
程天放
周佛海
朱家驊
陳文炳
杜月笙
胡宗南
桂永清
鄧文儀
戴　笠
曾擴情
杜心樹
賈衷寒
康　澤
劉健群
鄧　悌
楊公達
蔣堅忍
潘佑强
蕭贊育
劉吟堯
鄒介民
孫常鈞
周仁鳳
顧順章
王天木
谷連中
路竹平

藍衣社の役割

藍衣社の成立したのは、前述の通り、一九三二年の三月であるが、その、あまねく

國外に知られたのは、同年十月頃、有名な「滿洲抛棄宣言」を、同社が發出したといふ報道が、上海發電通によつてキャリイされて以來のことである。これによつて、蔣直系の祕密結社があつて、支那ファッシステイ樹立の準備に、大童になつてゐるといふことが、朧ろ氣ながら、世人に諒解され、やがてそれを追つかけて、同社の組織及び活動狀況に關する情報が、續々日本に入つて來た。さうして、それらの情報は、色々な形で紹介され、中には、社の總章三十一ヶ條の全文をすら、素破抜いたものがあるくらゐだから、いまさらここで、改めて解說する必要を見ない。ただ蔣介石が、かうした有力な工具を用ひて、何をしようとしてゐるのか？　その意圖については、これもすでに誰かによつて道破されてゐるとは思ふが、今述べないわけには行かない。

彼の意圖は、要するに中華民國の大總統になりたいのである。それも、袁世凱や、曹錕のやうな大總統でなく、もつと獨裁的な大總統になりたいのだ。では、どうしてその目的を達成するか？　この點を考察するに當つて、我等の第一に考慮しなければならないのは、中國國民黨の存在である。蔣介石と、歷史上切つても切れぬ關係にあるこの黨を、敢然として蹴飛ばして、全然新らしい基礎の上に、彼のファッシステイを樹立することは、彼としては實はさうしたいのであらうが、遂行上、なかなかの困難を伴ふでイージーゴーイングな方法ではあるが、彼はやはり國民黨を基礎として、大總統になるといふ考へを、まだ抱いてゐるのだと、私は觀る。

そこで、彼のプログラムは、かうだ。藍衣社をますます強化し、國民黨の中央・地方黨部を、藍衣社員で絕對的多數を占めるやうに導き、一面、三民主義をファッシズムに近づけ、すなはち三民主義に、ファッシズム的新解釋を與へ（藍衣社員中の周佛海、その他高一涵、陶希聖、楊公達等の學者は、そのために役立つだらう。）素地をつくつた上で、國民黨總章を修正し、同總章において、「國父孫文」のものとして、永久に空位とすることになつてゐる「總理」の地位を、何人でもなれることにしようとするだらう。總章の修正は、黨の全國代表大會でやることになつてゐる。この意味において、一九三四年十一月頃開かれる豫定の、第五回大會（通稱五全大會）が、今から注目されるのである。

この修正が、大した故障なしに通れば、彼の目的は半分完成されたも同樣である。すなはち、國民黨總理となり――進んで中華民國の大總統となることは、もはや當然の順序だからだ。

これを蔣介石の第一コースと呼ばう。

第二コースは、總章修正が成功しなかつた場合である。成功するかしないかの見きはめは、恐らく事前につくであらうから、或は、五全大會を待たずして、その前に、もうこの第二コースを取るかも知れない。すなはち國民黨と絕緣し、藍衣社を明るみに出し、一氣にファッシステイを樹立するのである。

所詮、この二つのコースしかない。さうして、私の直感に據れば、蔣は結局、第二コースを取ることを餘儀なくされるだらうと信じてゐる。

白色テロの嵐

第一コース、第二コースのいづれを取るにせよ、蔣としては、一日も準備を忽がせにするわけに行かない。で中央・地方黨部への浸蝕、黨義のファッショ的改正、軍資金の充實、外交關係の改善、軍隊のファッショ化、各地に實力を擁する將領の監視、及び彼のコースに對する最大の障碍である共產軍の討伐等に、彼の全力を集注して來た。

その結果、藍衣社の組織網は、見る〳〵うちに擴大され、南京、南昌、上海は勿論、武漢、北平、天津、青島等には、世人の想像以上の、鞏固な組織が出來上つてゐる。就中、上海及び天津は、その活躍最も目覺ましく、「制裁部」の捲き起す白色テロの嵐は日一日と、速度と深度を加へつつある。

やや精細な情報網を張つてゐる向きでは、藍衣社制裁部のテロを、百數十件、少くも數十件と算へてゐる。それほど網の目を細かくしなくても、上海での楊杏佛暗殺、丁玲女士の失踪、天津での張敬堯暗殺、白逾桓暗殺未遂事件などは、日本の新聞紙にも載つたから、今では誰知らぬものもなからう。

楊杏佛の本名は楊銓。コーネル大學出身で、共産黨系左翼外廓團體を創立して、盛んに活躍したため終に暗殺された。丁玲女士は、左翼女文士、張敬堯はもとの湖南督軍、白逾桓は老國民黨員で、最近は天津で「振報」といふ新聞を起し、公正な議論を吐いてゐたので、睨まれるやうになつたのである。

新生活運動と文化運動

藍衣社の組織網を擴大し、白色テロを以て反對者を威嚇する一面、蔣は文化運動を以て、國民思想の統一を企て、ファッシズム採用に向つての、よき素地をつくらうと計畫しはじめた。一九三四年二月以來、蔣が南昌の剿匪行營から叫びはじめた新生活運動及び南京、上海方面において、彼の追隨者によつて發起された「中國文化建設協會」の運動は、その具體的現はれである。

新生活運動は、民國初年、汪兆銘等の提唱した「進德會」の運動に似た、一種の道德改進運動のやうに見える。「禮儀廉耻」といふ、支那固有の舊道德を、「衣食住行」に實踐しようとする提唱で、一見、平凡他奇なき標榜であるが、その底に流れる用意は一切の外來スローガン――「打倒帝國主義」「不平等條約撤廢」等――が、民衆に對して魅力を失つたのに乘じて、人心を右に向つて一轉させ、「柔順」といふ材料で、ファッシズムの通る途をペーヴしようとしたに外ならない。

文化運動の方は、「中國固有の文化を發揚し、各國の進歩せる文化を融化し、新らしき中國文化を創造する。」などと謳つてゐるが「思想には、思想を以て。」――すなはち共産思想の撲滅が、その唯一の目的であると確聞する。（『世界知識』一九三四・九）

第三節　蔣介石の「新生活運動」

一　有利な環境を利して

環境、すべてが、今や蔣介石に有利である。

羈建革命を潰滅せしめたことが、その主因である。それに依つて、福建が彼の勢圏内に入つた。福建の特殊地位、特に對日關係に鑑みて、老練な陳儀を省主席に任命し、廣東への抑え、且つは共産軍討伐のためには蔣鼎文、それに、曾つて鄂豫皖ソヴェート區の最重要根據地たる金家寨を攻陷して、その名を永久に行政區劃名にとどめた勇將衞立煌を配し（金家寨に縣治を置き、立煌縣と稱す。）水も洩らさぬ陣立てを整へた。この一事は、意想外の影響を廣東に及ぼし、廣東獨立の重要機構たる西南執行部の取消しが可能とならうとし、その他廣東陸軍の改編はおろか、陳濟棠の虎の子、三百臺の飛行機を擁する廣東空軍の接收すらあながち夢想でないやうな狀態を現出した。

一方、兎角の噂のあつた張學良も、三省剿匪副司令として武漢に納まることとなり、その直系の軍隊も、比較的圓滑に移動を了らうとしてゐる。張が、藍衣社の副社長になつたといふ噂すらある。

蔣の命取りといはれる共産軍討伐も、少しづつ進歩を見せてゐる。詳しい說明は、後日の機會に讓るが、最近靑の支那紙に據れば、江西に於いては零都を指ざし、四川に於いては巴中をマークしてゐるやうだ。兩地は、ともにその方面の共産軍に取つて、最要の根據地ではないにしても、次要のものたるを失はない。そこが戰線になつてゐるといふことは、この方面に於いても亦、蔣に取つて有利な環境が造成されつつあることを語る。

邊疆の動搖は、蔣のいはゆる「統一」に關係ない。イザとなれば、「斷臂存身」の覺悟を定めてゐる彼だ。臂を切り捨てても、本身の存は圖らなければならぬといふ說を、かつて主張したこともあるのだ。赤化將軍（？）孫殿英や、ダーク・ホース劉桂棠（黑七）やの蠢動は、これ亦齒牙に掛けるに足りない。

少しく滑べらせ過ぎたが、序でにもう一滑りをさせると、國內の安定狀態は（この國內といふ言葉に語弱はあるが）この六七年來未曾有ともいへるのだ、正にチャンスである。豐飮蔣にして、この絕好の機會を失することはあり得ない。

いかに利用するか？　問に應じて返つて來た回答が、いふところの「新生活運動」である。

二　Imported Slogans への代替

第三節　蔣介石の「新生活運動」

國民革命以來、種々のスローガンが叫ばれたが、それはほとんどすべて舶載ものであつた。打倒帝國主義・不平等條約撤廢、等等。これらの、國家救濟、民族復興に關する外來スローガンは、しかし久しからずしてその魅力を失ひ、そのあるものは忘却されそのあるものは無視、拒否された。今や支那國民は、その凝視すべき目標を失つてゐる。多少の凝結性を見せた支那民族も、今や再び「一盤の散沙」に歸らうとしてゐる、それを憂へる心が、蔣介石になかつたとはいはない。しかしそれ以上、環境の有利なるに誘はれて、彼は「新生活運動」を提唱したのだ。かつて共産軍の討伐に當つて、曾國藩・左宗棠をかつぎ出した彼は、今の場合に於いても亦、古い經典の耽讀から、「禮儀廉耻」の四字を引き出し、それを衣、食、往・行に現はすことを出發點とする新運動を提唱することに成功した！

彼自身をして定義を語らしめよ。新生活運動とは「禮儀廉耻に依據して、最高の準則となし、自己日常生活の衣、食、往、行より起し、努力して自己の全生活を改進せしめ、自己生活の德性と智能とを增進する」ことである。一見平平凡凡な提唱のやうだが再思、その然らざるを悟る。飛んでもない大題目だと氣附く。何となれば、それは國民性の徹底的改造を意味するからで、彼も流石に孫文の弟子だけあつて、何分にも話が大きい！

三　民心轉換のために

しかし彼もその大題目たることを知つてはゐる。出來さうもない相談であらうと思つてゐるに相違ない。しかも敢へてそれを提唱したについては、かずかずの用意があらうといふものだ。

彼の新運動提唱の用意。

一つには、民心を國內的に轉換させるためである。九・一八以來、否、更に遡つて國民革命開始當時から今日まで、支那の民心は、外へばかり向けられて來た。最初の間、それは蔣介石に取つて有利であつた。それを背景にして、いはゆる「革命外交」に、ある程度の成功をかち得た時代もあつたのである。だが、今は違ふ。一九三三年五月の北支停戰協定以來、彼が用心深く、一歩一歩轉換させて來つつある外交方針に對しては、彼は、國人から、とかくの批評をして貰ひたくないのだ。「おれのやつてゐることは、ともかく間違ひはない。ヂッと附いて來てさへ呉れれば、……」と、彼は考へ、しば〳〵言ひもした。けれども民衆は彼の註文を容れない。やゝ惰勢的にではあるが、依然として對外硬の書生論を發する。それを何とかして緩和したいと、種々研究の末到達したのが、新生活運動であつた。眞正面からは、誰も反對出來ない提唱であるし、中樞に據つて、者ども集まれの官製運動であるから、目前相當の效果を擧げてゐるやうに見える。

四　獨裁の準備工作

この運動を主唱する蔣の第二の用意は、それを獨裁の準備工作たらしめようとするに在る。

蔣が獨裁を企圖してゐることは、藍衣社の出現以來、隱れもない事實である。ところが世間には、藍衣社の重要性を疑ふ向きがあつて、黃埔軍官學校出身者の單なる倶樂部であるとする人もあるが、實際は決してさうでない。裏面の進行は、それこそ一日千里の勢がある。が、こゝでは、その詳しい實情を說く遑がない。たゞ藍衣社なる工具があり、蔣がそれを使つて、獨裁といふ目的を達すべく意圖してゐることを指摘すれば足りる。

蔣が獨裁の目的を達するためには、歩一歩、民衆をその方向に導かなければならない。それには、民心の團結が最必要である。古來幾多の奸雄は、皆そこに意を用ひた。手近な一例を擧ぐれば、袁世凱がある。彼が皇帝たらんとするや、先づ孔子教の尊崇工作をやつた。封建道德を說くものとして、民國以來弊履のごとく棄てられた孔子教を復活して、これを國教にしようとした。つゞいて袁崇煥追慕をはじめた。袁は明末崇禎朝の名將で山海關一帶に據つて淸の侵略に抵抗し、後讒言に依つて罷められた不遇の英雄であるが、袁はその同姓を利用し、自分の祖先は袁崇煥だといふ風に宣傳した。ちやうど成金が、どこからか系圖を買つて來るやうに。最後に祭天の儀を復活した。これは皇帝でなければやらないものなのである。かうした色々の準備工作をやつて、さうして遂に帝位に卽き、僅か八十三日であつたが、ともかく洪憲帝を名乘つたのであつた。

蔣介石の新生活運動を、袁世凱の孔子教尊崇に對比し、二者その軌を一にするといふ人がある。一つの見方たるを失はない。

五　運動の發生と經過

二月の十九日に、蔣は南昌行營に於ける擴大記念週に出席し、「新生活運動」の要義と題する講演をした。これが一般に本運動の發聲として知られてゐる。その大要を示す。（和田賢氏の譯譯に據る。）

江西省は國家建設と民族復興の模範とならねばならぬ。わが江西省の知識分子はまづ民族復興の先鋒となつて全國を指導せよ。九・一八の東北失陷以來わが國はなぜ外國の侮りを受けたか。その理由をよく考察せよ。武力が弱かつたからかさにあらず。國民の知識程度道德程度が列國に比して低いからなのだ。わが國家建設民族復興のためには第一に國民道德を高め、第二に一般知識の水準を高めることが先決問題なのだ。ドイツの復興振りを觀れば余の說くところがよくわかる。ドイツはヴェルサイユ條約により多額の賠償金を背負ひ、軍備は制限されてゐる。人口僅か六千萬、兵力十萬のドイツがヒットラーにより訓練されてめき〳〵復興し軍備は原則上平等を認められ、賠償金は減額されたではないか。人口四億、二百萬の軍隊を持つ民國が不平等條約撤廢のため何年奮鬪して來たか。年々外國に支拂ふ賠償金のためどの位苦しんでゐるか！　要するにドイツの文明がよく發達しわが國民生活の標準が低いからかういふ結果になるのだ。故にわれ〳〵は先づ日常の衣、食、住行を整齊、清潔、簡單、質朴の四原則によつて規律し、禮儀廉恥に合致させねばならない。この新生活運動は目前の建國と民族復興にもつとも有效な革命運動であるが、その目的は國民生活の徹底的軍事化にある。われらは日本と必ずしも砲煙彈雨のうちに對陣するわけではないが、彼此の日常生活を比較すれば、その國力の强弱は明白だ。たとへば日本人は昔はどこにでも勝手にたんを吐いたが、明治維新の改革以來公衆衞生の思想が發達し、現在では鼻紙に吐いて決して路上や部屋には吐かない。西洋人がハンカチにとることは諸君の御存知の通りだ。余は曾つて日本に留學して軍隊生活を送つたが、軍人はもちろん一般國民も毎朝冷水で顏を洗ひ中國人の樣に湯を使はない。また日本人は冷たいご飯を食べる習慣がある。しかるに中國人は冷水は絕對に使はずご飯は熱くなければしない。思ふに日本の軍隊生活はそのまゝ禮儀廉恥の精神に合致し、日本の國民生活は酷苦缺乏に堪へ、生活そのものが軍事化してゐる。これが日本の强い所以であり、一朝有事の際は進んで國家の犧牲となる精神を養つた所以である。余は前述の新生活運動を半年以內に全國に擴めるつもりだ。さすれば國民生活は必ず革新される。その時こそ、不平等條約の撤廢も民族の復興も、日本に對する報復も始めて可能となるのだ。

「我等は必ずしも日本人と砲煙彈雨のうちに對陣するわけではないが」とあるが、原文に據ると、「砲煙彈雨の間に日本人と勝負を決するまでもなく、日常生活に於いて、すでに日本人に負けてゐるのだ」といふほどの意味らしい。

それはとにかく、この有力な發聲を得て、運動は忽ち全支那に波及した。南昌では二月二十四日發會式が行はれ、軍民五千餘人が出席し、四月十一日の市民大會には、八萬の民衆が參加したといふ。南京では三月十四日に市民大會があり、上海、北平、天津漢口、杭州、安慶、西安等、およそ蔣介石の勢圈たる地方では、同樣の大會が擧行された。その中で記憶して置いていいのは、北平の大會で、張繼が「蔣氏をして支那のヒットラーたらしめよ」と絕叫した一事である。

尙、別な意味で注目すべきは、汪兆銘が贊意を表したことである。（三月十六日南京勵志社―黃埔軍官學校出身者の倶樂部―に於ける演述。）

支那に「五分間の熱心」といふことがある。あらゆる運動がこの語の制約を受けるやうだ。新生活運動も、恐らく例外とはなるまい。實益を伴ふ運動ならば、或は永續きもしやうが（例の排日貨のやうに）禮儀廉恥の抽象論では、永續性は最初から疑問だといはなければならぬ。（『國際評論』一九三四・五）

第五章　北支那局勢の考察

第一節　北支排日グループの正體

一

天津は日租界須磨街の、義德里といふ袋小路。その中ほどの三十三號に、二階三間、階下三間の、華洋折衷の住宅がある。里の入口には、六人の門番といふか、不寢番といふかともかく一人宛交代で堅めてゐる。用心堅固といへぬこともないが、――生憎五月三日の午前四時ごろには、不寢番は眠つてゐたのである！　自動車で乘附けた三人の青年、いづれも輕裝。

「よく寢てゐやがらあ」

乘捨てて、跫音を忍ばせながら、薄明りに門牌を讀む。首領らしいのが、

「三十三號、ここだ！」

一人が、重さうに提げて來た斧で、ハッシとばかり門を打つ。さうして穴をあけたといふのだが、一說に據れば鋸でやつたのだといふ。後の說が正しいらしい。ともかく穴をあけて、犬のやうに潛り込む。勝手知つたものか、すぐに二階にあがる。前にも書いた通り二階は三間。その眞中の室にすべり込む。

華洋折衷といつたが、內部は洋室と思へば間違ひない。隣室に通ずるドア。窓際にダブルベッドがあつて、六十一歲の白逾桓が四歲の子、振英を抱いて、前後不覺に眠つてゐた。當年國會の激烈派として、袁世凱から「暴徒！」と、罵しられた不敵な面魂はまだどこにか殘つてゐるが、爭はれぬ、寄る年浪の、好々爺としても通りさうだ。三人の青年は、顏見合はせた。

パン
パン
パン

――三發の銃聲と、魂消えるやうな子供の泣き聲に、隣室に寢てゐた白の妻君、林氏が寢衣のまま飛び込むのと、三人の青年がピストルを擬しつゝ、樓を下るのとが、同時であつた。健氣な林氏は、不慮の出來事に顚倒なしがらも、ボーイを交番に走らせたり、醫者を呼ばせたり。しかし、勿論、白は卽死。ただ子供は、腿に擦り傷を受けただけだつた。間もなく日本租界警察署から、司法主任と特務課主任が、巡査を連れて來て檢屍をしたが、よほど巧妙に立廻つたと見えて、何の證據も殘つてゐなかつた。

天津で發行される親日滿新聞「振報」社長白逾桓は、かうして暴徒の手に斃れた。その四時間前、同じ日租界の北洋飯店（飯店はホテル。）でも、他の親日滿新聞「國權報」社長、胡恩溥が暗殺されてゐる。卽死ではなく、擦り傷を負うた妻の沈竹君が附添つて、醫谷醫院にかつぎ込んだが、注射の甲斐なく絕命したのだ。

一夜のうちに、親日滿新聞社長が、二人までも暗殺！　四日の朝刊で、このことを知つた天津人士は「ただ事ではない！ただ事では濟むまい！」と、期せずして堅唾をのんだ。

白逾桓（楚香）は湖北人、大冶鐵鑛の近在で產れた。明治法律學校の出身で、日本留學中「革命同盟會」に加入し、居正（現國民政府司法院長）田桐とともに「湖北の三傑」といはれた男である。第一革命當時、湖北都督府の參議となつたが、第一國會成立するや、田桐とともに衆議院議員に當選し（居正は參議院議員）北京に入つて「國民新聞」を主宰し、盛んに袁世凱攻擊をやつた。今から二十二年前だから、三十八九の男盛り。水際立つたあつぱれ振りで、日本人の間にもよく知られてゐた。第二革命には田桐等と一緖になつて吳淞砲臺に討袁旗を揭げた組だつたが、御承知通りの失敗で、日本に亡命した。孫文もこのとき亡命してゐて、革命のやり直しを目標として「中華革命黨」を創立したのだから、一體なら彼もこれに參加すべき筈なのだが、どうしたわけか入黨しなかつた。孫

文系との緣は、このときに切れたわけ。袁の死後國會が復活（一九一六年）すると、彼は「丙辰倶樂部」の領袖として活躍し、黎元洪に依つて、第二回の國會解散が行はれると、廣東非常國會では「民友社」系として活動をつづけた。一九二二年頃には、孫文の敵陳炯明に接近して多年の同志と完全に離れ、北に走つて山東督軍、張宗昌の麾下に投じたが蔣介石の北伐成功後、再び日本に亡命し、青山邊にカッフェーを開いてゐたと。天津に歸つて、前記「振報」を出したのが、停戰協定成立後間もなくであり「斷臂存身」を根本信條として、日滿支親善を唱へ國民黨攻擊をやつたので、同年十一月二十八日耕餘里二號の自宅で入浴中を、三青年に狙擊され、重傷を負うたが助かつた。人と爲りが直情徑行、大聲叱呼するタチだつたから、狙擊されることこれで三回、第四回目にたうとう斃れたのである。

二

殺されたのが親日滿系新聞の社長だ。暗殺系統は、常識で判る。藍衣社？　憲兵第三團？　政治訓練處？　かう目星をつけて、探つて見ると、意外に早く、一切が明白になつた。御承知の通り、

『支那には「祕密」なし』

首魁も、それから、憲兵第三團長、蔣孝先（蔣介石の親戚といふ噂がある）政治訓練處長、曾擴情（藍衣社發起人の一人）等にも、ツナガリのあることが判つた。賞金の額さへ明かになつた。一切の確證を握つた。そこへ「孫永勤匪の熱河侵入、その討伐問題」が起つた。

一九三三年五月三十一日調印の「北支停戰協定」それに據つて設定された「非武裝地帶」すなはち「停戰區域」（略して戰區）を根據として、三回まで熱河省南部に侵入し同地方の治安を擾亂した孫永勤匪に對してはわが熱河部隊その都度これを掃蕩したが、四月下旬、遂に最後的にこれを擊破し、匪は雪崩れ打つて、河北省遵化縣に集結した。一體戰區内に於ける討匪は、支那官憲並びに停戰協定に據つて出來た「保安隊」の責任であるのに、保安隊はテレツとして傍觀し、遵化縣長・何孝怡は、積極的に匪を援助し、（これは今はじまつたことではない。）遵安縣では敗匪をかくまふし、于學忠（河北省政府主席、舊東北軍系）からは武器を供給するし、何のことはない、戰區そのものが、對滿陰謀の策源地となつたやうなものだ。業を煮やした關東軍では、重大なる決意を以て長城線を超え、遵化縣下に孫匪を追詰め、五月二十四日孫永勤以下三百餘名を擊殺し、一先づ掃蕩を終つたのであつた。

「天津白色テロル」と「孫匪問題」その一切の背景を明知した關東軍及び北支那駐屯軍はこれを停戰協定の破壞行爲、北清事變天津還附公文違反と認め、五月二十九日、北支那駐屯軍參謀長酒井大佐駐北平高橋武官をして、何應欽（北平軍事分會委員長）兪家驥（行政院駐平政務整理委員會祕書長、委員長―黃郛―代理）を訪問せしめ「通告」及び「要望」を手交させたのである。その内容。

「支那官憲主動の對滿陰謀、長城附近に於ける支那義勇軍への援助は、停戰協定の破壞であり、しかもその策動が、北平、天津地方に在る以上、日本軍はやむを得ず長城線を越えて進出する必要を生ずるかも知れない。それだけではない。場合によつては、北平、天津地方を、實質的に停戰區域内に包含せしむる必要を生ずるかも知れぬ。又、天津に於ける白逾桓、胡恩溥暗殺のごときテロ行爲は、北清事變天津還附公文の蹂躙であり、且つ歴然たる排外行爲對日挑戰であゝ。今後かかる行動が執られ又は、それを豫知するときは、條約の權限に基づき、自衞上必要と信ずる行動を執ることがあるかも知れぬ。これに因つて派生した事態の責任は、日本にはないのである。」

これが「通告」の内容である。「要望」の内容については、まだ公表されてゐないので的確なところは分らないが、大體左の通りだといふ。

（一）反滿抗日工作の拋棄。

（二）憲兵第三團、藍衣社、政治訓練處、國民黨各級黨部を北支那から撤退すること。

（三）右各機關の背景たる軍隊の撤退。

（四）停戰協定破壞の責任者たる于學忠の罷免。

（五）テロ行爲の責任者としての蔣孝先、（憲三團長）丁昌（同副團長）、曾擴情、（政訓處長）の罷免。

憲兵團といふのは、蔣介石の督察機關で、反蔣運動の偵察彈壓を本務とする公的ゲ・ペ・ウである。（藍衣社の一部に、暗殺を業とするものが、これは蔣の私的ゲ・ペ・ウで、公私兩ゲ・ペ・ウを合せて、以後、私は「白手」と呼ぶ。）憲兵團は、全國で九聯隊あり、蔣の勢力範圍内の各省に、多きは二聯隊、少きも一中隊を派遣し、直屬將領であらうと（例へば、蔣の軍界に有する腹臣の第一人である何應欽――北平軍事分會委員長――でさへも。）誰であらうと、容赦なく監視するのである。或意味からいへば、憲兵團の威權は、他の一切より高いのである。藍衣社に至つては、周知の通り、蔣介石、宋美齡を戴く祕密結社で全國的に組織網を張り廻して居り、北支那に於いては、蔣伯誠に依つてオルガナイズされた堅靱な機構を有し、かつて張敬堯（前湖南督軍）を暗殺し、今回白逾桓、胡恩溥を屠つたのも、この社であらうといはれてゐる。政治訓練處は、北平軍事分會に直屬して居り、處長曾擴情は、藍衣社發起人中の有力者である。いひ落したが、憲兵團には、藍衣社の分子が多數編入されてゐるのである。

三

酒井參謀長のなした通告及び要望は、關東軍及び北支那駐屯軍を代表しての「一方的通告」で「最後通牒」ではなく、必ずしも支那側の回答を要求せず、通告に對する支那側の實行如何を監視しつゝ、實行振り不滿足と認むるときは、自由行動に出ることとなつてゐるのであるが、支那側はまだかうした日本の眞意を測定し兼ね、談合の餘地あるものと信じ、外交交渉に依らうとしたり、種々劃策してゐるやうである。これは非常に憂慮すべき事態であるが、蔣介石と百武第三遣外艦隊司令官との重慶會見の結果、蔣もハッキリするだらうから、いづれ支那の讓歩に依つて、妥結することと思ふ。

いかに妥結するかの見透し、何しろ、今書いてゐる時期が、豫測には困難な時期である。或は御笑ひ草になるかも知れぬことを覺悟して診斷を下して見よう。

河北省政府主席第五十一軍長于學忠の罷免。これは六月六日の國民政府命令で實行され陝西、甘肅、四川鄂區剿匪總司令にされた。元來彼は吳佩孚の部下であり、その後張學良に屬し、張の外樣の一人であつた。昨年熱河戰の結果學良が下野外遊したとき同じく東北軍ではあるが、外樣であるから殘して置いてもよからうといふので、北支那に留まることとなり、河北省政府主席を拾つたのである。若し怜悧な男なら、意外な儲け物をしたといふ氣持ちで、對日滿關係を圓滿にやり、永く地位を保つて行く努力すべきであるが、愚かにも、依然學良と氣脈を通じ、變な行動ばかりやるので、蔣介石は、豫ねてから于を湖北邊に引下げようとしてゐたのだ。昨年秋、蔣が西・北支那を廻つたとき、それを實行するのだと思はれたが、どうしたわけか實現されなかつた。かうした經緯があるから、于の轉任及び軍の移駐は、蔣と學良の成都會見で即決され、發令を見るに至つたのである。因みに、この機會に、東北軍の改編が行はれ、現在二十餘萬のが、四軍十師十五萬くらゐに縮まるであらう。（于學忠の兵力は五萬くらゐ。）

テロ行爲の責任者たる蔣孝先、丁昌、曾擴情の罷免も、實行濟みである。

憲兵第三團の撤退、政訓處の廢止、これは近く實行されよう。國民黨各級黨部の閉鎖、これは支那側の面目問題に引つかかるが、恐らく保定あたりに移轉することに依つて、御茶を濁すであらう。ただ藍衣社の撤退、これも實際上閉鎖されることは疑ひないが祕密結社であるため、表面上は、あくまで「存在せぬ」といはざるを得ないから、支那側はちよつと困るであらう。

反滿抗日工作の拋棄。これも、實際問題としては、赫然として怒つた日本軍の前に、屏息してしまふであらうが、「今後かかることは致しませぬ。」と、表面的意思表示をなし得るかどうか？　北平軍事分會委員長が、關東軍及び北支那駐屯軍代表（例へば北支那駐屯軍司令官）を訪問して、遺憾の意を表するくらゐのことにして呉れと、恐らく支那側では主張するだらう。

黨部、憲三團等の各機關の背景を成す軍隊の撤退は、支那側の最も實行を難しとするところであらう。何應欽が、軍隊を持たないで旗棹のやうに、ポツンと北平にゐるわけにも行かず、何とか勘べんして貰ひたいといふに相違ない。

かう見て來ると、軍隊（于學忠軍は別）撤退を除けば、先づ實行されさうであり、意外の事變は起らぬものと、見極めがつきさうである。

雨去り、風收まつた後の布置はどうなるか。

第一節　北支排日グループの正體

北平軍事分會から、東北軍系の委員が一掃され、それに代つて山西軍系の委員が入るであらう。山西軍は、支那では最溫和な軍隊でその將領が委員に多く入れば、對日滿關係も圓滿に行くであらう。

河北省政府主席には、省政府民政廳長の張厚琯が、臨時主席として一應出て來た。滿洲國外務大臣張燕卿の甥だといふことで、對日滿關係上、きはめて適任とは思ふが、役不足でないこともない。しかし省政府は保定に移轉し、天津にその辦事處が出來るのだといふから、大物は出ず、張が本任になるかも知れぬ。

政務整理委員會の委員長は黃郛であるが、彼は五月末第三回目の辭表を提出してゐる。今後は內政部長の本任に歸り、部務は次長に任せて置いて、恒常的に蔣介石に隨伴し、その顧問になるといふ。對世界觀、對日認識に於いて、支那の第一人である黃郛が常に蔣の側近にゐて、對日外交の御指南番を勤めることはきはめて望ましいことである。政整會委員長に歸任することも、勿論いいが、すでに二年間もやつたことであり、後繼者もなしとしないから、むしろ蔣の側近にゐる方が彼我ともに好都合であらう。

黃の後任としては、殷同がどうの、かうのといふ噂があつたが、それより一層の適任者は、六月六日天津市長に任ぜられた王克敏である。彼は國民黨臭味が少しもなく、北支那政界花やかなりし頃、直隸派の領袖として、中國銀行總裁や、財政總長をやつた男である。銀行の總裁や、財政總長をやつたに似合はず、兩袖淸風、一向金も持つてゐないといふ點で、支那側で人望があるさうだ。我等が彼を推稱するのは、しかしその點ばかりではなく、彼の對日認識が、黃郛に次ぐものであることを、最近發見したからである。「斷臂存身」は、口にすることは容易だが、それを實行しようといふ熱意を持つてゐる人は少い。黃、王のごときは、珍重すべきで、政整會委員長は、二人を措いてあるまい。

天津市長には、殷汝耕など、どうであらう？　上海市參事だつたし、停戰協定後警察專員として、戰區の實際をよく知つてゐる。有名な日本通で、日本人よりも日本語がうまい人だ。

平津警備司令の商震は、これ亦適任である。元來山西系だつたが、住年閻錫山馮玉祥の反蔣戰後中央系となり、近頃では河北順德一帶に、三萬の兵を率ゐて駐屯してゐる。穩健な人物である。

かうした布置が出來れば、彼我　關係が最圓滿に行き、雨降つて地固まる結果を招來することが出來よう。

四

北支停戰協定は、實質上一種の不侵略協定である。これを忠實に遵守するときは、國民政府に測り知られぬ利益が與へられるのである。協定成立のトタンに、異分子たる張學良系の勢力一掃せられ、それに代つて中央軍が進出し、黃郛何應欽政權が樹立されたではないか。これが第一の利益である。爾後、若し忠實に協定を守り、反日抗滿工作をなさず圓滿な關係を日滿との間に保つてさへゐれば北支那はますます安定し、黃・何政權はますます鞏固を加へ、必然の結果として經濟は復興し、農村の疲弊も多少は恢復し蔣介石は意を安んじてその他の方面の統一工作に沒頭することが出來た筈である。實に一紙の協定は萬里の長城にまさる效用を有するのである。ただそれには、その協定を守るといふ誠意がなければならぬのだ。

もしその誠意がなく、いやしくもヘンな態度を日滿に對して採れば、滿洲國の邊疆綏靖工作は、それこそ一刻の猶豫もなく、まつしぐらに遂行されるのである。

ここのところを知らぬ蔣ではあるまい。故に黃郛を出山せしめ、戰區內の行政に意を用ひ、國民黨部の活動を約束し、言論を統制し（かつて『華北日報』が、何應欽によつて閉鎖されたことなどもある。）良苦なる用心を示したかに、最初の間は見えたのであつた。しかしいつの間にやらその用心がユルみ、黨部が出來る、憲兵第三團が出て來る、藍衣社が網を張り廻す、それに加へて、東北軍系の于學忠が背後から張學良に絲を引かれ、軍事分會內の東北系分子と策動して、匪の援助や僞勇軍の尻押しなどをやり出す。この間に立つて手に一兵をも持たない黃郛が、僅かに袁良（北平市長）殷同（北寧鐵路局長で、先般來朝した。）殷汝耕（戰區警察專員）等を提さげて、二年間、どれだけ苦勞したことか！

「二年來、腰のかがめ通しである。氣短かな日本をなだめ、疑ぐり深い內部を纏め、テニスのボールのやうに、北から日本の

ラケットで南へ、南から支那のラケットで北へ、辭表を出したり、引つ込めたり。さうして得たところは何か？「黄某は天成の賤骨頭で、甘んじて國賊となつてゐる奴だ。」といふ非難だけだ。かがめ通しの腰を伸ばすことを知らぬではないが、その前後をどうする？　國家といふことを考へると、辭めるわけにも行かぬ。

かう述懷してゐた彼だつたが、形勢いよいよ悪化し、挽回は所詮難かしいと見ると、「反對勢力の牽制、鐵血團の妨害、中樞の復雖性、これ天、黄某を扼するのである」と、長嘆して再び歸任せざるべく、第三回目の辭表を提出し「腰を延ばし」てしまつたのである。彼が腰を延ばすのと、日本がシビレを切らすのと、ほとんど同時だつたのを見ると、「すべては宿命だ」と誰人も觀念せざるを得ないのである。

卒然として觀れば、北支那今日の事態は、憂ふべく、悲しむべきものがあるが、酒井參謀長のいつたやうに、「素より時局は相當重大であるが、今にも北平、天津附近に兵亂が勃發するかの如く考へるのは、支那側が事を構へざる限り絶對あり得ない。我方はこれを未然に防ぐために、今回の如き努力を拂つたのである」が故に、むしろ是認しなければならぬのだ。支那も亦速かにこの認識に到達しなければならぬ。光天化日を仰ぐために、この認識を、即時實行に移すの勇氣を缺いてはならぬ。（『文藝春秋』一九三五・七）

第二節　北支事態の急迫と蔣政權

北支那に、又重大な事態が發生した。どうしてこんな事態が發生したか？　を主眼とし、豫測の部分を少なくし一通り書いて見る。

北支停戰協定の成立したのが、一九三三年の五月三十一日、ちやうど滿二年前である。他人はどう觀たか知らぬが、私は、この協定の調印を以て、滿洲事變發生以來、悪化に悪化を重ねた日支兩國の關係が、ここにおいて一段落を劃し、これから漸を逐うて好轉の一路に向ふ。その黎明であると斷定したのであつた。といふのは、この協定が、形式の如何に關せず、實質上、一種の滿支不侵略協定であるからである。果して、幾多の曲折はあつたが、本協定に基づいて、通車、設關、通郵の三問題が、相次いで解決され、終に一九三五年一月、有吉公使鈴木武官と、蔣介石、汪兆銘兩氏との歴史的會見となり、日支關係復常工作の劃期的進展を見るに至つたのである。

繰返していふが、北支停戰協定は、日支關係復常の黎明であつたのみならず、又、事實上の不侵略協定なのである。故に、支那側として果して忠實にこれを遵守したならば、それは彼等（この場合、蔣・汪政權を指すことは、勿論である。）に取つて、一大護符たる效用を發揮するのである。すでに、同協定の調印によつて、異分子たる張學良系東北軍の大部分を、中部支那に移すことが出來、それに代つて、中央軍が北平に入り、蔣の先輩で、危局收拾のために一肌拔いだ黄郛、蔣直系將領の第一人たる何應欽、この二人に依つて、いはゆる黄・何政權が樹立されるといふ、棚ボタ式の利益を享受し得たのみならず、協定を遵守することに依つて、中央系の北支に於ける勢力が、ますます安定して行くといふ利益をも、併せて豫約されたのである。だが、これに反して、若し協定を守らず、停戰區域内に兵を出すとか、ここを抗日反滿の根據地として、僞勇軍を援助するとか、いやしくもさうしたヘンな態度を採つたが最後、滿洲國の邊疆綏靖工作は、容赦なく發動し、忽ち嚴重な事態が、北支那に展開されるのである。さうだとすれば、下愚ならざる限り、前者を擇ぶべきはずである。

ところが、實際はどうであつたか？

行政院收平政務整理委員會委員長として、北平に乘り込んだ黄郛は、對日認識において支那の第一人であり、若し彼に廣汎なる權限を與へ、自由手腕を振はせたならば、事態は今少し改善せられてゐたであらう。最初傳へられたところでは、彼の權限は相當廣汎なものであるといふことであつたが、着任後よくよく檢べて見ると、隨分各方面から掣肘を受けるやうな組織になつてゐた。第一に北平軍事分會、これは何應欽を委員長とし、北支殘留してゐる東北軍の首腦その他を委員としてゐるものだが、何はとにかく、東北軍の連中と來ては、テンデ黄のいふことを聽くものではない。第二に、平津第一の兵力を持つてゐる河北省政府主席于

學忠は、東北軍系であり、第三黄の據れる政務會内にも、黄の股肱と目すべき人物は少く、第四、國民黨黨部は、最初は活動させないといふ約束だつたのが、いつの間にやら蔫勤をはじめるし、それに加へて、藍衣社、政治訓練處、憲兵團などいふものが入つて來た。藍衣社の平津地方におけるオルグは蔣伯誠であつた。政治訓練處は、北平軍事分會に直屬するもので、處長曾擴情は、藍衣社の發起人の一人である。憲兵團は、これまであまり知られてゐなかつたが、藍衣社の暗殺隊と相並んで、蔣のゲ・ペ・ウたるものである。全國で九聯隊あり、蔣の勢力範圍内の各省には、一聯隊少くも一中隊が配置されてゐる。嘘のやうな話だが、山西の閻錫山のところにも、一中隊ばかりゐて、督察に當つてゐるといふ。團内には多數の藍衣社分子が潜入してゐることは勿論である。北平に駐屯してゐるのが第三團で、團長蔣孝先は、蔣介石の親戚だと噂される男である。一九三三年に起つた前湖南督軍張敬堯の暗殺、天津「振報」社長白逾桓の暗殺未遂事件などは、藍衣社及び憲兵團の捲き起した、白色テロの嵐である。これら督察機關の恐るべき權力は、北支那においても、例外なく高く、蔣直系將領の第一人たる何應欽すら、その監視を免かれないといふのだから、外樣たる黄郛の場合も推して知るべしである。

かうした環境に置かれた黄郛である。殷同、袁良、殷汝耕といつたやうな、日本を理解はしてゐるが、實力は持つてゐない連中を提さげて、何程のことが出來るか？　彼はかつて述懐した。

「自分はテニスのボールのやうなものだ。北平にゐると、日本人が、「そんなことが出來ないのか？　中央に行つて相談して來い」といふ。そこで南に歸つて來て中央に打つつかると、「何とかやつて呉れ」とばかりで、シンミになつて考へて呉れない。滯在が永引くと、「膺白、いつ北平に歸るんだい？」といふ。何か借金でも取立てに來たやうにいふ。蔣委員長に會つたら、何もかもいつて呉れようと思ふが、彼が一生懸命に政務を執り、共匪討伐に汗水を流し、苦勞してゐるのを見ると、胸が迫つていひ出せない。彼も苦しんでゐるんだ！　北支那のことくらゐ、負擔し切れぬ筈はない。生命も要らぬ！　と、又テニスの球になつて北平に歸つて來るのだ。そこに何が待つてゐるか？　思つたことは十に一つも通らず、その癖、小さい、ウルサイ仕事は、山ほども押しつけられる。ああ、腰が延ばしたい――」

二進も三進も行かなくなつて、辭表を提出したこと二度、最近出したのが、第三回目である。全力を盡して、しかも敗れたのだから、斷じて歸任せぬといつてゐる。恐らく内政部長の現職のまま、蔣に隨伴して、その顧問になるのだらうといはれてゐる。

かく、黄郛を憤慨せしめた北支那の局面は、果然、ますます惡化して行つた。滿洲國内における反滿陰謀、長城附近における、僞勇軍の援助・天津租界内における白色テロが、その現はれである。熱河省の南部における治安擾亂の首魁である孫永勤匪軍は、停戰區域より侵入すること三回、勘忍袋の緒を切らした日本軍は、遂にこれを追擊して河北遵化縣に入り、孫永勤以下三百餘名を倒し、綏靖工作を終つたが、その結果得た情報に據り、遵化縣長何孝怡が、從前から孫匪を援助してゐたこと、停戰區域内の支那官憲及び保安隊が、孫匪に對し何等の處置を採らなかつたこと等を知り得たのである。更に、五月二日の夜、天津日租界の北洋飯店で、「國權報」社長胡恩溥が、三日午前四時、天津日租界須磨街の自宅で、「振報」社長白逾桓が、いづれも暗殺され、その犯人の目星もつき、憲兵第三團長蔣孝先、政訓處長曾擴情等に關係あることが明かになつたので、五月二十九日、天津駐屯軍參謀長酒井大佐は、高橋北平武官碧同、何應欽（北平軍事分會委員長）、兪家驥（政務會秘書長、委員長代理中）を訪問し、爆彈的警告をなすに至つたのである。その内容は、

「滿洲國内における支那側の陰謀、長城附近僞勇軍の援助、天津新聞記者暗殺の如き行爲は、停戰協定の破壞であり、北清事變天津還附公文の蹂躙であり、總じてこれをいへば、反日工作の反映である。而してその發動の基點は、北平・天津に在るが故に、日本軍はやむを得ず長城線を超えて進出せざるべからざるに至るべく、又これら地域を事實上停戰區域内に包含せしむる必要も起つて來る。また胡白暗殺のごとき條約違反に對しては、自衛行動の必要を生ずべく、これより派生する事態の責任は、日本側にはない」

これは、關東軍と天津駐屯軍を代表した酒井參謀長の警告であり、最後通牒ではないが、支那側が善處しない限り、次ぎの行動

に移る權利が留保されてゐる。警告につゞいて「要望」がつきつけられてゐるが、その内容はまだ發表されてない、進展に連れて追々判明するであらうが、支那側が採りつゝある措置に徴し、大體が揣摩出來ぬことはない。すなはち第一は、停戰協定の精神を蹂躙せる于學忠（河北省政府主席、第五十一軍長）の罷免、及びその軍の移駐である。張學良と糸を引いて、反日滿工作をやつてゐた彼は、北支那の禍源であるから、この要望は當然である。支那側は勿論異存なく彼及び彼の軍（五六萬はあらう）を、湖北の四川境、又は陝西省内に移し、剿匪に當らせることになるであらう。ただ未練氣タップリな彼のこと、實現までには、曲折があらう。或は中央軍との間に、一戰くらゐやるかも知れぬと疑する向きもある。

第二、白テロの責任者として憲兵第三團長蔣孝先、副團長丁昌、政訓處長曾擴情の免職、これは六月一日附で支那側が實行した。

第三、憲兵第三團、北平軍事分會所屬の政治訓練處、藍衣社及び國民黨黨部の北支からの撤退、これも遠からず實行されよう。

これと、前記諸機構の背景を成す中央軍第二、第二十五兩師の撤收は難關である。何となれば、蔣介石及び南京政府の勢力が、北支那に及んでゐるといふことは、實質上からいへば、中央軍が北平一帶に駐屯してゐるといふことに歸するからである。それにとにもかくにも支那の國軍である。それが他國の要求に依つて、アチコチと動かされるといふことは、體面上困るだらう。しかし蔣介石が、事態の嚴重性を認識したら、それにコダはるやうなことはあるまい。恐らく案外アッサリと、日本の要望を容れるのではあるまいか。古語に曰く、「風雨不終朝」と。解決は決して永引くまい。（『世界知識』一九三五・七）

第三節　北支情勢の新展開

鐵幹

啼きに啼くあさまし長しかしがまし短かき歌を知らぬ蟬かな

それを、無理と知り、無謀と悟りながら、「藍衣社」がいけなかつたら、「救亡社」ならよからう、とか、「復興倶樂部」なら文句はあるまい、とか、そこは文字の國のこととて、表現團體の名前は、いくらでもヒネリ出せる。いよいよ窮して來ると、「特別工作部」などと名をつけ、地下深きところに潜つて、執拗な反日滿工作をつづける。思ひ切り惡るく、未練がましいことといつたら、全く鐵幹が歌つたやうに、眞夏の晝さがり、あくことも知らずに啼きつづける蟬だつた。油汗のしみ出るやうな、ネットリした北支那の局面だつた。加ふるに、トックに時代に置き去られた舊軍閥や、その手先きどもが、このグルーミイな形勢に乘じて何かひと仕事やらかさうと、その昔、良民から搾取した、不義の財布の底をはたいて蠢動。——その一例として、某某のごときは、この數年間の政治運動に、一千萬元から使つたといふことだ。——眞ン中に挾まれた民衆は、一億何千萬元かの税金を搾り取られ、しかもその金は、北支那自體のためにはほとんど使用せられず、徒らに南京政府のポッポを溫ためる——ばかりならまだいいが、廻り廻つて、その金が、また彼等を收奪する費用になるのだ。それでまだ足らぬと思つたか無情な天は、旱魃を與へる、水災をよこす。踏んだり蹴つたりといふが、一日に三度も死ぬ思ひをしてゐる北支那の民衆だ。

かうした環境から、何が產れ出るといふのか？　多言を要しないであらう。かくて、去る十月二十日に起つた、香河縣の農民自治運動（註一）は、セッパつまつた民衆が、捨鉢の、素肌やせ馬、意氣一筋に振ひ立つた、ナイーヴな自衞運動であると同時に、一面南京政府の愛憎づかし、一種の不信任表示、絕緣狀でもある。それに少し遲れて、わが多田北支那駐屯司令官、川越天津總領事から、北支肅淸に關する警告（註二）が、北支那當局につきつけられたが、これは、去る六月の梅津・何應欽協定不履行に對する問責である。前者は、民衆搾取から起つたものであり、後者は、反日滿工作の依然たる繼續、別して八月初旬の灤洲事件を近因とするものである。

（註一）　十月二十日、北平東南方二十里、非武裝地帶内の香河縣城に、武宜亭（河北水利協會理事長、中和煤礦公司理事長）を首領とする一千餘の農民團が殺到し、縣長趙鍾璞に對して、（A）日本との經濟合作、（B）地方自治制の改正、（C）寄捐の撤廢、（D）一畝につき十七仙五分の附加税反對、（E）連年の凶旱蝗作に依る納税無力者の救濟、（F）縣政の引き渡し、の六條件

を提出した。縣長は農民團（香河自治團と稱す）の要求を容れず、非武裝地帶保安隊を以て武力壓迫の擧に出でたので、ここに農民團との衝突を惹起した。運動は二十一、二兩日も繼續、縣側終に屈し、同夜農民團入城、縣政を改組し、もと北平總商會長安廸生を臨時縣長に推し、二十三日「香河縣自治人民委員會は、蔣介石の國民政府並びに國民黨を絶對に否認するとともに、官吏の苛斂誅求を除き、自から護り、自から決し、自から强うする人民自治の實行を原則とし、土地公有に反對し、赤化の侵入を防止し、自治の實行、農村の救濟、苛稅廢止、地租及び鹽稅附加稅輕減を主張し、大衆の福祉增進を目的とす。」との自治宣言を發した。風潮は河北省内三河、武清、昌平、遵化各縣に波及した。けだし香河縣の單獨行動でなく、河北各省代表聯席會議（その所在地は天津と推せられる）及び河北自治同盟（秘密結社？）の尻押しあるものと思はれる。香河農民團の縣城占據は、二十七日まで繼續し、職區保安隊に接取された。

（註二）　十月二十九日多田北支那駐屯軍司令官は、石井參謀を程克天津市長の許に中井參謀及び北平高橋武官を平津衞戍司令宋哲元、北平市長袁良の許に派し、灤州事件の跡始末及び梅津・何應欽協定の切實なる實行を要求した。同日川越天津總領事も河北省政府主席商震、宋哲元、袁良、程克に對し、同樣抗議を提出した。

この稿起草の項（十一月五日）、右兩事件の關する限りに於いては、一應段落がついた形になつてゐる。すなはち香河縣事件については、河北省政府主席商震は最初武力彈壓の決心で、一時は所屬第三十二軍の一部を動員したが、香河縣が、停戰區域地帶内に在ることに氣附くと、ただちに動員を中止し、わが多田司令官に相談を持ちかけて來た。司令官が不干涉を回答したのは當然の措置である。商はそこでいよいよ平和解決と覺悟を定め、二十七日附を以て、管下各縣に對し「縣民の負擔經減をはかり、その他適切なる處置を講ずべし。」と命令したからである。又司令官及び總領事の警告に對しても、商震、宋哲元、袁良、程克四氏から、いづれもその權限内に於いて、通牒の趣旨に添ふ旨の回答が、十一月初旬までに出揃つてゐるし、北平軍事分會も、一日附を以つて河北省政府、平津衞戍司令部、北平、天津兩市政府に對し、反日組織の徹底的取締を命じてゐるし、宋に依つて北平公安局その他に藍衣社員の手入れが行はれ、その結果、意外にも黄郛系の親日政治家として知られてゐた袁良北平市長が、反日滿工作の元締であつたことが暴露し、その辭任（宋哲元後任となつたが、遼からヤ秦德純―現察哈爾省政府主席に歸するだらう。）を見るに至つたからである。

一應片附いたわけである。しかし、これのみを以て、北支の安定を云云するのは、誰が見ても尙早である。梅津・何應欽協定以後、ただ僅かに進一歩の改善がなされたといふに過ぎない。問題はこれからである。いはゆる安定を齎らすためには、まだ(一)河北省内支那勢力の單一化、(二)北支五省當局の緊密なる聯繫、(三)緊密に聯繫せる五省を統轄する機關、及び人物の確定、(四)財政支配、(五)赤化共同防衞に關する日滿支軍事協定の締結（内容的には、支那の滿洲國承認）といふ、五つの條件の充足が、絶對の必要である。この五條件が充足せられたとき、北支ははじめて政治的安定を獲得するわけであり、政治的安定あつて、はじめていはゆる日滿支經濟提携の可能性が發見せられるのである。いづれの國に在つても、政治的安定なくしては、經濟的發展はあり得ないのであらうが、支那に於いては、その程度が特に强いのである。

河北省内に於ける支那勢力の單一化といふのは、要するに、商震と宋哲元との兩頭政治を廢除することである。河北は北支五省の中心であり、北平、天津といふ、二個の大都會を有してゐる重要地方であるにも拘はらず、それがキチンと纏まつてゐず、先達てのわが北支肅清警告提出の經緯が示す通り、軍事分會、衞戍司令部、省政府、市政府と、四通も五通も通牒を用意せねばならなかつたり、この不統一を、先づ除去する必要があるのである。商と宋とは、二十年來の友人であるから、充分協調してやつて行けると語つてゐるやうであるが、民國以來の軍閥爭鬪史は、この二人者の場合にも、チャンとあてはまるやうに我等は感ずる。退却するものが、商であるか、宋であるかは、我等の關知する限りではないが、兩虎ともに傷つくよりは、無傷で勇退する方が、一虎のために得策であらうと思ふ。さうして、現在の情勢から推すと宋の殘る可能性の方が多いやうな氣がする。

商震が明哲保身で退き、宋哲元が河北省政府主席兼平津衞戍司令になり、秦德純を察哈爾省政府主席から北平市長に轉任させ、宋の智囊である蕭振瀛あたりを察哈爾に持つて行く。これで河北、察哈爾が宋の淸一色になる。これに山西、綏遠の閻錫山（綏遠の

傳作義は閻系だ。）、山東の韓復榘、この三巨頭の聯繫が緊密になり、各々保境安民、内は治安を維持し（特に反日滿工作を絶滅し）外は日滿關係を圓滑にすれば、北支の安定は更に一歩を進めたと見ていい。この五省の緊密なる聯繫の上に、新機關が打ち建てられねばならぬ。我等ははじめ、閻錫山を以てこの機關の中心人物に擬したが、各方面の情報を綜合し、種種研究を重ねた結果、彼の出馬はすこぶる可能性が薄いことを知つた。それではその外に誰があるか？　夢物語に類するが、我等は段祺瑞が唯一無二の適任者と信ずるのである。實現性については、確信がないし、又さうした情報も聞いたことはないが、ただ彼の健康が、曩のやうに悪くはないといふ報道を基礎として、出山させよといふのではない、適任だといふだけのことである。

財政支配といふのは、北支からあがる税收を、今少し北支自體のために使用したらいいだらうといふ意味である。香河縣の農民運動のやうなものに對する、對症の良藥だらうと思ふからである。

もしそれ赤化共同防衛に關する日滿支軍事協定の締結は、もし成立すれば、これこそ北支安定の一大礎石となるであらう。それは實質的に見て、支那の滿洲國承認であるし、從つて北支に於ける一切の紛糾を、一舉に除去する手段でもある。東亞に於ける國際的一大經綸は、正しくこの一役に在るのである。

爾來、赤化の魔手は、極東の全野を蓋うてゐる。東は滿露國境、興安蒙古から察哈爾、綏遠、寧夏を窺ひ、西部は新疆から甘肅をねらつてゐる。これがいはゆるコミンテルンの東、中、西三ルートであり、滿支兩國は共通の危險にさらされてゐるのである。

滿洲に於ける赤化運動は、滿洲事變後やや下火になつたと、一般に信ぜられてゐるが、實際はさうではなく、全露系、高麗系、中共系の運動は、ますます激しくなつてゐるのである。その活動狀況に關しては、何故か外間に發表されることが少いが、讀者にして、この方面に關する官版もしくは社版の一二本を手にせられるならば、思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。滿洲國内に於ける匪賊の蠢動が、今なほ絶滅するに至らないのは、國民黨の反日滿工作と相並んで、中國共産黨系の手が延びてゐるからであつて、これが除去のために、日滿兩國が協力してゐるのであるが、しかし、何といつても、滿洲國の儼然たる存在、その確實なる成長は、赤化に對する嚴の城で、國運に關するやうな危險は想像されない。だが、中、西ルートに於いては、對象物たる内蒙及び西北支那が、御承知通りの弱體であるから、事態は正に焦頭爛額の急を告げてゐるのである。内蒙に對しては庫倫張家口街道に沿ふ一驛、烏得（察哈爾省境に近い。）が、赤化の根據地となつて居り、内蒙共産黨一派が外蒙の卵翼下に勢揃ひをしてゐるし、内蒙自決運動の中心地として、德王の牙城たる百靈廟（綏遠省）の蒙古自治政務委員會（以下、蒙政會と稱略する。）内にも、共産分子が多數侵入してゐる狀態である。これに加ふるに、支那共産軍は、最近甘肅東部、陝西北部に集中し、ややもすれば綏遠（蒙古的にいへば伊克昭）に闖入しようとする態勢を示し、南と北から、あのひよわい内蒙古を挾擊しようとしてゐる。西ルートに於いては、ひいき目に見ても、新疆東部の哈密以西には、支那の勢力は全然及ばず、西望すれば、赤化の壁壘森嚴なるを覺ゆるに、更に支那共産軍の一支は、僅かに殘れる支那勢力の、帶のごとき一線すなはち蘭州、甘州、肅州地方を席捲して、新疆に入らうとしてゐる。この外、四川湖南湖北貴州省境、湖北河南安徽省境、江西湖北省境、江西浙江等にも、大小の共産軍が跳梁して、討伐軍の勢力を分散させてゐる、――中西ルートの危險は、かくのごとく、東ルートの比でなく、わが廟議が、赤化共同防衛を支那に提議するに決したのは、全くここに看到した結果であるから、以下脅威の中心を成す支那共産軍最近の活動狀況を細說せねばならぬ。

一九三四年十月、多年の根據地であつた江西を退出した主力軍（朱・毛軍）は、湖南、廣西、貴州、雲南、四川五省に亙つて、八ケ月の遊擊戰を試みた後、四川西部の懋功縣地方に於いて、四川東部から西進した徐向前軍と合流した。紅軍西遷の第一段の目的がこれに依て達成せられたのであつて、現段階の出發點に達するものである。合流後間もなく、次ぎのやうな新方針が樹立せられた。

黨及び軍は、國民黨機關から離脱した外域農業地方に於いて、革命勢力を充實せよ。徐向前軍は、陝北ソヴェート區（劉子丹軍）と聯絡して、甘肅に向ふべく、朱・毛軍は、四川西部及び西康にソヴェート區を創建せよ。その他の各地に在る軍はパルチザン的行動及び政治工作を擴大すべし。

この方針に從つて、各軍一齊に行動を起し、十一月初旬に於いては、大體左の配置になつてゐる。（嚴密に一、右方針通りに行つてゐないが）

(一)毛澤東軍。懋功から茂縣、理番、松潘（以上四川）を占領、一時理番にソヴェート假中央政府を組織したが、(七月初旬)間もなく甘肅に入り、西固に於いて、陝西中部から西進して來た徐海東軍と合流し、武都、天水を經て、七月二十三日秦安を占領、更に北進して劉德、固原を取つた。ここまでの行動は、朱・毛軍としての行動であつたが、朱德は毛澤東と意見を異にし、既定方針通り甘肅入りをつづけるに於いては全滅の恐れありと主張し、且つ共產黨軍中には、江西、湖南、湖北人が多いので、西進を嫌ふものが續出したので、協議の結果軍を分ち、毛澤東軍はロシア人顧問リトロフ少將指揮の下に、林彭、彭德懷がこれに屬し、天水まで引き返し、それから七百支里西方の漳縣にまで進んでゐる。

(二)朱德軍。前述のごとき經緯に依つて、毛澤東軍と分離した朱德軍は、天水、西固を經て、再び四川に入り、舊地盤の松潘地方に復歸した。

(三)徐海東軍。この一支は、湖北河南安徽省境ソヴェート區にゐた軍で、一九三四年江西紅軍の西遷と同時に行動を起し、河南から陝西南部の鎭安、柞水一帶に入つたが、やがて北上して、中部の雒南、商縣の中間を突破して、藍田、鄠縣、整屋、郿縣、佛坪、劉壩、鳳縣を經て甘肅に入り、兩當、徽縣、成縣、武都を過ぎて西固で朱・毛軍と合流した。その後は朱・毛軍と同一行動を取り、固原から更に北上して、海原地方にまで出沒してゐたが、朱德軍と毛澤東軍が分離すると、この軍は毛澤東軍を支持し、目下漳縣に進んでゐる。

(四)徐向前軍。紅軍中兵力最充實してゐるこの軍は、四川に在ること久しかつただけ、朱德の四川復歸に眞先きに共鳴し、天水から松潘に引返し、同地方ソヴェート區の再建に當つてゐる。

(五)劉子丹軍。最近世界の注目を惹いてゐる山西、綏遠「內蒙」赤化の原動力となつてゐるのが、陝西北部に蟠據する劉子丹の率ゐる紅第二十六軍である。これが發生は、すでに四年前のことで、はじめ陝西中部にゐたが、後北部に移り、昨年末頃では、甘肅陝西省境の廓陽に西北革命委員會を設けてゐた。本年に入り、その行動は俄然活潑となり、陝西北部の安定・延川、安塞、保安各縣を占領し、安定に陝甘ソヴェート政府を樹立したが(五月初旬)、八月延川に本據を移し、清澗、吳堡、綏德、米脂、葭縣、神木、府谷、楡林、橫山、靖邊、定邊、安邊一帶に遊擊し、山西及び綏遠を窺ひ、閻錫山、山西綏靖主任)、傅作義(綏遠省政府主席)を狼狽せしめてゐる。

(六)黃子文軍。陝西中部、西安と平涼との中間に在る邠縣を中心とし、その一帶に跳梁し、陝西南區革命委員會を組織してゐる。紅第二十六軍の別働隊と見るべきもので、しばしば共同動作を執つてゐる。

要するに、四川西北部に朱德・徐向前軍(想定兵力四萬)、甘肅東部に毛澤東・徐海東軍(想定兵力二萬)、陝西北部及び中部に劉子丹・黃子文軍(想定兵力一萬)、といふ具合に、合計想定兵力七萬の共產軍が西北赤化を目指して活躍してゐるのである。このうち最危險性を帶びてゐるのは山西及び綏遠をねらつてゐる劉子丹軍である。發生以來すでに四年の久しきを閱し、間斷なき赤化工作(彼等はこれを『鬥爭』と名づけてゐる。)は、陝西北部の民衆に浸潤すること深く、その宣傳員は、北支模範省の稱ある閻錫山の御膝許、山西各地に出沒し、これを掩護するために、時に紅軍の侵入を見てゐる狀勢だからである。もう一つ油斷のならないことは、目下は甘肅西北部を目指してゐるが、いつ毛澤東・徐海東軍が、方向を轉ずるかも判らない、といふことである。毛・徐軍が、新疆を目標とし、肅・甘・涼の一線を進みつつあることは、前述した。この道は、實に荊棘の路であつて、人煙稀薄一驛に達する毎に、井戸を掘りつつ前進しなければならぬといふ、最惡のコースである。一九三一年に、支那軍を新疆に派遣する計畫が立てられたが、結局不可能とされたことがあり、又かつて馮玉祥がここに閉ぢこめられ、新疆入りを企てて終に失敗したといふ先例もある。で毛・徐軍の肅・甘・涼突破も、先づ成功しないものと見なければならぬ。行手を塞がれた彼等が、踵をめぐらして東進し、劉子丹軍と合流し、山西もしくは綏遠侵入を企圖するかも知れぬとは、すこぶる合理的な推測である。一方、松潘地方に落附いた朱・徐軍も、四川からの討伐軍に逐ひ立てられるときは、再度甘肅入りを決行し、やがて東進して陝西北部に入り、全西北紅軍七萬が、陝西北部に集中せられるかも知れないのである。支那側は閻錫山、傅作義が、最善の措置を講じてゐるとなし、且又、黃河、長城の天險人工を以て、

紅軍の侵入を防ぎ得べしと思惟してゐるらしいが（黄河の渡河には、二地點だけ好適地があるが、そこは山西軍に依つて、堅固に防備されてゐる。）、支那側ではいつてゐる。我等はそれに信頼出來るか！――萬一支那側の豫想が外れ、現實に紅軍の山西、綏遠侵入を見たらどうであらう？慄然たらざるを得ないではないか！

かかる危險を想像するが故に、我等は赤化共同防衛に關する日滿支軍事協定締結の議を支持するのである。年來、それを主張して來たのである。提議はまだなされてゐないが、近く提議を見るとして我等の注文は、（一）山西、內蒙に紅軍侵入の場合、武器彈藥の供給は勿論、場合によつては飛行隊の出動、軍隊出動をも辭しないこと。（二）防共借款に應ずること。（三）討伐軍にわが軍事顧問を招聘させること。（四）防共線は、第一線を內蒙山西とし、第二線を新疆と定むること（註三）、等に盡きるが、その外に、鐵のごとき防共地帶を設定する工作として、內蒙の强化工作を强調せざるを得ないのである。

（註三）全西北紅軍を、肅・甘・涼の一線に逐ひ込み、やがてこれを新疆省內に驅逐し一先づ山西、內蒙の危機を除去することが討伐軍に對する註文となる。これで一段落。さうして、新疆省內の肅清が、第二段の工作となるのである。

ここに內蒙といふのは、察哈爾・綏遠兩省に屬する錫林果勒、烏蘭札布、伊克昭の三盟を指すのであつて、一九三四年四月以來一種の自治領（註四）となつてゐる地方である。

（註四）一九三三年七月十五日から二ヶ月間に亙り、綏遠省百靈廟に於いて、內蒙王公會議が開かれ、錫林果勒盟副盟長、德王を指導者として、高度自治要求の呈文が、南京政府に提出された。南京政府は黃紹雄、趙不廉を現地に派し、內蒙側と接衝した結果、形式だけの自治を許容することとなり、その政務機關として、內蒙自治政務委員會が、一九三四年四月に成立した。

而積こそ相當にあるが、人口はきはめて稀薄、三盟合計二十萬餘といふ貧弱さ。だが、この自治領を指導する德王以下の意氣込みは凄まじく、今こそ「自治」くらゐで胸をさすつてゐるが、その眞意は全蒙古國の建設に在り、ソヴエート聯邦の一つに淪んでゐる外蒙、滿洲國に包含せられてゐる東部內蒙古、興安蒙古をも打つて一丸としたいと意企してゐるのである。その盛んな意氣は壯とするに足らないか？

そもそも內蒙の往くべき途は三つある。一は外蒙の後塵を拜することであるし、二は支那への從屬であるし、三は全蒙自決である。赤化してソヴエート聯邦の一組織分子となることは、彼等としては一方法たるを失はないだらうが、これは滿洲國も、支那も同樣に欲しないところである。何となれば、上來述べたやうに、內蒙の赤化は、極東の平和に大害があるからである。それでは支那への從屬を繼續することはどうであるか？　支那にして眞に有力な國家であり、充分に內蒙を卵翼しその國力を盛んならしめその文化を向上せしめ得るならばそれも一つの方法である。しかし、支那にはその能力はない。內蒙の福祉のために、何等の寄與をなし得ないのみならず、高利貸と商人を送つて、蒙人を欺瞞し、その土地を收奪することしか知らない。これがために蒙人は、全蒙に亘つて、一年一哩宛退却しつつあるといはれ、蒙人の漢人仇視は、逐年激しくなつて來てゐる。かうした支那に、いつまでも內蒙を預けて置くことは、取りも直さず蒙古民族を滅亡に導くものであり、國內に興安四省を持つ滿洲國として、默視し得ないところである。實際、現狀のまま放つて置いたならば、內蒙に於ける赤化運動（註五）は日を逐つて激しくなり、支那が手を拱いてゐる間に、內蒙は外蒙に併合されてしまふであらう。

（註五）內蒙赤化を目的とする內蒙青年黨は、すでに五年の歷史を有し、外蒙古車臣汗部を根據とし、相當の組織を以て絕えず內蒙を窺つてゐる。その首領は阿明泰といひ、內蒙共和國憲法までも擬定してゐると傳へられる。德王等の蒙政會成立するやモスクワ東方大學出身の朱實夫・白海峰を領袖とする約五十人の一團が會內に入り込み、隱然德王に反對し、赤化工作をつづけてゐるとの報が最近にあつた。彼等は多分內蒙青年黨員だと思はれるが、一說に據れば、かつて平津地方で活躍した中國共產黨系であるともいふ。

かやうに觀て來ると、蒙古の往くべき途は、第三コースすなはち全蒙自決の外にはない。滿洲國の組織分子となつてゐる東部內蒙古の同胞に呼びかけ、新建國に邁進するが、殘された唯一つの途である。滿洲國が地を割し、蒙人治蒙の地――興安四省――を

設定した深意（註六）を顧みれば、滿洲國に異議のあるべき筈はなく、新蒙古が、鐵のごとき防共地帶として結成せられることに對しては、日本も支那も、ともに雙手をあげて贊成すべき筋合ひである。ことに支那はその無力を悟るとともに、體面論にこだはることを止めねばならぬ。思へ、蒙古は昔清朝の同盟者であつて、決して民國の奴隷ではなかつたのだ。「清朝の崩壞とともに、支那と蒙古との間を繫ぐ大綱は斷たれてしまつたのだ。」（オウエン・ラティモア『滿洲に於ける蒙古民族』）――歴史的に回顧し、現實を直視し、弱小民族扶植の孫文主義に照らし、蒙古建國の妥當性に看到せねばならぬ。

（註六）興安省の設置とともに、新らしい途が開かれた。滿洲國内の蒙人は、日本人と同盟を結んでゐると同じやうな狀態に於いて、地方自治を許されてゐるのであるから、蒙人の統一と國民性恢復の運動に對し、王公等は、再びその人民の本來的指導者たる地位を取得し、……從つて今日全體としての蒙古人は、ロシアと結んで革命的國民主義に赴くか或は日本と結び、成吉思汗の後裔たる彼等自身の指揮下に彼等自身の宗教を以て武裝し、保守的國民主義に赴くか、二者その一を選擇すべき立場に在る（オウエン・ラティモア「滿洲に於ける蒙古民族」）。

いささか書生論に走り過ぎた。赤化防衛に協力せねばならぬ、そのための軍事協定に調印せねばならぬ、防共地帶としての蒙古建國を認めねばならぬならぬと呼び叫んで見たところで、支那がこれを容れるかどうかは判らぬし、内蒙古建國運動にしたところで、（一）人口の稀薄（中心となるべき三盟の人口が二十萬そこそこでは、民族運動としては迫力が足りない。）、（二）兵力の不足（現有兵力多く見て八千）、（三）民族的無知朦昧、（四）文化落伍、（五）經濟力不足、と、悪い條件ばかりが眼につき、前途程遠しの感がないではない。先づ民族的自覺を與へ、教育を鼓吹し人口の增加を圖り經濟を開發し、民族的基礎が出來た上でなければ、獨立運動は危險であるとの結論も、胸に浮ばないでもない。それまでは、現在得てゐる自治の内容を充實し、蒙政實をつぶれないやうに盛り立て、折角出來た各盟旗の聯繫を崩さぬやうにして行くといふ、現狀維持の主張の方が、無難ではないかとも思ふ。しかし前述した通りに、赤化の危險は刻刻に迫つて居り、これが防衛は一日も緩うすることが出來ぬ。東亞和平の確立を大眼目とし、日滿支三國　依る赤化共同防衛といふ國際的大經綸を打ち立てたからには、論理の當然の開展として、本稿に述べたやうにリイドすべきだと思ふし、内蒙の自力更生を待たず、多少外から力が加へても差支へないのではないかと考へるので、想のまゝに運んで見た。必ずしも滿紙荒唐の言のみでもあるまいと信ずる。（『中央公論』一九三五・一二）

第四節　北支時局に躍る人々

のし上つた宋哲元

「時が來れば、饅鍮も黄金になる。運が下向けば、黄金も饅鍮さ！」――北支那の第二流軍閥であつた宋哲元の、今日この頃の羽振りを見ると、全くこんな感じがする。かつて馮玉祥が時めいてゐた時代、その下で威張つてゐたのが、鹿鍾麟に韓復榘。なかなか宋哲元までは、算へなかつたものだ。謀將型の鹿鍾麟は、馮の失勢とともに振はず、今はどうなつてゐるか、杳として消息を絶つてゐるが、韓復榘は、御承知通り、大變た代物で、後、馮玉祥に叛旗をひるがへし、蔣介石と妥協して、山東に地盤を貰ひ、現に見るやうに、押しも押されもせぬ第一流軍閥にまでセリあがつてゐる。これに比べると、宋の經歴ははるかに地味で、熱河都統や、陝西省政府主席代理といふやうなところに廻り、馮が失脚して後は、張學良の外將となつて、東北第三軍長などやつてゐた。間もなく中央軍に改編されて、第二十九軍長張學良が下野してから、やつと芽が出察哈爾省政府主席に治まつたが、又後に舊主馮玉祥が彼の地盤を借りて反蔣軍を起したので、暫らく平津に隱れ、馮が失敗してから戻つて行つた。それも東の間、張北事件で、日本との間が拙くなり、察哈爾を棒に振つて、天津に隱れたものだ。

一介の武弁だと思つてゐたし、事實さういつた評判だつたし、このまま消えてなくなるかと見てゐると、なかなかさうでない。彼の直系の軍隊、馮治安等の三個師團が、北平の近くに頑張つてゐるし、蔣介石からは「公忠體國」などいふ電報が來るし、北平からの情報は、宋の潜勢力依然たるを傳へて來る。河北省主席になつた商震の影がうすくて、浪人である宋の威勢が、却つていい

面妖なと思つてゐるうちに、平津衞戍司令として、いとも鮮やかに復活して來た。それから後の彼の動きは、我々が、新聞紙上でアレヨアレヨといひながら、見て來た通りで、七萬の兵力を擁し、智囊の蕭振瀛を察哈爾省政府主席に、參謀長格の秦德純を北平市長に、河北省政府主席の商震を、事實上押しのけ、河北、察哈爾二省を手に入れ自治運動の中心人物となつてゐる。「水の流れと人の身は？」と來ると、「ハテわからぬものぢやあ！」と受けねばならぬが、待てしばし、ここまでは誰でもやる。ゐかけ松が、商賣道具を大川へ叩ッ込んで、タンカを切つたところが、宋哲元の現段階なんでこれからうまく行くかどうか？　やつて退け得るかどうか？　ちよつと疑問なんだ。

閻錫山・韓復榘

といふのは、山西の閻錫山山東の韓復榘の二巨頭が、曖昧な態度になつたからだ。尤も閻の態度は、大分前から判つてゐた。西北の共產軍に窺はれ、西南には、共產軍討伐を名として、實は山西を目指す張學良がゐるし、東の方は、蔣直系將領で、現に統兵してゐるうちの第一人たる劉峙が、精鋭を提さげて虎視眈々としてゐる。この三系統（蔣・張・共產軍）の兵力、およそ二十餘萬といはれ、閻の態度如何に依つては、山西なんど一モミにつぶれてしまふのである。閻が恨みをのんで、六中全會、五全大會に出席するため南下したのは、これは當然。程度の差はあるが、山東の韓復榘も、背後をつかれる恐れがあるので、ハキハキするわけに行かぬ。「政權開放」の通電を發したりして置きながら、最後のドタン場になつて「自治など、關知せぬ。北上？　そんなこともあつたかい！」と空うそぶいてしまつた。明哲保身のスマート男である商震が、保定で假病をつかつたくらゐのことは、敢へて驚くに足りないが、北支自決の三脚、閻・韓・宋の、二脚までが折れたんぢや、宋もなかなかやりにくからう。

だが、ここまで來た以上、拔きも差しもならぬ。これで止めたのでは、民衆の怨恨は、彼の一身に集中して來るだらうし、ッッカヒ棒も外れて、天津租界にルムペン生活をやらねばならぬ。租界で身を兼ね、世を兼ねることになると、ちよつとやそつとで浮びあがれぬことは、孫傳芳等の先例が示す通りであつて見れば（孫のごときは、往年の部下施從滨の刺のために、親の仇をとられてゐる）ここは一番、頑張らねばならぬ。河北、察哈爾の二省、北平、天津の二市、及び戰區（停戰協定區域—非武裝地帶）を以て、「防共自治委員會」の旗上げ以外、殘された途はない。

その他の同志

自治宣言をやつた後は、虛心平氣「一介の武辨」たることを表明し、政歷の異同を問はず、異路同歸を目標として、各派の人材の參集を謂ひ、その援助に倚らねばならぬ。天津は、在野政客の淵藪であり、國民黨の統治に快よからぬ人々が、長年巢喰うてゐたところであるから、如何なる人材が、「宋哲元、志小ならず。孺子教ふべし。」とか何とかいつて、出て來ないものでもあるまい。彼に取つて、今が一等大切な時期である。

どういふ連中が出て來るだらうか？——その前に、宋の同志として、表面に出てゐる人々を擧げて見ると、察哈爾省主席蕭振瀛同主席代理張自忠、北平市長秦德純、この三人は、純然たる宋系である。秦の出身は、はじめ吳佩孚、後馮玉祥・最後に宋系に歸した。吳と關係のあることは、見のがせないところだ。天津市長程克、これは舊直隸系。戰區警察專員殷汝耕は、有名な日本通で夫人は井上氏。殷の日本語は日本人以上といふ評判があり、「あまり日本的」なので、出世が出來なかつたのではないかとまでいはれた人だ。停戰協定成立後、陶尙銘の相棒と督察專員になり、默々として仕事をしてゐたが、今春陶が灤州事件で失敗すると、その領分をあはせ、戰區全體の督察專員となつた。自治運動では、最も純理的に動き、逸早く宣言を出し、戰區各縣に日本人顧問を入れ、稅賦を抑留して河北省政府に送らず、徹底したところを見せてゐる。

諸元老の動き

さて、以上の五人の晉頭に依つて、どんな人物が出て來るか？　直隸派に舊大總統曹錕が居り、吳佩孚が居り、その他齊燮元、高凌蔚、王克敏等がゐる。御世辭のないところ、吳佩孚の人格と、王揖唐、曹汝霖の機略材幹は當代支那稀れに見るところで、彼等を眞に引張り出し得たら、宋の一大成功といはねばならぬ。吳佩孚を委員長、宋か王揖

唐が副委員長、曹が財政委員、宋と王とで軍政、行政を分擔するゝいふやうなことにでもなれば、北方政權の陣容としては、理想的なものが出來上るだらう。しかしこれらの人材は、當世の范增もどきの人々で、宋のごときを、眞に孺子と思つてゐる手合ひであるから、宋がよほど心を用ひなければ、第一、出て來ないし、出て來ても、「これあ、泥沼だ！」と氣附いたら、逸早く足を拔くだらうし、齒切れのいい連中だから、宋、一世一代の氣配りが必要だ、さうした材幹を持つてゐるかどうか、ここんところ、まるで見當がつかない。

ただ、一事の確かなるは、停戰協定、梅・何協定、及び察哈爾協定の儼然たる存在は、中央軍の北上を阻止するといふことである。ここに看到してゐるから、諸元老も、案外、宋を敎へるために出て來さうな氣がするのだ。バロメーターとして、私は、この頃、彼等の動きを興味深く眺めてゐる。（『世界知識』一九三六・一）

第六章　日支關係を檢討す

第一節　抗日情勢の變化とわが對策

一

先づ、日支停戰協定の意義を發見せねばならぬ。

それは、滿洲國の邊疆綏靖工作の、最後の仕揚げである。停戰協定に含まれる延慶——盧臺の線、すなはち支那軍の撤收線は、それと、長城線との間に、非武裝地域を想定することによつて、滿洲國の「綏靖線」と目さるべきものである。綏靖線は、必ずしも國境と一致しない。國境より、幾分前方に在るべきは、理の當然である。延慶——盧臺の線を劃し得て、はじめて長城線が確保される。しかし北支那、特に平津地方は、各國利害關係の錯綜するところ、日本軍は、出來得れば長城の線にとゞまらうとした。だが、抗日意識に燃えてゐる支那としては、長城線に進攻する姿勢を執らざるを得ない。蔣介石に在つては、國民に對する面子もあり、內に雜軍整理の魂膽を藏しつゝ、抗日作戰の擬勢を示す必要があつた。日本軍の、灤東及び古北口方面再進出は、かくして、避くべからざる一擧となつた。大正四年の日支交涉に際し、支那側の要求によつて、最後通牒を發出した先例を、今こゝに見る。成程、と納得出來れば、モウ野暮なことは云はない國民だ。そこで、案外スラ〳〵と出來た停戰協定だつた。

二

しかし、斯う惡達者に摘發せずに、今少し單純に觀察することも可能である。すなはち、兄弟牆に鬩ぐの愚を悟り、無益な抗日戰を繰返さず、アッサリと旣成事實を認め、日滿支三國の提携・その分治合作を以て、東亞將來の和平を招來しようといふ、謙抑

な希望に出發して、甘んじて秦檜たるべき悲壯な決心をつけたものも、支那に於いて絶無ではなかつたらうと、私は考へる。停戰協定の立役者である黄郛が、その人であると斷言はしない。しかし「抗日より剿共の方が大事だ」と演述した蔣介石、九・一八事件以前、早くすでに滿洲問題の解決策に、手を着け、事變後、たゞちに「一面抵抗、一面交渉」のスローガンを掲げた汪兆銘、この二人者は、亜細亜モンロー主義に對する、少しの理解もないとは信ぜられない。溯つて云へば孫文がある。その一生の世界觀を調整して、最後に大亜細亜主義にとゞまつたこの先覺の遺教は、汪と蔣と、二人の愛弟子に傳はつてゐないとは、何人も斷定出來ないのだ。大亜細亜主義の理、至つて淺近。日本に在つては、すでに常識となつてゐる點から推せば、支那に於いても亦、東洋アンシュルッスの理想に燃ゆるもの、絶無であるとは斷じ得られまい。「隣國心理」の皮肉をいふ前に、我等は先づ日支共存の大道を認識すべきであり、十歩の内、必らず芳草あり。支那に於いて、この正覺に達し得たるもの、一二人にとどまらざるを信じたいのである。

三

すなはち一二人にとゞまらなかつたけれども、正覺は久しく蓋はれて彰はれなかつた。支那の大勢は、奮態依然たる以夷制夷。元來日支兩國の間で、膝つきあはせて談合すべき紛爭案件を、切實なる利害關係を有せざる諸國の前にさらけ出し、裁判評定の資格なき國々の組織せる法廷に、原被兩告のごとく兩國が並んだ光景は、東亞空前の奇耻大辱であつた。私の先輩である某老支那通は、ジュネーヴで眼のあたりこの耻づべき光景を視て、舊知の支那代表顔惠慶と手を握り、一刻も早くこの汚辱を雪がうではないかと語つたら、顔も心からこれに同意を表し、心外に堪へないと答へたといふ。やがて清算の秋が來た。日本の聯盟退出は、獨り日本の爲めのみでなく、支那の耻をも同時に雪いだものである。こゝに、兩國は本來の面目に立ち歸り、脚を泥沼から拔き、頂天立地、俯仰天地に耻ぢない男子國たるの體面を、恢復し得たのである。

良心發現し、正覺はすでに顯彰された。しかし、比年支那に於いて繼續されつゝある深刻なる内爭は、この正覺の出現を少からず妨害した。例へば右派の狹隘なる理論家たる胡漢民のごときは、西南の一角に據つて、支那の「出路」を論じ、徹底抗日を高唱した。聯盟依賴に反對せる彼の論鋒（『國際評論』一ノ、「リットン報告を評す」參照）は、相當傾聽するに足るものがあるけれども、支那の出路は一にも抗日、二にも抗日あるのみと、ことさらに高調を唱へて、その實蔣介石憎しの私心を藏せるは、吾人の取らざるところである。地を替へて、彼をして南京政府當局たらしめば、彼は果してその高調を持續し得るか。身を安全の地に置き、犬の遠吠的氣焔を揚げ、徒らに政敵を窮地に陷れんとするもの、器度の狹にして墮なる、唾棄に値ひするが、滔々たる支那の天下、比々としてやはり、比較にならぬほど、力弱き叫びと觀られたのであつた。

四

一九三三年四月に於ける支那の雰圍氣が、これであつた。茲に黄郛の男子漢なることを知る。停戰協定の成る、一に黄郛に倚るとするは、あまりに人的要素を重く視る嫌ひがあるが、しかし彼微りせば、汪兆銘、蔣介石、果してノコ〳〵と北平まで出掛けて停戰協定に調印し得たであらうか。非常の際には、非常の決心を要す。野心なくしかも敢然として責任を取り、これを以て祖國に對する最後の奉公であると覺悟した彼ありて、支那は始めて、この非常の功を成し得たのである。彼の功は、果然沒すべからざるものがある。

黄郛、膺白。この名は、邦人には親しいやうで、その實はよく知られてゐない。故に、卒然として彼の現在の遭逢や懷抱を述べたところで、讀者を五里霧中に彷徨させるだけであるから、その前に一應彼の經歷を洗つて見る必要がある。

彼れは杭州人で、一八八三年生といふから本年五十一歳。一九一〇年に東京陸地測量部卒業、歸國後前清軍諸府の測量部員となつてゐたが、辛亥革命起るや、陳其美の參謀長として江南機器局攻擊に參加し、つづいて北伐軍兵站總監、江蘇都督府參謀長、第三十三師長となつた。第二革命には、再び陳美其の參謀長として活躍したが、事敗れ日本に亡命、米國、新嘉坡を歴遊して一九一

六年歸國、浙江自治法起草委員兼同省駐滬軍事委員、一九二〇年大總統府顧問兼財政調査會長、同年大戰後の各國財政視察のため歐米に派遣、華府會議には支那代表部顧問であつた。一九二三年の張紹會内閣に、外交總長として入閣、次いで高凌蔚内閣教育總長代理、顏惠慶内閣（一九二四年）の教育總長となつたが、第二奉直戰に際し、馮玉祥を說いてクウデタアを斷行させ、自から國務總理代理として「臨行内閣」を組織、段祺瑞執政として北京に入るに及び辭職。爾來馮玉祥系の政客として、一九二五年財政善後委員會副委員長。關稅特別會議代表、一九二六年駐獨公使（未赴任）、これで彼れの北方での政治生活は、打切りとなつてゐる。

北方の政治生活を淸算した彼れは、一九二七年蔣介石の招きに應じて南下し、上海特別市長となり、一九二八年國民政府外交部長、五月濟南事件の勃發に遭ひ態度軟弱を攻擊せられて辭任（後任は王正廷）。それから一九二九――二〇年浙江省政府委員一九三一年導淮委員會副委員長、本年五月行政院駐平政務整理委員會委員長。「歐戰の敎訓と支那の將來」、「戰後の世界」、「華府會議とその傾向」等の著書がある。

五

以上の叙述によつて、彼の輪廓はハッキリとなつたと信ずる。すなはち彼は蔣介石と同鄕で、同じく陳其美系であり、むしろ蔣より先輩である。技術家出身で軍人となり、文筆にも秀で、轉じて財政家、大學敎授となり、再轉して外交家となつた男である。馮玉祥に見切りをつけ、蔣の勸說によつて國民政府と因緣を生じたが、徹頭徹尾國民黨に入黨せず、容共時代、共産派及び國民黨左派から、「新官僚派」と指目され、王正廷と併稱された。朝に立つた期間も短く、表面的活動は、王正廷ほど花々しくなかつた。しかも隱然として南方に重きを成して居たのは、その卓拔な世界觀によつて、外交上に於ける蔣介石の師匠格であつたからである。蔣介石の外交方針を知るには、黃郛の意見と、その動きを見るのが捷徑であると、消息通の間でいはれてゐたものである。

要するに黃郛は、蔣介石取つときの「切り札」であつたのだ。イザといふとき、蔣は、この切り札を出す積りであつた。その機會は一九三三年三月、張學良下野のときに到來した。蔣は黃を北平市長に起用し、表面花々しくないこの職に、藝で廣汎な權限を賦與し、對日外交の轉機を計ることにしてゐたのだが、輕佻なジャーナリズムは蔣の苦衷を察せず、それ親日家黃郛の出馬だと、八釜しく騷ぎ立て、各方面から反對が起つたので、蔣は已むなくこれを引込め、さらに次ぎの機會を狙つてゐるうちに、日滿軍の灤東及び古北口方面再進出となり、モウ多少の故障は顧慮にしてゐられなくなつたので、急遽行政院駐平政務整理委員會を組織し、黃を委員長として出山させたのである。

黃は敢然としてこの重任を引受けた。彼の自任は非常なものであつた。自分以外、この難局に當るものはない。もし今回の使命にして失敗したならば、何人と雖ども、日支關係を打開し得るものはない。國民政府に對する、否祖國に對する最後の奉公だといふので、上海で萬全の準備を整へた。で、彼は先づ第一に廣汎な權限を要求した。政務整理、外交にとゞまらず、軍權をも要求した。表面は委員制であるが、實際に於いては獨裁權を握る諒解をも得た。動もすれば局面紛糾の原因となる黨部の活動を、北方では一時停止することの諒解をも得た。南方に於ける言論の抑制をも承認させた。一方全國的組織を持つてゐる某團體にも渡りをつけて、反對運動の勃發にも備へた。――すべてこれらは、彼及び彼の同志（例へば吳鐵城、張群、黃良、殷汝耕、李擇一、杜月笙）によつて、熱心に劃策され、蔣介石の認許によつて、完全に遂行されたのである。

かうして出馬した黃郛の業績は、果然目ざましいものがあつた。眼前の停戰協定は、その第一の證左である。何應欽等中央系要人が、よく黃郛の節度を奉じ、比較的靜穩裡に北支局面の收拾を了したのは、流石だといへる。樣に依つて胡盧を畫く馮玉祥の反蔣運動が、黃郛、何應欽政權の前に、ヘロ〳〵矢となつて落ちたことを見よ。引込思案の閻錫山はともかく、北支第一の實力家たる韓復榘が、一歩も動かなかつたことを見よ。上海、天津その他の地方に、何等の騷擾の起らなかつたことを見よ。黃郛のその非常なる決心、周到なる用意の前には、これを妨ぐるアルプスはなかつたのである。

六

あまり黃郛ばかり褒め過ぎたやうだ。彼をして自由手腕を振はせた蔣介石は、勿論無視することは出來ない。山海關事件以來、

南昌で共產軍討伐に專念してゐると見せ掛けて、實は張學良處分の案を練つてゐた彼、學良危しと見るや、疾風迅雷的に中央軍を北進させ、一舉手よく北支を鎭定した彼、抗日擬勢の下に雜軍を整理し、機熟すと見るや、切り札を出して北支收拾の仕揚げをした彼、時勢を察するの敏、人を識るの明、小面憎いほどである。もしそれ「剿共・抗日より重し」の識見に至つては、我等の雙手を擧げて贊成せんとするところである。

更に蔣の協力者たる汪兆銘がある。彼は動もすれば反日政治家と稱せられてゐるが、それは甚だしき認識不足である。その實滿洲問題の解決については、彼は支那人中の先覺者で、九・一八事件以前、すでに同問題の解決策を決し（廣東國民政府時代）種々奔走を試みたことがある。この間の經緯は、遺憾ながら詳しく說明出來ないが、その一般は陳友仁、甘介侯等の發表によつて、世間の一部には知られてゐる筈だ。滿洲事變發生後も、彼は有名な「一面抵抗、一面交涉」のスローガンを發表し、ある期間、南支那では反日運動を抑制したことも、これ亦周知の事實である。行政院長復職の際、彼と黃郛との間には、將來の大策に關して、意見の一致を見てゐた筈だ。對日政策に關する限り、彼は蔣と完全に意見を同じうし、遺憾なく協同の責を果してゐる。亦沒すべからざる一人である。

七

日支停戰協定の成立は、アジアの黎明である。案ずるより產むが易く、この一事實を契機として、支那が太然の姿にかへりつつあるは、我等の喜びを抑へ得ないところである。平津に於ける黃郛・何應欽政權、山東に於いて保境安民と親日に終始せる韓復榘、對日策轉換の南京政府、これらはいづれも愉快なる存在であるが、たゞ遺憾なるは共產軍と西南政權である。緣なき衆生たる共產軍は暫らく置くが、西南政權が親米抗日の色をます〳〵濃厚にしアジアの黎明を認識せざるは、禍根こゝに在りと斷ぜざるを得ない。しかしこゝにも同憂の士が現はれて、華僑及び留東學會を中心とする大亞細亞協會の運動が起つたことは（東朝六月十三日朝刊參照）爭はれない大勢の動きを觀ることが出來る。この時勢に處する我が方策如何。（一）黃郛・何應欽政權の支持、それとの政治交涉の機を捉ふること。（二）韓復榘政權に對する勸奬工作。（三）反共產運動に對する支援。（四）西南方面に於ける啓發工作。ここに簡目のみを擧げ、讀者の心領意會を促がすにとゞめる。（『國際評論』一九三三・七）

第二節　銀公司問題と日本

我等は「宋子文コース」を想定し、且つ、それを追跡しなければならない。

一九三三年の春、彼は、世界經濟會議への支那代表として、先づ、アメリカに渡り、そこで、例の棉麥借款の締結に成功した。それからジュネーヴ、歐洲各國を遍歷して、聯盟の對支技術援助の强化をかち得た。さうして、この棉麥借款と、聯盟の對支援助を、手土產として、同年の秋、彼は支那に歸つて來たのである。

――これが表面に現はれた宋子文コースだが、彼の策動は、決してこれにとゞまるのではない。一皮掘り下げて見ると、隨分色んなことをやつてゐることが判る。近頃問題の銀公司案のごとき、彼は一九三三年春のアメリカの訪問のとき、もうすでに口火を切つてゐるのだ。アメリカの返事は、決して色よいものではなかつたが、彼はそれを押し隱し、いかにもアメリカが、乘氣になつてゐるやうにいひふらし、それを種に、歐洲各國で策動した。相棒はかのライヒマン、それからジャン・モネ、キンダアスレイ等だ。ライヒマンのことは、あまりに知れ亙つてゐるから、改めて紹介しないが、隱くれもなき「宋子文の靈魂」なのである。キンダアスレイといふのは、倫敦でラザアル商會といふのをやつてゐる男だが、いはゞ掠鳥。支那投資に經驗のない彼は、うま〳〵と宋子文の口車にのせられて、單獨に借款に應じようとしたのだが、アデイス（香上銀行頭取、イギリスの小田切萬壽之助といつたところ）の忠告で思ひとまつたといふ。それが病みつきの魚まぢり。ジャン・モネは、かつて聯盟事務局次長だつたし、四國借款團の、佛國財團代表でもあつた、著名の財政家。現聯盟事務總長アヴノールの先輩に當る。

この猶太系ポオランド人、英人、佛人を相棒にして、宋子文の提案したのが、支那經濟再建のための、支那を含む七國（支英米佛

（伊白）を以て構成する、國際コオポレイションだつた。

この案が、もし當時、各國が容納するところとなつてゐたら、今日問題となつてゐる中國建設銀公司は、一九三三年の秋には、出來上つてゐた筈である。しかし幸にも、案は主要各國に依つて拒否された。いかに拒否されたか？　の内容は、詳しくここにブチまけることは出來ないが、要するに、四國借款團の存在が、かかる國際コオポレイションの成立を許さないからである。

戀りずまに、宋は第二案を提起した。「財政諮問委員會案」である。モネを議長に、第一案同樣、六國委員を以て構成しようといふ案。これも、しかし、第一案に類するものとあつて、成立に至らなかつた。コンソルシアムの存在は、どこまでも物をいふ。

宋は失敗に屈せず、第二案を變形させ、モネ、ソルター（前聯盟財政部長）キンダアスレイ等を、南京政府の顧問として招聘した。個人としての彼等が、南京政府に就聘することは、誰も文句のつけやうがない。かくて宋の歸國と前後して、モネ、ソタルーが渡支し、一方、聯盟の對支技術援助聯絡員として、ライヒマンもやつて來たのである。

彼等、國際的ブローカーたちは、それから八九ヶ月の間、縱横の活躍を試みた。俸給その他、個人的の報酬だけでも、十二三萬元と傳へられるほどで、その他の立案、調査の費用に、いくら使つたか、ほとんど見當がつかない。さうして得た結果は何か？

ソルターだけは、支那の現狀に愛想をつかし、將來を悲觀し、嗟嘆して去つたといふから、これはやや炯眼。比較的冷靜に、觀測し得たといへるし、日本人に近似した認識と許せる。ライヒマンは、在京中セッセと「作文」を書き、それを、後生大事にジュネーヴに持ち歸つて、いはゆる「ライヒマン報告」が、一時の問題となつた。私は、まだその全文を見てゐないから、論斷を差控へるが、相當な出來榮えだといふ評判だ。勿論、實行には緣遠いだらうが。――さて、三人男の一人であるモネは、ソルター、ライヒマンの歸國後も、居殘つて、色々と奔走してゐたが、果然、初一念を貫いた。中國建設銀公司は、ともかく、發起人會開催の運びにまで、漕ぎつけたのである。

銀公司の開業は、二ヶ月後とされて居り（八月頃）この稿起草の頃までには、まだ全貌が、明かにされてゐない。斷片的に傳へられる情報を綜合するに、本店を上海、支店を各地に置き、資本金一千萬元（一株百元、十萬株）は、孔祥熙、宋子文等の發起人二十七人で五十萬元を負擔し、その餘九百五十萬元（九萬五千株）は、中央、中國交通等の十七銀行、宋子文、孔祥熙等の個人八人で引受けられてゐる。設立期限は三十ヶ年。役員としては、總裁孔祥熙（行政院副院長兼財政部長）、理事長宋子文（全國經濟委員會常務委員）理事孔等二十一名、監査役張靜江等十七名。最重要視さるべき事業内容は「組織、管理の權限を、完全に中國人にて把握し、政府關係・内外銀行、その他の組織と協同して、公私各種の企業を扶助し、農工商業の發達を圖るために、これらの事業に投資し、また事務管理、信託事業を行ふ。」と、定款に謳つてある。一見平凡、他奇なき標榜のやうだが、實質は、前述した七國コオポレイションの變形である點から見て、單なる支那銀行團として、看過するわけに、日本としては行かないのだ。想ふに、國際聯盟の對支援助といふものがあり、對支援助委員會の立案した、諸種の支那經濟復興案が、聯絡員ライヒマン（彼の任期は國際聯盟に依つて延長された）に依つて、支那に傳達せられ、これを受取る支那側には、宋子文を靈魂とする全國經濟委員會があり、ライヒマンといふチャンネルを通つて來た計畫案を、全經委員會で採擇、調整し、いよいよその實行に際しては、モネをムウボング・スピリットとする中國建設銀公司が、支那のみならず、觸手を廣く歐米に出し、内外資を誘導して、計畫遂行に當らうとするのである。この整然たる三位一體の完成、中國銀公司の意味の重大なことは、ここに觀取されなければならない。

モネは、しかし、流石卓越せる財政家である。かかる大仕掛けな事業に、日本を除外することの、果して得策であるや否やに考へ及んだ。そこで、銀公司創立準備の期間中に於いて、彼は、しばしば日本側と接觸して、支那經濟復興に關する、彼の見解を披瀝した。その當時の日本新聞紙の報道に據れば、彼の矢表に立つたのは、わが南京總領事須磨彌吉郎氏であつたといひ、モネは同總領事に對し、「むしろこの際、日本も銀公司に加盟してはどうか？」と勸説したといふことである。

モネの勸説に對し、須磨總領事の應酬したところは、取りも直さず、日本の銀公司に對する態度を語るものであらう。すなはち、列國が、支那に對し、若干の投資をなすがためには、支那それ自身に若干の信用があるといふことが、先決條件である。支那が、

若干の信用を恢復するためには、今少しく國内安定の程度を高めるといふこと以外、日本だけでも九億といふがごとき、巨額の債務を整理することが、絶對の必要條件である。支那は、今暫く「絶食療法」を繼續すべきであり、この見地に立つとき「協同して投資を試みるよりは、聯合して債權を取立つ」べきであらう。須磨總領事は、恐らく、かう應酬したのであらう。

私の感ずるところでは、叙上、日本の態度は、間然するところなしと思ふ。舊利權の調整は論外とするも、國際協同投資のごときは、斷じて尚早である。さうして、かかる見解は、獨り日本だけでなく、歐米に於いても、コンソルシアム方面では、同樣に是認されてゐるやうに思ふ。論より證據、債權整理に關しては、日本と同じ歩調を採りつつある國も出て來たではないか。將又モネ一個の策動も、それほど恐るべきものかどうか？　道塗傳ふるところに據れば、彼は故國財界に、さまでの勢力なく、彼の動かし得るところは、知れたものであるといふ。更に、銀公司構成の主要分子たる、浙江財閥の一部にも、隱然たる反對論があり「一種の鞘取り機關さ」といふ、冷評すら藏してゐるといふ。

冷嚴に、わが立場を堅持して、「御手並拜見」としようではないか。少くとも、一ライヒマン、一モネ、一銀公司のために、あまり騷がぬにととしたい。（『セルパン』一九三四・七）

第三節　日支復常工作の現狀と期望

支那は何故に轉向したか？

「日支關係の正常化なくして、その他の國に對する工作は、概して成功性に乏しい」

と、これは、私の畏敬する某先輩が、往年、米國を視察して得た結論である。

「支那は、統一あろ國家ではない」とか、「支那を、國家といふは、擬制に過ぎない」とか、かういふ觀方が、まだ盛行してゐた時だつたから、所詮、俚耳には入らぬと思つたが、久しからずして、いつかは彼の言が證しせられるであらうと、私は、ひそかに期待してゐた。

それが、實現せられた。眼前に展開せられつつある日支關係復常工作の嘗然たる大觀。特に、親日への支那の急旋回。日支關係の正常化を以て、國策一切の前提と信じて來た私は、この人間僅かに睹得るの快事に接して、心神昂揚、胸のときめきを禁じ得ないものがあるのである。勿論、工作は、まだはじまつたばかりであり、一派の懷疑論者のいふやうに、「僞裝親日」の「含み」も絶無とは武斷し得ないのであるが、「含み」はどこまでも「含み」であり、大根は、本筋は、端的に復常の一路を指ざしてゐるものと私は信ずるのである。――信ずればこそ、論じもし、書きもするのだ。希くば兩國の同志、後昆への榮譽を懸けて、居然成就するところあらんことを。

と、先づ期望を投げて置いて、さて、演繹に移るに當り、第一に想ひ及ぶことは、支那は、何故にその對日態度を轉換したか？その原因である。

統一への蔣介石の意企

支那の實權者である蔣介石の、日本に對する眞意如何？　日本朝野の關心が、この一事に集中せられたのは、これは當然である。彼の腹は、抗日に決してゐる、いや、抗日を擬勢してゐるのだといひ、いや親日を僞裝してゐるのだといひ、いはゆる性惡、性善、善惡相混ずるといふの類、紛紛として歸一するところがなかつた。雜誌論文の題目も、ここに觸れたものが多かつたし私自身も、數回撰稿の機會を持つた。何しろ、他人の腹の中を揣摩するのだから、容易なことではない。辛うじて、「その欲するところを察すれば、人いづくんぞかくさんやで、蔣が何を欲してゐるか？　それと、對日態度の關渉如何を照し合せれば、中らずといへども遠からざる觀察が生れて來よう。各般の狀勢に徵するに、蔣は支那の統一を意企してゐる。さうして、滿洲國と接壤する北支那の安定如何は、彼の統一工作に大なる影響がある。北支那は、彼のウキイク・ポイントである。この方面に於いて、下手な態度を日滿兩國に對して採れば、忽ち滿洲國の邊疆綏靖工作の發動を見、彼の統一工作は中斷される。統一を意企する以上、彼は抗日態度に

出ることは出來ない。抗日と見ゆるは、擬勢である。擬勢は、いつか脱落するであらう。」と、きはめて單純、且つ平凡な論理を以て、切り拔けて來たものである。私はこの理論を、今日といへども、變更する必要を認めないのである。

蔣の統一工作は、では、どの程度に達してゐるか？　我等は一九三四年十一月に遡り、赤色首都瑞金の陷落を回顧しなければならぬ。蔣のコースの最大障碍であつた共產軍。妥協も出來ず買收も出來ず、驅逐する外ない共產軍。一九三〇年から三四年、足掛け五年の間、五回に亙る執拗な討伐を敢行した甲斐があつて、終に江西の本據を覆へし、共產軍を西方に潰走せしめたのである。その效驗はいやちこであつた。今まで共產軍、及びソヴエート區を障碍物として、その蔭に隱れて、勝手な熱をあげてゐた西南派が氣勢を殺がれて、やむを得ざる沈默を守るやうになつただけでなく、いはゆる追剿軍事に於いて、精鋭な中央軍は、共產軍に尾して貴州、雲南に侵入し、實力の威脅するところ、右兩省ともに蔣の鼻息を窺ふ外なきに至つた。湖南でも、首鼠兩端を持してゐたといはれる何鍵が、背後をねらふ張學良（その系統の旧東北軍は、過般の追剿軍事に於いて、湖南軍の後詰となつてゐた。正に『逐り狼』で、何にしても剿匪に努めざれば、湖南は忽ち學良の手中に入るのである）に驚いて、肅然形を改めたし、四川では、一時失脚した劉湘が、蔣の後押しで息吹き返し、剿匪に可成りの成績を擧げてゐる。半獨立省區であつた四川が、蔣の勢圏に入ることはこれで豫約されたといつていい。張學良のゐる中部支那、黃郛、何應欽政權と、閻錫山、韓復榘等の軍閥とが、同床異夢の北支那、この二つの方面に對しては、蔣は昨年秋巡視して、いはゆる中支北支の兩工作を完成してゐる。その效果は？　北支那に反蔣の旗翻へるとして、その場合、反蔣の大本營たるべく豫想せられる山西に、蔣直屬の偵察機關たる憲兵隊が、一個聯隊駐屯してゐるといふ一事を以て、全貌を推していい。

以上は、蔣の外面的工作、すなはち各政治的勢力摺脈の工作であるが、これを內部的に見ても、彼の勢力は、最近ますます強化されて來てゐる。彼の軍事的勢力の根源たる軍官學校出身者は、概算二萬五千と算せられ、これらは蔣直系軍隊、藍衣社、憲兵隊剿共、文化機關等洩れなく配備せられてゐるが、最近は傍系軍隊にも侵入し、蔣系でなければ人でないといふ狀態になつてゐる。軍官學校出でない將校で、短期の講習を受け、色揚げしたものも、三千人からあるさうで、これを合算すれば、約三萬の軍官學校出が、網を張り廻してゐるわけである。藍衣社のことは、陳腐だから略する。憲兵隊は九聯隊出來、藍衣社員が多く、反蔣運動彈壓に全力を注いでゐる。黨部に對しては、陳立夫、陳果夫兄弟の西西園（C・C團）が牛耳り、行政機關に於いては、外交、鐵道、實業各部の上層に汪兆銘派、立法院に孫科派がゐるだけで、アトは全部蔣派だし、クウデタアに必要な首都の警察機關その他、無論腹心を据へてゐる。最後に、軍事委員會に至つては、蔣の大本營として、國民政府外の一政府を成してゐる。尙、臺所方としての浙江財閥を忘れてはならぬ。

上述に依つて、蔣の力量が强化されて來、統一工作が、可成りの深度に達したことが窺へる（強調は暫く措く、いはゆる『統一』は、支那本部を範疇とするものである）。で、（一）この程度を維持せねばならぬ。（二）一歩を進めて、本當に統一を完成したい。（三）萬一、統一が完成されたら、それを失つてはならぬ。これが蔣の意企である。彼は最近しばしば「第二革命の開始」に就いて語つてゐるが、要するに、右の意企に外ならぬ。

ここに於いて、極めて明白なことは、統一を完成し、これを維持するためには、彼が弱點を自覺する北支那の安全を保障しなければならぬといふことである。それには、對日態度を轉換しなければならぬ。その時機は？　彼の統一力量が深められ、民論の跳梁に對して、或程度の彈壓を加へ得る自信のついた時、――すなはち今！　である。

不先不後、轉換が、一九三五年初頭に於いて行はれたことは、偶然ではない。

經濟萎縮、特に銀問題

比年支那の經濟萎縮、農村の疲弊、最後に米國の銀政策に因る銀流出問題は、支那に甚大な影響を與へた。いかなる國民政府の施措に頓着なく、半歲間に銀の流出三億、やや下火となつたが、三ヶ月後は？　半歲後は？――蔣政權の重要なる支柱たる浙江財閥は、かく自問自答して、慄然たらざるを得なかつた。その巨頭頭腦は、南京、上海の間に往返して、危機來！　を絶叫した。國民政府は、米國政府に對して銀政策の緩和を求めたが、シルヴアメンの勢力强き米國が、それを聽くことが出來ようか？　浙江財

閥の頭腦の一人は、滙豐銀行（英國）に走つて、二千萬磅クレヂット設定を哀願したが、同行では、本國政府の意嚮を承けて、一應これを拒絶した。事、急なり。他の一人の頭腦は、急遽南京に赴いて最後の膝詰談判を試み、「現狀のまま放置すれば、一ヶ年を出でずして、支那は（勿論浙江財閥の意味であらう。）破産の外ない。」と述べて、外資輸入の要を切言した。これが南京政府を動かした。事成れりと見るや、頭腦は上海に歸つて、支那經濟の自力更生を說いた。

不先不後、英米以外、對支投資の可能性ある唯一の國である日本に對する態度轉換が行はれたのである。

抗日排貨の無效果

排日は、支那に於いて、すでに二十數年の歷史を持ち、昂揚期八九回を經てゐる。支那はこれを以て、日本を凹ます絕好の武器と思惟してゐた。滿洲事變起るや、對日抵抗の一方策として、抗日排貨を執拗に繼續した。しかし日本は、凹まされるどころではなかつた。旺盛なる產業力を昂揚し、圓安に乘じて世界の市場を席捲した。

「支那は、長年の日貨排斥、すなはち廉價なる日貨を排斥し、高價なる西洋品を購入し來れることに因り、出超國が入超國となり、一九三四年のごときは、現銀五億元の流出を見るに至り、日本より直接輸入せば、一個一元の麥稈帽も、一度香港を經由し、英國商人の手を經れば、五、六元に賣附けらる。支那政府及び抗日團は、これを老百姓に强買せしめ來れり。かくて南洋華僑の商場は鎖され、その本國への送金（年額五、六億元）は皆無となり、貿易バランスは逆線を辿るに至れり。かくて國庫券と流通票だけが、內國銀行に積み重ねられ、現銀は海外に流出し、民力疲弊せる現狀は、經濟的破滅の前兆にあらずして何ぞ。假りにもし日貨を直接取引きせば、入超額の半分は補正せらるべし。もし又日本が年々海外より購入する棉花九億圓の三分の一を、支那產棉花を以てせば、貿易バランスは更に均衡を得るに至るべし。」（土肥原少將上海聲明の一節）

土肥原少將を待つまでもなく、支那は、遂に抗日排貨の無效果を覺つたのである。一圓の帽子を、五、六圓も出して、日本以外の外國商人に儲けられ、ヤセ我慢を張つて見ても、日本は少しも弱らぬのである。そのうちに、無理をしたため、いよいよ自分の身が危くなつたのである。「こんな馬鹿らしい取引きを、どこまで續けるつもりか？　政府も政府、抗日團も抗日團だ」といふ、つぶやきの聲が、公然たる非難に代らうとして來た。それが、政府の對日態度に影響したのは、これ亦當然であらう。

聯盟依存の夢破る

滿洲事變が起つた時、支那には、三個の潮流があつた。一は、日本との直接交涉を主張する一派であり、二は「一面抵抗、一面交涉」のスロオガンに著るしき汪兆銘一派あり、三は、國際聯盟への提訴を主張する一派である。第三派が大勢をリイドし、「一面提訴、一面抵抗」「全面提訴」の二個の段階を經過した後、一九三三年五月の北支停戰協定締結當時には、「一面交涉、一面提訴」となつた。しかも日本の聯盟脫退に依つて、聯盟が支那の主張を容れて、どんな決議をしようとも、實效はないことになつた。取り止めたものは、聯盟の對支技術援助だけ。それも結局月給取りに顧問がやつて來るだけのことで、財政部が顰をシカめるばかり。實地に卽せぬ、行へない計畫を立てたり、徒らに理想に馳せて蔣介石を苦笑ひさせたり、例のライヒマン博士支那辭去の時の話など、想ひ出しても滑稽なくらゐだ。

かくて「提訴」はすでに「尾聲」となり、一九三四年では、通車、通郵、設關三問題が片附き、對日債務整理も少しづつ行はれ、「全面交涉」の場面が展開されたのである。

それを公式化しようといふのが今度の對日態度轉換である。すなはち、支那に於ける聯盟依存の夢は、破れてすでに久しいのである。

その他の原因

轉換の原因については、上述の外、まだいくらも考へられる。黃郛、汪兆銘、吳震脩、唐有壬、李擇一、殷汝耕、袁良等の穩和派の不斷の努力。滿洲國の健全な發達。北鐵賣却交涉の進捗。南洋委任統治問題の落着。日本が倫敦に於いて、堂々その立場を曲げなかつたこと。日本に於ける大亞細亞主義的新國際論の勃興等等。並びに、やゝ漠然としてはゐるが、現狀に對する倦怠の念、

すなはちドンヨリと曇つた、頭のムシヤクシヤするやうな狀態を打開したいといふ國民的感情。最後に、支那ばかりが轉換したのではない。日本もこゝに導くためには朝野とも、數年の努力を傾注して來たのだといふことを、指摘せざるを得ない。本稿冒頭、某先輩の言は、その脚註である。

轉換の態樣

不充分ながら、轉換の原因を說明した。いかにそれが現はれたか？　先づ次頁の表を讀まれたい。

表を見て感ずるのは、今回の支那の方向轉換は、突如として現はれたものでなく、黃郛を起用して、停戰協定を締結した當時から、氣運が動いてゐたといふことである。いや、蔣介石と相並んで、國民政府を背負つてゐる汪兆銘が、孫文の大亞細亞主義の正覺に看到したといつて、陳友仁を赴日せしめたのが、一九三一年の五月だから、見樣に依つては、九・一八事件の勃發に因つて日支の接近が、數年間せかれたのだともいへよう。だが、これらは、すでに歷史の領分に入つたとして、現段階の出發點が、一九三四年一月、蔣介石と鈴木武官との會見に在ることは否めない。つづいて、四月、有吉公使と汪兆銘の會見、これも意味重大である。それから通車、設關、通郵の順序で、停戰協定の跡始末が出來、それと併行して對日債務の整理が緒に就いたところで、蔣は陳布雷に命じ、徐道鄰と協力させ、徐の名に於いて、日支關係整調に關する論文を、外交部機關誌「外交評論」誌上に發表させた。陳はもと上海時事新報主筆、蔣と同鄕の浙江人で、教育次長をやつたこともあり、今はたしかに蔣の侍衞室秘書長をやつてゐる筈。周佛海等とともに、蔣の文化方面を擔當する助手の一人だ。徐は本年二十九歲の一靑年で、段祺瑞の懷刀であつた故徐樹錚の次男、建設委員會の委員で、南京大學の敎授だといふ。問題の論文は、「敵乎？　友乎？　中日關係之新檢討」といひ、「外交評論」に出ただけでなく、「申報」その他支那南北の大新聞にも轉載せられ一大センセイションを惹起した。一部では、蔣本人がその一部分を書いたといつてゐる。論旨は、本邦諸雜誌に全文が譯載せられてゐるから、ここに繰返さないが、要するに滿洲事變以來の日本の錯誤を擧げ、雙方に責任ありとし、たゞちに國交調整の要ありといふに在る。ただその結論に、「鈴をかけた人が、鈴をとけ。」といひ、滿洲事變の原因が抗日排貨に在ることを忘れた言分は、我等の承服し得ないところであるが、ともかく、アノ程度のことでも、

時日	蔣介石	汪兆銘	胡漢民
一九三一	◇九・一八事件起るや、南京國民政府主席として、聯盟提訴の根本方針を決す。一面、國難を理由として、廣東との妥協を謀る。	◇五月、孫文の大亞細亞主義（一九二四・一一・二八神戸講演）に味到したと稱し、廣東國民政府外交部長陳友仁を赴日せしめ滿洲問題に關し、幣原外相はじめ朝野要人の間に遊說させた。 ◇九・一八事件起るや、逸早く「一面抵抗、一面交涉」を提唱し、南京との妥協に應す。	◇十二月、南京・廣東妥協成立とともに、監禁より自由を恢復し香港に隱れ、聯盟提訴の不可を切言す。
一九三二	◇上海事件起るや直屬二師を參加せしむ。	◇南京政府に入り行政院長となる。 ◇七月下野外遊。	
一九三三	◇四月黃郛を起用して、行政院駐平政務整理委員長とし、五月停戰協定を締結せしむ。 ◇四月十日南昌行營に於いて要人千餘名に對し「剿匪は抗日より先きにすべし。歷史に徵するに、國內安定せずして攘夷に成功せる事例なし。予は剿匪各部隊に對し、匪軍を肅淸せざれば斷じて抗日を云爲すべからず。違背者は重罪に處すべき旨嚴命せり。」と演述。	◇三月外遊より歸國し、黃郛の後援に依り行政院長に復職。 ◇四月黃郛起用、五月停戰協定締結に參畫す。	◇停戰協定に反對す。
一九三四	◇一月三十日駐支日本公使館附武官鈴木美通と會見、日支關係整調を希望。 ◇十二月陳布雷、徐道鄰をして外交評論誌上に「敵乎？友乎？中日關係之新檢討」を執筆せしむ。	◇四月有吉駐支公使と會談、國交調整の要を說く。 ◇通車、通郵、設關及び對日債務整理に參畫す。 ◇中華日報記者林柏生をして「二條之對日路線」を發表せしむ。	

これまで支那にはいふ人がなかつたのだら、相當買つてもいいと私は思ふ。

この論文と前後して、たしか本年一月十五六日頃、吳鐵城、楊永泰が使者になつて、有吉公使、鈴木武官に、蔣から會見の意が傳へられた。これより先、須磨南京總領事は、歸朝して本省の訓令を受けつゝあつたが、これもこの頃南京に歸任、待ち兼ねた汪

兆銘が、一月二十一日に須磨總領事と會見した。さうして、議會に於ける廣田外相の外交演說が、穩健適切、支那側に豫想以上の好影響を與へたのを背景として、いよいよ一月二十九日に有吉、汪兆銘、鈴木、蔣介石の兩會見、三十日に有吉・蔣の會見が行はれたのであるが、それまでに須磨總領事、岡野、雨宮海陸武官、汪兆銘、黃郛、唐有壬等の間に、十回に近い準備的會談が行はれてゐるし、本會議に當る二十九、三十兩日の三回の會見後も、孫科、孔祥熙、王寵惠等が新たに登場して、補足的會談をやつてゐる。それから支那側內部でも、何回か重要な會議をやつてゐる。就中最重要視さるべきは、一月三十日の有吉、蔣會談、同夜の支那側會議である。特にこの支那側の會議には、蔣、宋、黃郛以下、孫科、孔祥熙、居正、葉楚傖等の要人三十餘名出席し、對日根本方針を決したといふ。すなはち蔣と鈴木武官との初次會見（一九三四・一・三〇）後、滿一ヶ年にして、日支復常工作に、一ピリオッドが打たれたのである。

これより後、蔣の中央通信に與へた會見談（二・二）、中政會議に於ける汪兆銘の對日方針闡明（二・二〇）、訓政時期約法に規定されてある「人民營業自由」條項勵行決議（二・二七中政會議。―いはゆる變相的排日取締令）、王寵惠訪日（二・一九―三・五）、有吉、汪會談（三・七）その他李擇一、陳伯藩、張嘉鏘の來朝、橫竹商務參事官の歸朝等、目まぐるしいばかりの展開を見せてゐる。その效果は、必ずや今後に現はれるであらう。

支那の求むるところ

前記準備的會談、本會議的會談、補足的會談を通じて、支那は何を日本に求めて來たか？

第一に、滿洲問題は、これをセット・アサイドすべき筋合ひであるに拘はらず、矢張りチョイチョイこれに論及した。しかし日本側は、この問題を持ち出さないといふことは、年來諒解濟みのことであり、もしこの問題を論ずるならば、その他の問題に入らないといふ强硬な建前を執つたので、支那側も遂にこれに觸れないやうになつた。當然の成行である。

第二、侵略の意思がないといふことを、機會を見て表明して貰ひたいといふ依頼。けだし抗日排貨停止の代償として、日本から不侵略聲明を得たいといふ意味らしい。ところが日本は、かつて支那を侵略せず、滿洲事變を侵略などといふ解釋には、絕對に同意し得ないのであるから、この上侵略しないなど、テンデ觀念として成り立たないと、一蹴した。侵略の意思があるかないか、外相の議會演說等を見れば、說かずども判る筈で、コンナことは、復常工作の議題にはなり得ないのだ。

第三に、共匪討伐への援助。これについては、具體的の話はなかつた。漠然たる要求だつた。しかし、これは日本に異議のないところで、以心傳心といふ形だつた。實際問題として、討伐軍の輸送を、日淸汽船に承諾させたやうなことになつてゐる。

第四、銀問題、これが支那の求むる最大のものであるやうに感ぜられた。さうして、この問題は、結局借款問題に歸するのであるから、これまでの日支の會談が、借款話に觸れたにせよ、觸れなかつたにせよ、どうせ落ち着く先は知れてゐる。早晩この話になるのは定まつてゐるといつてよかろう。

日本の求むるもの

抗日排貨の根絕は、その第一である。復常工作の前提として、力强くこれを要求した。その結果、前述の通り、變相的排日取締令（訓政時期約法の「人民營業自由」條項の勵行）が出、黨部に手を入れ（葉楚傖、邵元神に代つて黨中央宣傳部長となる）教科書の改訂にも着手したといふことだが、これだけでは、日本としては決して滿足出來ないのは、いふまでもない。

對日債務整理は、その二である。これは、一九三四年來、小口から手を着けてゐるが、それだけでは滿足出來ぬ。或機會に、一括整理したい希望を持つのは、これ亦當然である。

不逞鮮人問題は、その三である。不逞鮮人を〇〇學〇に收容したりするのは、共產黨張りの政策である。「中華ソヴェート憲法」の中に、世界革命鬪士保護、援助、指導の明文があるが、それと同じことを國民政府がやるといふことは、默視するわけに行かないのだ。

建設援助及び合作は、その四である。聯盟の對支援助その他に現はれてゐる通り、支那は外國から人や、智惠や、物資や、の援

助を受けてゐる。すなはち顧問・教官の招聘、資本輸入、武器購入等をやつてゐる。それを止めよといふのではなく、苟しくも日支關係の復常に乘り出す以上は、日本ともかうした合作をやるべきだといふのが、日本の意向である。

經濟關係の調整は、その五である。勿論まだ具體的の話はない。ただ、復常する以上、當然經濟關係を調整すべきだといふ、その根本方針は、支那側に通じてあるものと觀ていい。

期望

日支復常工作の進展は、國際的に大なる反響を呼んだ。英國を主動者とする、對支財政共同援助は、その最大の現はれであるがそれは、(一)英から米に、銀政策の緩和を求め、(二)對支財政共同援助を慫慂し、(三)その場合、日本にも參加を求めよう。(四)取りあへず、日本にも相談しようではないか。といふに歸するやうだ。詳しい情報を知らず、新聞電報だけで論斷することは、危險だから、次の機會に讓る。日本としては、英國からその話のあつた場合には、「聞き置く」くらゐのところにして、本筋たる復常工作に、依然全力を盡すが得策だらう。共同援助がうまく行くものならば、一九二〇年に成立し、五年の期限を終つた後、更に無期有效を決議して、(「近代支那の政治經濟」五六頁に據る。) 今日なほ存在してゐる四國借款團は、今日まで十五年間を、無爲に暮らしてはゐなかつた筈だ。實際、共同動作のとり難いことは、一九二五年の支那關稅會議でも判る。債務整理の問題にしてからが、賣掛代金と普通の借款は違ふとか、A借款は入れるが、B借款は入れられないとか、借款の性質に依つて償還順位を異にせねばとか、面倒くさいことこの上なしである。もし借款を支那に許すなら、單獨借款の方がいい。——私は、だから共同援助に期待を持たない。

傍目もふらず、依然復常工作を進めるが、今日の急務であるとして、個人的期望を開陳することを許されるならば、——

(一)日支經濟關係調整に關し、上海に日支共同調査會を設置すること。銀問題、對支クレヂレット、幣制、割當制、その他が調査の題目。その結果、クレヂレット設定がいいとなれば、一肌拔ぐのも結構ではないか。

(二)支那に於ける共產運動調査のため、上海に日支共同の一機關を設立すること。共產軍を江西から驅逐したことは、一應の成功であるが、それを四川、湖南、貴州、雲南に追ひやり、西北赤化の段階を現出したことは、遺憾である。共匪の勢が、今や下火であるといつて、これが研究を抛擲することは、許されない。ここに一機關を作り、調査に當らせ、その報告に依つて共匪討伐援助と決すれば、軍事顧問招聘、武器供與、討伐軍輸送援助、ともに結構ではなからうか。

(三)邊疆問題研究會を設立せよ。邊疆の危機は次第に迫つてゐる。就中、新疆は何の體態であるか。中央の文書は受け附けず、勝手にロシア人顧問を入れ、借款契約を締結し、歐亞航空をカットしたりしてゐる。今にして挽回を謀らざれば、將來どうなる？　この問題も亦、日支兩國の共同研究に待つ必要がある。

(四)支那は抗日排貨禁絕に關し、今一層切實な手段を講ずべきである。理由は贅述を要しない。

(五)視察團の交換。經濟視察團、新聞記者團の交換も缺くべからざる一擧と思ふ。

(六)支那は不逞鮮人を取締るべきである（理由前述）。

(七)支那學生留日に徹底便宜を供與すること。（『國際評論』一九三五・四）

第四節　支那の親日派排日派

支那の政局と、人物を論ずる場合、誰は何派だ、彼は何系だと、矢鱈に派別をつくるはいかんと、近頃、よく方々で叱られる。一應、尤もである。再應、必ずしも然らずである。

弱國が、周圍の强大な帝國主義に對して、外交手段により、何とかして活きて行かうとする場合、どうしても「以夷制夷」と、考へつく。Aと結んでBを抑へ、Cを延いてDへの楯とする。有り得ることである。「以夷制夷はいけない。」とか何んとかいつて、エラさうに評するけれど、「以夷制夷、遠交近攻を除いて、外交が有り得るか？」と、支那の或外交家が放言したさうだ。外交とい

ふもののうちには、多少とも、「以夷制夷」的傾向が、含まれてゐるのではあるまいか？　弱國の外交においては、特にそれが著しい。かつて朝鮮において、それを見た。支那でも、五・四運動の原因の一つとなつた、曹汝霖一派の親日派を見た。現下の支那が、御多分に洩れるか？　洩れないか？　問ふだけ野暮である。

九・一八事變が勃發したとき、支那には、三個の潮流があつた。一は、日本との直接交渉を主張する一派であり、二は「一面抵抗、一面交渉」のスローガンを唱へた、廣東國民政府の汪兆銘一派であり、三は、國際聯盟への提訴を主張する一派である。前二派は、認識やや正確であり、後の一派は、見透しが不正確であつた。しかも、支那に取つて不幸にも、後の一派が大勢をリイドした。かくて、「一面抵抗、一面交渉、一面提訴」「一面抵抗、一面提訴」「全面提訴」の三個の段階を經過した後、一九三三年五月の北支停戰協定締結當時に及んでは、「一面交渉、一面提訴」となり、今日においては、「全面交渉」の正常關係に復しようとしてゐる。「提訴」と「抵抗」とが姿を隱し、「交渉」だけが活きてゐる現狀は、一寸面白く、皮肉でもあらうではないか。さうしてこの五個の段階を通じて、親日派と、排日派との勢力對立が觀取され、消長の跡が、マザマザと判る。

では、いかなる人々が、舞臺に躍つたか？

循つく面々

支那に於ける財政家の一人として、宋子文の名はあまりにもよく知られてゐる。九・一八事變後、我等は彼を、排日の巨頭として記憶せねばならなくなつた。ライヒマン博士と組んで、眞茹の無電臺にベッドをかつぎ込み、ジュネーヴへの情報供給の采配を振つたといふ話は、繰り返すべく、あまりに陳腐である。世界の耳目が、滿洲の一擧一動に集中せられてゐるとき、彼とライヒマンとの不眠不休の情報供給が、どれだけ役に立つたか！　それは、滿洲事變外交史を讀む人の、知つてゐる通りである。ここに於いて、彼は一躍して、名宣傳家の名をかち得たのであるが、熱河の戰線に、何十萬元かをバラ撒いて、張學良を煽動したり、世界經濟會議への使節として、先づアメリカに渡つて、棉麥借款を成立させたり、歐洲を廻つて、各國の財政家を手玉に取つたり、八面六臂の活動に、世人を瞠目せしめたのであつた。

「貴國の支那に於ける權益は、日本の進出に依つて、根こそぎ消滅するのだが、それでもよろしいか？」と、相手構はず說き廻つた彼。船が往復に日本を過ぎても、頑として船から上らなかつた彼。一九三三年の秋、右手に棉麥借款、左手に聯盟の對支援助といふ、莫大もない手土產を携へて、得意滿面で歸國した彼。――しかし、中樞の意向は、もう變つてゐて、その年の十月には、彼は財政部長を免ぜられ、僅かに全國經濟委員會の常務委員として、今日に及んでゐる。それでも、中國建設銀公司の設立とか、西北開發借款とか、相變らず暗躍をつづけて居り、その潛勢力は少しのユルミも見せてゐない。

見るからに精力的な顏。英語は、留米學生の御手のもの。外人の心理を摑むこと、天下一品。ことの分りの早いこと、不逞な、鋭もしい人物。何よりも、野心の強いことが、彼をして、政・財界の巨頭たらしめてゐる。普通に日本に對する認識がないといはれてゐるが、それは皮想な觀察。日本のことは、一から十まで心得てゐて、その上での排日であるから、困る。場合に依つては、敵の日本さへ利用しようといふ。借り倒してやれといふ腹を持つてゐるのだから、ウッカリかかれない。

蔣介石とは、切つても切れぬ姻戚關係があり、浙江財閥との關係も、蔣につぐものがあるし、――そのために、蔣と彼とは、「脊中の喰附いてゐる雙生兒。」

と、陳友仁あたりから評せられるのだが、場合に依つては、その蔣を蹴放すくらゐのことは、やりかねないし、張學良とは、一脈相通ずるものがあるし、西南派と結ぶ可能性もあるし、これくらゐ、小氣味のよくない存在はない。單なる排日の巨頭だけでなく、民國政界の一大惑星として、彼の動きは注目される。

宋子文について、長く述べ過ぎたが、彼を除いては、眞に力量ある排日派が見當らないのだから、仕方がない。以下、名前だけを擧げると、先づ顧維鈞、施肇基、顏惠慶等の外交家がある。

彼等は全部アメリカ留學生である。中でも顧維鈞と來たら、排日的といふよりは、テンデ支那人でないといつた方が、適當であ

る。ハイカラ才子を多く出す江蘇人で、上海のアメリカ學校、セント・ジオンス・カレッヂを出て、アメリカに留學した男。支那にゐたより、外國にゐた方が長く、支那そのものについては、何も知らない。まして日本をや。さうして、アメリカの手先きになつて、國際聯盟でラウド・スピーカーの役目を勤めた彼。そもそも、巴里會議の昔から、我等日本人には、忘れられない彼だが、さて、中樞の意向が變り、聯盟依存の夢も覺め果てるとなると、彼など無用の長物。近頃、歸國してゐて、「我々は蓄音機だ。レコードがなくては喋れない。中央に、どんな外交方針があるのか？　それを聞きに歸つてゐるのだ。」と、悲鳴をあげてゐる。顏惠慶になると、顏とは大分違ふ。そのむかし、英文大辭典を編纂したり、北京では、親日派全盛時代に、その下積みになつてゐたりした男とて、大分苦勞をしてゐる。北京政府の財政整理會長をやつて、本氣に、支那財政の建直しを考へたり、迂儒のやうなところ、どこか重厚なと想はせる點があり、排日派と片附けるのは、いささか氣の毒な感じがする。——大體、排日的意見を發表したこともないのみならず、かつてジュネーヴで、相手は日本人であつたが、「黃色人同士が、白人の審判を受けるやうなことは、恥かしい。」と、語つたこともあるといふ。最近にも「支那の外交方針は、ジュネーヴ路線か、東京路線か、モスコー路線か、の三つよりない。」と、いつたとやら、日本と結ぶのも、一方策だと知つてゐる點、買つてやつてもいい。

顧、顏以下、外交官の大部分は、分類すれば、排日派だが、故國の政界に勢力なく、蓄音機に過ぎぬから、實は齒牙に掛けんでもよい。「外交官謀叛」など、どこの國でも成り立たんのだから。

舌の排日派から、筆の排日派に轉ずると、これはたしかに多い。九・一八事變後は、國を擧げての排日氣勢だつたから、それも無理はない。全支那の新聞記者、一二の例外を除いては、全部が排日派だといつてもいいが、腹からの排日派を擧げよといはれると、「民國日報」にゐた潘公展とか、ホーリントン・ケイ・トンの名で知られてゐる、英文記者の董顯光とか、「征倭論」の著者、龔德柏とか、二三人の名しか浮んで來ない。

董顯光のことは、よく知らないが、要するに、新聞界に於ける顧維鈞であらう。潘公展は、上海に於ける排日運動の大幹部で、それを踏み臺にして政界に入り、今は上海市の教育局長をやつてゐる。雀百までで、先達て排日於送をやつて、物議をかもしたのは、この男である。龔德柏は、日本留學生で、北京で夕刊新聞を主宰したことがあり、この後上海、南京に移り、「征倭論」だとか「喝破日本的陰謀」だとかいふ種類の書物を出し、排日論策家として知られてゐる。職業的排日者の尤だ。

再轉して、各政治的勢力、軍界、實業界に、どれだけの排日派がゐるか？　調べたつて、判りつこはないが、頭に浮ぶままを擧ぐれば、孫科、張學良等であらう。胡漢民も排日家でなく、西南派も同斷、北では山東の韓復榘は、諸軍閥中、最も日本を理解してゐるし、山西の閻錫山、平津の何應欽、いづれも排日的でない。實業界でも、腹からの排日派はあり得ず、商賣さへ出來れば、の連中ばかりであらう。

色よい人々

親日派を見よう。

行政院長の汪兆銘。滿洲事變勃發前、彼は廣東國民政府にゐて、孫文の「大亞細亞主義」に覺醒したと稱し、外交部長の陳友仁を派して、日本との提携を策したことがある。事變勃發後も、逸早く、有名な「一面抵抗、一面交涉。」のスローガンを發表した。南京政府に入り込んでからも、蔣介石、黃郛と談合して、穩健な對日策を執つてゐる。今日の支那に、汪兆銘あるは、國の大幸でなければならぬ。

北平政務整理委員會委員長黃郛。彼こそは、日本を理解する第一人。北支停戰協定當時から、今日までの、彼の出處、進退、及び業績は、今更紹介するまでもない。九・一八事變以後、一時雌伏を餘儀なくされた、親日派の總帥として、吳震脩、李擇一、殷汝耕、袁良等を率ゐ、一旦緩急ある場合、一身を犧牲にして、日支兩國間の楔にならうと決心した彼。汪兆銘の南京政府入りを背後から支へ、「困つたら、自分も出るから。」と、はげました彼。一九三二年末までに、支那の歐米依存の夢が清算され、つづいて熱河聖戰、彼は機會を見出し、終に出山した。彼の率ゐる一團の同志、——眞に日本を理解し、日本と提携するのでなければ、支

那は決して救はれないといふ信念に生きる親日派、――の、二年間の忍從は、彼の出山に依つて酬ゐられ、現に、北支那の殘局を支へてゐる。人間、僅かに見得るの快事である。

黃の一派のうちに、吳震脩は、中國銀行の南京行長で、一派の長老であり、智囊でもある。唐有壬は、汪兆銘の下に外交次長となり、そのよき輔佐役である。殷汝耕は日本に最もよく知られ、上海市參事だつたが、今戰區整理委員を兼ねてゐる。李擇一すなはち李官韓（李十一といふ名で、邦人に知られてゐる。）は、慶應出の實業家、今福建主席陳儀（これも親日派）の輔佐役として、福建に行つてゐる。袁良は、今北平市長として、對日交涉に腕を振つてゐる。

汪兆銘黃郛の外、政府部內では戴天仇（『日本論』の名著がある。）切つても切れぬ親日派である。蔣介石左右の楊永泰、張群、ともに日本を理解してゐる。前者は蔣の秘書長で、當世の范增といはれる智者。後者は湖北省政府主席で、一面黃郛の同志。何應欽以下の蔣系將領は、特に親日派として名を擧げるに及ぶまい。

山東の韓復榘は、諸軍閥中、日本を理解する第一人。北支那に亘る排日風潮中に、彼のみ血迷はなかつた點、特に買つてやらねばならぬ。同時に、西田濟南總領事の努力を認むる必要がある。南に下つて胡漢民、特に高調を發するやうだが、排日派ではない。聯盟依存には、最初から大反對だつた。西南派は、今失意の境遇の時に、日本に手を延ばすこともあらうが、親日派と目すべき筋合ひではない。

新聞界にも、對日正覺を持合せてゐるのがある。天津「大公報」の胡霖、張熾章、同じく「民報」の魯嗣齊等がそれである。張は、支那隨一の名記者。彼の筆が、どれだけ日支邦交に役立つてゐることか！

支那に於ける排日派と、親日派とを論じて、ここに至り、蔣介石の對日態度に及ばないわけには行かない。彼は一體、親日か？排日か？

腹からの親日派でないのは勿論だが、腹からの排日派でもない。ボナパルテイズムの權化であり、支那の統一を、一生の念願としてゐる彼は、對日態度に於いて、機會主義者の外貌を表はしてゐる。滿洲事變を、國際聯盟に提訴することにしたのは、彼であり、北支停戰協定と締結し、黃郛を出山させたのも、同樣に彼である。福と鬼との、二つの面を用意して、隨時に使用するのが、彼である。

故に、彼を、親日派だ、イヤ排日派だといつて、傍から肯筋を立てるのは、實に愚の骨頂である。すべては、ボナパルテイストとしての、支那統一の念願者としての彼の本質から演繹し、今、日本に對して、どういふ態度を取り、將來、どう出るであらうか？といふことを、檢べればいいのだ。

この見地に立つて、私は斷ずる。彼は、現在に於いて親日である。將來に於いても、同樣であらうと。何故？　とは、汪カッな質問である。彼は、今江西の共產軍を蹴散らして、大敵、西南派と、敍々相摩するほどに、鍔競つてゐる。張學良と結んで、中部支那を平かにし、先達ては北支那を巡閱して、懷柔工作に大童だつた。その弱點は、北支那の一角に在る、對日外交、そのよろしきを失するときは、○○國の○○○○工作が發動し、統一の礎石が失はれるではないか！　それは、必ずしも、○○○○を待たないのである！

かうした弱點を抱へて、どうして彼が反日的たり得やうか？　では、將來はどうだ？　彼の支那統一の可能性は、これ亦一問題であるが、それは暫らく措き、萬一統一出來たとする。彼は、やはり反日的にはなり得ない。例の弱點は依然として弱點であり、――折角出かした統一を失ふまいためには、あくまでもその弱點を、抱擁し盡さなければならぬから。「統一が出來たら、失地恢復へ。」それこそ、痴人、夢を說くの類であらう。（『世界知識』一九三五・二）

第五節　親日派の人々

一　親日派とは

「彼は親日派だ。」

「この男は、排日派だ」

と。これは、どこまでも、便宜上の分類であつて、支那政界に出頭沒頭する人々を、親日か排日かの、いづれかの範疇に入れてしまはうなどとは、出來もしなければ、無用のことでもある。だから、近頃、よく方々から、「色別けは、いかん。」と、苦情をいはれるのだが、――實際に當つて見給へ。これくらゐ便利な言葉はないのである。もともと、使ひ出したのが、支那關係の新聞記者で、支那政局の解剖に、いかにも便利だつたからだ。多くの說明を要しないで、大體、對象の人物の輪廓が判るので、我も、我もと。だが、そればかりとは、いひきれない事情が、支那にはある。支那邊疆の諸民族が、無知な人種でありながら、周圍の諸帝國主義に對して、トテモ敏感で、强力と認めるものを選擇して、それに依存しようといふ判斷が、一種の本能となつてゐるやうに、西力東漸以來、支那中原の主人公たる漢民族も、御多分に洩れないのである。そこが、半植民地・支那の、特徵の一つといへるかも知れない。で、外力をかりて、その背景の下に、自國の政界に覇を稱しようとする傾向が、支那政治家の間に著るしくなる。正しく、支那には、親日派もあれば、排日派もある、といふわけ。一方に、半植民地たゝ支那があり、他方に、諸帝國主義がある以上、必然の產物として、親日派、親米派、……等々があり得るのである。それが、外交に現はれて、「以夷制夷」ともなる。潔癖な日本人は、日本にゐて、「親日も、排日も、本質上あり得ない。」と評してゐるが、實地に就いて見ると、かうした批評が、必ずしも正確ではないことを發見する。

便宜上の社會觀念としての、親日派が、支那にはあるものと假定していただく。さうして、著名な政治家、その他で、親日的な、どんな人々があるか？　といふことが、課題であるが、それを果す前に、「親日派の定義」を、定めたければならぬ。

勿論、ピンからキリまである。正確な國際觀を持ち、世界の動きをよく見透した上で、日本が、東洋に於ける安定勢力であると判斷し、「支那が、その存續を確保するために、のみならず、國運を更に伸張するためには、日本と結んで、西力の再强襲に備へなければならぬ。」と。これは親日派の上々なるもので、かつて日本が、ロシアの野心を看透し、イギリスと同盟したのと、同じく良苦なる用心である。この境地にまで達した親日派は、數多くないが、自身、私支那に甘いせいか、絕無とは斷じ得ないのである。一人にせよ、二人にせよ、かうした人がゐると信ずることは、十歩のうちに芳草を發見したやうな嬉しさを感ずるのである。深文羅織して、もしくは、徒らに懷疑して、その人なしと自棄するよりは、大甘であらうとも、あると篤信した方が、兩國のためにいいと思ふし、――第一、私の健康のためにいい。自暴して、體あたり專門に行かねばならぬとしたら、一體どうなる？

上なるものの外、日本に留學して、よく日本の國情を理解し、やがてそれを基礎にして、出風頭（乘り出す）しようといふのもあれば、日本に心醉し切つて、日本のやることなら、何でもよく見えるといふのもあり、日支親善が流行語になると、一席便乘して、甘い汁を吸はうといふのもある。動機の如何を問はず、ひつ括めての親日派、と、定義附ける。

二　汪　兆　銘

浙江人を父とし、廣東人を母とし、十人兄弟の末ッ子に生れた彼は、二十歲のときわが法政大學に留學し、二十二歲のとき、朱執信と一緒に孫文に會ひ、共鳴感激、即日「同盟會」に加入し、機關誌「民報」誌上に、「民族的國民」その他の雄篇を發表した。「新民叢報」に據つてゐた保皇派（君主立憲派）の梁啓超との論戰など、今に文獻に殘つてゐるが、熱血多感の革命青年は、その婦女のごとき美貌に拘はらず、文字の鼓吹をもどかしとなし、ひそかに北京に入り、攝政王を爆死しようとして、謀洩れて捕へられたこともある。それから約三十年、目まぐるしいばかりの政治的經歷を經ながらも、依然として當年の情熱を保ち、

「ああ共和二年の戰士や、
ああ、白骨と青史と。
萬人の劍、匣を出で、
昏王の血を吸はまくす。」

などと、「革命戰士歌」の譯詩に筆を染めたりしてをる。かと思ふと、七十一歳までも、アクセクとして働かなければならなかつた彼の父を想ひ、庭訓のきびしかつた母を慕ひ、「秋庭課子之圖」を畫かせ、至情惻々たる贊をする彼である。どうしても、永遠の青年である。

だが、この永遠の青年にも、終に「不惑」の一日が來た。四十を越えて、少年時代に、意味も解からずに讀まされた論語を繰返して見て、新らしい感激を覺えるやうに、彼は、今から五年前、先師孫文の「大亞細亞主義」を味讀して、今更に、先師の偉大なる抱負に傾倒したのであつた。「先師の國際觀、その精華がここに在る。支那の存を圖るためには、この外に道はない。」と。青年らしき純情さを以て、素直に受け入れたのが、汪の汪たる所以で、汪と並んで、孫文門下の双璧である胡漢民が、修正附きでなければ、これを受け入れることが出來ぬとしたのとしたのと對比して、我等は、汪のよさを測り知ることが出來るのである。

彼が、大亞細亞主義の正覺に味到したのは、彼の廣東國民政府の主腦時代であつたが、思ひ立つては矢も楯もたまらず、外交部長陳友仁を日本に派し、朝野の間に遊説せしめた。しかし汪の覺醒が、東洋アンシュルッスに達してゐず、日本にも用意なく、陳の使命は失敗し、間もなく滿洲事變の勃發を見たが、彼は蔣介石の聯盟提訴方針に贊成せず、有名な「一面抵抗、一面交涉」のスローガンを發表した。あの當時、かうした見解を發表したといふことは、今日から見て、達見を許すことが出來る。

滿洲事變を契機として、南京、廣東兩國民政府合體し、汪は南京に入つて行政院長になつたが、張學良の北支に於ける抗日政策に反對して下野外遊した。しかし一九三二年初頭の熱河製職の後、張學良下野とともに、歸國して復職、對日關係を顧慮し、自づから行政院長を以て外交部長を兼ね、次長に黃郛系の唐有壬を置き、專念日支國交調整に努力して、今日に至つてをる。

年配からいつても、黨的經歷からいつても、彼は蔣介石の先輩であり（汪五十四歳、蔣四十七歳）、かつては北方に於いて閻錫山、馮玉祥と結び、擴大會議派を率ゐて蔣と對抗した、いはば政敵の間柄でありながら、合作すでに四年。ここに、彼の心境の冷徹を見ることが出來る。張靜江、吳敬恒、張繼等元老派と同じ心境に落附いたものであつて、しかも敢然責任を執り、慨然として對日國交調整に任ずるの襟懷を披瀝せるを見ても、斯人の支那に在る、彼邦の大幸であると斷ぜざるを得ない。

三、黃郛とその一派

同盟會にまで遡つて、蔣介石の地位を、支那革命黨中に求むれば、陳其美派といふが、もつとも當を得てをる。その陳其美の參謀長だつたのが、こゝに述べる黃郛であり、蔣の兄貴分に當る人である。軍人ではあるが、出身はわが陸地測量部といふ變つた經歷の持主。師團長くらゐで軍人を廢業し、北支那の政界に馳驅して、いくたびか內閣に列し、馮玉祥をリードして、クーデターをやらせたこともあるが、一九二七年蔣の招きに應じて南下、上海市長となり、翌年外交部長、その在任中に起つた濟南事件の責を引いて辭職し、爾來浙江莫干山に隱棲してゐた。

彼の卓越せる國家觀、特にその對日認識は、蔣の始終推服措かざるところで、實に蔣の、隱れたる外交上の導師であつた。故にその當時、支那消息通の間には、「蔣の對外方針については、黃郛の言動がバロメーターだ。」と、いはれたものである。

滿洲事變起るや、黃郛及びその一派――吳鼎脩、李擇一、殷汝耕、袁良、殷同等――は、いかにして日支兩國の國交を、復常せしむべきかについて、深刻な研究をつづけた。立案は吳震脩、決斷は黃郛、奔走遊説は李擇一。役者はいづれも腕揮ひ。故に、裏面に於ける進展は、人こそ知らね、目覺ましいものがあつた。一例を擧ぐれば、汪兆銘の復職のごときも、黃の盡力が與つて力があり、「ともかく出よ！　イザとなれば、僕も乘り出すから。」と、激勵したことは、今では誰知らぬものもない。汪が出ると、吳震脩系の、さうして張公權系の唐有壬が、外交次長として、その氣鋭な委を現はすといふやうに、彼等の努力は、おさおさ怠りなかつた。

待ちに待つた機會が來た。熱河職後の北支時局を收拾するために、蔣介石、汪兆銘は、一致して黃の出山を促がした。行政院駐平政務整理委員會委員長といふ、山鳥の尾の長々しい肩書きを貰つて、黃が北平に着いたのが、一九三三年の五月十八日。吳震脩、唐有壬を除き、アトの連中は皆黃について北上し、袁良が北平市長、殷同が北寧鐵路局長、殷汝耕が職區督察專員（これは停職後定成

立後のことだが？、宮仕への嫌ひな李擇一は依然游擊、といふ工合ひに、一派總動員の形で、つい本年五月まで、彼等の力の及ぶ限りのことは、ともかくもやつてのけた。停戰協定の調印、それに基づく通車、設關、通郵三問題の解決は、彼等の立てたる業績である。

しかし、彼等の力には、限りがある。チヤーナリステイックには、「黃・何政權」などと、我等もいつて來たが、黃の權力はごく弱く、今では周知の事實だが。

（一）何應欽を委員長とする、軍事委員會北平分會には、黃の權力は及ばない。委員の中には、舊東北系が殘留してゐる。分會直屬の政治訓練處長に、曾擴情などいふ藍衣社の幹部がゐて、眼を光らせてゐる。ただ何應欽その人が、割合溫和で、黃と協調してやつて行つただけだ。

（二）北平、天津地方を通じて、第一の兵力を擁してゐる于學忠（第五十一軍長、河北省政府主席）は、舊東北系であり、且又きはめて物分りの惡い男で、黃郛のいふことなど、テンデ取り合はないばかりか、張學良と通謀して、その北支復活さへ夢みてをる。

（三）政務整理委員會內にも、東北系やら、中央系やらの委員が多く、事務方面にも、黃の系統と目すべき人間が少い。

（四）前記曾擴情をリーダーとする藍衣社特派員、その地方支部格の河北辦事處などいふ、蔣の私的ゲ・ペ・ウがゐて、無氣味な督察をやつてをる。

（五）蔣の公的ゲ・ペ・ウたる憲兵第三團（團長蔣孝先）が、いつの間にやら進出して來てをる。その實際上の權勢は、他の一切より高いのである。

（六）國民黨各級黨部は、初めその行動を制限されてゐた筈であつたが、いつ頃からかユルみ、公然反日滿工作をやり出した。

（七）南京政府部內の複雜性、――すなはち、立法院に據る孫科一派、親歐米派の宋子文等、監察院を根城とする于右任一派、これらがいづれも黃郛、汪兆銘に好意を持たず、陳立夫陳果夫等のC・C團に至つては絕えず、汪兆銘打倒の策動をつづけてゐた。

かうした牽制が多くては、實力を持たぬ黃郛一派は、徒らに責任ばかり負はされて、實際は何も出來ぬことになる。これを苦にし、事態改善の目的を以て、黃郛は絕えず北支と南京との間を往來し、隨分苦いこともいつたらしいが、蔣は共產軍討伐に夢中だし、汪兆銘にも力が足らず、黃の思ふ通りにならぬ。見切りをつけて、本年五月、第三回目の辭表を出したが、それとほとんど同時に、わが軍の重大警告となり、いはゆる北支問題、察哈爾事件の絕大の波瀾を生じ、――それは六月までに、ともかく解決したが、黃郛一派は北支那に歸れず、退却を餘儀なくされてをる。折角努力の甲斐もなく、この體態は、氣の毒といふ外はない。

退却後のこの一派は、どうなるか？　黃郛は內政部長であるが、部務は次長陶履謙（汪兆銘系）に任せ、今後は楊永泰同樣、蔣の側近にゐて、外交上の相談役になるのだといふから、むしろ適任であらう。

唐有壬は、依然外交次長として、智能吳震脩後見の下に、相當やつて退けるであらう。湖南の革命家、唐才常の子息だけに、顏に似合はぬ頑張りがあるに相違あるまい。殷汝耕は上海市參事の本任に歸るだらうし、李擇一は、これは絕えず苦笑しつつ、依然奔走をつづけるであらう。袁良、殷同は、殘るであらう。

四　日本に理解ある人々

支那政界に於ける親日派として、華々しく活躍したのは、往年の段祺瑞一派――徐樹錚、王揖唐、曹汝霖等――と、現在の黃郛一派であるが、その他にも、日本に理解ある人々は、決して少しとしない。ただ『親日派』と呼ぶべく、妥當でないといふにすぎない。それらの人々を、左に簡單に紹介して置く。

國民黨の元老中では、居正、張繼、戴天仇等が、日本をよく理解してをる。ただ張繼だけが。日本及び日本人から離れてをる。居、戴等は、まだ熱情を剩してをると推せられる。因みに、戴には「日本論」の名著がある。

軍界では張群（湖北省政府主席）、陳儀（福建同）、熊式輝（江西同）、等、が日本をよく理解してをる。韓復榘（山東省政府主席）に至つては一兵卒からアレまでノシあがつた傑物だけに、流石に心得たもので、滿洲事變以來の排日風潮の中に、獨り知らぬ顏して親日政策を採つてをる。それには西田濟南總領事の努力も認めねばならぬが、ともかく韓は不言實行の親日派である。山西の閻錫山も、これに近い。

外交官や新聞記者には、日本に理解ある人物が少い。記憶に殘るもの、ベルー公使の沈覲鼎、天津大公報社長の胡霖　同主筆張熾章、これらの諸氏くらゐのものである。

實業界は、何といつても日本と親密な關係があり、日支正常關係の恢復を希望してをるのだから、その範圍に於いて、日本を理解する人が多いであらう。金融界では、張公權氏の日本理解の程度は周知の事實。

北支那の善後のために登場した三人男、王克敏（政府會委員長代理）、商震（河北省政府主席）、程克（天津市長）、いづれも日本理解の程度も相當なものであるが、從來「親日派」と烙印打たれた人々ではない。しかし王氏のごときは、滿洲問題、對日方針に關して、立派な意見を持つてゐるさうであるから、相當のことはやつて行けるだらうと思ふ。（經濟往來一九三五・八）

第六節　問題の「新生」事件

自由民權の穿き違へ、と、いふことは、どこの國にもあることらしいが、民衆の訓練が出來てゐないのに、突然「共和」を與へられた支那では、特にそれが甚だしかつた。早大の靑柳篤恒教授は、その名著「新支那」の中で、

「英國公使ヂョルダン、輿に乘じて西山に向ひ、輿夫に問うて曰く、「共和とは何ぞや？」と。答へて曰く、「淸廷退位し、袁帝（世凱）位に卽く。これを共和といふ。」と。民智、察すべきなり。」（大意）

と書いてゐられるが、こんな頭腦しか、一般民衆は持つてゐなかつたのだ。そんな民衆に、「自由民權」を與へたのだから、穿き違へるのも、無理のないところである。

それから十四年經つてゐる。しかしその間に、三民主義から共產主義まで、何とか主義、彼是イズムを目まぐるしいばかりに注入されて來たので、支那の民衆は、いまだにその適從するところを知らず、何が何だか判らない狀態に置かれてゐる。

「社會の無秩序、無秩序の社會」これが、支那の現狀を、一言にしていひ盡した言葉である。

無秩序の社會から、產れて來る言論、それがどんなものであるか？　多言を要しない。放肆、輕浮、少しもシツトリしたところのないのが、支那言論界の特徵である。それでも、日本の朝日、每日に比すべき、支那での大新聞は、まだしもいい。ことに天津で發行される「大公報」のごときは、正に東京朝日を彷彿させるやうな立派なものである。だが、小新聞になると、ことに小雜誌になると、始末にいけない。大體これらの小雜誌は何等文化的の使命を自覺せず、アブク錢を摑んで、或はセシメた男が「一つ、雜誌でも起してやれ」で、文士くづれや、墮落敎師やを雇つて來て、はじめるものだからである。アクドク、エゲツなく、いはゆる惡として爲さざるなしといふ奴。

こんど、わが國に對する大々的不敬記事を揭げ、日本國民の憤激を買ひ、終に廢刊の憂き目に遭つた「新生」といふ週報も正にこの小雜誌の一つであつたのである。鄒韜奮といふ男、これは、支那敎育界の元老で、かつては北京で敎育總長をやつたことのある黃炎培の乾兒である。四五年前から上海で生活書店といふ書店を開いてゐたが、滿洲事變が起つて、東北僞勇軍援助の運動が盛んになると、もと黑龍江省長をやつたことのある朱慶瀾が總大將になつて、大大的後援費募集をやつた。鄒もこれに參加し、生活書店の名義で、何でも十何萬元かを集めたさうであるが、それを滿洲に送りもせず、大部分を着服してしまつた。さうして、はじめたのが、「生活週刊」、これが「新生」の前身である。

そのうちに馬占山がロシアから歐羅巴を廻つて歸つて來た。例の僞勇軍後援金は馬を目標として集められたもので、馬は上海に歸るとすぐその受取つた額を公表したが、それと、朱慶瀾の集めた金額との間には大變な開きがあるので、サア大問題になつた。

形勢不穩と見て朱はいつの間にやら姿を隱す。餘波を受けて、鄒もヂッとして居れなくなつた。そこで「生活週刊」を「新生」と改題し、後事を杜重遠に托し、尻に帆かけて外遊してしまつた。旅費が、例の金であることはいふまでもない。

杜重遠といふ男は、わが藏前高工の出身で、滿洲事變前、奉天で商會長をやつてゐたといふから、張學良系の有力者であることは勿論である。滿洲事變後上海に逃れ、抗日反滿の各種團體を組織し、これをリードしてゐたが、鄒から雜誌經營を相談されると一も二もなく引受けた。「生活週刊」は、割合に賣れてゐたらしく、北平の清華大學（米國系）で調べた「報界交通錄」（新聞雜誌調査書）に據ると同誌を上海の雜誌の劈頭に置いてあるほどである。商賣としても成り立つし、趣旨が趣旨だから、學良からも引張り出せる筈と、チャンと算盤をはぢいた上、昨年二月十日、學良から毎月一千六百元づつの補助金を貰ふ約束で、「新生」と改題して發行しはじめた。定價四仙にしては立派で、專門家の說に據ると、實費十仙くらゐはかかるだらうといふ。學良から出てゐることは、これでも判る。

かうしたイキサツで出來た雜誌であるから、「支那の出路は、抗日及び反帝國主義の外にはない。」と、每號滿誌、抗日の煽動記事で埋められてゐたことは、勿論であるが、――本年五月四日發行の、第二卷第十五期にトンでもないものを載せた。「易水」といふ人間の署名で「間話皇帝」と、日本流にいへば、「皇帝物語」といつたやうなものが載つた。その中で、わが皇室をはじめ、友邦三四ヶ國の皇室に對し大々的不敬の筆を弄してゐるのである。內容は揭載禁止であるし、且又日本國民として絕對に筆にすることも出來ぬくらゐ恐れ多いものである。滿洲事變以來、四回に亙る不敬記事事件があつたさうであるが、こんどの「新生」のは、前三回のそれに比し、比較も出來ぬほどの大それたものであるので、現地である上海在留邦人の激昂一通りでなく、報に接した日本國民の憤激の總意は、誤まりなくわが在支官憲に依つて代表され、六月二十四日石射上海總領事から上海吳鐵城市長への抗議ついで有吉大使から外交部長代理唐有壬氏への抗議となり、その結果七月七日中央黨部宣傳委員長葉楚傖氏の陳謝、檢閱責任者たる中央黨部宣傳委員會上海圖書雜誌檢閱委員會檢查主任以下六名罷免、同委員會改組誓約を實行し、同誌を停刊し杜重遠（現在江西陶業管理局長）等の關係者を處罰し一先づ落着した。但し筆者の易水は、この稿執筆の頃まで、まだ公判廷に出頭せず、本名も判明せず、日本として支那側の犯人捜查工作を嚴重監視中であるが、噂に依れば彼は某銀行員で公判廷に出られては困るといふので、上海黨部で隱してゐるのだといふ。（『話』一九三五・八）

第七章　中國共産黨・軍の研究

第一節　中國共産黨解消派の潰滅

一　上海の左翼大捕物

一九三二年十月十五日の午後二時半から、翌十六日の夜半に掛け、上海共同租界及び佛國租界の九ヶ處に亘つて、大捕物が行はれた。上海市公安局長文鴻恩が最高指揮を取り、共同租界總巡捕房もこれに協力した。そのうちの一隊は、十五日の夕方、岳州路永吉里（一に永興里につくる）、十一號の洋館から、藍色の長褂兒をつけ、淡黄色の中折をかぶつた、五十餘歳と見える老人を引きずり出して來た。貌、はなはだ清癯、だが兩鬢ほとんど白く、面色黝黑、一見して病人らしい。この病みほうけた老人こそ、はじめ「支那の森戸辰男」といはれ、後、中國共産黨を創立して「支那のレニン」と稱せられ、再轉して「支那のトロッキイ」となつた、中國共産黨解消派の首領、陳獨秀（註）その人であつたのである。

その他の八ヶ處で擧げられたのは、廣東人謝少珊（二十三歳）、安徽人王兆羣（二十七歳）、湖南人張次南（三十四歳）、安徽人濮一凡（二十八歳）、河北人王武（三十五歳）、廣西人梁有光、安徽人王曉春（三十歳）、浙江人王子平、何阿芳、山東人王鑑堂の十人であつた。張次南の本名は彭述之で、かつては中國共産黨の領袖の一人であり、「國民革命の領導者は誰か？」等の論文に依つて、文獻方面にも活躍した有力な人物である。先づ解消派の副首領といつたところ。陳少珊の本名は謝德培、最近解消派の工作中心人物であるといふ。

（註一）　陳獨秀字は仲甫、安徽省懷寧の人、一八七九年生。少年にして浙江求是書院に學び、沈尹默（後北京大學教授）と同學であつた。ついで日本に留學して速成師範を卒業し、歸國後安徽高等學堂の教務長となつた。辛亥革命起るや、安徽都督柏文蔚の秘書となり、第二革命（討袁革命）失敗後、上海に隱れて「月刊新青年」を發行してゐたが、一九一七年沈尹默の紹介に依つて、北京大學文科學長となり、先づ同郷の米國留學生胡適を教授に薦め、「新青年」を文科の機關誌とし、胡とともに白話文を提唱し、從來有産階級の獨占に歸してゐた學問を、平民の領域にまで引き卸さうと試み、ついで毎週評論、新潮等の刊行物が、陳、胡の說を祖述する學生に依つて發行され、皆國語を用ひ、やうやく孔教排擊に入つた。かくて文學革命の標語は、遍ねく青年の間に唱へられ、改造の烽火、天に冲せんとするに至つたので、守舊派の錯愕一方ならず、その機關紙「公言報」は、陳、胡二人を孔教の破壞者であるとして極力攻擊し、在野の舊學者林紓（琴南）は、北大校長蔡元培に一書を裁し、陳、胡を攻擊するとともに、校長としての蔡の責を問ひ、その實際政治に牽動するや、軍閥政治家の尤たる徐樹錚及び安福倶樂部（段祺瑞の私黨）は、新國會議員張元奇をして教育總長傅增祥彈劾案を提出させ、陳、胡だけでなく、蔡をも引責辭職させ、一擧に新思想派を北京から驅逐し去らうとした。蔡はこの間に在つて立場に窮したが、結局一の聲明書を發して守舊派の意を緩和し、學長制度を廢して理科學長秦汾を教育部に轉任させ、文科學長陳獨秀を平教員にしたが、陳は教育部の壓迫に堪へ切れずして辭職した。これが五・四運動の先驅たる北大事件である。辭職後しばらく北京に居り、一九二〇年春、同地の盛り場であつた新世界といふ遊戯場の頂上から、共産主義宣傳の傳單を撒布したといふので逮捕されたが、間もなく赦されて上海に入り同年九月、中國共産黨の創立に成功した。これが彼の前半生である。

陳獨秀は中國共産黨の創立者である。今日では解消派の首領として、一九二九年來黨籍を褫奪されてゐるとはいへ、なほロシアに於けるトロッキイ派と氣脈を通じ、「青年團委員會」を組織して、「反對派中央」を稱し、若干の政治工作を行つてゐただけに、陳就縛の報は世界的にセンセイションを起した。一九三一年、赤色太平洋勞働組合書記長ヌウラン夫妻が捕縛されたときと同樣に、陳の場合にも、蔡元培、胡適、宋慶齡（孫文未亡人）をはじめ、諸名流の、陳のために生命乞ひをするもの引きも切らず、「陳獨秀評論」などいふ單行本が出版されるなど、殊に支那に於けるインテリゲンチアの、最大の關心を喚起してゐる。ヌウラン夫妻が、結局無

期徒刑になつたと同樣に、陳も生命だけは助かるだらうと豫想されるが、所詮無期徒刑以下になる見込みはなく、それに解消派といつても、陳あつての存在であり、陳の政治的生命が絶たれてしまへば、その派も亦澌滅に歸すべきは當然の成行きである。解消派の發生は、一九二九年十一月（註二）で、爾來滿三年の生命を保つて、今や終に潰滅した。この機會に於いて、私は、陳の行徑を論じ、兼ねて中國共産黨の內情に觸れて見たいと思ふ。

（註二）　一九二四年以來提携を保つて來た國民黨と共産黨とが、終に分裂を餘儀なくされたのは、一九二七年の七月であつた。この間に處し、指導よろしきを得なかつた廉を以て、黨書記（普通には總書記と呼ばる）陳獨秀はコミンテルンの叱責を受け、同年八月七日の九江會議（すなはち八・七緊急會議）以後黨中樞から遠ざけられ、非幹部派として一九二九年に至り、十一月十五日終に黨籍を剝奪された。十二月十日、彼は「告全黨同志書」を發表し、同十五日彼と彭述之とは、同志八十一名の連書を以て「宣言」を發表し、これを以て解消派同志の今後の團體的意見とする旨を聲明した。解消派の名はここにはじまる。

二　陳獨秀の眞價値

陳獨秀の前半生に關しては、すでに前述した。中國共産黨成立以前の彼は、これを要するに黎明運動の指導者であつた。彼の主宰した「新青年」誌を、年代順に繰つて見て、彼の書いた論文を讀んで見る。カヴアし得た範圍の廣いのには敬服するが、卿に深い研究があるわけでなく、再讀三讀に値ひするものは、決して多くない。事物に對する理解がいかにも淺薄で、矛盾撞着は平氣の平左、何でも新らしいものならすぐ飛びつく。彼の最初の論題は、孔教の排擊であつた。これは信教自由の立場から、孔教を國教とするに反對したわけであるが、それだけのことで、孔子の學說に深刻な批判を下し得てはゐない。第二の論題は新道德論であつた。彼はこの分野に於いて、「忠孝節義は奴隸の道德なり、輕刑薄賦は奴隸の幸福なり。稱功頌德は奴隸の文章なり。拜爵賜第は奴隸の光榮なり。豐碑高墓は奴隸の記念物なり。」と喝破して、大いにニイチエ振りを發揮した。同樣の意味に於いて、彼は階級制度を根本義とせる三綱を破棄し、この階級制度を擁護する名教、禮教を破壞すべしと叫んだ。

つづいて胡適が「文學改良芻議」を發表して、白話文學の提唱をはじめると、陳はたゞちにこれに應じて、「文學革命論」を發表する。對獨外交問題が盛んになると、又大いに反獨的議論を出し、國際關係の改造に依つて、支那の國際的地位の向上を謀りたいといふ。つづいて軍國主義の排擊がはじまる。偶像破壞論が出る。無政府主義らしい論文が出る。李大釗（註三）がマルクス主義研究會を起すと、それにも同感を表する。といふ工合に、彼の論題は絶えず變化して行つた。往くとして可ならざるなき才筆は認めるが、さうして黎明時代に於いては、大衆は彼をインデツキスとして、あらゆる改造思想を味ふ便宜を得たことは否めないが、自由主義者のやうでもあり、無政府主義者のやうでもあり、或場合には國際主義者のやうでもあり、一向正體が摑めなかつた。畢竟彼の役目はインデツキスに盡きた。彼を索引として、大衆はその好む部門に分け入つて、禁斷の木の實でも何でも貪り食つたといふわけである。

結局、彼は偉大なヂヤアナリスト、ヂヤアナリスト的通儒、時論家、縱橫家でしかなかつた。かうした彼が、最後に摑んだものが、幸か不幸か共産主義であつた。色んな主義を喰ひ散らした彼も、最後に出た御馳走である共産主義だけは、それでは七八年間飽きずに喰つたわけである。喰へどもその味を知らずで、アレだけ長く共産黨を指導しながら、マルクス主義に關する理論的著述は一冊もない。ただ文學革命の主義者、黎明運動の立物といふ過去の經歷を背景に、さうしてマルクス主義も支那で最初に研究したといふ點から、氣運に乘じて中國共産黨の中心人物となり、宗法社會の家長よろしくの獨裁で、ともかく七八年間切つて廻したに過ぎない。

（註三）　李大釗はわが早大出の學者で、陳獨秀文科學長時代の北大教授兼圖書館主任。一九一八年學內の左傾學生を會してマルクス主義研究會を創立、中國共産黨成立後南陳北李と併稱され、國共分離後北支に於ける黨再建の中心人物であつたが、一九二七年四月、張作霖のためにロシア大使館內で捕はれ刑死した。

陳獨秀の眞價値は、およそかやうなものである。そもそも彼を、思想家又は理論家として扱ふのが無理なのでどちらかといへばやはり政治家に分類するのが妥當である。勿論、蔣介石を政治家といふ意味で、彼を政治家と思へといふのは、無理な注文だが、汪兆銘や胡漢民を政治家に數へるならば、陳も亦一種の政治家として扱つて差支へない。實際、國民黨　聯繫して、民族革命の聯合戰線を形成し、「支那の森戸」から、一躍して「支那のレニン」となり、共產黨の獨裁的家長として、思ふがままに國民黨を引きずつて行つた時代の彼には、蔣介石以外、比肩すべき、何人もなかつたほどの花々しさがあつた。

彼の行徑は、かくて思想家、理論家以外の觀點から、考察されなければならない。

三　「支那のレニン」時代

一九二〇年に遡る。

北京「新世界」でのアジ・ビラ撒布事件に因る投獄から釋放された陳は、漂然として上海に現はれ、舊知の柏文蔚の邸（佛租界霞飛路漁陽里二號――現在の明德里）に寄寓し、「新青年」の總發行所をこゝに移した。當時上海に於ける新思想派としては、「建設雜誌」及び「星期評論」に據る胡漢民、戴天仇、廖仲愷、沈定一（玄廬）等の孫文派、金家鳳、袁振英、遣恨等の無政府主義派、時事新報に據るギルト社會主義者張東孫等があた。そこへホヤホヤのマルクス主義者たる陳獨秀が入つて來たわけである。恰もこのときコミンテルンは、東方迂回政策の實施に依り、先づ支那を赤化すべく、第一選手としてワーテイチンスキイ（註四）を派遣して來た。彼は通譯楊明齋、朝鮮人安昌浩を從へ、先づ北京で李大釗と會見し、その紹介で上海に入り、霞飛路七一三號（現在の鐵路協會）に本據を設け、陳獨秀等と會見し、中國共產黨の組織を協議した。その結果、到達し得た結論は、純粹の共產主義者だけの集團は、今のところ成功の望みが少い。小異を捨てて大同に就き、一般に左翼といはれる連中の大同團結をつくるに如かずといふに在つた。かくして產れたのが「中國社會主義青年團」である。

（註四）　グレゴリイ・ナウモウイツチ・ワーテイチンスキイ（一八九三年生）は、小學校を卒へた外學歷なく、一九一三年以後カナダに放浪し、一九一八年歸國して全露共產黨に入黨、クラスノヤルスコ勞兵會に活躍し、コルチヤク軍に對抗してオムスクで兵を起し、失敗就縛して樺太に流され、一九二〇年同地を遁れて歸國し、二十八歳で滿東部長となつた男である。

中社青年團に參加したのは、陳をはじめ、戴天仇、沈定一、施存統、陳望道、李漢俊、張松年、金家鳳、袁振英、柏克（鮮人）安昌浩（同）、坂西多郎、兪秀松、葉天衣、楊明齋等で、張繼、柏文蔚の奔走で佛租界當局の御目こぼしを受け、漁陽里六號の戴天仇宅（外國語學舍の看板を掛く）を本部とし、楊明齋が總務を、兪秀松が庶務を擔任した。經費は勿論ワーテイチンスキイから出てゐたのである。つづいて周佛海、張聞天、李達、卡士琦、羅綺園、彭湃、陳爲人、李立三、傅大年等が參加し、團の勢やうやく振ふに至つたので、ワーテイチンスキイはいよ〳〵中國共產黨の組織を提言し、一九二〇年九月、陳獨秀、陳望道、李漢俊、沈定一等十餘名を參加者として、黨創立大會が開かれた。

かうして黨は出來たものゝ、政綱の決定も、宣言の發表もなく、しかも組織分子は雜駁で、到底黨の力のみを以てしては、共產革命は思ひも寄らないので、コミンテルンでは、その植民地革命の原理（註五）に據り、黨と中國國民黨との提携を命じた。巢立つて間もない中國共產黨に取つて、これは相當の難題で、國民黨との合作を非とするもの、これを可とするもの兩派に分れ、一九二二年の八月まで、この問題を中心として、黨の內部には蜂の巢をつついたやうな混亂がつゞけられた。合作を非とするものには、中央委員長陳獨秀（一九二一年七月の一全大會で當選）、委員兼組織部長張國燾、委員蔡和森、同高語罕、その他高尙德、何夢雄、羅章龍、范鴻劼、朱務善、金家鳳（張以下は北京に於ける黨員）等があり、合作を可とするものには、委員李大釗（註六）鄧中夏、許興凱等があつた。兩派の論爭は先づ北京にはじまり、地方に波及し、收拾すべからざる勢を呈し、就中年少氣鋭の張國燾は、躍起となつて合作反對を唱へ、脫黨して「勞工黨」を組織すべしとまで敎唆いたが、コミンテルンの命令貫徹を迫り、一九二二年七月の二全大會で、民主主義聯合戰線形成の必要を可決させ、同八月杭州で開かれた中委全體會議を强要し、黨員の中國國民黨加入を決議させた。この決議に基づいて、李大釗及び鄧中夏が、個人の資格で卽時眞先きに國民黨に入黨し、翌

一九二三年六月の三全大會に於いては、國共合作が正式に決議され、爾後半歳一九二四年一月の中國國民黨一全大會で、正式に合作が成立した。

（註五）　コミンテルンの植民地革命の原理といふのは、コミンテルン二全大會で決定されたもので、植民地革命の初期に於いてはインテリゲンチア及びブルヂョアの民主主義革命を助け、これと共同戰線を張り、以て外來帝國主義に反抗しなければならない、と要約される。

（註六）　陳獨秀自身は、李大釗も亦國民黨との合作に反對であつたと斷言してゐる。（一九二九年十一月十五日附「告全黨同志書」――「滿鐵支那月誌」三四參照。）

自からの意志に反した國民黨との合作を强ひられた陳獨秀は、最初は不平だつたが、しかし後には心境一轉、明日は又明日の風か吹かうよと、只管自己の權勢擴張に努力するに至つた。そこで李大釗、譚平山等を國民黨に入れ、自分は黨の總書記兼政治局主席として上海に鎭在し、廣東には長子陳延年を派遣して黨務の實權を握らせ北京には次子の陳喬年を入れ、李大釗を看板に、實權はやはり喬年の手に握らせた。この外陳の兄の子、姉の子弟の子、妹の子等も、各地の支部で重要な職務に就き、共産黨は恰も陳獨秀一家の私黨であるかのやうな觀を呈した。黨の勢が擴張されるに連れ、この家長式首領陳獨秀の權威も益々大きくなり、外間から「支那のレニン」と稱せられるやうになつた。勿論ヂャナリスティックな稱呼で、過褒であることは勿論だが、彼は有頂天になつてこの稱呼を受けた。かうした全盛は、一九二七年の七月、國共分離時代までつづいた。だが同年八月七日の九江會議（いはゆる八・七緊急會議）以後、彼は日和見主義の罪名を負はされ、中央から放逐されたのみならず、一九二九年十一月には、終に黨籍を解除されるに至つた。全盛七年、すべては春の夜の短き夢であつた。

四　日和見主義と陳獨秀

陳獨秀を葬り去つた日和見主義。一九二五年から、二七年に掛けての支那革命に於いて、日和見主義といふ言葉は、あまりにしばゞ〳〵使はれた。さうして一切の日和見主義の責任は、すべて陳獨秀、譚平山に脊負はされてゐる。支那の國情にくらいコミンテルンが、支那に於けるその耳目（ボロディン、ガヴレン、ロオイ等）からの上申を判斷の根據として、實情に即しない指導を支那の黨に加へる。これがコミンテルン・コオスであり、陳獨秀、その他がその實行不可能を進言すれば、彼等はたゞちに日和見主義者と指摘される。コミンテルン・コオスに盲從するもののみが、幹部派となつて勢威を振ふ。畢竟日和見主義とは、反コミンテルン・コオスの謂である。その實コミンテルンの指導は、迂遠である場合が多く、日和見主義者の見解の方が、實情に近かつたと思へるのであるが、とにかくコミンテルンに言葉をかへしたことが、陳獨秀失脚の原因だつたのだ。

コミンテルンの見解に從へば、陳が犯した日和見主義の過誤は、一九二六年三月二十日の中山艦事件（註七）にはじまる。これに憤慨した陳延年、張太雷、黄平、周恩來等（一說に據ればボロディンも亦）は、即時國民黨と分離すべきことを主張したが、陳獨秀は依然として國民黨との合作を支持し、黄埔軍官學校内の黨代表高語罕を召還し、且つ一書を蔣介石に裁して諒解を求めた。これが陳獨秀の第一の過誤であるといふのだが、これはしかし明白にコミンテルンが無理である。共産黨直屬の軍隊もなく、民主主義革命聯合戰線も、まだ廣東内に蹋蹐してゐたあの際に、即時撤退をいふがごときは、實情とあまりかけ離れた論議である。しかもコミンテルンは、これを以て陳を日和見主義者とするのである。比類なき權勢を與へて呉れたとはいへ、陳のコミンテルン仕へも亦つらい哉である。

（註七）　三月二十日、海軍局長李之龍（共産派）は、黄埔軍官學校に中山、寶璧の二艦を廻し、不穩の擧動があつたので、前から無産派の一二幹部に不快の感を懷いてゐた蔣介石は、これを機會に李之龍を捕縛し、軍官學校内の黨代表高語罕（共産派、委員）を監禁し、共産系糾察隊の武裝を解除し、東山に在るロシア人顧問の邸宅を包圍した。これを中山艦事件又は三月二十日事件といふ。

陳の過誤の第二は、一九二七年四月五日附、汪兆銘との連名で出した「國共兩黨領袖の聯盟宣言」である。もうこの前から、共

産黨反對の聲は全國的に揚つてゐたし、先んずれば人を制すで、むしろ共産黨の方から、進んで國民黨との腐れ縁を絶つべきであつたのに、陳は遂に聯合戦線の維持を主張し、周恩來をして汪を脅迫させ右宣言に署名せしめたものである。この宣言は兩刃の劍であつた。蔣介石派に對しては、徹底的反共の口實を與へ、四・一二反動（註八）となり、吳稚暉の清共案となつたと同時に、コミンテルンからは時勢に逆行するものとして叱責され、「日和見主義の最も恥づべき文獻だ」と稱せらるゝに至つた。宣言後、陳は汪とともに武漢政府に入り、「國共兩黨は徹底的に聯合せよ」といふスロオガンを提出した。

（註八）　上海を握るものが、全局面を把握する。共産派もこれを欲し、蔣派もこれを欲したが、プロレタリアの大本營である同地には、五・三〇事件以來共産派の不斷の努力が傾注せられてゐたため、自然の勢、先づ共産派の手に歸した。蔣冷かに機會をねらひ腹心白崇禧を戒嚴司令に任じ、四月十二日一大クウデタアを敢行し、共産派を一舉に上海から驅逐した。これを四・一二反動といふ。

陳獨秀の日和主義の迷夢（コミンテルン及びその支那に於ける追隨者から見て）は、南京政府の白化、その武漢政府への傳染にも拘はらず、まだ醒めさうもなかつた。さうしてコミンテルンが、「支那の黨」の最後の出路として指令した、農民革命の遂行についても、機宜に適した、指導を與へることが出來ず、日和見主義の泥沼の中を徒らにあがき廻るのみであつた。コミンテルンはいふ「支那の黨はコミンテルンの指令に依つて、農村革命の指導者となり、武漢政府及び國民黨幹部の、中途半端な臆病な態度に對して攻撃を加へ武將連の裏切りの可能について警鐘を鳴らし、勞働者を激勵し、國民黨を後押しして、眞正なる革命の途に導くべきであつた。然るに中執委、政委ともにこの指令を實行せず、却つて農村革命の進展を阻止した。黨の一領袖が「はじめに擴大後に深化」といつたのは全く日和見主義的標語だ。個個の黨員が大衆の間に奔走してゐるとき、幹部は、却つて大衆抑制の方針を執つた。政委は、終に勞働者武裝解除に承諾をさへ與へた。武漢政府が反革命に移つたに拘はらず、譚平山は政府から脱退せず、賜暇を請願したのは見苦しい。中執委は指令を拒絶した。事こゝに至つた以上、コミンテルンは支那の黨に對し、黨幹部の日和見主義に反抗すべきを勸誘せざるを得ない」（布施勝治氏著「レーニンのロシアと孫文の支那」に據る）と。判決は下された。八・七會議以後、陳獨秀は完全に中央から驅逐されてしまつた。

いはゆる日和見主義者に一言の辯解の辭はないのか。陳獨秀は「告全黨同志書」でいふ。「支那に於ける幼稚な無産階級の產んだ幼稚な黨は、相當期間に亘るマルクス主義的、及び階級鬪爭の鍛錬なく、創立日ならずして大革命の鬪爭に遭つたのだ。資產階級の大屠殺の前には、一溜りもなかつた我々だつたのだ。」と。鳥の鳴くや悲しこれが僞らざる當時黨の實情で、コミンテルンは全く支那の黨の實力の測定を誤り、不可能事を黨に强ひたのである。さうして指令が實行されないと、冠するに日和見主義を以てし敝履のごとく陳獨秀を投げ出したのである。憐れむべきは、コミンテルンの奴隷、陳獨秀である。

五　非幹部派から解消派へ

八・七會議後の新幹部派李立三、向忠發（一九二八年總書記となる）、周恩來、瞿秋白等は、一九二七年十一月の擴大會議で、日和見主義者譚平山を除名したが、陳獨秀に對しては、まだ多少の敬意を拂つてゐた。勿論中央の黨務から引き離されたが、幹部派は必要に應じて陳の意見を徵し、陳も亦「撤翁」のペンネイムで、黨機關誌「布爾塞維克」に短評を執筆したりした。同年末の廣東コムミューンに際して、彼は、（一）香港帝國主義との武力衝突を避け、（二）國民黨左派及び譚平山の第三黨と聯絡すること、といふ意見を出したが、（一）はとにかく、（二）は幹部派の逆鱗に觸れ、爾後やうやく疎遠されるやうになつた。

陳の不平はます〳〵募る一方で、黨内に非幹部派の小組織をつくるとともに、事ある毎に幹部派に喰つてかゝつた。一九二九年八月、東支鐵道問題發生するや、彼は中央に對して意見書を提出し、中央の擬定せる「武裝擁護蘇聯」、「反對帝國主義進攻蘇聯」のスローガンを「反對國民黨的誤國政策」に代へよと述べたが、コミンテルン東方局委員イヴアノフはじめ、幹部派のために痛罵されただけであつた。陳は躍起となつて第二意見書を提出し組織上について幹部派を痛烈に攻撃し、幹部派は警察的政策を以て反對派を排斥すると言ひ放つた。これが彼の幹部派に對する最後通牒で、爾彼一層猛烈に小組織運動を進行させ、同時に彭述之、高

語罕、李季、劉仁靜、蔡振德、王獨清、張振亞、馬玉夫等百數十人を連署者として、「黨治意見書」なるものを發表した。それは左の通り要約される。

（一）革命は完全に失敗した。その責任は、コミンテルンの指導上の錯誤に歸せなくてはならない。

（二）今後若干年は革命は行はれない。民族ブルヂョアジイが或程度の發達を遂げた後、革命情勢は、はじめて成熟するであらう。

（三）一切の直接行動は取消す必要がある。

（四）新たにマルクス・レーニン主義を研究し、平和的に、秘密裡に革命勢力を培養し、機會の到來を待つて革命を起すがいい。

（五）赤軍及びソヴェートを取消す必要がある。

（六）罷業、デモンストレーションを取消し、民族資本の發展を幫助する必要がある。

（七）國民會議を召集すべきこと。

幹部派は勘忍袋の緒を切つた。さうして一九二九年十一月十五日、陳獨秀除名を決行した。十二月十日附の「告全同黨志書」、同十五日附陳及び彭述之等八十一名の宣言が發表され、解消派がこゝに產れた。

陳は同志の糾合には苦しまなかつたが、資金には閉口した。ちやうどこのときモスコーから放逐されて來たトロツキイ派の留學生團があつたので、彼はこれを利用してトロツキイ派との接近を圖り、政綱に左の諸項を追加した。

（一）支那には封建勢力は存在しない。

（二）ただちに社會主義革命を展開する。

（三）ブルヂョア民權革命に反對する。

（五）土地革命に反對する。

さうしてコミンテルンに向つて、トロツキイの黨籍恢復を、通電の形で要求した。これが期待通りの結果を齎らし、トロツキイ派から資金が來るやうになつた。獨逸の社會民主黨とも聯絡が出來、俄然景氣がよくなつたので、ここに敢然として「中國共產黨反對派中央」を組織し、黨の正統幹部と名乘り、左のごとく主腦部を形成したのであつた。

總書記兼政治局主席	陳獨秀
常務委員兼宣傳部長	彭述之
常委兼組織部長	高語罕
同兼北方及び滿洲總責任者	潘問友
同兼農民部長	李季
同兼特務部長	劉仁靜
同兼青年部長	王獨清
同兼軍事部長	張振亞
同兼秘書長	蔡振德

（常委は主席團の一員）

同時に地方にも手を擴げ、江蘇、湖北、湖南、廣東、廣西、山東、福建、河南、北方、滿州、順直（河北）等の省黨部が成立した。

解消派の成立した一九三〇年は、幹部派に取つても多事な年で、全盛の絶頂に在つた李立三は、紅軍及びソヴェートの充實から驕納して、革命は正に高潮しつつあると判定し、六月十一日政治局をして、「新的革命高潮與一省或幾省的首先勝利」決議を採用せしめ、七月末長沙を奪取したが、僅かに十日で奪回され、得意の鼻をペシヤンコにした。その後コミンテルン代表ミフ派の陳紹

禹一派から、失敗の責任を指摘され、一九三一年一月にかけ、いはゆる李立三コオスの淸算問題で、黨内は四分五裂、稀れに見る内訌を示したが、これに乘じて結束を堅くすべき筈の解消派も、幹部派に劣らないゴタ〳〵を生じ、先づ工人部長をねらつて得られなかつた馮玉山の南京政府投降あり、ついで工人部長兼秘書長蔡振總は、陳を離れて陝西省の役人になり、北方總責任者潘問友は北平當局に自首し、山東省黨部は幹部派との鬪爭に敗けて解消し、兩廣・福建黨部は財政的破綻を生じ、河南黨部も檢擧される等、支離滅裂の狀を呈した。陳はこれを見て氣が氣でなく、最後の策として幹部派と解消派との聯席會議、及び陳の黨籍恢復を幹部派に要求したが、勿論一蹴されたばかりでなく、下層同志からは投降的態度だと非難され、やうやく彭述之、王獨淸等の辯解で事なきを得た。ところへ非幹部派の羅章龍・王克全が北方からやつて來て、解消派の切り崩しをやる。運動資金はつづかず、糟糠の妻には捨てられ、愛兒延年喬年はトックに逮捕刑死してゐるし、流石の陳も弱つてしまつた。そこへ病氣、もう黨に對する熱も何も冷めてしまひ、細細と靑年團委員會の秘密組織に閉ぢ籠り、謝少珊に一切を代理させて、自分は病院通ひをしてゐるうちに、今回の檢擧となり、副首領格の彭述之以下十名とともに、逮捕されることになつたのである。「支那のトロッキイ」の末路、まことに蕭條たるものがある。

六　淸　算

たゞ陳の馬首を是れ瞻る解消派、陳あつての解消派である。陳が捕縛されたとなると、殘黨だけでは何も出來ない。僅かに三年足らずで、中國共產黨解消派も、歷史上の名詞と化してしまつたわけである。それにしても南京政府の反對派彈壓は、今にはじまらぬことながら、斷然凄い。一九三一年六月の向忠發逮捕銃殺、つづいてヌウラン夫妻の逮捕、韓麟符、羅綺園の逮捕があり、陳の逮捕前にも、江軍第十三軍長胡公冕の就縛があつた。彼は江西の中華ソヴエート共和國臨時政府（主席毛澤東）の命令を受け、上海大擾亂の計畫を目論んでゐたのだといふ。かく反對黨彈壓がうまく行くのには、共產黨から裏切つた顧順章が、復讐的に南京政府に忠勤を擢んでてゐるからであらう。顧は南洋煙草公司事務員の出身で、獨逸に留學したことがあり、李立三、向忠發、周恩來とともに四大健將と稱せられ、中央委員の一人として、特に諸領袖の身邊保護を任務としてゐた男であるが、漢口で國民黨側に逮捕され、助命の條件として白テロ實行を誓つたことが共產黨に知れ、上海の彼の留守宅が共產黨員の襲ふところとなり、一家全滅の悲運に遭つた。彼はこれに因つて深く黨を恨み、終に向忠發を檢擧するに至つたのだといはれてゐる。

冒頭述べた通り、陳には有力な生命乞ひがあり、又黨の暴動政策に反對した人であるから、ヌウラン夫妻の場合と同じく死刑を免かれ、無期徒刑くらゐでケリがつくのではないかと思はれる。彼の政治的生命は終つた。もう謀叛氣を出さず、獄中靜かに自叙傳でも書くがよからう。黨の產みの親たる彼の自叙傳は、黨研究者に稗益するところが少くないであらうから。それを奬めたい。

（『國際評論』一九三三・一）

第二節　露支復交と豫測

一　斷交の回顧

その頃の支那は、二重政權の時代であつた。

北には、張作霖の安國軍政府があつた。最後に殘つた封建軍閥である。南には、共產派と國民黨極左派のブロックである武漢政府があつた。一九二七年の春だ。一九二四年の一月に、國民、共產兩黨の合作が成立し、いはゆる民主主義聯合戰線が形成せられてから、すでに三年の星霜が流れ、最初から、もう破れるか、今度こそは難かしいと、絶えず危惧せられてゐた兩黨の關係が、全國に漲ぎる反共產軍の叫びに支配されて、國民革命の實力を握る蔣介石が右翼陣營への移行に、細心の準備をしてゐた頃。

その四月六日、正午過ぎ北京公使館の應接間で堀參事官（現駐墨公使）と定例會見をやつてゐた我々（北京邦人記者團、―その當時、私は、東京Jiiの特派員だつた）は、遲れて這入つて來た同僚のNに依つて、一大ニュースを敎へられた。ロシア大使館が手入れされてゐる。共產黨狩りらしいといふので、ソレッとばかり、參事官を置き去りにして程遠からぬ大使館に驅けつける。先づ眼に着いたのは、

大使館に隣る露亞銀行前の群衆。交民巷巡警、さては安國軍兵士の物々しい警戒、更に驚いたことには、露亞銀行と小路一つ隔てた建物にホースが向けられてゐることであつた。何でも證據湮滅のために、武官室（その建物は、大使館附武官の住宅だつた）で火を放つたものがあつたからだといふ。さうして小路の奥の兵營からは、兵士に兩腕を取られた支那共產黨員が、引つきりなしにショビキ出されてゐる。中にはロシア人も交つてゐる。人力車に積んで、宣傳書類らしいものが山のやうに運び出される。かうした騒ぎが四五時間もつゞいた。打電のために現場を三四回も離れたので、終に見落したが、黨の北方に於ける總帥李大釗も、その片腕の路友于と一緒に、捕へられたといふことであつた。これが有力なロシア大使館手入事件で、安國軍政府とロシア政府との間に、抗議のやりとりがあつた後、兩者の關係は事實上斷絶した。

それから八ヶ月經つて、南方政權も亦ロシアと斷交した。その直接の原因は、十二月十一日の廣東コムミユウンであるが、斷交の氣配は、四・一二反動の頃、もうすでに現はれてゐた。四・一二反動とは蔣介石の上海共產黨彈壓を指すのであるが、彼はたゞちに「清黨」を標榜して南京政府を樹立し、北京・武漢兩政府と對抗して、三重政權時代を現出した。間もなく武漢政府も白化し七月國共兩黨の分離となつたが、共產黨員は八・七會議を以て武裝暴動の總方針を決し、四省秋收暴動の後、十一月十七日には廣東海豐ソヴエート（主席彭湃）の樹立となり、十二月十一日の廣東コムミユウン（ソヴエート主席張黎黨）に及んだ。「革命退潮期の殿戰」とコミンテルンが推稱したこの一役は、僅か三日で潰滅してしまつたが、その裏にロシアの運動があつたことを理由とし、南京政府は十二月十四日附を以て對露斷交令を下したのである。

かくして南北兩政權ともにロシアとの國交を斷絶したが、しかしこの斷交たるや、きはめて不徹底なもので、東三省地方には、依然としてロシア領事が駐在してゐるし、東支鐵道といふ絶ちきれない權益關係もあつた。事實上の關係は、ずッと後までつづいた。ところが一九二九年に入つて、東三省の實權者たる張學良は、國權恢復の鋒先きを先づロシアに向け、勿論蔣介石とも相談濟みで、七月十日武力に依つて東支鐵道を回收した。これがために兩國の國交は、從來の變態的斷交狀態から一變して、七月十八日以後正式の斷交狀態となつた。實に今を距る滿三年と五ヶ月である。

二　復交の機運

斷交の結果、ただちに露支の開戰となつたが、支那軍は到底露軍の敵でなく、散散の敗北に終つたことは、今尙讀者の記憶に存してゐるであらう。で、十一月二十七日に、駐獨支那公使蔣作賓は、獨逸政府を通じてロシアに和解申入れの一札を差出し、その結果十二月十六日から、豫備會議がハバロフスクで開かれ、二十三日蔡運升シメノフスキイ兩代表との間に、ハバロフスク議定書十ヶ條が調印され、東支鐵道に關する限り、七月十日以前の原狀が恢復されたが、勿論國交恢復とまでは行かない。そこで翌一九三〇年一月五日、莫德惠が東支鐵道督辦に任ぜられ、五月九日モスコーに到着、露支會議開催に努力した結果、十月十一日から正式會議開催の運びとなつたが、年を越えて進捗遲々、一九三一年九月十八日滿洲事變の勃發に因り、これまでの路線に依つては到底交渉を繼續することが出來なくなつて會議は終に停頓した。

九・一八事件後暫らくは、露支復交どころの騒ぎではなかつたが、しかし國際關係打開、國難救濟の一方策として、ロシアとの復交が、支那朝野の念頭に絶えずあつたことは爭はれない。就中その急先鋒と目せられたのは、廣東別派の首領孫科、陳友仁等であつた。彼等の主張は、いふまでもなくロシアと提携し、北滿の紛爭を變じて日露戰爭たらしむべしといふのが、中心思想であるが、民間にもこの一派の提唱に應ずるものが多く、支那第一流の新聞である天津「大公報」のごときも、「支那の兩大隣國は日本とロシアである。理想からいへば、この三國が平和關係を保つこと、これが第一であらねばならぬ。しかし日本は侵略政策を繼續し支那の生存を脅かしてゐる現狀であるから、支那は、他の隣國たるロシアと提携すべきである。この理や、至つて淺顯である。然るにそのロシアと支那とは、正式の外交關係がないのだ。支那の愚拙や、實に絶倫といふべきである。愚圖々々してゐて、ロシアが滿洲僞國を承認でもしたら、支那は一體どうなるのだ。抗議を提出することさへ出來ないではないか。何より復交が急務だ。」といつたやうな論鋒で、息卷き荒く政府に迫る。で政府部内の復交論者、時の行政院長汪兆銘あたりが中心となつて、一九三二年五

月頃から詮議をはじめ、六月三日と六日の中央政治會議で露支復交を原則として可決し、その前提として、兩國の間に不可侵條約を結ぶといふ方針を立て、同月下旬モスコーで、支那代表團の一員王曾思から、不可侵條約締結の申入をしたといふことだつたが、それつきりで後報なく、九月末には到底絶望と喧傳せられた。しかしそれは表向きで、裏面ではズツト交渉が繼續せられてゐたらしく、支那新聞に現はれる復交論も、その後ますます急調となり、はてはロシア政府代表ロシソフとか、ソコロフスキイとかいふのが、南京に入り込んで、外交總長羅文幹等の支那當局と盛んに往復してゐるといふ風評さへ傳へられるやうになつた。少し臭いなとは思つたが、今日まで二月あまりの、ノンベンダラリとした交渉振りでは、當分はまだまだ下交渉の時期で、近い將來に纏まるとは、到底思へなかつた。

三　終に無條件復交

ところが、そこへ、無臺は一轉して、思ひもかけないジュネーヴから、露支復交公文交換の電報が飛んで來た。文字通り、晴天の霹靂だつた。立役者は片や外務人民委員長リトヴイノフ、片や聯盟代表顏惠慶。セリフが太い。曰く「予は、ジュネーヴに於ける予等の、數次の愉快なる會見に依る最近の諸會談に準據し、平和のために、兩國間の友好的關係を促進せんとする希望に基づき予の政府は本日より、正常なる外交並びに領事關係が、正式に再建されたるものなりと看做すに決したることを、貴下に通告する正當なる權限を有するものである。」（正文）と、曰く「顏惠慶氏と予とは、本日、ソヴエート聯邦及び中華民國間の、外交關係を恢復する通牒を交換した。この正常的行爲は、ほとんど說明を必要としないものである。」（リトヴイノフ聲明）と、かうした思ひ上つたセリフの粉飾の下に、露支兩國は、無條件に抱きついたのである。

眞に、無條件に！　である。アレほど八釜しくいつてゐた赤化宣傳禁絶の條件は、一體どこへ行つたのか、勿論、完全に解消せしめられたのである。十二月十一日外務省着、在露天羽代理大使の報告に依れば、支那は四ヶ月前から、ロシアに對して復交交渉を進めてゐたが（前項、王曾思の申入れを指す）支那が赤化宣傳禁絶の條件を持ち出したため交渉中絶に陷つた。今回急に復交公文交換の運びとなつたのは、支那が該條件を撤回したからであると。復交の最大難關であるべき筈の赤化宣傳禁絶の條件を、かくも輕々に拋棄し去ることが可能であるならば、復交は、眞に一擧手一投足の勞である。この外に、どんな難かしい問題があるといふのか。東支鐵道問題は、九・一八事件以後支那の權益は煙滅霧消し、問題は事實上滿露兩國間に繫屬してゐる。看來れば、赤化宣傳禁絶こそ復交の唯一條件でなければならぬ。これを拋棄しての復交、それは畢竟、支那のロシアに對する無條件降服である。無條件降服を敢へてしようとは、流石に我等も考へなかつた。我等が觀測を誤まつたのも、滿更無理でもなからう。

だが、今から考へ直して見れば、我等はあまりにも赤化宣傳の問題を、重く見過ぎた嫌ひがあつた。今は共匪討伐に憂身をやつしてはゐるが、かつて一度は共產黨と握手した蔣介石であり、汪兆銘であり孫科であつたのだ。もう一皮突込めば、江西省瑞金に赤色首都を持つ中華ソヴエート共和國中央臨時政府も紅軍そのものも、皆對露斷交後に出來たものだ。斷交してゐても、復交してゐても、赤化の魔手はどうせ延びる。水のやうに、支那大衆の間にしみ込む。赤化宣傳禁絶の空手形を貰つても、何の役にも立ちさうにないと、諦らめがいいといはうか、淺墓だといはうか、ともかくさうした考へ方をしさうな「沒法子」人種で、彼等はあつたのだ！　それを失念したのが、我等の不覺であつた！

四　重大な影響

ともかく露支兩國の國交は、かうして恢復された。今後の兩國の關係は先づ第一に大使の交換、支那からは顏惠慶に確定し、すでにロシア政府からはアグレマンを取つたといふことだ。ロシアからは、リトヴイノフの次席のカラハンが行くか、イズヴエスチヤ主筆のカアル・ラデツクが行くか、今日（十二月二十五日）まで決定してゐないが、矢張りカラハンではなからうか。彼ならば、初代の駐支大使だつたし至極適任であらう。

大使の交換につづいて、不可侵條約の締結、通商條約の訂立といふことになるだらう。通商條約の草案なども、もう出來てゐるといふ說もあるが、さう急に纏まるものか、私は疑問に思つてゐる。

その影響は勿論重大だ。第一に支那民衆の人氣を獲得することが出來よう。國際聯盟の頼みにならないことは、支那民衆も氣附いてゐる。十二月七日の總會で、英國代表サイモンの冷靜な發言があつてからは、特にさうした傾向が強くなつた。もう聯盟は駄目だ。殘すところは米露兩國よりない。かういふ感情が民間を風靡してゐる。そこを見込んでの復交だから、人氣は南京政府によくなる。復交派の急先鋒たる孫科を抱き込むことも出來よう。

第二に、國外的に、ロシアの滿洲國承認を阻止することが出來る。これは自明の理だ。しかしこれを以て、滿洲國に大打擊を與へ得たと思つたら、それは大きな間違ひである。假令滿露間に國交關係なくとも、例へば東支鐵道問題のごときは、實際的に處理する方法がいくらもあるのだ。

第三に、日露不可侵條約の締結交渉を、多少妨害することが出來よう。尤もロシア側は、決して日露不可侵條約交渉の妨げにはならぬといつてはゐるが。

第四、日支問題和協委員會にロシアを招き入れるといふ點について、復交は多少效果的かも知れない。しかしロシアの參加と否とは、自づから別個の觀點から看るべきで、日本の態度を顧慮しないで、ロシアがその進止を決しようとは思はれない。

第五、かう看て來ると、支那が聯盟外交に奇勝を制しようとして、輕々に宣傳禁絶條件を拋棄し去つたのは、淺慮短見、愚拙絶倫の一擧であるといはざるを得ない。尤も支那側の考へでは、前にも述べたやうに、斷交してゐても赤化宣傳は入つて來る。復交して、宣傳を禁絶しないからといつても、さまで恐れることはないといふのであらう。私はどうしてもさうは信じ得ないものである。

中國共產黨及び紅軍が、三十餘萬の兵力を擁し、一年有半に亙つてその赤色首都を保持し、散在的にではあるが、約二省の面積に匹敵するソヴエート區を設定してゐるのは、もとをただせば、中國國民黨が、聯俄容共政策を採用し、共產黨とともに、民主主義革命の聯合戰線を張り、赤化宣傳を大つぴらに行はせたからである。今囘の復交は、必然その時代の再現である。カラハンやラデックが大使として飛込み、知惠、金、武器の三段援助を、黨、軍に與へるとすれば、その結果は豫想に堪へないものがあらう。あらゆる利權の無條件恢復、在支外國利益の沒收を綱領とする中華ソヴエートの勢力が、揚子江流域を蓋ふときを想像せよ。畢竟露支の復交は、支那赤化工作の擴大、深化であり、ロシアの支那進攻であり、極東平和の搖籃である。復交の影響、ここに至つて極まる。（『世界知識』一九三三・二）

第三節　時今支那共產軍聞書

一　「首斬り」鄺繼勛、誅られの事

湖北省新集の、第四方面軍司令部で、鄺繼勛の胸の中は、煮へくりかへるやうであつた。第十一師長の許繼慎が怪しい、といふことは、とはいへ、もう早くから黨中央の氣附いてゐたところであつた。その確證を得て、臨機格殺すべしといふ、中央軍事委員會の密命を受けて、この鄂豫皖區にやつて來て、はじめには軍長として、後には第四方面軍の總司令を兼ね、容疑者である許を、絶えず監視してゐた彼ではあつたが、許の陰謀が、まさかこれほど大仕掛のものであらうとは、二個月前までは、ちよつとも氣が附かなかつたのである。何しろ許繼慎といへば、黄埔軍官學校出身の秀才で、朱德、毛澤東、賀龍、彭德懷に次いで、一九二九年の末に、逸早く第一軍を組織して、その軍長となつた男である。鄂豫皖區の草分けで、同時に赤軍の元老でもあるし、これまでの戰績だつて、決して惡い方ではない。ソヴエート區内の大衆の支持も、絶對的といへるほどだつた。絶えず圍剿して來る優勢な討伐軍を、常に相撲にもさせずに擊破し去つて、鄂豫皖區を泰山の安きに置いた英雄的軍隊の指揮者である彼を、高が一通の密書（蔣介石から許繼慎に宛てたもの）を手に入れたからといつて、ただちにスパイ呼ばはりをして、臨機格殺の密命を帶して、自分を派遣するなどとは、中央軍の委員會ともあらうものが、いささか神經質過ぎるといふものだ。反間苦肉の策といふこともあるではないかことさら思はせ振りの密書をつくつて、手ゴワイ敵と敵の間を割く、さうした例は、三國志に御手本がある。芝居で演る「群英會」

周瑜にだまされる蔣幹になりはしないかと、彼は委員會の席上口を酸つぱくして力說したのであつた。が、委員の多數は、依然として疑ぐり深く、許繼愼反動化說を固持するし、彼自身も第六軍長を罷めて、軍事委員會の一委員として、實は髀肉の嘆に堪へなかつたときであつたので、ともかく見て來よう、といふので、軍長兼總司令となつてここに乘り込んで、來たのであつた。

着いてからも、しかし、許繼愼の側には、別段反動化の模樣は見えなかつた。彼は、軍事に於いて依然勇敢である。多少の失敗はあつたし、確實性のある勝利を逸したこともあつた。しかしそれは、用兵上の錯誤に依る過失と認められないこともない。軍事以外の方面では財政上多少面白からぬ點がある。軍需關係の人間で、公金費消の噂もある。小柄な美しい許の第二夫人と、女學生上りの第一夫人とが、猛烈な喧嘩をやるとか、必要以上に頻頻宴會が催され、黑遊びに耽るといふ噂もある。が、それ以外には、さしたる缺點も見出されなかつた。それ見ろ！　鄺繼勛は、ひそかに先見の明を誇つてゐたのであつた。

その先見の明(?)を、峻烈に打ち破つたのは、軍及びソヴエート區に於ける、左右の偏向を檢討するために、黨中央から派遣されて來てゐた、勞働者生へ拔きの黨員陳昌浩だつた。鷹のやうな眼をした彼は、政治保衞分局の連中の援助を得て、半歲の餘に亘つて軍、區の內情を偵察した結果、第十一師長の許繼愼、第十三師長の周維炯、この二人が、蔣介石の指使を受ける超スパイ團であるA・B團（アンチ・ボルシエヴイキ團）の首領であり、右兩師團の幹部はほとんど全部が團員であり、軍以外にも、某某三縣下の黨組織が、大半加入して居り、それに富農も加擔してゐて、三千人以上の大組織となつてゐるのみならず九月十五日（一九三一年）を期して、新集を中心とするA・B大クウデタアを計畫してゐることを未然に暴露したのであつた。

鄂豫皖區の英雄、紅軍の模範指揮官である許繼愼は、その實軍、區を根こそぎ敵に渡さうとする超スパイ團の首領であつたのだ軍、區の情報を、コソコソ敵に賣るといつたやうな、ありふれたスパイではない。軍、區を根本から顚覆しようとする、恐るべき陰謀だつたのだ！　鄺繼勛は、今更に戰慄した。それを暴露して呉れた陳昌浩に感謝するとともに、改めて軍事委員會の先見に服した。さうして疾風迅雷的に、A・B團員の檢舉を開始し、最後に許繼愼をも捕縛した。さうして十一月五六兩日、軍長徐向前、前記陳昌浩等を審判員とする革命法廷を開き、許繼愼等九人の死刑を宣告した。

――新集の、司令部の一室で、煮えくりかへるやうな胸をおさへて、これのみが彼の唯一の嗜好であるシガアをくはへながら、鄺繼勛は、靜かに物思ひに耽つてゐた。許繼愼の、アノ大陰謀が成就してゐたらどうだらう？　第四方面軍はどうなる？　赤衞軍の主力たる朱毛軍にも劣らぬといはれてゐる第四方面軍が、彼等A・B團の白蟻どもに喰ひつぶされかかつたのだ！　鄂豫皖區はどうなる？　江西中央區に次ぐソヴエート區として知られたこの區が、敵に賣り渡されて、白色テロル支配下の廢墟にならうとしたのだ！　恐るべきA・B團、憎むべき許繼愼。その許繼愼は今わが手中に在る。どうしてくれよう、窓外、秋雨しとどに、遠からぬ營舍からは、無邪氣な兵士どもの、「守れ第四方面軍、衞れ鄂豫皖蘇區」のコオラスが聞える。シガーの灰を落しながち、鄺は、默默として思ひつづける。

凌遲開膛の刑に處してやらうか？　アノ逞ましい許繼愼の身體を、板に縛りつける。脂ぎつて、テカテカしてゐる。鬼頭刀を振りかぶつた執刑兵が、つぶらな眼をみはり、矢庭に二三歩前進したと見る間に、第一刀、左の乳を削る。第二刀、右乳。第三刀で左の腿の肉を一塊えぐり取る。第四刀で右腿。第五刀左・臂。第六刀が右の臂。第七刀で膝から左腿を卸す。第八刀で膝から右腿へ。第九刀で胸を劃く。第十刀はじめて首を斬る。首だけ板に殘つて、下體は地に墜ちる。黨、軍の恨みは、かうしてはじめて晴れるのではあるまいか？

それとも絞首にしようか？　板の上に縛りつけて膝を組ませ、二人の兵で首に繩をかけ、絞り殺す。それではあまり曲がない。それとも腰斬にしてやらうか？　いつそ一思ひに打首にして、アト梟首とするか？　だが、彼もかつては軍長、師長だつた男、矢張り、平凡に銃殺とするか？――鄺の妄念は、果てしなくつづく。

翌日は、カラリと晴れた上天氣だつた。許繼愼等九人の銃殺命令が、總司令鄺繼勛の口から發せられた。彼の考へ拔いた處刑法も、結局平凡に落附いたものとも見える。しかし處刑は平凡であつたが、許の陰謀はよほど彼を神經質にしたものと見え、それか

らのA・B團殘黨の檢擧は、至極峻嚴なものであつた。餘波を喰つて馬鹿を見たのは岳維峻である。彼は一九三一年二月十日、二郎峴の戰で捕虜となつた討伐軍の第三十四師長であるが、その鄉里である陝西の赤化を鄜に要求され、これを拒絶したのみならず、第四方面軍中に殘つてゐる彼の舊部下を煽動し、第二の許繼愼事件を起さうとしたので、鄜は一九三二年八月十一日、蘄春で岳を銃殺した。劉子手鄜繼勛「首斬り」鄜繼勛の名が、一時に高くなつた。

この間に、彼の指揮する第四方面軍は、主として猛將徐向前の奮鬪に因つて、赫々たる武勳を樹て、その兵數も八萬を超え朱毛を凌駕するまでになり、鄂豫皖區も空前の發展を遂げ、安徽の霍邱、六安、舒城、霍山、英山、湖北の廣濟、黃陂、花園、廣水、羅田、麻城、黃安、河南の羅山、光山、潢川、固始、商城一帶を淹有するに至つた。軍、區の發展に連れて、鄜繼勛の名は廣く中外に知られ、「支那のウオロシロフ」朱德を凌ぐ聲譽をかち得たのである。

「首斬り」鄜繼勛、討伐軍を縮みあがらせた彼にも、皮肉な運命が訪れて、アベコベに部下の軍長徐向前に馘首されることになつた。それは一九三二年の九月末、蔣介石の第四次圍剿に對する、彼の第四方面軍軍事指導失敗の責任を問はれてのことである。

節を改めて、第四次圍剿と、紅軍の全面的敗退の始末を語らなければならない。

二　三省圍剿、風に木の葉の紅軍の事

一九三一年九月に起つた滿洲事變は、偶然にも、蔣介石の紅軍に對する第三次圍剿を中斷せしむる結果を齎らした。それが一くぎりつくと、こんどは一九三二年一月の上海事件である。その跡始末が五月までかかつた。この約八個月間が、中國共產黨及び紅軍に與へられたる休養期間であつた。この間に、紅軍及びソヴエート區は、雪達摩のやうに大きくなり、一九三二年のはじめに於いては、次ぎのやうな廣汎な地域を確保するに至つた。

（一）江西、福建、廣東省境區。一に江西中央區ともいひ、赤色首都瑞金を中心とする江西東南部地域で、支那最大のソヴエート區である。その勢力範圍は、江西の瑞金、石城、寧都、會昌を包んで尋邨、安遠、信豐、南康、贛州、雩都、興國、樂安、臨川、黎川、福建の建寧、清流、連城、汀州、武平、上杭の各縣に及ぶ。いはゆる朱毛軍（朱德、林彪、羅炳輝等）の遊擊區域で、その兵力は約五萬。

（二）江西、湖南省境區。江西西南部區で、江西の寧岡、永川、上猶、崇義、湖南の汝城、桂東各縣を包含する。彭德懷軍の遊擊區域。兵力二萬。

（三）江西東北區。江西東北部地域で、江西、浙江、福建、安徽四省に跨がる。江西の橫峯、弋陽、上饒、貴溪、德興、餘江萬年、樂平、玉山、鉛山、福建の崇安、浙江の常山安徽の婺源を包含する。指導者は方志敏、邵次平、周建屏で兵力一萬。

（四）湖北、河南、安徽省境區。前節で述べた鄂豫皖區である。湖北東部地域で、私はこれを鄂東區と命名してゐる。江西中央區に次ぐ大ソヴエート區で、鄜繼勛、徐向前の鋼張り。兵力八萬。

（五）湖北中部區。湖北中部區域で、鄂中區ともいひ、洪湖、沔陽、潛江、岳口、漢川、天門、京山、鍾祥、荆門、沙洋、監利を含む。賀龍、段德昌軍（二萬）の遊擊區域である。

（六）湖北東南部區。湖北東南部地域（鄂南區）で、陽新、通山、崇陽、通城、蒲圻、咸寧、大冶地方。孔荷寵軍（三萬）の遊擊區域。

（七）湖北西部區。湖北西部地域（鄂西區）で、巴東、建始、鶴峯、五峯、長陽を含む。王炳南軍（一萬以下）の遊擊區域。

以上の七大ソヴエート區のうち、基礎の最鞏固で、勢圈も廣いのは、何といつても江西中央區で、江西、湖南省境區を西側の、江西東北區を北側の屏障として、江西省城の南昌、中部の大都會吉安を窺つてゐる。しかし蔣介石が最憂慮したのは、この方面ではなく、鄂東、鄂中、鄂南三ソヴエート區域に依つて、半永久的に包圍されてゐる武漢の形勢であつた。某外人記者が評して「萬頃紅濤中の一孤舟。」といつたやうに、鄂東、鄂中兩區は聯繫して一丸とならうとし、平漢線はしばしば中斷せられようとしたし、鄂南區は西北進して、湘鄂鐵路を斷ち切らうとした。就中驚異的發展を遂げたのは、鄜繼勛、徐向前の鄂東區である。もとはA・

B團の首領許繼慎があたからいいやうなものの、その許繼慎は銃殺され、猛將徐向前が擡頭し、平漢沿線の鷄公山（武漢方面からの有名な避暑地）あたりに出沒して、米人宣教師を拉致したりした。兵力も八萬といふ、紅軍としては空前の大集團を成してゐる。斬り崩さうと思つて出したスパイ團が全滅し、逆にそのねらつた的が大きくなつたのだから、蔣介石としても腹が立つた。許繼慎の弔ひ合戰といふ意味をこめて、彼は第四次圍剿の目標を、主として鄂東區に向け、同時に鄂中、鄂南兩區を擊破し、武漢の危機を一掃すると聲明した。さうして一九三二年の五月末に、鄂豫皖三省剿匪總司令に就任し、六月廬山で剿匪會議を開き、同月末までに討伐の部署を整へ、七月から湖北三ソヴエート區に對する總攻擊を開始したのであつた。

八十一師、二十九旅、三十九團、兵數六十三萬以上といふ大掛り、それに軍艦、飛行機なども參加した第四次圍剿は、前三回の討伐に比して、規模に於いて格段の差異であつた。これに對する紅軍は驅り集めて十五萬もあらうか。先づ四對一の比例である。石と卵である。紅軍が、風に木の葉の散るやうに、十月初旬までに、全面的敗退を遂げたのは、先づ無理からぬ結果といへる。勿論紅軍は敵はぬと見て、「化整爲零」すなはち「分散主義」を採つたのであり、小規模の殘軍は所在に隱れてゐるし、中には徐向前軍や賀龍軍のやうに、數千乃至萬餘の軍を收拾して、紅軍史上空前の遊擊線を劃し、數月ならずして新根據地を獲得したものもあるのだから、討伐軍側でいふやうな、徹底的殲滅ではないのだが（現に一九三三年一月末には、商城、經扶、立煌三縣が、王千の紅軍に驅はれてゐる）しかし黃安、七里坪、新集、金家寨、商城、洪湖、龍港、燕厦等の重要根據地が、ほとんど全部克服せられた事實からいへば、先づ先づ政府側の言分を通してよささうである。少くとも四回の圍剿を通じて、今回ほど成功したことはないのである。

圍剿のデテイルを叙することは、舊聞でもあり、今更どうかと思ふが、日本では割合ひ正確に傳へられてゐず、今でも武漢の形勢が危ないなどといつてゐる向きもあるやうだから、左にエキスだけを書いて置く。

鄂中區すなはち賀龍、段德昌の遊擊區域に對しては、七月十五日總攻擊が開始されたが、賀龍軍案外弱く、八月下旬には賀龍段德昌兩軍は、逃足早く遁走し、政治委員の夏曦が殘軍を率ゐて、最後の根據地洪湖に入つた。ここは鄂中區ソヴエート政府の所在地で湖中にいくつかの島があり、梁山泊に彷彿たるものがある。隨つてその攻擊は隨分困難であつたが、長江艦隊及び飛行機の援助を得て、九月三四日頃には周圍の要害を占領し、八日完全に洪湖をも占領した。

鄂東區すなはち鄂豫皖區に對しては、七月上旬總攻擊開始、十二日に羅邱を恢復、八月十日河口鎭、十三日黃安を克復、つづいて七里坪をも奪回、九月九日終に新集を取つた。軍事政治の中心地だけでなく、物資集積地として重要な地點で、ここの占領は、紅軍に大打擊だつたらしい。同十四日商城を取り、二十日最後の損據地たる金家寨を恢復した。周圍は深山峻嶺で、水の洪湖・陸の金家寨と並稱された險要。許繼慎が最初の紅軍を組織したところである。金家寨恢復の功勞者は、第十四軍長衞立煌で、河南方面から深山の間を縫ひ、源義經ひよどり越へ的な勝利を博したものである。その功に依り金家寨を改めて立煌縣とし、彼の功名を永久に殘すこととなつたといふ。（A・B團殘黨の策應も顯著で、金家寨陷落の重要原因をなしてゐる。）

鄂南區は紅軍第十六軍孔荷寵の勢圈である。蔣はこの方面をあまり重視せず、精鋭部隊を派遣しなかつたので、討伐は遲遲として進まず、五月頃攻擊を開始したに拘はらず、九月中旬辛うじて要害三溪口を恢復、十月上旬、孔の根據地龍港、燕厦を奪回した。しかし孔軍は大して實力を損せず、江西西北部に遁入つた。

蔣介石は、見事、愛弟子許繼慎、宋將岳維峻の弔ひ合戰をやつて退け、意氣揚揚、三中全會に臨むべく南京に引返した。因果はめぐる小車、「首斬り」鄒繼勛は、軍事失敗の責任を問はれ、中央革命軍事委員會の命に依り、職停止の處分を喰ひ、軍長徐向前が代つて第四方面軍總司令となつた。一說に據れば、徐に依つて銃殺されたともいふ。三年に亘つて、淮河流域に跳梁した彼も梟雄、末路憐れむべきものがあるではないか。

三　白狼の昔を偲ぶ徐向前の遊擊戰

今は昔、といつても、まだ二十年にしかならないが、一九一二年から一四年にかけて、當時の大總統袁世凱の故郷河南に崛起し安徽、湖北、湖南、甘肅と、五省を荒し廻つて、流石の袁を手古摺らせた草澤の英雄がある。名前は白朗　晉を取つて「白狼」と呼

ばれた大土匪である。親の代から土匪稼業、修業のために軍隊生活二年、さうしてスッカリ軍の匪引きを覺え、歸鄉して一隊の土匪軍を組織し、先づ南陽の守備隊を擊破し、一九一三年の正月には、すでに三千人を越ゆる土匪團となり、南して湖北境の武穴關に入り、轉じて湖南の各縣城を屠りつつ安徽に侵入、このときはもう一萬餘の大土匪團となり、勢大いに振つた。北京政府は吃驚して、湖北都督段芝貴を討伐軍總司令とし、安徽にゐた張勳をこれに副とし、總勢五萬を以て白狼匪一萬五千と、河南商城の野に相見へた。この一戰に白狼は敗北したが、殘軍を收拾して湖北に侵入し、三千の同勢となつて河南に歸り、今度は河岸を變へて陝西に入り、沿道不逞の徒を糾合して三萬人「中原扶漢軍大都督白朗」の大旆を、終南山颪しに吹きなびかせ、西安に向つて殺到した。スロオガンは扶漢排袁といふので、南方國民黨の志士連もこれを利用し、中には白狼軍の中に投じたものもあるくらゐ、袁政府は大いに驚いて、陸建章を討伐總司令に任じ、三十三大隊を潼關に集中したので白狼は西安攻擊を斷念し、甘肅、四川に遊擊して志を得ず、同志僅かに二千となつて故鄉河南にたどりついたが、魯山の本據を圍まれて二進も三進も行かず終に石家莊に遁れて病死した。彼事を擧げて以來、月を閲する二十六、遊擊線三千六百哩、討伐費が二千萬兩、軍隊五萬以上を動かしたといふ。八人擔ぎの輿に乘つて、飛ぶか如くに戰線を往來し、輿を戰場の中央に卸させ、悠悠酒宴を開いたといふ逸話も殘つてゐる。正に民國大土匪の白眉である。

白狼の昔語りを今に見る、徐向前、賀龍の遊擊戰は、月を閲する僅かに四、しかもその遊擊戰は、湖北、河南　陝西、四川、湖南五省に及び、實に二千八百哩に達し、しかもその實力を損せず、兩兩相並んで新根據地を四川、湖南に獲得したのである。正に支那赤軍發展史上の一異彩である。

先づ徐向前の遊擊線を辿つて見よう。九月二十日の金家寨陷落後、總司令廊繼勛は現職停止の處分に附せられ、軍長徐向前が代つて總司令となつた。彼は殘軍を收拾しこれを大小の二軍に分ち、小なるを蔡盛熙に附し、自から大なるを率ゐて西走することにした。蔡盛熙は小部隊を率ゐて先づ湖北の蘄春に逃れ、次いで安徽の英山に轉じ、終に太湖縣に入つて分散した。その後の消息は不明であるが、一九三三年一月末に、河南商城、湖北經扶、安徽立煌の三縣を襲つた紅軍といふのは、或はこの蔡盛熙軍ではないかと思はれる。

一方徐向前軍は、敗殘とはいへ一萬餘の大軍、先づ湖北の黃岡縣に入り、十月二日同縣下の李家集を占領したが、六日同地を拋棄、黃陂を經て十月中旬麗水に現はれ、隨縣　棗陽を經て河南の新野、鄧縣を通り、十月二十八日淅川入城。十一月初旬には陝西に現はれ、商南縣下の趙家川蕎、龍駒寨を經て、十六日商縣に入つた。それから十二月上旬まで、河南一帶を荒し廻つた。終南山（秦領）を根據として、西安河南の鄠、盩厔、郿三縣を闊がし、十一月二十五日には、西安南方五十支里の子南鎭を占領し、西安の人心を洶洶たらしめ、陝西省政府主席楊虎城辭表提出の一幕などもあつた。が、各路の攻擊に勢漸く衰へ、十一月下旬柞水に退き、子午鐘で大敗を吃し、十二月頃佛坪に轉じ、九日漢中を過ぎて南下、四川境に入り、二十六日南江、通江、萬源、綏定一帶に入つた。この遊擊線、實に一千二百哩である。主力は通江に在るもののごとくで、一九三三年に入り、一月二十九日巴中を占領したが二月二十三日田頌堯軍に奪回された。

徐向前軍現在の實力に關し、支那新聞は、すでに分散の勢ありと報じてゐるが、十二月二十六日「大公報」所載漢中通信に據れば、一匪衆なほ萬餘人あり、槍枝、銃も亦齊全、帶ぶるところの油印機械甚だ多く、到る處に反動宣言、共產標語を貼る。」とあり、なほ相當の實力を剩してゐるものと見るべく、現に主力の占めてゐる通江一帶は、四川軍閥中勢力最弱き田頌堯の勢圏であるから、徐軍の溫床としては、けだし最適當であらう。

さて說く、第二方面軍の賀龍、段德昌軍は、洪湖陷落（九月八日）前、早くも見切りをつけ、一旦荊門方面に遁れたが、轉じて京山から遊擊戰に上つた。すなはち鐘祥、隨縣、棗陽を經て河南に入り、桐柏から嵩縣に長驅し、陝西龍駒寨に南下し、十二月中旬四川巫溪縣を過ぎ、二十二日頃湖北巴東縣にたどりついた。この一帶は、前述した通り、巴東、長陽、五峯、鶴峯、建始と連ねて、紅軍第一教導師長王炳南の遊擊區域で、いはゆる鄂西ソヴェート區である。二十八日賀龍は同區內の五峯に入り、そこを根據とし、

て湖南を窺ひつつあつたが、一九三二年一月八日頃、直屬軍（第七師李光吉軍、第九師段德昌軍）に王炳南軍を加へ、一萬餘の兵を以て湖南桑植を攻擊し、十三日終にこの地を占領した。京山出發以來、ここまでの遊擊線は、實に一千六百哩に及ぶ。

賀龍の桑植占領は、相當重大な意味がある。ここは彼の生れ故郷であり、彼の紅軍の發祥地でもあるからだ。そもそも彼はこの地の一土匪、一九一二年頃ある土匪團に投じ一九二〇年頃には、その土匪團の首領となつてゐた。一九二五年に歸順して四川建國軍第二師長になり、後、國民革命軍に歸して張發奎の下に附き、河南で張作霖軍と戰つて功を立て、一九二七年六月武漢政府から國民革命軍暫編第二十軍長となり、七月南昌に移駐したところを、共產黨員に煽動され、朱德、葉挺とともに例の南昌八・一暴動に參加した。暴動失敗後福建を經て廣東東江に遁れ、そこでも廣東軍に大敗して香港に亡命、黨幹部周恩來李立三の勸誘に依り、湖南桑植に歸鄉して舊部下を糾合し、紅軍第二軍を組織したのである。その後遊擊區域の變遷に連れ、彼は洪湖を中心とするソヴエート區を建設し、第二方面軍を稱するに至つたのであるが、一日も舊根據地を忘れず、王炳南を留守部隊長として、巴東方面に殘して置いたのである。

かうした因緣のある桑植であり、鄂西ソヴエート區である。彼の歸山に依りこの地方一帶が、又しても南京政府の一部國たるべきは當然の勢ひである。で、彼は、鄂西ソヴエート區の五縣、湖南の桑植、永順、保靖三縣を合せた新根據地と四川の秀山、酉陽彭水、黔江一帶に散在する土著紅軍（六七千あるといはれる）を糾合し、施南を攻陷し、鄂湘川ソヴエート區を建設せんとしてゐるものごとくである。もしこの計畫が成功し、通江一帶の徐向前軍と聯絡がついたならば、將來は萬縣あたりを中心とする、一大ソヴエート區が出現するかも知れない。

尤もさうは問屋で卸さないらしく、官邊の報道では、桑植もすでに政府軍に奪回され、賀龍は酉陽に遁れたといふ。しかしこの地は、前述の通り土著紅軍が大分ゐるから、賀龍は恐らく久しからずしてこれら土著紅軍の糾合に成功し、兵力を增加して、桑植奪回もしくは施南攻擊に出ることであらう。

四　蔣介石、毛澤東鬪せり合の事

蔣介石が第四次圍剿をつづけてゐた間、中央ソヴエート政府の所在地、紅軍の總本山たる江西三ソヴエート區は、果してどうしてゐたか。決して無爲に暮してゐたわけではなかつた。黨中央一月九日の軍事決議を遵奉して、行動を起したのは、むしろこの方が早かつた。すなはち一九三二年の四月初旬、支那のウオロシロフ朱德が總司令となり、林彪を總指揮とする第一軍團、彭德懷總指揮の第二軍團、董振堂總指揮の第五軍團、それに羅炳輝の第十二軍など合せて第一方面軍を組織し、福建に進出して先づ龍巖を占領、四月十九日厦門近くの漳州を占領して、南京政府の心膽を寒からしめた。しかし結局福建は物にならぬと見極めをつけ、五月末自動的に漳州を拋棄し、戈を轉じて廣東に侵入した。それは蔣介石が、圍剿の部署を決定し、今や總攻擊に移らうとしてゐた六月末から、七月上旬にかけてのことである。ところが廣東には善戰の余漢謀があり、流石の朱毛軍も目的を達するに至らず、七月末には完全に江西の古巢に追ひ込まれてしまつた。

八九兩月、江西の紅軍は多少の蠢動を試みたが物にならず、十月になると、鄂南區の孔荷寵軍が敗退して江西境内に入つたので、中央軍事委員會は、その機會に於いて左の通り軍區を劃定した。

（一）中央區。瑞金、寧都一帶。警衛師及び學生軍を以て守備し、瑞金に衛戍司令部並びに後方總兵站部を置く。衛戍司令は劉伯承、副司令は劉聯標、總兵站主任は楊志誠。

（二）贛粵邊區。寧鄔、安遠、會昌一帶。第二十軍長陳毅守備に當る。

（三）贛湘邊區。崇義、上猶、寧岡、永新、蓮花一帶。第八軍長李天桂守備に當る。

（四）贛鄂湘邊區。修水、銅鼓、萬載、醴陵、瀏陽一帶。第十六軍長孔荷寵の遊擊區域とする。

（五）贛東北邊區。橫峯、上饒、貴溪、鉛山一帶。第十軍長周建屏守備に當る。ソヴエート主席が方志敏、黨代表が鄧次平である。

この五軍區の劃定が終ると、右記各軍を留守に殘し、朱德が總司令となり、林彪の第一軍團、彭德懷の第三軍團、董振堂の第五軍團、羅炳輝の第二十二軍を率ゐ十月末から行動を開始し、主力を建寧に集中し福建侵入を企てた。中路林彪は建寧から將樂へ、右路羅炳輝は泰寧から邵武、建陽へ、左路彭德懷は黎川から光澤へ、一齊に活動した。中央ソヴエート政府主席毛澤東も、自から一軍を率ゐ、東北區と聯絡の目的を以て、十一月十六日資溪を取り、二十九日金谿を占領した。一方東北區の方志敏は、崇安から光澤に向ひ、羅炳輝軍と聯絡を取らうとした。

一九三三年に入つてから、紅軍は福建侵入を斷念し、專心東北區との聯絡完成に努力してゐるもののごとく、撫州北方の東鄉あたりまで進出したが、一月末には蔣介石自から南昌に出馬、三個月内に江西全省を肅淸すると豪語し、蔣介石、毛澤東鍔ぜり合ひの一幕が觀られさうであつたが、三月、熱河喪失に因る北支那局面の變化は、蔣の南昌滯在を許さず、惜しいところで栃が入つた形となつた。

蔣介石の北上に關聯して、東京日日新聞三月七日附南京及び上海特電は、蔣と朱德との間に停戰協定が成立したと報じてゐる。その要旨は左の如くである。

> 蔣は北上に先ち朱德と會見、停戰協定を成立せしめた。停戰區域は江西北部では黎川、南豐、吉安茶陵を連ねる線、南部では寧都、信豐、汝城を連ぬる線、福建方面では、江西の黎川と福建の漳州を結ぶ線、右三線を赤白境界線とし、相互に進出しないことになつた。

この說の眞僞はまだ明かでないが、朱德代表と蔣との會見說は、二月以來傳へられてゐたところであり、停戰協定成立說も、滿更謠言と思へない節がある。或はあり得べきことだと思はせる根據として、一九三三年一月十五日附、中央ソヴエート政府の宣言を擧げることが出來る。右宣言は、左のごとく要約される。

紅軍は、政府軍がただちにソヴエート區への進出を停止することを條件に、政府當局と協力し、日本の侵入に對して鬪爭を開始するであらう。人民に民主的權利を賦與し、支那の獨立と統一とを擁護するため、武裝義勇軍を組織するであらう。日本は、全支那の徹底的解體を企圖してゐるものに外ならない。

この宣言を讀み、しかして今回の停戰協定成立說と照し合せて考ふるとき、コミンテルン、支那の黨、並びに中央ソヴエート政府に於いて、何等かの新方針を決定したものと思はれないでもない。これについて、或は多少の關係がありはせぬかと思はれるのは、李立三の爲國である。

「支那のスタアリン」として、一九二七年から三〇年まで、中國共產黨を領導した李立三の名は、今なほ我等の記憶に存してゐる。革命段階の評價に對する李立三のコオスの誤謬を指摘され、黨中央の重要地位を退き、新訓練を受けるため、駐露代表團の一員となつて、莫斯科に赴いたのは、たしか一九三一年の春であつたと記憶する。その李立三が、露支復交（一九三三年十二月十二日）後間もなく江西中央區に入つたのは、恐らくコミンテルンの新訓令を、中央ソヴエートに齎らしたものではあるまいか。彼が新訓令を齎らして莫斯科を出發したのは、十一月初旬と想定せられてゐるが、いづれ浦鹽を通過したものであらう。ところが浦鹽には、當時すでに黨中央が上海から遷移してゐたと推察されるので、彼はここで黨中央と聯絡協議を遂げ、十二月末江西に入つたものと見える。その結果が本年一月十五日の、問題の宣言となつたものではなからうか。新訓令の內容は勿論我等には判らないが、すでに露支無條件復交に成功したロシアとしては、南京政府を、容共政策に導くべく、暫らく共產軍の活動を停止させることも、頗る有り得べきことだからである。

以上一九三二年に於ける支那共產軍活躍の大體の情況を網羅し得たと信ずる。筆の序でに黨中央の活動を附記すれば、大抵左表のごとくである。

（A）　一月九日「軍事決議」採擇、各ソヴエート區の聯絡を命ず。

（B）　六月十九日「國民黨第四次圍剿と我等の任務」決議採擇。

（C）八月一日「失業勞働者運動」決議採擇。九月六日「黨勢擴張指令」。

（D）九月十八日中蘇政府の對日宣戦（四月二十六日附）に對し、大衆の有力なる回答を求むと通電。

（E）十月六日中蘇政府、リットン報告反對宣言。

（F）十一月一日浦鹽遷移。十二月末又上海に歸るとの報。

黨中央の遷移は、紅軍第十三軍長胡公冕の捕縛（十月一日）、解消派首領陳獨秀、彭述之の就縛（十月十五日）、等に依り白色テロルいよいよ峻嚴となつたがためである。しかし黨總書記陳紹禹は、終始上海を離れず、ルムペン的に動いたのは周恩來、瞿秋白等であつた。前述のごとく、黨中央はすでに上海に復歸し、左の諸人を以て幹部を形成してゐる。

總書記　陳紹禹
組織部長　朱森
宣傳部長　楊尙昆
軍事部長　聶雲增
工人部長　謝康
中央政治局委員
秦邦憲　張聞天　趙容　廖成雲　王雲程
贛閩赤色政治局長　周恩來
閩總書記　陸定一
總工會委員長　劉少奇

右のごとく、依然として莫斯科留學生派が專權を握つてゐる。これに反し、江西の中央ソヴエートでは、主席毛澤東、副主席項英、張國燾以下、中央執行委員會には周恩來、瞿秋白の舊人、並びに紅軍の各首領が多く、莫斯科派としては、陳紹禹、劉少奇が名を連ねてゐるたけである。（『國際評論』一九三三・五）

第四節　共產軍の頽勢と蔣介石の獨裁强化

南昌城北の一角、贛江の流れに臨んで、簡素な一個の洋館がある。世を擧げて、注目の的となつてゐる人物が、そこに住つてゐる。羨望、懷恨、畏懼、漠然たる尊敬――それら、外間の善意、惡意を、冷然と受けて、彼は、默然として工作する。毎朝六時に起き、十四時間に亘つて、公文書と、地圖の間に生活してゐる。軍事委員會委員長として重責を負つてゐるに拘はらず、同時に、一介の學生のごとく、史學、經濟學、政治學を、孜孜として研究し、時に、中國文學にまで及んでゐる。學徒、さうして、全身に、生命と活力の横溢してゐる工作者（チヤイナ・プレス南昌特派員）。

剿匪陣營の蔣介石。――八十萬の大軍を動かし、共產軍討伐といふ、世界に二人とない役割を、演じつつある彼は、同時に、一個の學徒であり、特にこの頃は、清朝史――支那近世史の研究に、餘程興趣を覺えてゐるらしい。有名な「清代通史」の著者、蕭一山が、研究費不足のため、同書下卷の編纂に惱んでゐるといふ話を聽いた蔣は「それは惜しいことだ。愛讀者の一人として、自分にその費用を負擔させて貰ひたい。」と、いつて、即座に、いくらかの研究費を、蕭に送つたさうだ。近頃、支那での美談。

かうして、從つて、彼の剿匪方策は、長髮賊を討平した曾國藩に負ふところが少くないと、二年ばかり前から、噂されてゐた。目下行はれてゐる、第五次共產軍討剿で「碉堡政策」といふのが採用され、多大の效果を擧げてゐるといふが、これは、疑ひもなく清朝史の耽讀から得られたものである。

碉堡とは、碉樓と堡壘の謂である。碉樓は、ツマリ望樓であり堡壘は「とりで」である。石か煉瓦で壘んだ、三丈ばかりの、方形又は圓形の塔である。大低四階になつて居り、各階に銃眼があり、階下の入口は、タツタ一つ。そこには、いつも歩哨が立つて

ゐる。二三階は、指揮官及び兵士の寢室で、指揮官室には、電話まで備つてゐる。頂上には、いつも七八人の哨兵が立つてゐて四方を展望してゐる。樓の周圍には、逆茂木、鹿柴を設け、奸細の出入を防いでゐる。碉樓一座の收容人數は、一中隊から二中隊を普通とし、特大碉樓では、一聯隊を容れ得るものもある。樓の建てられる場所は、多く縣城の周圍、それから、縣と縣との間の大道を挾み、遠望のきく、小高い丘の上などである。ある重要地點を占領すると、逃げる敵を長追ひせず、すぐに碉樓の建築に取りかかる。かうして築いて行つた樓が、太年三月頃の調べで、江西全省に約三千座といふことであつた。今は、もつと增加してゐるであらう。素人考へでは、大して役に立つまいと思ふのが、支那の軍事專門家の說では、一座の守兵十人を以てすれば、步兵五百人に相當する實力があるといつてゐる。貧弱な武器しか持たない共產軍に對しては、成程效果もないではなからう。

この碉堡政策は、全く蔣の頭腦から出たものだが、彼は、これを、乾隆時代に於ける、大・小金川征討の史實に得たといふ。大金川、小金川は、四川省成都の西に當り、金の產地として知られた土地で、その頃、西藏種の土人が住んでゐた。乾隆十二――三年、及び三十一――四十年の二回、彼等は天險に依つて淸朝に抗したが、討伐軍の最も苦しんだのは碉樓であつた。削り成した絕壁のやうな碉樓に、土人は猿のやうに登つて行く、さうして、銃眼から射擊する。手がつけられない。指揮官を替ゆること三度、十年の長年月を閱し、辛うじて阿桂將軍の下に、海蘭察福康安等の勇將が現はれて、征服することが出來たのである。――蔣介石が、かうした史實を見免がさず、巧みにこれを模倣したことに對して、我等は、彼の眞價を、見直してもいいと思ふ。共產軍側では、はじめは碉樓を馬鹿にし、無二無三に突進して、多大の犧牲を拂つたさうだが、後にはその威力を知り、自分等も、碉樓を築くやうになつたといふ。

剿匪方策としては、碉堡政策だけが、唯一のものではない。その外、

（一）經濟封鎖。（二）公路政策。（三）空軍の充實。（四）山地行軍の訓練。（五）指揮官敎育。

といつたやうな諸方策を併行させ、その效果が、最近メキメキと現はれて來た。經濟封鎖といふのは、白色區から赤色區への、軍需品、食糧その他の輸入を絕滅し、或は制限するだけでなく、「隣匪區」といつて、赤色區に隣りする地域への輸入に對しても、同樣に禁止又は制限になるのである。これは、一九二三年の第四次討伐のとき案出せられ、案外效果があつたといふので、その後幾度か修正せられ、回を經る毎に周密、完全になり、今日では、これ以上完全には出來まいと思はれるほど、拔目のないものになつてゐる。封鎖條例だけを輯めたものが、尨然たる一巨册となつてゐるくらゐ。少々のことには驚かない共產軍も、經濟封鎖には弱り切つてしまつた。特に、食鹽の缺乏には、全く閉口してゐる。例の、棺桶に鹽を一杯詰め、死骸を裝つて持つて行つたとか、小便に溶解し、肥桶に入れて密輸入したとかいふ話は、この間の消息を語るものだ。

公路政策といふのは、恢復地域に、縱橫に自動車路をこしらへることである。これが、軍事輸送その他に、至大な利便を與へることはいふまでもない。江西省內だけで、今、三千二百キロの公路があるといふ。

かうした諸方策を驅使して、蔣は、第五次討伐の遂行に當つた。一九三三年の秋頃までは、彼の準備期間であり、剿匪戰線は、表面膠着の狀態を呈し、江西中央ソヴエート區に於いて、僅かに五六縣を恢復しただけであつた。しかし、秋になつて、いよいよ準備が整つたので、いざ總攻擊と、頭張りはじめたとき、晴天の霹靂のごとく福建革命が起つたのであつた。全く、想ひもかけない障碍であつたが、彼は落膽せず、周章てもせず、ただちに十萬の兵を剿匪戰線から割いて、これを浙江、福建省境に集中し、つづいて空軍を以つて、敵の本據たる福州を衝き、一擧に革命を紛碎した。

福建革命が腰くだけに終り、同省が、蔣の勢圈に入つたことは、測り知られぬ利益を、蔣に與へた。革命前の福建は、十九路軍の勢圈であり、隱然反蔣的に動いてゐたので、共產軍討伐などは、眞面目にやつてゐなかつた。討伐の費用を貰つてゐたので、表面御調子を合せてゐたが、實は本氣でなかつた。ところが、革命の失敗に因つて、福建が蔣に歸し、剿匪に經驗ある蔣鼎文、衞立煜等の勇將が乘込むと、東路剿匪戰線は、俄然活氣を呈して來た。

進んで、もう一つの儲けものは、廣東が態度を改めたことである。今までは、十九路軍といふものが福建に居り、一種の緩衝地

帶が形成されてゐたので、廣東も勝手なことがいへたのであるか、福建革命の失敗で、こんどは直接、蔣の直屬部隊と接觸することになつたのだ。輕輕しい行動は、もう危險で、出來なくなつた。そこへ蔣鼎文が、黄紹雄が、蔣伯誠が、最後に湖南省政府主席の何鍵までが出掛けて來て、少くとも剿匪の題目だけでは、協力しようではないかといふ相談を持ちかけて來た。それに「便乘」する外なかつた。獨り、廣東の實力派、陳濟棠ばかりでなく、廣西派の李宗仁、白崇禧までが、さうであつた。

何鍵の南下は、一九三四年六月のことであり、ここで記述するのは、どうかと思ふが、これ亦福建革命失敗の一影響であるから序でに說く。――彼は蔣から見て外樣であり、一から十まで、蔣のいふことを聽くつもりはなかつた。剿匪戰線では、彼は西路を受持つてゐるが、從來あまり力瘤を入れなかつた。ただ共匪の勢力が、湖南省內に入らなければ、それでいいといふ、消極的なズルい遣り口であつた。ところが、福建が蔣の手に入り、その結果、廣東が態度が改めたとなると、影響は、廻り廻つて彼の身に及ぶ。(一)剿匪に、本氣にならなければ、蔣介石から脫まれる。(二)福建に阻まれ、廣東に締め出され、頭を蔣に押へられ、共產軍は、抵抗力の最も弱い湖南南部に侵入し、彼の本領にヒビが入る。今日はわが身の上、何鍵は大いに狼狽した。そこで、蔣に泣きを入れ、共產軍の逃げ道に當る、湖南、河西、廣東省境に　十個の大飛行場を設け、退路を絕つ。それにはどうしても廣東の同意を經なければならぬといふので、急遽南下して、西南實力派に遊說した。といふのが、彼の南下の眞相。幸ひ、廣東も諒解を與へたさうで、彼はホッと胸撫でおろした形である。

環境は、今や蔣に取つて有利である。剿匪の進行は當然の順序でなければならぬ。で去る六月までに、中央ソヴエート區の北の關門たる廣昌、南の關門たる筠門嶺、東路福建の連城、永安、建寧等を克復し、東北ソヴエート區ではその首都橫峯を占領した。この外、徐向前の四川ソヴエートは、十一縣を失つて僅かに萬源、鎭巴の二縣に縮まり、賀龍の湘鄂西區は、その重要根據地のほとんど全部を失つて、貴州の后坪、沿河、婺川三縣に分散した。ソヴエート區及び共產軍は、今や全面的に頹勢を呈露した。左表は、その一九三四年八月に於ける現勢である。

區名	一九三三年初ソヴエート縣數	同年末	一九三四年八月
中央區	二五	一九	一〇
贛東北區	七	六	二
贛鄂湘區	一〇	七	三
贛湘區	六	三	三
湘鄂西區	七	一一	三
川陝區	二	一三	二
陝甘區	〇	三	〇
鄂豫皖區	六	六	三
計	六三	六八	二六

表だけでは、不充分であるから、補足的に說明すると、中華ソヴエート中央執行委員會主席朱德、ソヴエート共和國臨時中央政府主席張聞天、黨中央政治局分局書記周恩來、第一軍團總指揮林彪、第三同彭德懷、第五同董振堂、第七同蕭勁光、第九同羅炳輝等のゐる中央區は　赤色首都瑞金を中央に江西五縣(石城、寧都すなはち博生、興國、雩都、會昌)福建四縣(汀州、清流、歸化、寧化)合計十縣に縮まつてゐる。その一般方略は、廣東に對しては守勢を採り首都瑞金を死守すべく、その東に當る汀州(閩省赤區の稱があるが)に全力を集中し、朱德自づから三萬の精兵を率ゐて、ここを堅めてゐる。もし汀州陷落せば、瑞金も守りがたく、中央區諸軍は、全面的に退却し、贛湘區から湖南に入り、同省南部の嘉禾縣附近に遁れるであらう。(八月初旬、羅炳輝軍と傳へられる共產軍が、福州上流十二哩の白沙、水口地方を占領したが、これは、米、鹽等の物資を得るための行動で、共產軍の全體的方向が、福州に向けられたわけではない。)

第四節　共產軍の頹勢と蔣介石の獨裁强化

第八軍團總指揮方志敏、及び邵式平等の東北區は、首都横峰を占領され、ソヴエート潰滅の悲況に陷り、九江近傍の彭澤都昌方面に遊擊してゐる。第六軍團總指揮孔荷寵、竝びに蔡會文、蕭克、高詠生等の贛鄂湘區は、根據地小源陷落後、瑞昌一帶に遊擊し、高詠生のごときは、生擒斬首された。李天柱の贛湘區は、内訌の結果自滅し去つた。

以上が江西四區。湘鄂區に飛ぶと第二方面軍總司令賀龍、及び夏曦等は、貴州省后坪、沿河、婺川地方に追ひ込まれた。第四方面軍總司令徐向前、中華ソヴエート中央執行委員會副主席、張國燾中央執行委員陳昌浩等を首腦とする川陝ソヴエート區は、四川陝西境界の二縣に蹋蹐してゐる。吳煥先、沈澤民等の鄂豫皖區はほぼ一九三三年末の狀態を維持してゐる。

現在の赤化縣數、七大ソヴエート區、二十六縣。私の推定は、常にあまりに小に過ぎると評せられるのだが、いかに計算し直しても、四十縣以上とは推定し得ない。かつては、赤化縣數三百以上と推定せられた支那ソヴエートの、この體態、隔世の感がではないか。

共產軍頽勢の報は、世界に、剿合ひに素直に受け容れられた。これまでは、南京政府の宣傳だといつて、一も二もなくデマ視されたものだが、今度の場合は、不思議と思ふほど素直に、世間が諒解した。事實の示すところ、今や蔣介石コースの最大の障碍が全然去つたといふわけではないが、もはや障碍物としての作用をしなくなつたことが、明かにせられたのである。それとともに、「蔣介石、いよいよ獨裁へ？」といふ疑が、煙のやうに、立ちはじめた。

蔣に、獨裁制樹立の意圖が、あるかどうか？　問ふだけ野暮である。彼の言動に徵しても、「九月一杯で、剿匪軍事を結束する。さうしたら、人事問題をはじめとして、一切を片附ける。」と、いつたし、鄧文儀等にやらせてゐる「内外類編」といふ叢書風のものの中には、蔣名義の著作が五編もあるが、その中の一編に、「第二革命の開始」といふのがあるし、六月十六日の黄埔軍官學校創立十週年記念日に於ける、彼の講演の中にも、「我等の過去十年の工作は、第二期國民革命の基礎を構築した。我等はこの基礎の上に立つて、繼續努力しなければならぬ。しかし第二期は、第一期に比して、その困難は倍加すべきが故に、我等は、更に一層、革命精神を奮ひ起さなければならない。……第二期國民革命開始のこの時期に當つて、我等はよく考へるがいい。十年前には、四百挺の銃で、帝國主義者に抵抗し得た。今になつて、何を恐れるか？」と。いふのがあつた。彼の頭を、今支配してゐるのは「第二期國民革命」といふ觀念である。それが何を意味するか？　フアツシヨ革命以外の何物でもないことは、彼の、この七年來のコースを以て、ただちに參證し得られるのである。

一九二七年四月十二日、上海に於ける共產派を彈壓して、「清黨」を開始した以後の彼は、ボナパルテイズムの權化であつた。「黨すなはち我」といふ信念は、蔣介石コースの指導原理である。一九二八年の北伐成功後は、この傾向がますます強くなつた。軍權と黨權とを一身に集中し、おのれに反對するものを、容赦なく粉碎した。黨内民主化を叫んだ汪兆銘、純正三民主義を主張する胡漢民これらの理論を利用する軍閥（廣西派、馮玉祥、閻錫山等等）誰彼を論ぜず、片ッ端から打ッつかつで行つた。九・一八事件以後は、一層露骨で、藍衣社の組織文化建設協會の設立、新生活運動の提唱、――眼あるものは、もはや彼の「意圖」を見誤まらない。

獨裁の工具としての藍衣社は、一九三一年の創立であるから、もう四年の工作を積んだわけである。勿論、祕密結社だが、表現團體名としては、「救亡社」或は「圖存社」等等を用ひ、半公開的工作をもやつてゐる。組織網は最近益々完備し、蔣、宋美齡、張學良を最高幹部に、陳立夫、陳果夫等のC・C團、陳文炳、賀衷寒、鄭悌、劉健群等の黄埔系、蔣伯誠等の直屬將領系、邵力子、邵元冲、陳布雷、周佛海、程天放、張道藩等の文人派、張群等の政學系、楊公達、高一涵、何浩若、陶希聖等の學者から、雷霆の杜月笙、王天木等、共產黨から轉向して、反赤偵探戰線を領導する顧順章、鄧演達を逮捕して有名になつた谷建中等に至るまで網羅し、國民黨々部の占領、黨義の改革、腐化將領の監視、軍隊ファッショ化、反對黨彈壓等に、死力を傾注してゐる。就中人心を聳動したのは、特務班の活動に依つて捲き起された、白色テロルの恐怖であつて、前湖南督軍張敬堯、中央研究院總幹事で、宋慶齡の祕書であつた楊杏佛の暗殺、天津「振報」社長白逾桓の暗殺未遂、左翼女文士丁玲女士の失踪等はその顯著な事例である。

新生活運動促進會は、本年一月以來、蔣が南昌で提唱し出した新生活運動の促進機關で、支那固有の道德である「禮義廉耻」を

衣食住行に實踐することを主眼としてゐるのであるが、その底意は民心の統一に在ること勿論で、軍閥・帝國主義打倒、不平等條約撤廢等のスローガンが、魅力を失つた間隙に乘じ、新スローガンを提出して、獨裁制樹立に都合のいい素地なり、雰圍氣なりを造成しようとするに外ならない。文化建設協會は、新生活運動の姉妹運動たる、中國固有文化復活運動　機關であるが、その底意は、「思想には、思想を以て。」で、反共産運動を基調とし、特に、共産派の假托する左翼文化團體、プロ文學團體、等を粉碎することを以て主たる工作とするものである。

獨裁制樹立に至る程序は、どうであらうか？

先づ第一に、獨裁に都合のいゝ憲法を制定することである。建國大綱に據つて、目下の支那は、いはゆる訓政時期に在るのであるが、その終りに近づくに從つて、憲政時期開始の準備のために、憲法草案を議訂しなければならない。これは、立法院のやる仕事であり、同院はすでにその業を卒へ、去る七月九日、草案（中華民國憲法草案初稿審查修正案）を公布した。全文十二章、百八十八條、細かに檢討の機會を得ないが、一わたり見たところでは、總統の權限が、相當强力なやうである。すなはち國家元首として、外に對して中華民國を代表し、全國の陸海空軍を統率し、宣戰、媾和、締約、戒嚴、大赦、特赦、減刑、復權等の權があり、一面又行政首領として、行政權を總攬する。ただ「國民大會」なるものがあり、總統、副總統以下を選擧・罷免し、立法の原則を創制し豫算・宣戰・媾和・條約等の案を複決する權を持つて居り、その閉會中（同大會は、二年に一回召集される。）は、國民大會委員會なるものがあつて、その職權を代行することになつてゐるやうであり、近頃傳へられてゐるやうに、總統の權力が、絶對に强いとは思へないが、しかしこれを現行制度に於ける國民政府主席に比すれば、同日の談でないことは認められる。立法院を示唆、領導して、かかる草案を議訂せしめたことは、ひと先づ蔣派の成功であらう。

右の憲法草案は、「國民大會」で決定・公布されるものである。世間では、來る十一月十二日頃を以つて開かれる、中國國民第五次全國代表大會（いはゆる五全大會）で、右草案を決定するやうにいつてゐるが、それは誤まりである。右五全大會では、蔣派の別の工作が現はれるだらう。國民黨總章の修正である。その中に、國民黨總理の地位は、國父孫文に對する敬意の現はれとして、永久に孫文のものとし、空位にしてあるのであるが、蔣派は、これを修正して、誰でも總理になれるやうにしようとするであらう。これが若し通れば、無血のファッショ革命が成功する。といふのは、國民黨總理に蔣介石が座るといふことは、彼が、次いで中華國民總統となることの豫約であるからである。

これが通らなければ、彼は、第二のコースを採るであらう。國民黨を蹴飛ばして、藍衣社を明るみに出し、一氣に支那ファッシステイを樹立するであらう。當然、「無血革命」であり得ない。

獨裁制樹立に關する蔣の意圖・工具・程序を述べただけで、枚數が盡き、工作にまで及ぶことの出來なかつたのは遺憾であるが、あまり尻切れトンボとなるので、分析を先きにし、結論だけを述べると、蔣は今、第一コースを採つてゐるのである。さうして、西南に對する工作、胡漢民抱込みの努力に、全力を傾倒してゐるのである。それが、成功するかどうか？　分らないが、今の私の漠然たる感じから斷ずれば、先づ成功しないと思ふ。それでは、ただちに第二コースに移るか？　それも、必然とは斷じ得ない。そこで來るべき五全大會には、總章修正案も出ず、有耶無耶に空過し、一切萬事が明年に持ち越されるであらうといふ、第三コースが想定される。三つのコースの比率は、二・三・五、或は三・三・四であらう。私は、今後なほ情報をフオロウして、この次ぎの機會には、一層正確に近い比率を報告したいと希望するが、――差當りは、二・三・五或は三・三・四である。（『中央公論』一九三四・九）

第五節　赤區の潰滅と紅軍の西漸

十一月七日、すなはち十月革命記念日は、ソヴエート支那でも、例年盛大に祝賀される例である。ソヴエート中央臨時政府が、瑞金に樹立されたのが、一九三一年のこの日であつたことも、まだ世人の記憶に存してゐることであらう。それから三年後の、一九三四年十一月七日吉例に依つて、革命記念祝賀會が、早朝六時から瑞金で開かれた。參會者一千餘名。中央執行委員長主席毛澤

東は、影を見せず、副主席の項英と革命軍事委員會主席の朱德とが、當日の立物。演壇に立つて祝賀演說を述べた項、朱兩人の顏には、何となく落ちつかぬ表情があり、二時間足らずで、あはただしく會は終り、午前十時から、項副主席に對する觀兵式が、頰骨のツン出た、顏面蒼白の將兵に依つて行はれたが――その日の午後には、中央軍の飛行機が、無氣味な姿を赤都の上に現はして爆擊を開始した。明くれば八日・兵工廠・軍官學校等は、紅軍のために燒却され、九日夜には、紅軍は全部撤退してゐた。その翌日、記念すべき十一月十日、東路軍の第十師（師長李默庵）は、長驅して瑞金に入城し、友軍第三十六師（師長宋希濂）は、瑞金南方の蠟米街に進出した。ソヴエート支那の首都として世界的に名を知られた瑞金も、かくして中央軍の手に克復せられたのである。

經營幾年の中央ソヴエート區は、かくて潰滅し、そこに盤據してゐた紅軍は、湖南南部を經て西漸し、新地盤を四川に求むべく空前の遊擊戰を展開してゐる。一九三四年十一月末までの情報を綜合し、その姿を描いて見る。

江西目標の第五次圍剿が開始せられたのは、一九三三年の春である。蔣介石は、前四回の討伐の經驗に依り、（一）經濟封鎖、（二）公路、（三）碉堡の三政策を採用し、「穩打」主義に依つて、ヂリヂリ押しに軍を進めた。急進して足許を堅めず紅軍に奪回されるよりは、牛の歩みの遲くとも、得たところを失はないといふ點を主眼とし、一九三三年末までに、僅か五六縣の恢復を以て、滿足したのであつた。この方策は、たしかに成功した。それまでの經驗に依れば・重要地點は、取つたり取られたり、五六回も繰返すのが例であつたが、「穩打」主義を採るやうになつてからは、一度恢復した重要地點を、紅軍に奪回されるやうなことは、目立つて少くなつた。換言すれば・紅軍の反擾力が、ズッと弱くなつたのである。

かうした趨勢は、一九三四年に入つて、ますます甚だしくなつた。さうして四月下旬になると、中央ソヴエート區の北の門戸である廣昌と、南の門戸である筠門嶺とが、ほとんど同時に討伐軍の手に歸した。就中廣昌の陷落は、紅軍の最苦痛とするところであり、その精神的打擊は並大低のものではなかつた。必然、動搖を生じ、中央ソヴエート區を拋棄して、大擧西漸し・四川に、徐向前と合すべしといふ議論が、毛澤東等の必死の反對にも拘はらず・徐々に大勢を支配するに至つた。この說は、先般討伐軍側に投降した孔荷寵が、眞先きに主張し・第九軍團總指揮の羅煥輝等も・これに贊同してゐたといふ。

だが毛澤東等は、中樞の威力と壓力とを以て、西漸說を制抑し、中央區死守の我を通したのである。――我を通し　結果が、どうであつたか？　後に說き進めることとし、叙述の便宜上、ここで、一九三四年六月に於ける各ソヴエート區の狀態を示す。

（A）江西中央區。赤都瑞金を中心に、江西五縣（石城、寧都、興國、雩都、會昌）、福建四縣（汀州、清流、歸化、寧化）、合縣十縣に縮まつた。

（B）江西東北區。首都橫峰を討伐軍に奪はれ、全ソヴエート區潰滅、方志敏軍はルムベン軍となつて、一部は江西九江附近の彭澤、都昌方面に、一部は浙江福建省境方面に遊擊してゐた。

（C）江西・湖北・湖南省境區。西路の何鍵軍に依つて、根據地たる小源を奪はれ、猛將高詠生（第十六師長）就縛銃殺、一部は瑞昌附近に遊擊、一部は蕭克これに將として、湖南南部への侵入行動を起さうとしてゐた。

（D）江西・湖南省境區。內訌の結果ほとんど自滅し去つた。

（E）湖南・湖北西部省境區。賀龍軍は・舊根據地のほとんど全部を失ひ、貴州の后坪、沿河、婺川方面に分散した。

（F）四川・陝西省境區。徐向前の努力に依り、一九三三年末に於いて、十三縣以上に亘る大ソヴエート區を形成してゐたが、四川各路の討伐軍勢ひを盛り返し、僅かに萬源縣の一隅に追ひ詰められた。

（G）湖北・河南・安徽省境區。湖北、河南の四五縣。

中央區死守の決心をつけた紅軍は、福建汀州に全力を集中し、總師朱德出馬、精鋭三萬を集め「性別を問はず、十五歲以上の人民全部の總動員」を號召した。この方面に向ふ討伐軍は、龍巖、連城方面から蔣鼎文・延平方面から衞立煌、それに一部の廣東軍の參加があるものと推測せられたので、右三軍の迅速な集中を妨げ、且つ經濟封鎖によつて・缺乏を訴へつつあつた食糧を補充す

るため、北の衞立煌、南の蔣鼎文の間隙を縫うて、牽制作戰部隊として、林彪、羅炳輝兩軍を進出せしめた。これが八月上旬に於ける、紅軍福建進出の眞相である。

幸ひにして福建省側の軍事措置よろしきを得て、福州西方の白沙、水口方面の紅軍を擊破し、福州の陷落を見るには至らなかつたが、紅軍は轉じて福州北方に向ひ、八月十五日羅源縣城を占領し、江西東北ソヴエート區の殘黨、方志敏軍と合體し、福建・浙江、省境一帶を荒らし、同月末、浙江省南部の龍泉、遂山、開化、遂安方面に分散した。(方志敏が、この一股のうちに入つてゐるかどうか、確報に接しないが、假りに入つてゐるものとし、この一股の使命は、「化整爲零」を實行し、東北ソヴエート區再建に努むるに在るものと推定される。續報なし)紅軍の一部は、福建省內の尤溪、大田、永安地方に殘留してゐたが、漸次討伐軍に壓迫せられ、歸化淸流に追ひ詰められ、十月下旬、汀州の東南數里の地點に在る河田が、東路軍の手に歸した。――紅軍の福建進出は、かうして失敗に歸した。

一應、中央區死守の勢を示しつつも、紅軍首腦部は、後圖を策することを忘れず、贛鄂湘區の蕭克をして、湖南入りを決行せしめた(同區には、徐琛團軍――紅第三師――約三千を殘留せしめた。後述)。八月中旬、すなはち福建侵入の紅軍が、福州攻略に失敗した頃、蕭克は、兵一萬銃四千を以て行動を起し、遂川を經て、湖南省境に沿うて南下し、湖南南部の桂東・汝城を過ぎて西進し、資興・桂陽、新田、寧遠・嘉禾・藍山、零陵、臨武・東安、更に一時廣西に侵入したが、跳ね出され、九月下旬、貴州軍を擊破して、天柱・玉屏、石阡、餘慶(以上貴州)を占領し、沿河(貴州)から南下した賀龍軍と、銅仁、印江(以上貴州)に於いて合體した。

かかる間に、中央區の形勢は、ますます危急を告げて來た。北路方面では、十月六日石城陷落、同十四日興國、二十六日寧都これにつぎ、東路方面に於いては、前述せる河田の陷落は、汀州の運命を決し、十一月に入るや、一日、汀州東路軍の手に歸した。これより先、興國陷落するや、流石の紅軍首腦部も、中央區抛棄、紅軍の大擧西漸を、最後的に決心したものの如く、十月二十二日紅軍の一隊は筠門嶺を衝き、二十三日には、優勢部隊を以て安遠、信豐を占領し、一時は廣東省境を突破するかと思はれたので從來剿匪に比較的冷淡であつた南路軍(廖軍團)も、漸く本氣となり、南雄(廣東)大庾・南康、信豐の線に兵力を集中して、これを防いだ甲斐あつて、安遠、信豐を恢復し、紅軍を南康、新城の間から、湖南南部に追ひ遂ることが出來た。

今や中央區を形成するもの、歸化(福建)瑞金、零都、會昌(以上江西)の四縣に過ぎず、しかも紅軍すでに西漸を決心し、固守の意がないので、東路軍は無人の野を行くが如く西進し、十一月十日李默庵師は、勇躍して瑞金に入城した。

瑞金の陷落は、第五次圍剿のクライマックスであると同時に、赤白對抗史上の一大轉機である。果然、その影響は各方面に現はれ、廣東、湖南、廣西、四川の各省は、一陣又一陣長蛇の如き紅軍の西進に惱まされ、奔命に勞れてゐるが、久しく沈默を守りつつあつた鄂豫皖區の吳煥先軍、亦江西友軍と相應じて西漸を開始し、これより湖北、河南の二省亦震動しようとしてゐる。かくて孔荷寵が眞先きに提唱し、中頃、蕭克が勇敢に實行し、羅炳輝が最後に力說した大擧西漸說は終に毛澤東等の中央區固守說を覆へし、空前の大遊擊戰がここに展開された。

瑞金陷落後、紅軍の手に殘留してゐた零都、會昌(以上江西)、歸化(福建)は、先後中央の手に歸した。すなはち瑞金を退出して、一時零都、會昌に集結した紅七、八、九軍團約三萬は、漸次遂川(江西)に轉じたので、零都は第四十九師に依つて十一月十九日奪回された。これで中會昌は第三師に依つて同二十四日奪回。又少數の紅軍が殘つてゐた歸化も第五十二師に依つて、同十九日頃奪回された。これで中央區全部の肅淸を見、恢復地域の各縣には、縣長が續々赴任し、善後措置に當つてゐるが、それだけでは勿論不足であるので、江西全省を七區の綏靖區に分ち、各國に綏靖主任を置くことになつた。特に贛州、上猶、崇義、南康、大庾、信豐、虔南・龍南・定南、安遠各縣を大綏靖區とし、南路軍第一縱隊司令余漢謀を、その綏靖主任に任じたことは、對西南關係上注目の價値がある。余は南路軍剿匪の第一人者であり、靡翠陳濟棠に匹敵すと稱せられる人物で、今斯人を擧げて綏靖主任とし、事實上江西南部の重要地域を、その地盤に歸せしむることは、陳濟棠牽制の妙策であり、しかも表面上は、陳に對する蔣介石の好意の表現とも觀られ、一石二鳥の效果を擧げるであらう。

第五節　赤區の潰滅と紅軍の西漸

紅軍中の殿軍として、遂川に集結した七、八、九軍團（羅炳輝第九軍團總指揮たり。）約三萬は、十一月十七八日頃同地を引拂ひ、南下して廣東省境に向ひ、南雄、仁化（以上廣東）方面に於いて、廣東軍と交戰中との情報があつた。右は二十六日頃の情報で、續報に接しないが、これに依つて、大體殿軍の所在を認定するに足る。

九月下旬、合流に成功した賀龍、蕭克兩軍（約二千）は、西漸紅軍の先頭部隊として、四川、湖南、湖北、貴州省境に跳梁しつつある。その勢力の及ぶところは銅仁（貴州）秀山、酉陽（以上四川）、咸豐、來鳳（以上湖北）、龍山、永綏、永順、鳳凰、陽麻、辰州（以上湖南）の十一縣で、相當の遊擊區を形成してゐる。地理學者の說に據れば、銅仁がその中心たるべき險要の地であると。

前述に依つて、先頭部隊と殿軍の所在を發見し得た。この頭尾の間に在つて、或は廣西に、或は貴州に、その爪を打ち込み、ほしいままなる爬行をつづけてゐるのが、紅軍主力部隊なる紅一三五軍團（毛澤東、朱德、林彪、彭德懷、董振堂）である。その兵力は五萬と見るが妥當である。これに對する討伐軍の配置は、十一月十二日任命、十四日衡州に赴いて就職した追剿總司令何鍵の下に、劉建緒、薛岳、周渾元、李雲杰、李韞珩を第一――五路追剿司令に任命し（十一月二十四日）、湖南軍第十五、十六、十九、六十二、六十三各師、中央軍、北路軍、第四十軍（周渾元部四ヶ師）同第六十軍（薛岳部四ヶ師）同計十三ヶ師を永興、薛州、桂陽、新田、零陵（以上湖南）の線に配置してゐる。一說に據れば、東北軍何柱國軍も、新田方面に出てゐるといふ。廣東軍の配置は、詳細な情報がなく、明確にその陣線を指摘し得ないが、李漢魂師が嘉禾（湖南）に進駐してゐることはたしかである。廣西軍は十ヶ團を以て桂林附近を、五ヶ團を以て灌陽、興安、全州を守備し、紅軍の侵入を跳ね返しつつある。

紅軍主力の所在に關しては、情報區々、しかも統一なく、これが判定に苦しむが、大體宜章、臨武、藍山、道縣、江華、永明（以上湖南）に在るもののごとく、一部は臨武から南下し、連山（廣東）に出で、西進して富川（廣東）に入つたといふ。（十一月十八日頃）。湖南に於ける唯一の居殘り部隊である徐彥剛軍（紅第三師）約三千は、贛鄂湘區再建の任務を帶びてゐるものと想はれるが、或は友軍に應じて西進の意あるものか、十月中旬以來武長鐵路沿線を擾亂し、次いで岳陽、平江、瀏陽（以上湖南）を襲擊したが、湖南軍に擊退せられた。

鄂豫皖區に負嵎する吳煥先軍（紅第二五、二八兩軍）四千は江西友軍の西進と相應じ、且又、この方面に於ける新剿匪軍（上官雲相を總指揮とする第四五、五四、六五各師）の討伐開始を見越し、その一部約二千は、十一月十四日頃から行動を起し、商城、光山、信陽（以上河南）を經て十七日夜明港（河南）附近に於いて平漢線を横斷して西進したが、第四七師（黃杰駐屯）、第五四師（薛岳駐屯）の各一旅に追剿せられ、十九日桐柏（河南）に入り、又第三九師（潢陽駐屯）に追はれ、一時隨縣（湖北）に轉じたが、更に北上桐柏に向つたといふ。この部隊は、一九三二年に於ける徐向前軍四川移動のコースを取り陝西を經て、四川に入り徐向前軍に合する意圖らしい。

鄂豫皖區には、二千の紅軍殘留し、六安（安徽）附近にも、二千を殘留せしめてゐるといふ。

西漸紅軍の目指す四川はどうなつてゐるか？　一時萬源縣に追ひ詰められた徐向前軍は、四川將領劉の內紛及び剿匪總司令劉湘の辭職騷ぎを利して頹勢挽回に努め、通江、巴中、儀隴を占領し、十月中旬終に要害宣漢に占據した。死灰復燃の形勢である。

あまりに多岐に亘り過ぎた感があるので、一應淸算する。（一）方志敏軍は浙江南部に分散して、東北區再建に努力してゐる。（二）徐彥剛軍は、贛鄂湘區（江西西北部）再建を志してゐる。（三）西漸紅軍の殿軍（七、八、九軍團）は、廣東北境に在る。（四）同主力部隊は湖南南部に在る。（五）同先頭部隊は、湖北、湖南、四川、貴州省境十一縣に在る。（六）鄂豫皖區に一部殘留し、一部西漸して河南に入つた。（七）四川五縣が、唯一のソヴエート區として殘つてゐる。

西漸紅軍に對しては、關係各省の剿匪態度が眞劍でない。廣東軍は、紅軍が省內に侵入しない交換條件として、若干の物資を供給したやうな噂があり、廣西軍は、省內に侵入した紅軍を省外に跳ね出すくらゐの努力しかせず、湖南の何鍵は、一日も早く紅軍が自己の勢圈を通過せんことを希望し、紅軍「獻送」の態度を執つてゐる。故に西漸紅軍は、大なる困難なくして西進し、先頭部隊たる賀、蕭軍に追ひつき、貴州、湖南、四川湊區ソヴエートの形成に成功し、喘息やや定まる曉には、宿望たる四川入りを決行するかも知れない。――かかる情勢を必至と觀、蔣介石は、着々四川剿匪計畫を樹立しつつある。紅軍を四川に一纏めにし、袋の鼠

とし、一網に打盡しようといふのだ。計畫の大要は、(一)兵力二十萬。(二)經費六千萬元。(三)重慶に劉湘を副司令として置き、陝西南部から楊虎城軍及び第六一師（舊十九路軍）を侵入させる。(四)總司令蔣介石（もし出馬しないときは何應欽又は鋼時）。

だが、紅軍が四川入りに成功するかどうか？　これは疑問である。私は、湘鄂川邊區ソヴエートの樹立が、次の段階だと見る。かうなつた場合、蔣はどう出る？　湖南の中央軍を驅使し、その他あらゆる手段を講じて、紅軍主力を廣西に追ひ込むだらう。對西南關係の角度から見ると、この說必ずしも無稽であるまい。（『東亞』一九三五・一）

第六節　支那共產軍の歷史と現勢

誰かが、「總豫備隊だ。」と、いつたかどうかは、保證の限りでないが、變局に際して、正にその役目を勤めるかも知れない支那共產軍。これあるがために、蔣介石の一身に軍權を集中せしめ、大兵を必要とさせ、財政にも大きな影響を與へてゐる支那共產軍。一九三四年十一月十日の瑞金陷落に因つて、一應江西の肅淸を見たのは、結構だが、共產軍そのものは案外な實力を保存しつつ一陣又一陣長蛇のごとき西漸をつづけてゐる。尻尾はまだ江西南部に在るが（いはゆる殘匪の推算三萬五千）胸部はすでに川南（長江以南の四川）に達し、川北には、前から徐向前が鎌首を持ちあげてゐる。この外、安徽の南部には方志敏、劉仇西軍が、湘鄂西區に賀龍・蕭克軍が遊擊し、鄂豫皖區を退出した吳煥先、徐海東軍はすでに陝南の柞水、鎭安に達し、今一息で徐向前に合しようとしてゐるし、陝西の北端府谷には、孫殿英軍崩れの新編紅第三十五軍（恐らく聯絡符がそのオルガだらう）が出來、陝甘區の劉子丹（紅第二十六軍）と聯絡しはじめたといふ。「張獻忠、李自成もどきの流寇だ。」と、簡單に片附ければそれまでだが、一面、水滸傳に出て來る張大尉が、ところも同じ江西は龍虎山の伏魔殿を開いて、百八道の金光を走らせたのだとも考へられぬこともない。「剿匪を言ひ立てて、擁兵自重する「養匪總司令」が匪と妥協して、「縱匪總司令」になつた。」と、これは胡漢民派の「三民主義月刊」の放言だが、楯の半面を得てゐる。紅軍が、實力を出してゐない點、それから、西南では、蔣が紅軍に武器を與へて、江西を退出させたのだといふ。それらを考へ合せると、紅軍の將來は、その流寇的外觀に拘はらず、一概に駄目だとは斷ぜられぬ。依然注目に値ひする存在でなければならぬ。

紅軍の歷史？——先づ思ひ起されるのは、一九二六年の春、蔣介石が國民革命軍を率ゐて、北伐に出掛けやうとした時、陳獨秀及びボロデインが、黨軍（共產黨軍）の組織が出來てゐないことを秘密の理由として、北伐に反對したことである。共產軍を持たなければならぬといふこと、それをつくる志はこの時もうあつたのである。續いて想起されるのは、翌一九二七年の六月、國共分離の直前にコミンテルンからロイ（印度共產黨員で當時コミンテルン特派員として支那にゐた）に宛て、支那の勞働者及び農民を武裝せよといふ密電が着いた一件である。當時の情勢では、農民の武裝は、急速に出來る筋合ひではなかつた。力もなかつた。だから「出來ても、出來なくても、「承知した。」と返電して置けばいいではないか。」と、共產黨の領袖の一人が放言した。——こんな狀態ではあつたが、コミッサル制、赤化細胞制の御蔭で、國民革命軍の中には、相當赤くなつてゐた部隊があり、或點まで煽動が效いた。同年七月三十一日の南昌奪取に依つて、一躍名を知られた賀龍・葉挺兩軍は、この赤がかつた軍隊であつた（南昌暴動には、朱德も參加してゐるが、直接指揮する軍隊を持つてゐなかつたやうだ。）南昌暴動失敗後、賀・葉軍は江西、福建、廣東に南征し朱德も一軍を率ゐて、先づ江西の瑞金に遁れ、それから廣東の潮州、汕頭に遊擊し、最彼に韶關に落ち延びたが敗殘の餘、ほとんど軍を成さなかつた。一方賀、葉軍も潮州に敗れ、海・陸豐に入つたりしたが、これ亦失敗し賀龍は、香港に遁れて再擧を圖る。葉挺も、同年十二月十一日の廣州暴動で工農紅軍總司令に擧げられたが、その後どこに行つたか？　まるで分らない。一說に據ると彼は譚平山派ださうで、廣州暴動後は隱れてしまつたのだといふ。

賀・葉・朱三軍は、赤がかつた軍隊といふだけで、今日のいはゆる紅軍の元祖だとは、普通考へられてゐない。今日の紅軍の濫觴は毛澤東の組織した農民バルチザン隊である。八・七會議（一九二七年八月七日の九江會議、コミンテルン代表ロミナーゼ指導の下に新方針を決し、黨幹部となつた會議）から、鄕里湖南へ歸つた毛澤東は、秋の收穫を目指して所在に農民暴動を起した。いはゆる四省秋收暴動。勿論

失敗に結果したが、毛はこの經驗に依つて、一つの偉大な教訓を得た。

（支那の革命は、畢竟農民革命であり、それには、農民を基礎とする軍隊が必要だといふこと。）

で、秋收暴動失敗後、湘潭（毛の産れ故郷だ。）で農民軍三千を組織し、株州に侵入した。と、そこへ、張發奎の部下で、共産黨員である林吟金が、新兵を募集にやつて來た。否應なしに一緒になり、醴陵から江西へ入つた、ここで盧德銘（これも張發奎部下の警衛團長）の指揮する一軍に遭ひ、それをも合せ、相當有力な一團となつて萍鄕を攻め落し、蓮花をも取つた。そこへ現はれたのが朱德軍である。どうして彼が出て來たか？

留關まで遁れ、敗殘の餘、ほとんど軍を成さなくなつたことは、前述した。それを拾ひ上げたのが第十六軍長の范石生。朱德と同じ雲南人、それにその當時は、今日のやうに、軍隊の系統がハッキリ分つてゐるではなし何の氣なしに部下に拾ひあげ、團長にし、樂昌縣下の酃石に駐屯させた。朱德はここで暫らく休息し、機會をねらつてゐるうち、廣州暴動が起り、赤い軍隊だといふので處分されさうになつたので、先發制人、兵變を起して湖南に入り、宜章縣を占領した。それが一九二八年のはじめ。もう一度酃石に引返し、掠奪をほしいままにした後、再び湖南に入つて汝城を占領。この時彼の實力はもう三團以上になつてゐたので、軍を組織し、「中國工農紅軍第四軍」と稱し、桂東・酃縣を取り、江西に轉じ遂川、寧岡等の十餘縣を遊擊し、蓮花まで來て、毛澤東の農民バルチザン隊を發見したのである。

朱・毛兩虎は合した。朱が軍長、毛が黨代表兼政治委員。時に一九二八年四月、今を距ること滿七年、これが今日紅軍の主力たる朱・毛軍である。

合體後永新を取つてソヴエートをつくり、間もなく湖南江西省境の大山である井崗山に據る。さうして一九二八年末まで篝つてゐたが、湖南軍の間斷なき攻擊に堪へ切れず、山を下つて遊擊戰に移つた。「朱・毛の井崗山下り」といつて、紅軍發達史上有名な出來事だ。軍は大庾嶺を望んで南下し、信豐、安遠、尋鄔に遊擊した。一九二九年一月、瑞金、寧都を經て吉安縣下の東固を取り

ここに江西全省ソヴエートを置いた。次いで廣昌・石城、汀州を、一九三〇年には吉安を陷れた。一九三一年に入つて朱・毛軍の勢ひ ますます增大し、張輝瓚軍の覆沒に依つて款項數十萬を得、孫連仲部下の季振同・趙博生・董振堂の寧都兵變に依つて萬餘の兵力を得た。しかし吉安・東固を政府軍に奪回せられたので、退いて瑞金に中國ソヴエート中央臨時政府を創立した（一九三一年十一月七日）。

一九二八年に遡る。朱・毛が井崗山に覇を稱するの報が傳はると、各地に風を望んでこれに應ずるものが出來た。一九二八年五月（朱・毛軍成立の翌月）湖南平江に駐屯してゐた第六軍（軍長彭湃）の團長彭德懷は、團政治部主任黃公略と談合して、突如兵變して工農紅軍第五軍を組織し、彭が軍長に、黃が黨代表、兼政治委員となつた。間もなく賀龍が湖南桑植で第二軍をこしらへた。前述した通り、南征失敗とともに香港に遁れた彼は、周恩來の紹介で入黨し、その勸めで鄕里に歸り、舊部下を收拾して建軍したのである。

右兩軍につづいて、許繼慎の第一軍、蔡申熙の第三軍、鄒繼勛の第六軍（一九二九年六月成立）李明瑞、張雲逸の第七軍（同年十二月）、黃公略の第八軍（第五軍から分れて一九三〇年三月成立）、李明光、古大存の第十一軍、鄧子恢の第十二軍方志敏の獨立第一團等が成立し、一九三〇年五月までに、十四軍七萬五千の紅軍が出來、その遊擊地域に、所在にソヴエートを簇生せしめたのである。

かかる紅軍實力の充實は、一九三〇年七月の長沙奪取を敢行せしめたが、これは十日天下で失敗した。しかし紅軍の實力は、これに因つて毫も損害を受けず、かへつて增大し、一九三一年初頭に於いては、左のごとく四ヶ軍團（三十數軍）二十萬の兵力となつた。

第一軍團。主席朱德。政治部主任毛澤東。軍長林彪、羅炳輝、陳毅。兵力三萬。

第二軍團。主席（兼軍長）賀龍。政治部主任段德昌（兼軍長）二萬五千。

第三軍團。主席彭德懷、政治部主任黃公略、軍長彭德懷、黃公略、項英。

第四軍團。主席鄭行爲、政治部主任許繼慎、軍長許繼慎、蔡申熙、陳賚平。

軍團を組織せざるもの十軍、軍長李明瑞、孔荷寵、李超、胡公晃、周建屏、張鼎丞、楊岳斌、羅桂波、張雲逸、李明光。

翌一九三二年初頭に於いて、左のごとく六方面軍三十萬と增大した。

第一方面軍　總司令朱德
第一軍團　總指揮林彪
第四軍　軍長林彪
第十五軍　軍長左權
第十二軍　軍長羅炳輝
第三軍團　總指揮彭德懷
第五軍　軍長彭德懷
第七軍　軍長李明瑞
第三軍　軍長徐彦剛
第五軍團　總指揮董振堂
第十三軍　軍長趙博生
第二方面軍　總司令賀龍
第二軍　軍長賀龍
第六軍　軍長段德昌
第四方面軍　總司令鄂豫皖勛
新第四軍　軍長鄂豫皖勛
第二十五軍　軍長徐向前
獨立行動部隊
第十軍　軍長方志敏
第十六軍　軍長孔荷寵

この時期が、紅軍及びソヴエートの極盛時代で、鄂豫皖勛・徐向前の鄂豫皖區、賀龍・段德昌の湘鄂西區・孔荷寵の鄂南區、この三大ソヴエート區が武漢を包圍し・江西には中央區（朱・毛）、湘鄂區（彭德懷、李明瑞）・東北區（方志敏）の三大ソヴエート區があり、その他の小ソヴエート區を合すれば、支那の約二省に匹敵する赤色區域を形成してゐたのである。

しかし一九三二年七月から十二月にかけての、蔣介石の第四次討伐は、豫想外の成功を以て終り、鄂豫皖、湘鄂西區潰滅し、鄂南區は江西に移り、一九三三年初頭に於いては、基本紅軍の推定兵力十萬といふ、あはれはかなき狀態となり、江西の四ソヴエート區がほぼ舊態を保つた外徐向前が川陝區・賀龍が湘鄂西區・吳煥先が鄂豫皖區の創建又は再建を企ててゐたに過ぎなかつた。かうした黨、區、軍の頽勢に乘じ・蔣介石は、江西ソヴエート區特に中央區を目標として、第五次討伐を開始したが、紅軍必死の奮鬪物凄く、北路の要路たる金谿のごときは、紅軍と討伐軍との間に、六回に亘る爭奪が行はれたほどであり、結局一九三三年の終りに於いては、中央區は二十五縣から十九縣に減少したが、川陝區は二縣から十三縣に擴大され、その他賀龍の湘鄂西區が擴大され吳煥先の鄂豫皖區再建、劉子丹の陝甘區創成などがあり、ともかく蔣の鋭鋒を持ちこたへて、一歩も退ぞかなつた。これがために、紅軍の實力は今更見直され、「討伐は到底不可能事だ。」といつたやうな、急ごしらへの悲觀論が方方で唱へられたものである。あだかもそれを裏書きするかのやうに、一九三四年に入ると、一月二十二日から二月七日まで、瑞金で第二回中國ソヴエート全國代表大會が開かれ世人は一般に、「今こそソヴエート支那の全盛期である。」と、誤認したのである。

當時の紅軍兵力及び指導者は、左のごとくであつた。

◇第一方面軍（總司令朱德。政委周恩來。政治主任王稼祥。副主任袁國平。參謀長葉劍英。）

○第一軍團（總指揮林彪。政委聶榮臻。政治主任羅恒榮。同副主任許卓然。參謀長左權。）兵力五千

▽第一師（師長李登魁。政委黃甦。參謀長畢占雲。第一團長周振國。第二同劉雄武。第三同張棹傑。）
▽第二師（師長陳光　政委胡亞林。政治主任劉亞樓。第四、五團長不詳。第六團長黃應宏。）
○第三軍團（總指揮彭德懷。政委楊尙昆。政治主任袁國平。參謀長鄧萍。）兵力六千
▽第四師（師長洪超。政委黃國誠。政治主任李井泉。第十團長不詳。第十一團長鄧國清。第十二團長謝嘗。）
▽第五師（師長李天佑。政委陳亞金。政治主任黃春波。參謀長王子雲。第十三團長王眞。第十四同黃晃。第十五同姚傑。）
▽第六師（師長曾德欽。政委徐策。政治主任歐陽欽。參謀長杜中美。第十六團長陳漢英。第十七同藍國清。第十八同鐘瓊。）
○第五軍團（總指揮董振堂。政委朱淑。政治主任劉伯堅。）兵力五千
▽第十三師（師長陳伯鈞。第三十七團長李清雲。第三十八同易隱。第三十九同梅林。）
△第十五師（師長趙立懷。政委蕭華。第四十三、四十四軍團長不詳。第四十四團長周松山。）
○第七軍團（總指揮萊創英。政委滕代遠。參謀長郭如岳。）兵力四千八百
△十九師（師長張某。政委呂振球。第五十五團長李國桂。第五十六不詳。第五十七團長鐘學高。）
▽第二十師（師長林伯渠。副師長夏光澤。政委黃璠開。第五十八、五十九、六十參謀長不詳。）
○第九軍團（總指揮羅炳輝。政委蔡某。政治主任黃其清。）兵力一千
△第三師（師長羅炳輝。第七團長劉振香。第八同張某。）

すなはち右各團軍の合計二萬一千八百に加ふるに、方志敏、蕭克その他獨立師、團、並に外廓軍隊を以てするときは、第一方面軍の兵力は、總計八萬六千に達する。更に

◇鄂豫皖區　吳煥先軍　八、〇〇〇
◇湘鄂西區　賀龍軍　五、〇〇〇
◇川陝區　徐向前軍　六〇、〇〇〇

を合算するときは、總計十五萬九千となる。約十六萬から二十萬ぐらゐといふのが、無理のないところであらう。

區、軍の首腦部は、「尙一戰するに足る。」と、想つてゐたに違ひない。一九三三年の一年間を頑張り通して、しかも兵力に於いて增加を見ゝゐるのであるから、さう考へるのも無理ではなかつた。しかし何ぞ知らん、一九三三年は、蔣の剿匪準備期間であつたのであつた。

（一）經濟封鎖。
（二）碉堡政策（望樓及び堡壘を構築し、一度恢復した地點が紅軍に依つて奪回されるのを防止する。）
（三）公路政策（恢復地區に自動車路をつくる。）
（四）飛行機利用。
（五）對匪宣傳。

等々の、いはゆる「政治七分、軍事三分」政策は、着々進行し、いよいよ最後の攻擊、と勇み立つた一九三三年の十一月、想ひもかけない福建革命が起つて、一時討匪戰線に異狀を呈したが、福建革命が腰くだけに終るとともに、蔣は威丈高になつて紅軍の北部を壓しはじめた。それが一九三四年のはじめで、四月に入ると、中央ソヴエート區の北の關門たる廣昌、南の關門たる筠門嶺が、ほとんど同時に討伐軍の手に入つた。就中廣昌の陷落は第五次討伐の關ヶ原で、これより各路の剿匪軍事目ざましく進展し、十一月十日赤都瑞金の陷落に因つて、紅軍は大擧西漸の餘儀なきに立ち至つたのである。

往年、八大ソヴエート區と稱せられた面影はどこにもなく、僅かに川陝ソヴエート區が、六七縣の範圍を比較的鞏固に保持してゐるだけで、その他は流寇のごとく、或は星雲のごとく、ゲリラ戰をつづけてゐる。その遊擊線を叙すれば、——

主力たる朱德、毛澤東、林彪、彭德懷、羅炳輝、童振氣各軍は、江西退出後、廣東北部、湖南南部廣西北部を遊擊して貴州に入り、この稿起草の頃貴州北部の赤水方面は達し、瀘州下流から四川に入らうとする姿勢を示してゐた。この兵力、三四萬と見る。

江西に殘存し、省內各地に分散せるもの、葉剣英、陳毅、徐彥剛の指揮に歸し、概算三萬五千。

一九三四年八月頃福州に進出し、それから北上して、遂に安徽南部に達した紅軍の一支は東南軍事委員會主席方志敏の率ゐるもので、劉仇西を軍事指揮者とし約四千と推算せられたが、一九三五年一月末、方、劉二人以下、浙江省玉山縣の懷玉山中で就縛。殘軍を誰が率ゐてゐるか未詳であるが、實力に餘程減じてゐると見なければならぬ。

一九三四年八月頃西漸を開始し、十月賀龍軍との合流に成功した蕭克軍は、今や湖南大庸・桑植一帶に在つて湘黔川ソヴエートを樹立し、賀龍・蕭克を軍事上の指揮者に、任弼時、夏曦が政治上の指揮者となつてゐる。兵力は五千くらゐ。

川陝區の徐向前軍は、前述の通り六七縣に占據し、兵力は少くも四萬はあらう。

鄂豫皖區の吳煥先、徐海東軍は、往年徐向前の遊擊コースをたどつて西漸し、一九三五年一月、終に陝西南部の柞水、鎭安に達した。兵力二千。

鄂豫皖區にも殘軍二千あり、商城、固始地方に集中してゐる。

陝西、甘肅境の紅第二十六軍（劉子丹）、陝西最北端の府谷地方の紅第三十五軍（孫殿才軍の崩れで、山西土匪が合したもの、軍中にオルグとして聯絡員がゐるものと推測せられてゐる）右兩軍の兵力は不明であるが、假に一千宛と計算する。

以上、九條の遊擊線を描きつつある紅軍の兵力、概算十三萬。それがどこに凝化するか？――大體に於いて四川に集中しつつあることは否めないが、それらの急速な實現は疑問である。或は當分、湖南四川境の賀、蕭軍、貴州北部の朱、毛主力軍、川北の徐向前軍、この三軍を以、萬縣、瀘州間を挾さんで聯擊するの態勢を取るのではあるまいか？

これが一九三五年二月に於ける見透しである。（『支那』一九三五・三）

第七節　西北赤化の現段階

支那の問題で、今第一の話題になつてゐるのは、日支關係の正常化といふことである。それは普通には、「支那の親日への轉向」と稱へられ、それが僞裝であるとか、附燒刃であるとか、イヤ、ほんものであるとか、八釜しく論ぜられてゐるが、――私にはせれば、轉向したのは、支那ばかりではない。日本の對支態度も變つたのである。曾つては、「支那は、統一ある國家ではない。それを國家といふのは、一つの擬制に過ぎない。」といふやうな表現が、外交文書にまで採錄せられたこともあるのである。それほどの日支關係を、ともかく今日の狀態にまで復常したについては、支那が轉向した分量が多いか？　日本のそれが少いか？　輕々には斷ぜられないのだ。が、假りに一歩を讓つて、世說の通りに矢張り支那が轉向したのだといふことにして置き、その轉向の原因を、色々の角度から檢べてみると、政治的にも、外交的にも、經濟的にも、將又社會的にも、充分納得出來るのである。轉向するだけの理由があつて、轉向したのである。詳しい說明をすることは、本稿の範圍外であり、且又今日となつては、すでに六舊十菊の感がするので、ここには繰返さないが、唯一つ、どうしてもいはずに措けないのは、――さうして、本稿の主題と關係のあるのは、――轉向の政治的理由である。

支那は、蔣介石一人の支那ではない。彼は國民政府の主席でもなく、軍事委員會の委員長に過ぎぬ。しかし、主席の林森は勿論首相格の行政院長汪兆銘でも、萬事蔣の決裁を仰がなければ、何も出來ぬといふのが、今日の支那の現實である。ムッソリイニの伊太利に於けるヒットラアの獨逸に於けるのと、やや趣きを異にするが、蔣の支那に於ける、その發言權は最も大である。その蔣介石が、今何を一等欲してゐるか？　曰く、支那の統一である。

統一を賣企する上に、何が最大の障碍であるか？　支那がこれまで採つて來た、抗日排滿の態度である。北支那に於いて、滿洲國と國境を接する以上、一たび滿洲國に對してヘンな態度を採ると、忽ち滿洲國の邊疆綏靖工作の發動を見、日滿議定書の儼然た

る存在に因つて、共同防衛の責を負ふ日本の乗出しとなるからである。〇〇〇〇の場合のことを、支那側でも筆にするものがあるが、ソンナ地歩に行かずとも、今日でも明日でも、ヘンな態度を滿洲國に對して採れば、與謝野鐵幹の詩ではないが、「萬馬あした に南下せば、八道、みすみす血とならむ。」である。ここのところを、蔣はよく合點してゐる。故に彼は、この三年來、いかにして轉向すべきかと、熱心にその機會をねらつてゐた。機會は來た。蔣介石コースの、亦一大障碍であつたところの、江西の共産軍を西方に驅逐し得た機會に於いて、彼は敢然として轉向したのである。彼の統一力量が增大し、多少の反對論があつても、それを壓倒し得る自信がついたところで、豁然態度を明かたしたのである。

統一を意企するが故に、彼は鮮やかに轉向した。だが、一派の懷疑論者はいふ。「轉向と見えるのは、カムフラーヂである。これに依つて日本の鋭鋒を避け、萬一、統一が出來たら、猛然假面を脱いで、反日に逆轉し、失地恢復に乗出すであらう。」

私は、これに對して、統一を保持するためには、彼はますます親日的に出なければならないのだと答へる。失地恢復などと、痴人夢を說くの類であつて、蔣のやうな實際家が、ソンナ馬鹿げたことを考へてゐる筈がない。況んや、統一が出來るかどうか？これが大なる疑問であるに於いてをや。民國史上に現はれた、他の誰よりも、彼が統一に最近づいてゐることは事實であるけれども、いよいよそこまで達するには、彼の殘生涯を以てして、果して可能であるかどうか？　それさへ判らぬのに、その後の失地恢復など、全然問題外である。萬一、豫想外早く統一が出來たとしても、前にもいつた通り、それを保持するためには、彼は依然反日的たり得ないのである。

かく、鮮やかに、對日態度を轉向して置いて、なほも蔣介石は、統一を目指して行く。その、最有效な手段が、共産軍の討伐である。そもそも、五回に亘る討伐を强行して、江西から共産軍を逐ひ出したことが、すでに西南派に對する工作の一部なのだが、——といふのは、地理上、蔣と西南派との間に介在して、緩衝的地位に立ち、一種の障碍物となつてゐるのが共産軍及びソヴエート區であり、西南派は、この障碍物の蔭に隱れて、勝手な行動を取つてゐたからである。共産軍を西方に驅逐することに依つて、障壁が取除かれ、西南派の氣焰が揚がらなくなつたことは、蔣の對西南策の第一歩の成功であるが、更に、西漸する共産軍を追擊することに依つて、第二歩の工作が完成されようとしてゐる。すなはち、共産軍が貴州に逃げ込むと、中央系の薛岳軍が、これを追うて同省内に侵入し、アトから蔣自身も出掛けたりした結果、西南系の省主席王家烈の失脚となり、薛岳が綏靖主任に、蔣の廣東時代からの腹心で、もと安徽省主席であつた吳忠信が省主席になり、マンマと貴州を手に入れてしまつたからである。同樣に、共産軍の雲南侵入は、これ亦、雲南の中央歸服に結果するのである。曾つては西南派の範圍は、廣東・廣西・福建、雲南、貴州の五省であつたのだが、一九三三年末の福建革命の結果　福建が先づ蔣に歸し、今度貴州、雲南が離れたため、西南派は、僅かに廣東・廣西の二省に縮められてしまつたのである。

そればかりではない。蔣の共産軍討伐は、民國になつて以來、ズット獨立の態度を採つて來た四川をして、蔣の勢力圏に歸せしめようとしてゐる。この地方に蟠踞してゐる共産軍は朱毛軍と相並んで、今や世界的に名を知られてゐる徐向前軍であるが、四川諸軍閥の飽くなき内訌に乘じ、盛んなときは十餘縣に及ぶ大ソヴエート區を形成し、すでに二年餘に亙つて跳梁してゐるのである。江西に於ける共産軍の勢盛んな時代には、流石の蔣も、自から出馬するだけの餘裕がなかつたが、江西ソヴエート區潰滅とともに彼は電光石火のごとくこの方面に乘出し、主席劉湘（彼の勢力は、四川百二十餘縣中、約七十縣に及んでゐる）を尻押しして、（一）各土産軍に强壓的に防區行政權の返還を命じ、（二）全四川の縣長及び稅局長を更迭して、稅制を一律とし、任意の徵稅を禁止し、（三）各軍の軍費を査定し、經理考察主任の嚴重な監督下に置く。といふ風に、積極的に懲服工作を進めてゐる。四月初旬、徐向前軍が嘉陵江を渡つて西するや、敗戰の責を算へて田頌堯に詰腹切らせたなどは、その最顯著な現はれである。

かくのごとく、共産軍の討伐は、赤化絶滅といふ、本來の目的以外、蔣の支那統一の工作ともなるし、又、共産軍の現在蟠踞してゐる地方が支那の邊疆地方であるといふ點からすれば、蔣が、邊疆問題の解決に、一歩踏み出したといふことにもなるのであつて、共産軍の現在の動きは、赤化、統一、邊疆の三問題に、至大の關涉を持つものである。

他人の國の、匪賊の騷動といふなかれ。叙上の意味に於いて、それは充分に、「我等の問題」たり得るのである。

以上を「導言」として、本題に入り、共產軍の西遷經過、及び現在の狀勢、總じて西北赤化の現段階を叙述しよう。

先づ主力軍の行動である。政治上の最高首領朱德の名を冠して朱・毛軍と呼ばれる軍であつて、その下に林彪、彭德懷、董振堂の各軍があり、ロシア人顧問リトロフ少將が、總參謀長格として、一切の軍事を指導してゐる。リトロフは支那名を李德といひ、恐るべき軍事上の天才でよく討伐軍の行動と計畫とを察知し、巧みにその鋭鋒を避け、約五萬の兵力を保存して、貴州北部にたどりついたのである。江西中央ソヴエート區を拋棄したのが、一九三四年の十月二十日頃、それから廣東省境に殺到し、西轉して湖南南部に入り、廣西北部を横斷し、貴州に入り、貴陽東北を北上して、烏江を渡り、貴州北部の大邑遵義を經て、西北隅の赤水、土城一帶に落附いたのが、本年一月中旬であるから、江西出發以來約三ヶ月にして、四川侵入の地歩が出來たわけである。一般にはこの邊から渡江して四川に入るのではないかと思はれてゐたが、そのうちに討伐軍が追ひつき、一月二十九日の土城潰戰で、朱・毛軍は大敗を吃し、二月二日叙永に逃げ、同十二日頃雲南省の威信、牛街、鎭雄一帶に入つた。ここから筠運、鹽津に出て、渡江し、峨眉山南の峩馬雷邊區ソヴエート（後述）に入ると報ぜられたが、さはなくて、十七日頃鎭雄地方を拋棄し、東進し貴州に入り二十七日頃桐梓、遵義地方を占領した、これがこの地方第二回目の占領である。遵義は貴州では省城、貴陽に次ぐ重要地點で、ここを中心としてソヴエート區を開拓することが出來れば、共產軍に取つて好都合であるので、餘程未練があつたらしく、三月下旬まで、約一ヶ月の間、討伐軍との間に、猛烈な爭奪戰が繰り返された。

形勢重大の報に接して、蔣介石は重慶から飛行機で貴陽に乘り込んだ。三月二十四日である。湖北の一市に在る黨・軍の指導者からの無電で、このことを知つた朱・毛軍は、遵義から一氣に南下し、貴陽東北の息烽に朱・毛軍が、西北の修文に彭德懷軍が、合計約五萬の大軍を以て、貴陽城を指顧の間に望み、微塵になれと攻め寄せた。これに對し蔣介石は、薛岳の指揮する中央軍に、王家烈の貴州軍を合せ、計七萬五千の兵力を以て應戰した。戰は四月三日から五日まで繼續したが、兵力の相違、三十臺の飛行機の威力に因つて、勝利は討伐軍に歸し、共產軍は貴陽東方の貴定、龍里地方に退却した。總司令朱德が討死したと傳へられたのは龍里への退却途中であつた。しかし續報なく、デマに過ぎなかつたらしい。

四月九日頃、貴陽は再び共產軍の攻擊を受けたが、大したことはなく、その後暫らく消息を絶つたが、意外にもその間に、貴州南部を西行し、四月十四日には、普安を中心とする八縣を占領し、四月二十四五日頃、總司令朱德の名を以て雲南入り宣言を發して平彝、羅平地方に侵入し、二十七八日頃、進んで曲靖、陸良、師宗一帶に占據した。ここまで來れば、省城昆明は今一歩である。ので、雲南省主席龍雲は、必死となつて防衛に努め、馬龍、宜良、路南の線を死守した結果、辛うじて喰ひ止め、共產軍は昆明北方の尋甸宣威一帶に退却した。

以上の經過を見ると、二月から四月までの三ヶ月間、貴川、雲南兩省城の訪問（？）をやつてゐたやうで、無軌道、沒目的の行動に見えるが、これは恐らく蔣介石が、なるべくかういふ風に、動くやうに討伐軍を配置したものであらう。さうして共產軍のアトを追つかけ、貴州、雲南の土着軍を犧牲にし、中央軍の手で收拾し、二省軍・政の實權を手中に收めようとしたのであらう。（前述したやうに、貴州主席吳忠信、雲南主席龍雲の任命を見、蔣自身も當分貴陽に滯在し、仕上げをやる積りでゐるのである。）

蔣の對西南工作の御手傳ひをするのが、共產軍の能事ではなく、彼等の目的は、別にあるべき筈である。果然最近の情報は、朱・毛軍の北上、會澤地方を經て、四川に入るであらうと傳へてゐる。この報道が事實とすれば金沙江を渡り、峩馬雷邊區に入る意圖であらう。峩馬雷邊區ソヴエートとは、峨眉山の南の峩邊、馬邊、雷波三縣に亙るソヴエート區で、共產軍領袖中、足智多謀の名ある劉伯承が、コミンテルンの命を承け、三年前から秘密裡に建設しつつあつた、一種の捨石的ソヴエートであつて、成都をねらふ足溜りに持つて來いの地である。朱・毛軍がここを目指すのは、當然の仕儀である。尤も一報に據れば、朱・毛軍はまだ雲南を斷念しないとのことであるが、私は四川入りの方に可能性があると觀るのである。

第七節　西北赤化の現段階

四川の東北部には、一九三三年來　張國燾、陳昌浩を政治首領とし、徐向前、王樹林、何長等を軍事領袖とする共産軍が蟠踞し川陝ソヴエート區を組織してゐる。その兵力は、時に八萬、六萬と稱し、今日では約五萬。その有するソヴエート縣數は、一時十三四縣に擴がり、浙江省の二倍くらゐに達したこともあり、その後僅かに二三縣に縮まつたこともあるが大體六七萬と見ていい。本年の初め頃は、氣勢割合ひに振はず、陝西入りを企て、寧羌、沔縣から陽平關に出で、甘肅の白馬關にまで侵入したが、陝西軍に追ひ返され、廣元、昭化、蒼溪、通江、南江地方の習地盤に占據した。間もなく新指令を受取つて、猛然として行動を起し、田頌堯軍を擊破して嘉陵江を渡つて西進し、四月二日劍閣、三日西充、鹽亭、六日梓潼と、破竹の勢を以て進み、二十日江油、二十一日安縣、二十二日茂縣を占領した。茂縣は成都の西北に在つて、懋功、理番、松潘と連ねて、共産軍のソヴエート建設豫定地であるといはれてゐる。出師以來一ヶ月足らずで、すでにこの豫定區の一端に到達したのである。

途端に、峩馬雷燊區ソヴエートに、朱・毛軍が入つたらどうであらう？　北方の徐向前軍が五萬、朱・毛軍が內輪に見て三萬、計八萬の共産軍が、成都を南北から挾擊する形勢となるのである。かう書いて來た時、廣東七日發電に據れば、雅安（成都西南、峩馬雷燊區の北）にクスボつてゐる劉文輝（前四川省主席で、內戰で劉湘に敗れた男）は、朱・毛及び徐向前と通じて、反中央、反劉湘の態度を明かにしたと。この報道は、眞僞勿論不明であるが、あり得ないことではない。由來四川の軍閥なるものは、民國以來曾つて中央に屈服したことなく、防地と稱して地盤を劃し、勝手に稅を取立て、したい放題のことをやつてゐる酋長であり、自分の事以外何も顧みぬ奴等であるから、共産軍と通ずるくらゐのことは、全くやり兼ねないのである。「四川は共産軍の溫床だ。」と、いはれるのは、かうした軍閥が諸方に割據してゐるからなのであつて、軍の對四川軍閥が一歩を誤まれば、劉文輝のみならず、その他にも、共産軍と通ずるものが出て來るかも知れない。

劉文輝の兵力十萬と、前記廣東電は傳へてゐるが、それは誇大に失するとして、相當なものであることは事實であるから、朱・毛軍＝峩馬雷燊區＝劉文輝＝徐向前といふ赤色線が出來るとすると、或は成都陷落といふ場面が見られるかも知れない。

さうしてこの赤色線を、陝西に向つて延長する時、いはゆる「コミンテルン南方ルート」打開の可能性が發見せられる。その飛石に當るものが、陝西南部から中部にかけての吳煥先、徐海東軍、陝西北部から西は甘肅に、東は山西境に及ぶ陝甘ソヴエート區（紅軍二十六軍及び第三十五軍）であり、それを傳つて行くと、目標たる新疆に達するのである。

吳煥先、徐海東軍は、鄂豫皖ソヴエート區から西遷した部隊である。このソヴエート區は、徐向前、鄺繼勛が、八萬の大軍を以て拱衞してゐた大ソヴエートであつたが、一九三二年の第四次討伐で潰滅、徐向前が四川に移つた後、吳煥先、沈澤民（その死後は成仿吾）、徐海東等に依つて再建されたが、瑞金陷落後、指令に依つて西進し、吳・徐が二千を率ゐて河南から陝西に入り、陝西南部の寧陝、石泉に落附いた。最近の報道に據ると、陝南から中部に北上し、西安の東南維南地方に邀擊してゐるとのことである。

紅軍第二十六軍（軍長劉子丹、師長謝浩如）及び第三十五軍は、陝西北部の延安から、最北端の府谷にかけて、約十二縣に亙る陝甘ソヴエートを、二千の兵力を以て拱衞して居り、すでに三年の歷史を持つてゐる。最近の情報に據れば、この區の共産軍も、最近甘肅へ移動してゐるといふ。

コミンテルン南方ルートの起點であり、各路の共産軍がその進行目標としてゐる新疆の現狀については、名にし負ふ秘密の國であり、ヂヤーナリステイックには「ソヴエート・イースタン・トルキスタン」とか、「赤色新疆」とか呼んでゐるものの、ロシアが果してどんなことをやつてゐるか？　少しも判らないのであるが、辛うじて得た最近の支那情勢に據ると、ほぼ左の通りである。

一切の軍・政大權は、邊防督辦盛世才に握られてゐる。主席の李溶はヨボヨボの一老人で完全に盛のロボットだ。副主席が和加尼牙子、回教徒の首領である。財政廳長兼外交署長の陳德立は、廸化のロシア領事の秘書である！　省政府及びその下の民政、財政　教育、實業、建設各廳には、モスコーから派遣されたロシア人顧問一名乃至數名があり、實際の政治をやつてゐる。これだけでも相當瞠目させられるが、この外に、これら機關の一切に對して、生殺與奪の權を握つてゐる保安處（別名

政治監察管理局）がある。總務、政治、軍事、經濟、國際、檢査の七科と、特務隊といふ組織で、處長はロシア人ボゴウニン總務科長は中央黨員で、かつて外蒙で活躍した王立祥である。盛世才の督辦公署にも、ロシア人顧問中將一人、少將二人がゐて、航空學校、軍官學校、憲警學校を直轄し、ロシア人教官が教育訓練に當つてゐる。

話半分にしても、驚くべき赤化振りといはねばならぬ。大事、すでに去れり矣。

共產軍追擊戰、すなはちいはゆる追剿軍事を利用しての、蔣介石の對西南工作は、巧妙でないとはいはれない。貴川、雲南に關する限り、その工作は、割合に順調に進行してゐる。しかし朱・毛主力軍が、なほ未だ大なる打擊を受けてゐないのはどうだ？更に四川はどうだ？　西南赤化の危機は、前述のごとく、日一日と深化して來てゐる。さうして、追剿軍費の支出增加は、今日すでに五千萬元以上に上つてゐる。看來れば、蔣の四川乘出しは至極の冒險である。彼が果して虎穴に入つて虎兒を得るかどうか？豫斷の限りではないが、江西とは違つて、自給自足の充分出來る、物資豐富な四川に攜り、しかも封鎖も何も出來ない地理的條件を擁する共產軍に對しては、江西以上の痛苦を嘗めさせられることは疑ひない。もう一つ考へねばならぬことは蔣の健康である。さきに重態說が傳へられ、それは誤報だつたやうだが（蔣の持病は、鴉煙漏瀉に因る胃の神經衰弱で、肺結核は疑はしいアレだけの活動をすれば、身體に無理の出來るのはアタリ前で、惡くすると五丈原頭の諸葛孔明といふやうな、悲慘なことにならぬとも限らぬ。支那赤化瀋清、及び大亞細亞主義の見地から、私は彼に加餐を勸めたい。好意からいふのではなく、彼の後に、彼ほどの反赤活動をなし得る人物はあるまいと信ずるからである。

（追記）ソヴェート區及び共產軍の現狀勢を、一わたり書く積りであつたが、本文中に書けなかつたので、ここに補ふ。湖南極西の桑植、大庸、永順地方に、賀龍、夏曦軍と、蕭克・任弼時軍計五千がゐて、湘鄂西ソヴェート區（一名湘黔川ソヴェート區）を擁衛してゐる。江西に殘匪が三萬五千ゐて、各地に散在してゐる。その中、蓮花・萍鄉地方の徐彥剛軍、江西南部の項英・葉劍英軍が一等纏まつてゐる。これらは將來西遷するであらう。鄂豫皖區に殘軍二千。さきに捕縛された方志敏、劉伉西の殘軍が安徽南部に二千くらゐ。本文中に書いた各路軍を合せ、共產軍現兵力十三萬。これはやや內輪の見積りである。

（『中央公論』一九三五・六）

第八節　一九三六年に於ける共產軍

一　年初に於ける共產軍の態勢

爾來、形勢は大いに變じてゐる。「軍事偏重主義」を揚棄した中國共產黨は、抗日救國の旗幟の下に、各階層の民衆を再組織し、國民政府をして「容共」を餘儀なくさせようとして居り、共產軍・ソヴェート區の强化・擴大は、暫らく擱置せられてゐるかのやうに見える。今頃支那共產軍の動きをどうかうといふのは、殘山剩水の間に徘徊するの觀なきにしもあらずであるが、遊擊地域が內蒙地方に接近してゐる點から考へると、重大性は決して減少してゐないのだし、大局から論じて、「支那共產軍は、東亞局勢變化の日に於ける、〇〇の總豫備隊だ。」と、理詰めにして來れば、共產軍兵力の外面的劣勢に拘はらず、依然注目の價値があるとしなければならぬ。課題は徒爾でない。——一九三六年初頭に於ける共產軍の態勢は、略々左表のやうになつてゐた。

區・軍名	領導者	想定兵力
陝甘區	毛澤東、彭德懷、林彪、徐海東、劉子丹	三〇、〇〇〇
川康區	朱德、徐向前、張國燾、羅炳輝	三〇、〇〇〇
賀・蕭軍	賀龍、蕭克、夏曦、任弼時	二〇、〇〇〇
殘匪	項英、陳毅、徐彥剛、劉英、粟裕、高俊亭	二〇、〇〇〇

卽ち約十萬の共產軍が、陝西、甘肅、四川、西康、貴州各省に遊擊してゐたのである。殘匪は江西、福建、浙江、安徽、河南、湖北各省に散らばつて、大體に於いて動きが少く、大局への影響がないから、以後叙述を省き、專ら毛・徐軍、朱・徐軍、賀・蕭軍

の三軍をフオローすることにしたい。

二　朱・徐軍の山西侵入及びその後の動き

一九三五年の七月に遡つて說く。山西の一角から、閻錫山に依つて、次ぎのやうな悲痛な叫びがなされた。

「陝北二十三縣中、多少なりとも赤化してゐない縣は一つもなく、完全に赤化してゐるのが八縣、半ば赤化してゐるのが十數縣。共產黨は、武力を用ひずしてソヴエート區を擴大し得るほどの勢威をすでに持つて居り、陝北の赤化民衆は七十萬を算へ、赤衞隊二十萬、正規紅軍だけでも二萬に達する。」

矢繼ぎ早やに、彼は第二の聲明を發し、土地公有制の實施に依つて、赤化の危機を免かれるつもりであると述べたものだ。彼のつきならした警鐘には、しかし大した反響がなかつた。といふのは、陝北に據る劉子丹軍の實力は、到底省外に事を起すに足りないと見たからだ。だが、閻の懸念も亦、決して杞憂ではなかつた。形勢の暗遷を豫知する點に於いて、局中人のカンのよさは、局外者の及ぶところではなかつた。何となれば個中の局面は、この時大いに變化しつつあつたからである。――陝南の徐海東軍は、ほとんど陝北に入らうとしてゐたのであり、「赤豹」毛澤東も亦、徐の後を逐うて、陝北を志してゐたのである。

又二ヶ月過ぎた。毛・徐・劉三軍は、終に陝北に合流し、紅軍三萬、ソヴエート縣數二十餘、儼然たる陝甘ソヴエート區は、左の陣容を以て、北支赤化の中樞として出現したのである。

（A　陝甘支隊　　想定兵力一萬

司令	彭德懷
副司令	林彪
政治委員	毛澤東
政治主任	王稼祥

コミンテルンの代表　リトロフ（露人・支那名李德）

第一縱隊司令	林彪
第二同	鄧發
第三同	彭雪風

（B）紅第二十五軍　　想定兵力一萬

軍長	徐海東
第四一師長	張士誠
第七三師	
第七五師	
補充師	

（C）紅第二十六軍　　想定兵力七千

軍長	劉子丹
紅一團長	賀進年
紅二團長	嚴紅燄
紅三團長	王兆相
紅四團長	譏光潤
紅五團長	崔世俊
紅六團長	

陝北元來痞せた土地である。劉子丹軍だけでもどうかと思はれるくらひなのに、毛が來、徐が入つて、四倍以上の軍を養はねばならぬとなると、內容の充實をいふより前に、先づ物資の缺乏に悲鳴をあげねばならなくなつた。物資が要る、アワよくば新ソヴエート區でもと「赤色の豹」が四方を見廻はした時、眼にとまつた獲物、卽ち閻錫山の「家畜」山西であつたのである。

豹は檻を破つた。山西石樓縣下の一寒村、霍家村の對岸に、二百餘名の共產軍が現はれたと見る間に、忽ち黃河の結氷を渡つて山西側に侵入して來た。それは一九三六年二月十七日のことであつたが、爾後連日渡河部隊の數を增し、陝西の吳堡から延川までの間の黃河沿岸から、山西の石樓離石一帶へ、二十一日頃までに約六千が押し出した。この正面を守つてゐた山西軍溫玉如旅團はほとんど無抵抗狀態で屈服したため、右三縣が先づ陷落、氣をよくした毛澤東、自から吳堡に近い渡河地點の三交鎭に出馬、三月十日までに、一勝一敗はあつたが、結局離石、中陽、石樓、永和、隰縣、冷陽、孝義、靈石の八縣を占領した。侵入兵力も一萬二三千に達し、五割が毛・徐軍、三割が陝西土着の急造部隊、二割が舊東北軍からの投降部隊だ。

防衛側の山西軍は、第一縱隊（司令楊澄源）、第二同（楊效愈）、第三同（李生達）、第四同（孫楚）合計兵力三萬、總豫備隊一萬、省城太原を守備する三ヶ旅、山西を南北に貫ぬく同蒲鐵道守備の二ヶ旅計一萬を加へて、總計五萬であるが、山西軍の强くないことは周知の事實。精銳を誇る中央軍でも、共產軍の討伐には、敵の五六倍の兵力を要する例であるから、山西軍だけでは討伐は到底不可能である。どの方面かの救援が必要だか、冀察の宋哲元にその氣がなく、餘力もなく、山西側もイヤだといふし、山東の韓復榘も長鞭及びがたく、一時出動の噂もあつたが立消えとなり結局中央軍が押し出すことになつた。

共產軍の或る省への侵入を尾して、中央軍を入れ、討伐三分、省實權掌握七分で行くのが蔣介石の御得意だ。貴州、雲南、四川、皆この傳で行つたが、山西も御多分に洩れなかつた。冀察不出兵の見透しがつくと、彼は敢然七ヶ師の中央軍を入れ（この兵力四萬）これに商震軍二ヶ師一萬を加へ、江西剿匪の勇將陳誠（武漢行營總參謀長）を派遣し、中央軍で第一路軍（四萬）を組織し、陳を總指揮とした。第二路軍（楊愛源が總指揮）六萬は、山西軍と商震軍の合成部隊で、外に飛行機十九臺、このうち中央のが十三、山西、綏遠各三を參加させた。

討伐軍がかうした陣立てをしてゐる間に、共產軍は着々占據區域を擴大し、先きに占領した八縣の外に、興縣、靜樂（以上太原西北）交城、文水（以上同西南）平遙、介休、霍縣、趙城、洪洞、臨汾、新絳（以上同蒲線南段沿線）、安澤、浮山、靈城、曲沃（以上同蒲線東側）、汾西、大寧、吉縣、鄕寧（以上同西側）の十九縣を、三月二十日頃までに手に入れた。合計二十七縣、約三十縣、全省の約三分の一に及び、しかも西南部の富庶の區を來てゐる——侵入軍の極盛時代だ。

しかし討伐軍の御膳立てが整ふと、十萬の兵力がモノをいひはじめた。三月二十日以後、侵入軍は下り坂となり、同月末には、霍縣、新絳間の同蒲線沿線、並びに隰縣附近に毛軍が五千、太原西北の興縣地方に徐軍二千が殘留するのみとなり、それも五月上旬には全部退去し、山西はやうやく赤禍の脅威から救はれた。騷擾實に二ヶ月半。

陝西の古巢に舞戻つた共產軍は、勿論相當の打擊を受けたが、一方多數の壯丁を强制收容したから、兵力は減少せず、武器には損害少く、物資を滿載して歸つたらしい。で、休養一旬、五月二十三日頃には、毛澤東安定、保安に現はれ、六月上旬長驅して甘肅の曲子鎭、阜城で馬鴻逵軍と交戰、轉じて環縣、北進して洪德城、山城堡から寧夏省に入り、豫旺、同心城に據つた。徐海東軍は五月二十八日陝西、綏遠省境の靖邊縣屬の寧條梁に入り、定邊を經て寧夏省境の紅柳溝から寧夏に侵入、鹽池を陷れ、紅水城に進み毛澤東軍　合體した後、中衞を攻略した。次いで靈武、金積を收めた。これは八月までの動きである。九月下旬になると、毛軍は南下して甘肅の涇原、會寧方面に進出し、將さに朱・徐軍と合流しようとしたが、討伐軍に阻止され、十月上旬再び寧甘省境の豫旺、環縣　蟠據した。

三　賀・蕭軍の北上

湖南西部に據つてゐた賀龍・蕭克軍は、一九三五年十一月行動を開始し、年末貴州に侵入し、二月下旬までに畢節にゐたが、二十六日同地を拋棄、雲南に侵入し三月十二日鎭雄に迫つたが擊退せられ、二十七日貴州盤縣占領、ここで二隊に分れ、賀軍は平彝

霑益から尋甸へ、蕭軍は平彝、曲靖南方から馬龍北方を經て同じく尋甸へ。再び合して四月六日嵩明に達した。つづいて十一日富民十二日羅次、十三日祿豐を攻擊して失敗。再び二隊に分れ、賀軍は廣通・楚雄、鎭南、祥雲を、蕭軍は鹽興・姚安を經て、賓州で兩軍再び合し、鶴慶、麗江を略した後、二十五日から二十九日までの間に金沙江を渡り、五月五日西康侵入・定鄉德欒に達し、理化、巴安の線に進出、瞻化附近に於いて朱德・徐向前軍と合流し、相携さへて甘孜に進み・七月中旬までここに滯在した。

これから又單獨行動を取り、大雪山、大金川を越えて四川、西康省境を西北進し、七月二十五日寄海省の白衣寺に達したが、馬步芳軍に擊退され、阿軍より再轉して青海省阿什羌河に向ひ、九月中旬朱・徐軍と相應じて甘肅岷縣を攻擊したが拔けず、東進して甘肅南部の成縣、康縣、徽略を略し、爾後この附近に小規模の游擊を試みてゐる。

四　朱・徐軍の動き

年初四川、西康省境の懋功、丹巴一帶に在つた朱德・徐向前軍は、三月に入つて西康省道孚、鑪霍に進出・甘孜附近に轉じ、ここで賀・蕭軍と手を分ち、七月中旬鑪霍東方から四川に入り、綏靖屯北方に於いて大金川を渡り、北方梭磨を經、三十四日包座着。二十八九兩日松潘を攻擊したが拔けず、再び包座に引返し、北進甘肅に侵入、八月中旬岷縣を略した。九月十日頃臨洮を取り、十二日進んで蘭州に迫つたが商が立たず、臨洮に引返し、寧昌・通渭一帶に據つた。十月上旬のことである。

五　年末の態勢

總括すると、一九三六年末に於いては、各軍はほとんど甘肅に集中せられたやうである。

東北部の環縣から寧夏の豫旺、鹽池、金積地方一帶には、毛澤東、徐海東・彭德懷、林彭等の軍が蟠據してゐる。中部の通渭、寧昌・渭源・漳縣、岷縣、武山、伏羌　秦安地方には朱德・徐向前軍がゐる。

東南部の陝西省境、成縣、徽縣、兩當、康縣、白水江一帶、陝西の略陽、沔縣、鳳縣地方には、賀龍、蕭克・羅炳輝各軍がゐる

ソヴエート縣數にして二十餘、兵力は殘念ながら不明である。福建・浙江、安徽、江西・湖北・河南諸省の邊區の跳梁區域にソヴエート縣と見るべきものがどれくらゐあるか？　それを合しても、全ソヴエート縣數五十を越すことはあるまい。（『支那』一九三七・二）

第九節　滿洲に於ける共産運動

滿洲の有つ複雜性の一端は、人種問題の方面に具現してゐる。日、鮮・滿・漢・蒙・露、ブリヤートその他。これら諸民族の熔礦爐、それが滿洲である。複雜性の他の一端は、その地理的形勢に現はれる。接壤の鮮、支、露、蒙の各國から各種の思想が滿洲を目指して流入する。三民主義も・王道思想も、大亞細亞主義も、共産主義も、恣いまゝに侵入し、各その對象を見附けてこゝを先途と跳梁する。就中その態樣最も離奇變幻を極めてゐるのは共産主義運動であり、いづれもソヴエート・ロシアを本源とするは變りないが、（一）在留露人を對象とするもの、（二）支那を經て、支那人に働きかけるもの、（三）朝鮮を經て在留鮮人を追ひかけるもの、（四）日本を經て、在留邦人を摑まうとするものの四系統に大別され、更に朝鮮共産黨は中國共産黨の指揮下に入り○○共産黨は中國共産黨と聯絡し、各系統の機關相錯綜し、これが實相を捕足しがたきことは支那に於ける共産運動との比較研究に依つて容易に了知し得るところである。

先づ、ロシア側からする運動を一瞥する。

最初のボルシエヴイキ機關が、哈爾賓に組織せられたのが、一九一七年、當面の目標は、ホルワット白系軍隊の赤化であつた。次いで北滿の勞働者、特に東支鐵從業員に目標を移し・一九二〇年に東鐵附屬地黨事務局をつくり・運動の大本營とした。進んで赤色職業同盟を持ち、東鐵局長イワノフを指揮者とし、一九二五年十二月の郭松齡事件に際しては、奉天軍輸送を妨碍し、その結果イワノフの逮捕を見たこともある。その後一九二七年、中國共産黨廣東暴動の背後にロシアがあることが明かとなり、國民政府の對露斷交となつたが、ロシア側は、事實上斷交の範圍外に在る滿洲に全力を注ぎ、外務人民委員部極東部長メリニコフを哈爾賓總領事とし、東鐵附屬地黨事務局を黨北滿縣委會（通稱哈爾賓縣委）と改め、赤色職業同盟、ダリ・バンク、林業トラスト等を外廓とし

て、盛んに赤化運動を試みたが、彼も亦一九二九年五月逮捕された（ハバロフスク領事館捜査事件）。勝に乗じた支那側は、同年七月武力に依る東鐵回收を決行したが、結局ロシアの武力に屈し、屈辱的ハバロフスク協定に調印するのやむなきに至るや、哈爾賓縣委は北滿委員會と改稱せられ、捲土重來を策しつつあつたが、滿洲事變の勃發及び滿洲國の建國に因り、その勢は終に阻まれた。北滿鐵道賣却の提議は、前進を阻まれたロシア側が、北滿よりの退却意思を表明せるもの、同交渉の結着如何は、本稿起草當時、まだ豫斷を許さなかつたが、幸ひにして成立せば、北滿委は消滅すべく、ロシア側からする運動は當分閉息するに至るであらう。

第二、朝鮮共産黨の運動。

これは一九一八年に遡ることが出來る。當時すでに間島等の地方を中心として、朝鮮民族主義團體が存在してゐたが、その赤化に依つて、鮮人最初の共産主義團體がハバロフスクに結成された。李東輝の韓人社會黨がこれである。翌年第三國際にグルッペとして承認され、高麗共産黨と改稱、中心を上海に移したが、その虚に乗じ、一層急進的な主義者に依つて、イルクーツクに全露韓族共産黨成立。兩派の抗爭はコミンテルンに依つて調解せられ、活動範圍を劃し兩者併存のこととなつた。

しかしそれも束の間、上海派は二派に分裂し、一部は全露派に投じ　優勢となつた全露派は、うまくコミンテルンに取入つて一九二一年十一月、全露高麗共産黨と改稱し、鮮人共産運動の最高團體と名乗つたが、上海派はこれに服せず、寧古塔に高麗共産黨北滿支部を建てて抗爭した。

コミンテルンは鮮人團體の訌爭に幽想をつかし、高麗共産黨を解散し浦鹽の全露共産黨極東地方委員會内に高麗部を設立した（一九二三年）。部の中心人物は依然李東輝等で、その指導下に、間島一帶に大韓義勇軍の活動を見、一九二四――六年には、矢張りその指導下に、東、南、北、滿三青年總同盟が成立した。

以上は在露、滿の鮮人團體であるが、朝鮮内にも共産團體の成立を見、一九二五年朝鮮共産黨としてコミンテルンから承認された。これが檢擧に依つて消滅すると、殘黨は浦鹽に遁れて第三次黨を組織し、ただちに滿洲に進出東鐵沿線其他にその滿洲總局を設けた（一九二六年）。

朝鮮共産黨の滿洲進出の結果、浦鹽高麗部内の高麗派はこれに合併せられ、一應滿洲總局に統一せられた形となつたが、鮮人御得意の内訌はなほ熄まず、七八派に分れて排斥し合ひ、運動は萎微沈滯した。コミンテルンは赫怒して在滿鮮人團體の中國共産黨加入を命じ、一九三〇年四月から八月にかけ、在滿鮮人團體は解體して中共傘下に入つた。

第三、中共の滿洲進出。

一九二八年東三省易幟後、中國共産黨中央直轄の滿洲省委員會が成立、その指導下に於いて、撫順に赤色工會を見たのを手はじめに、工業地帶、鐵道沿線に、赤化宣傳が盛行するに至つた。多年の經驗を持つ中共の活動は、果然目覺しいものがあり、鮮人團體を持てあましたコミンテルンは、むしろ中共の傘下に一切を統一するの賢明なるを知り、一九三〇年一月頃滿洲省委及び鮮人團體幹部に依る聯席會議を開催せしめ、鮮人團體の解體、中共加盟を決議させた。四月鮮共滿洲總局、八月までに各分派解體して中共に加盟した。

この結果、中共滿洲省委は、在滿鮮支共産黨員に君臨し、活動ます〳〵顯著となつた。その下に北、東、南滿三特委、二市委、十五縣委、十七特別支部があり、獨立せる軍事委員會（區、縣、市軍委を統轄）中共青年團滿洲省委、滿洲省互濟會、全總滿洲軍事處、反帝同盟、社會科學聯盟、農民協會等も組織又は計畫せられた。實行運動としては間島地方に於ける鮮人の武裝遊擊、哈爾賓地方の反帝運動、撫順の勞働運動、盤石の農民運動等、相當猖獗を極めたものである。しかし支那官憲の取締りも、やうやく眞劍となり、わが在滿警察機關の充實と相俟つて、一九三一年滿洲事變發生前、一部地方を除き、共産網はほとんど破壞し盡されてゐた。滿洲事變發生後は、尙更中共の活動は制限せられ、終に滿洲省委の浦鹽移轉となり、間島地方に於ける小規模の遊擊の外、全滿に亙つて共産運動の衰微を見てゐる。

第四、日本共産主義者の活動。

これはほとんど問題とならない。一九二八年から三一年まで、黨組織の前提としての社會科學研究會をつくつて檢擧されたものが二三件、最後に例の滿洲事務局組織となつたものであるが、未然に發覺して熄んだ。

滿洲に於ける共產運動は、支那本部に於けるそれよりも、沿革上古い。哈爾賓とか東鐵とか、相當の根據地にも事欠がなかつた。而もその成果は遠く支那に及ばず、ソヴエートもなければ、紅軍も出來なかつた。これは滿洲の治安に日本が貢獻し、滿洲に軍閥の混戰を發生せしめなかつた賜物である。滿洲國建國以後、日本は更に緊密にその秩序維持に協力することとなつたから、將來ますく安心である。本篇には故ありて詳說することが出來なかつたが、滿洲事變のドサクサにまぎれ、全露、中共、鮮人團體の援亂計畫は、相當深刻なものがあつたに抱はらず、全然物にならず、中共滿洲省委は浦鹽に逃げ、全露は北鐵を賣つて退却しようとしてゐる現狀である。

澎湃たる赤化の潮に對する巖の城、それが滿洲國である。それは赤魔をして風を望んで退却せしむるだけの威容を持つてゐる。ここに至つて、滿洲國の存在は正に世界的意義がある。この意義を觀取せず不承認主義に膠着するはその眼光豆のごとく小なるかな。（『支那』一九三三・九）

第十節　支那赤化へ——外蒙の觸手

「外蒙を根據とすると支那赤化の運動。」かうした課題を、輕々に引き受けて、實は後悔した。その範圍が、想つたよりも、ズツト廣汎。支那赤化のための、三條のコミンテルン・ルート。東路が滿洲、中路が外蒙、南路が新疆であり、東路は……、中路は……南路は……、といふ風に、說かなければならないし、邊疆ソヴエート組織の工作が、どうだとか、そもそも、外蒙赤化の過程が、どうだつたか？　とか、辛うじて「三三年中共史」を纏めて、邊疆赤化の部門に、手を着けたばかりの私には、「所詮、重荷だ。」と投げ出すことが、結局賢明だと、中途で、思ひ返す外なかつた。

しかし、若干の資料は、獵つて見た。鷄肋、捨つるに惜しいものも、少しはある。それを、手際よく纏めるだけの準備が、今の私に缺けてゐることは殘念だが、中間報告として、拉雜な點は許して貰つて、資料をそのまま紹介することも、無駄ではなからうか、これは、編輯者への辯解。

たゞ、題目だけは、ハツキリと認定しなければならぬ。

「外蒙が赤化した。それは、赤露の東方進出のための、最重要な根據地となつた。」「進出の、主たる目標は、何であるか？　外蒙に隣接し、その影響を、直接に受ける內蒙でなければならぬ。」「外蒙を根據とする、支那赤化の魔手は、かくして、先づ內蒙に伸べられた。その工作は？　工具は？」「馮玉祥があり、內蒙國民革命黨があつた。さうして、今や、內蒙靑年黨がある。」

——で、範圍は、外蒙を根據とする、內蒙赤化工作に狹められ、更に、その工具を說明することが、精一杯の私の仕事となつた。

さて、外蒙古に於ける革命が、最後的に成功すると、その影響は、たゞちに內蒙に現はれ、白雲梯、郭道甫、福明泰等、少數知識階級分子に依つて、「內蒙國民革命黨」なる祕密結社が組織せられた。

（一）　內蒙の自治自決を完成する。
（二）　平民政治を確立する。
（三）　中國の軍閥政治を打倒する。
（四）　封建制度を除去する。
（五）　蒙古侵略壓迫に反對する。
（六）　蒙古を賣る王公を排除する。

これが、黨の政綱であり、スローガンであつた。黨は、組織成るとともに外蒙國民黨との聯絡を策し、白雲梯自づから庫倫に赴いた。「王公打倒」のスローガンは、外蒙側から提出せられたものであつた。白が外蒙から歸つて後知識階級の入黨者も、俄然增加

した。

黨成立のハッキリした期日は、明白でないが、一九二四年中と推測される。そこへ、馮玉祥が現はれて來た。直隸派の驍將だつた彼は、一九二四年の第二次奉直戰に於いて、ひそかに張作霖、孫文と通じ、軍を、古北口から北京にかへし、有名な「倒戈」の一幕を演じ、大總統曹錕を逐ひ、吳佩孚を擊破し、察哈爾・綏遠をその手中に收めたのであるが、ここに至つて、內蒙國民革命黨との關係を生じ、その仲介に來つて、同黨と、中國國民黨との提携が成立した。黨勢俄然振ひ、內蒙各旗に黨部が成立せられ、庫倫に七八十名黃埔軍官學校へ十餘名の學生黨員が留學した。

翌一九二五年春、馮勢力下の張家口に於いて、黨第一次全國代表大會が開かれた。出席者は、內蒙各地から參集した代表四十餘名、外蒙黨、政代表、中國國民黨、コミンテルン、馮玉祥代表等であつた。大會は、中央執行委員二十一人、常務委員七人（白雲梯、郭道甫、繼明泰、李鳳崗、包悅卿、樂景濤、伊德欽）を選出し、內蒙國民革命軍組織を決議し、大會宣言を發出した。

同年馮玉祥軍熱河に進出するや、經棚、開魯、林西諸縣に、蒙旗民軍八千が組織せられ、樂景濤が司令となつた。察哈爾、綏遠には、蒙旗民軍訓練處（處長奇子懋）が設けられ、經棚には軍官學校が出來て、七八十名の學生を收容した。軍費の三分の二は地方の醵出に待ち、三分の一は馮玉祥から支給せられ、兵器は外蒙及びロシアから供給せられた。

黨員數は、このとき一萬數千人。盟・旗・區各級黨部の組織も備はり、張家口に週刊、經棚に月刊機關誌の發行を見た。政策としては、學校の設立、旗制改革、國民代表會議の期成、王公優待條件廢除、自治實行等。

これが、黨の全盛時代であつた。

黨は、外蒙及びロシアの後援、並びに馮玉祥の卵翼の下に、發達したものである。從つて馮軍の失勢とともに、その勢力を失墜するに至るべきは、當然の成行である。馮軍南口に敗戰し、寧夏、甘肅に退くや、蒙旗民軍も察哈爾を退出し、司令樂景濤はロシアから免職せられ、赤露教官多數の監視の下に、白雲梯が內蒙國民革命軍總司令となり、四旅六千人を以て殘局を收拾しようとしたが、更に山西からの壓迫が來て、寧夏、阿拉善に退却した。このとき、軍隊數は僅かに千餘人であつた。

そのうちに、友黨である中國國民黨の內部に、共產、非共產の爭ひがはじまつた。その影響を受けて、內蒙國民革命黨にも、同樣の內訌が開始された。黨中央は最後的にこの問題を解決すべく、寧夏から各支部に通知を發し、一九二六年秋、庫倫に於いて緊急大會を召集した。白雲梯、郭道甫・樂景濤・コミンテルン、外蒙各代表、赴露學生代表等三十餘名參集した。コミンテルン代表は、赴露學生代表を指摘し、幹部改選を主張した。舊幹部を驅逐して、淸一色の親露分子を以て新中央を組織しようとしたのだ。これに對し白雲梯等は、各地支部の反共、反露主張を後楯として（察盟大會未了の際、各地支部は、反共決議を行つた）極力反對したため、大會は遂に決裂。白樂等は寧夏に歸つて舊幹部の會議を開き、排露、反共を決議し、淸共宣言を發した後、白雲梯代表となつて南京に赴き、蔣介石及び國民黨右派と妥協し、內蒙黨務指導委員會を成立させ、專ら內蒙自治運動に努力することになつた。一方內蒙國民革命軍（總司令伊德欽—實力七百人）を改組し、旗保安隊となり、馮玉祥から賄つて貰ふこととした。

反共產派が國民黨右派と結ぶや、親露派分子郭道甫及び學生代表は、コミンテルン及び外蒙の指導下に、庫倫に新中央を組織した。しかし一向微力なもので、肝心の內蒙各地に勢力なく、コミンテルンに養はれる、百餘人の一小團體に過ぎなかつた。さうして、いくばくもなく又二つに分裂し、一派は走つて呼倫貝爾獨立を策して失敗し去つた（この一派のうちから、後述する內蒙青年黨が產れたのだ。

南京と合作した反共產派は、前述の通り、黨務指導委員會を北平に成立せしめた後、樂景濤、伊德欽、包悅卿、金永昌、李永新、李鳳崗、于蘭澤、暴子甯、王惠民等が委員となり、白雲梯を南京代表とし、每月九千元の經費を得て、黨務を進行させようとしたが、間もなく南京政府と、內蒙王公との間に因緣を生じ、白雲梯一派は袖にせられる狀勢となつたので、彼等は憤然として南京を離れ、反蔣の側に廻り、白雲梯、郭道甫、樂景濤等は、北平に新組織をつくり、閻錫山、馮玉祥、汪兆銘が、反蔣大團結を形成し、いはゆる擴大會議を開くや、白等は、內蒙各盟旗黨部聯合辦事處を北平に組織し、一時は六十餘旗の代表を網羅したほどの

勢であつたが、張學良の武裝調停に依つて反蔣派閉熄するや、白等一派も亦散り散りになつてしまつた。しかし、彼等の蒔いた種子は、地に墜ちて死なず、三年の後、德王一派の高度自治要求運動となり、一九三四年に入つて、內蒙古は高度自治區域として起ち上ることが出來たのである。

轟つて說く、共產派は、呼倫貝爾事件（一九二九・八・一五）失敗後一九二九年末、海拉爾に於いて內蒙共產政府の設立を決議し、はじめて內蒙青年黨の名を定めた。首領は阿鳴泰といひ、赴露學生であるといふから、一九二四年內蒙國民革命黨から庫倫に派遣せられた七八十名の學生のうちの一人であらう。彼につゞいて、八人の有力な首領があるさうだが、その姓名はよく判つてゐない。たゞ、ともに留露學生であることはたしかである。

現在に於いては、彼等は、本據を外蒙古車臣汗部地方に移し、○○○○○將軍の隔地指揮下に、虎視眈々として內蒙を窺つてゐるが、內蒙に於いては德王一派の勢力、まさに旭日のごとく、齒も立たないやうなものであるけれども、いついかなる切掛けに因つてか、軒然たる大波を、內蒙に起すかも知れない。「內蒙は德王のものだ。」と、一概に定めてかゝつてゐる我等日本人には、內蒙にも共產黨があり、外蒙の一角を根據として、好機を窺つてゐるといふことを、知つて置いて貰ひたいと思ふ。

檢討未了の資料を、臆面もなく紹介した所以であり——最後に內蒙青年黨の政綱として、傳へられてゐるところを擧ぐれば——

（一）民族自決、內蒙獨立國創立。
（二）國體は民主共和國。主權は勞働者に在り。最高機關は國民代表會議。
（三）土地その他一切の資源の國有。
（四）一切の舊條約を認めない。
（五）貿易國營。
（六）政教分離。
（七）集會・結社等の人權を保障する。
（八）王公打倒。
（九）共產軍組織。（『遼寧支部』一九三四・八）

第十一節　中國共產黨の中心人物

異常な發展

中國共產黨が成立してから、もう足掛け十四年になる。僅か數十人の團體から出發して、十四年後の今日では、支那の約一省半に相當するソヴエート區を持ち、これを拱衛する二十萬の共產軍を擁し、數千萬の民衆を統治してゐる。實に驚異すべき發展であり、正に「世紀の奇蹟」でもある。

この目覺ましい發展の裏には、勿論幾多の犧牲、痛烈な自己批評、深刻な淸算があつた。その結果、黨の領導人物にも、著るしい新陳代謝があつた。犧牲者もあつた。落伍者もあつた。轉向者もあつた。さうして現在の領導者は、ほとんどいはゆる「後起の秀」を以て占められ、黨創立當時の領袖は、僅かに數人を剩してゐるに過ぎない。以て如何に「淸算」と「犧牲」の激しかつたかを察することが出來よう。しかし、生生躍動する生命は、必然に犧牲と淸算とを要求する。これありて、はじめて劃期的躍進が可能となるのである。中國共產黨とてやはかこの天演の公例を免かれ得るものではない。

共產黨史の三段階

黨の成立した一九二〇年九月から、中國國民黨との合作（一九二四年一月）を經て、遂にそれとの分離（一九二七年八月）に終つたまでを私は「陳獨秀時代」と呼ぶ。國共分離後、全國總暴動の方針を決し、一たびはコミンテルンに依つてその方針は是正されつつも、各

地に蜂起した共產軍、所在に樹立されたソヴェート、等等の現象に幻惑され、敢然中共コオスを打立て、コミンテルン・コオスに對抗した李立三、その領導は一九三〇年を以て終焉を告げたが、私はこの期間に「李立三時代」の名を與へようと思ふ。李立三沒落の後を承け、暫時ロボット總書記向忠發が中樞に坐つたが、その刑死（一九三一年六月）後は、白面の一書生陳紹禹が總書記となり、モスコー派の全勢と見る間に、久しい間實力を蓄へてゐた毛澤東の崛起となり、一九三一年十一月七日、中央ソヴェート政府樹立され、毛がその主席に擧げられた。爾來共產軍の發展、ソヴェート區の擴大に依つて、實力派の勢焰ますます昂り、黨中央はあるかなきかの存在をつづけてゐる。現在の時期は、正に「毛澤東時代」である。

中國共產黨史の、人的觀點に依る三期を劃定した後、私は、左に右三期を通じて起伏、生榮した領導人物の系統表を、讀者に贈る。恐らく日本では最初の試みであらうから、從つて遺漏多く、採錄人物の選擇、その排列、順序等に、遺憾の點が少くないであらうが、次ぎの機會に是正することとし、暫らくこの貧弱な業績を看過されたい。表中――は死亡を示す。病死もあり、刑死もあるが、別に區別しない。◇は黨籍を除かれたもの。▽は自發的に脫黨・轉向したもの。□は國民黨官憲に逮捕され、轉向の意思を表明したもの、及び自首したものである。以上の各場合を通じ、正確な時日を擧げることの出來なかつたのは遺憾である。これ亦次ぎの機會に讓る。（三五二―三頁）。

陳獨秀時代の主要人物

これから各時代に分つて、重もな中心人物の評傳を試みよう。

一九二〇年の黨創立から、一九二七年の國共分離までは、大體陳獨秀による家長制度といつて差支へない。從つて陳獨秀を評傳することが、ただちにこの時代を叙することになる。安徽懷寧の人、一八七九年生。北京大學の文科學長として、白話文學の提唱孔子教の排擊等、いはゆる支那に於ける新文化運動の大立物として彼の前半生は、今更叙述を必要としない。北大辭職後上海に入り、一九二〇年九月、コミンテルン代表ワーテインスキイの助力を得て、中國共產黨の創立に成功した。

創立大會に參加した黨員には、陳の外、戴天仇、沈定一、陳望道、李漢俊、施存統、阮嘯仙、楊明齋、張太雷、周佛海、張東蓀、邵力子等の十餘名があつた。今日南京政府の要人戴天仇、邵力子等の名前を見ることは、いささか變であるが、大體初期の黨が一種の啓蒙團體、學術團體に過ぎなかつたから、かうした人々も包容されてゐたのである。右の二人、それから陳望道（共產宣言の支那譯者）張東蓀（上海時事新報主筆）、李漢俊等は、創立後間もなく脫黨し、施存統は一九二七年頃まで黨に殘つたが、その後見苦しい轉向をつづけ、今日では一個賣文の徒となつてしまつてゐる。楊明齋はワーテインスキイの通譯だつたさうで、その後杳として消息を聞かない。最後まで黨に殘つたのは、初期黨員として阮嘯仙の外にない。

翌一九二一年の七月に、黨の一全大會が開かれたが、それには陳公博、包惠僧、李漢俊、李達、張國燾、劉仁靜、董必武、陳潭秋、毛澤東、何叔衡、周佛海等の各地代表が出席し、中央委員長に陳獨秀、同副委員長に周佛海、組織部長に張國燾、宣傳部長に李達を選出した。なほこの一全大會前後の期間に於いて、李大釗、譚平山、于樹德、林祖涵、瞿秋白、周恩來、李立三等が入黨してゐる。黨の外廓團體たる中國共產主義青年團には、張太雷、俞秀松等が活躍してゐた。陳獨秀に繼ぐ時代をつくつた李立三、今日の黨の總帥たる毛澤東などの名前が、ここにはじめて出て來たわけである。これらの未來ある人物を除き、精精國共分離までで黨の領導的地位から去つた人々を、左に短評して置かう。

周佛海。湖南人でわが京大經濟學部出身。黨創立の際には、留日學生代表として參加し、一全大會では中央副委員長に選ばれたが、後思想的轉向を來し、廣東大學及び上海大夏大學の教授となり、「三民主義之理論的體系」等の著述を出し、三民主義の、しかも右派の論客として有名になり、南京政府の訓練總監部政治訓練處長などをやつてゐた。今日では、彼が共產黨員だつたことを、想ひ出す人もあまりあるまい。

陳公博。汪兆銘派の領袖として、今南京政府の實業部長をやつてゐる彼も、もとは共產黨員だつたのだ。しかし彼の黨生活はごく短く、一九二一年から二三年くらゐまで、除名されたともいひ、脫黨したともいふ。

李達。轉向して象牙の塔に閉ぢこもり、今上海で大學教授か何かやつてゐる筈だ。

劉仁靜。一全大會に北京代表として參加した彼は、その後ズット陳獨秀に追隨し、一九二九年に陳と同時に除名され、いはゆる解消派の一員として、陳獨秀捕縛（一九三二年十月）後の孤壘を守つてゐる。

李漢俊。李達とほとんど同時に脱黨したが、後矢張り黨員だと誤認され、某省官憲のため逮捕銃殺された。

國共合作時代の人物

微弱な當時の黨勢を以てしては、共産革命などは想ひも寄らないので、コミンテルンでは、その植民地革命の原理に據つて、黨と中國國民黨との握携を命じた。巢立つて間もない黨に取つて、これは相當の難題で、合作を可とするもの否とするもの兩派に分れ、一九二二年八月まで、黨の内部では蜂の巣をつついたやうな混亂がつづけられた。しかしコミンテルン代表マアリンは、斷乎として命令を執行し、一九二二年九月の黨二全大會で、民主主義聯合戦線形成の必要を可決させ、同八月杭州で開かれた中委全體會議を强要し、黨員の中國國民黨加入を決議させた。この決議に基いて、李大釗と鄧中夏とが、個人の資格で眞先きに國民黨に入黨し、翌一九二三年六月の黨三全大會で國共合作が正式に決議され、一九二四年一月の國民黨一全大會で正式に合作が成立した。この時國民黨内部に入り、重要地位を占めたのは李大釗、譚平山、于樹德（以上中央執行委員）、林祖涵、瞿秋白、毛澤東、張國燾、韓麟符、于方舟（以上候補中央執行委員）等であつた。就中譚平山は最重用され、國民黨中央組織部長をかち得た。

譚平山。廣東の波止場人足の子に生れ、十二三歳の頃、孫文鎭南關の役に參加したといふ。一九二〇年北京大學を卒業し、陳獨秀に隨つて黨の創立に參劃、特に勞働組合運動に熱中した。國民黨改組に際して、フラクションの責任者として、國民黨組織部長となり、才名を謳はれたが、一九二七年の國共分離の後、態度がハッキリしなかつたといふので、右傾派の名を冠せられ、巨額の運動費を持つて香港に亡命、同年十一月除名された。彼はやむなく鄧演達等の國民黨極左派と握手して、第三黨を組織したが、今日では杳として消息を聞かない。

李大釗。河北天津附近の人早大卒業後北大教授、圖書館主任となり、新文化運動に參し、一九一八年學内にマルクス主義研究會を創立。マルクス學者としては陳獨秀より上だつた。國民黨改組に際し執行委員となり、終始北京に在つて、南陳北李と稱せられ黨の北方に於ける總帥であつたが、一九二七年四月、張作霖のロシア大使館手入れの際、路友于等とともに就縛、同二十八日刑死した。

國民黨改組から國共分離までは、陳獨秀の全盛時代で「支那のレニン」などと、ヂヤアナリスチックに謳はれたものだが、最後に李立三等に領導權を奪はれ、國共分離後は絶對に中樞から遠ざけられ、一九二九年十一月終に彭述之、高語罕、劉仁靜等八十一名とともに除名された。彼等は解消派なる一團を形成し、支那に於けるトロッキイストとして、多少の活躍を試みたが、一九三二年十月、陳、彭述之等十一名南京政府に捕縛され、この派も亦潰滅に歸した。

陳を葬り去つた日和見主義。支那の國情にくらいコミンテルンが、ボロディン、ガアレン、ロオイのやうな連中の上申を判斷の根據として、實情に即しない指導を支那の黨に加へる。これが國際路線であり、陳獨秀や譚平山等が、その實行不可能を進言すれば、彼等はただちに日和見主義者と指摘される。國際路線に盲從するもののみが、幹部派となつて勢威を振ふ。かうして陳獨秀は葬られ、彼の時代は終つた。

李立三時代の主要人物

國共分離の一九二七年八月から、一九二〇年まで、黨の幹部は李立三、向忠發、周恩來、瞿秋白等を以て形成され、就中李立三の才華最も煥發し、李立三時代を以て稱せられた。

李立三。字は能至、號は伯山。湖南人で本年三十八歳、湖南大學卒業後留佛苦學生となり、歸國後上海總工會委員長として、五・三〇事件を指導し、一躍有名となつた。黨内でも一九二七年來メキメキと頭をもたげ、國共分離後は陳獨秀を逐うて事實上の首領となり、ロボット向忠發を總書記に祭り上げ（一九二八年六月）自ら宣傳部長として一切を切り廻した。このときに當り、一九二七年末

中國共産黨領導人物系統表

陳獨秀時代（一九二〇—一九二七）

- 路友于
- □楊匏安
- ◇李季
- 白雲梯
- △李維漢
- 惲代英
- 羅綺園
- 包惠僧
- 向忠發
- 董必武
- 陳潭秋
- ◇劉仁靜
- 林祖涵
- 張太雷
- 李立三
- 于澤東
- △邵力子
- ◇陳公博

李立三時代（一九二七—一九三〇）

- ◇羅章龍
- ◇王鳳飛
- ◇何長庚
- 李樂
- △邵式平
- 林彪
- 劉少奇
- 沈澤民
- 鄭繼勛
- 周逸群
- 彭德懷
- 許繼慎
- 項英
- 阮嘯仙
- 林祖涵
- 賀龍
- 毛澤東

毛澤東時代（一九三一—）

- 聶雲增（軍事部長）
- 陳定一（共青總書記）
- 寥成雲（政治局員）
- 華少峰（前宣傳部長）
- 王雲程（政治局員）
- 劉少奇（全總委員長）
- 王稼嵩（外交人民委員）
- 秦邦憲（政治局書記）
- 陳紹禹（黨總書記）
- 張聞天（政治局員）
- 沈澤民（前宣傳部長）
- 夏曦（前鄂中區政委）
- 楊尚昆（宣傳部長）
- 趙榮（政治局員）
- 孟慶樹（婦女部長）
- 朱壽（組織部長）
- 關向應（前宣傳部長代理）
- 劉伯承（參謀部長）
- 李天柱（第八軍長）
- 蔡盛熙（軍長）
- 蕭勁光（第五軍團總政委）
- 張榮臻（第一方面軍總政委）
- 謀崩丞（土地人民委員）
- 羅炳輝（第二十二軍長）
- 段德昌（軍長）
- 邵式平（第十軍黨代表）

中央派

- △施存統
- 洋張
- 鄧子恢（財政人民委員）
- 林彪（第一軍團總指揮）
- 張太雷
- 徐向前（第四方面軍總司令）
- 蘇兆徵
- 方志敏（東北區主席）
- △戴天仇
- 朱德（革命軍委主席）
- 張國燾
- 毛澤東（中蘇政府主席）
- 李大釗
- 彭德懷（第二軍團總指揮）
- △陳獨秀
- 周恩來（二方面軍總司令）
- 賀龍
- 李立三
- ◇譚平山
- △周佛海
- 張聞天（第六軍團總指揮）
- 孔荷寵
- 董振堂（第五軍團總指揮）
- 李維漢
- ◇沈定一
- △陳望道
- 惲代英
- 葉挺
- 楊明齋
- 朱德（第十軍長）
- 周建屏（第二十軍長）
- △張東蓀
- 陳毅
- 羅綺園
- 羅章龍
- 韓麟符
- 李達
- 葉劍英（第一方面軍參謀長）
- 鄭繼勛（前第四方面軍總司令）
- 白
- 韓麟符
- 何叔衡（工農監查人民委員）
- 夏曦
- 董用威
- 俞秀松
- 周以遠（內務人民委員）
- 鄧子恢（第三軍團總政委）
- 于方舟
- 滕代遠
- 黃公略
- ◇高語罕
- 何叔衡
- 何長庚（第十三軍政委）
- 阮嘯仙
- 張雲逸（參謀部第一局長）
- 張國燾
- 周恩來（第一方面軍總政委）
- 蔡和森
- 李明瑞
- 項英（中蘇政府副主席）
- 瞿秋白（教育人民委員）
- □顧順章
- □潘問友
- 蘇兆徵
- 周恩來
- 陳毅
- 張國燾（中蘇政府副主席）
- □黃平
- 惲代英（中蘇執委）
- 周恩來
- 張國燾（中蘇執委）
- 邵力子
- 吳玉章
- 鄧乾元
- 黃平
- 彭述之
- 夏曦
- 董用威
- 許甦魂
- 何孟雄
- 唐宏景
- □羅登賢（中蘇執委）
- □胡大海（中蘇執委）
- □胡均鶴（中蘇執委）
- □盧坦（中蘇執委）
- □余飛（全總書記）
- □徐錫根（中蘇執委）
- □黃平（中蘇執委）

實力派　**元老派**　**自新派**

（備考）右表中、中執委は中央執行委員、中蘇政府は中華ソヴェート共和國臨時政府、共青は共産青年團、全總は全國總工會、總政委は總政治委員、政委は政治委員のいづれも略稱である。

までの全國總暴動失敗の瘡痍やうやく癒へ、朱・毛軍をはじめ、各地に共産軍起り、その遊擊するところ、所在にソヴエート區が樹立せられたので、彼は新たなる革命の高潮來れりと盲信し、一九三〇年六月、その指導下に、中央政治局をして「新的革命高潮與一省或幾省的首先勝利」を決議せしめ、それに依つて、七月共産軍の長沙占領を見たが、その三日天下に終るや、忽ちコミンテルンの責罰をもたらし、いはゆる李立三コオスの清算を迫られ、一九三〇年末失脚、駐露代表團の一員として赴露した。

瞿秋白。江蘇人三十七歳。北京俄語專門學校を經てモスコー東方勤勞者共産大學卒業、中國國民黨候委、黨宣傳部長から駐露代表となり、一九三〇年歸國、黨隨一の理論家として、「中國革命與中國共産黨」等の著がある。しかし學者肌の男とて、政治上ではただ李立三に追隨するのみであつた。今名義だけは中蘇政府の教育人民委員であるが、

上海に隱れて出ない。

向忠發。湖北人。漢陽兵工廠の造船工出身で、漢冶萍總工會の幹事。武漢政府時代は黨中委兼湖北總工會幹事であつた。一九二八年黨書記就任。李立三失脚後は、陳紹禹等に操られながら、ともかくやつてゐたが、一九三一年六月二十一日國民黨官憲に逮捕され、同二十三日銃殺。享年四十二。

周恩來。宇少山、別に伍豪といふ變名がある。湖南人で三十七歳。黨組織部長、軍事部長を歷任し、李立三のよき協同者であつた。李失脚後も勢力を失はず、陳紹禹（現總書記）とも善く、毛澤東（中蘇政府主席）とも惡くなく、今は第一方面軍總政治委員をやつてゐる。いはゆる元老派の第一人である。

一九二八年から三〇年までの間に、十四軍七萬五千の共産軍が出來、その遊擊地方到る處にソヴエート區がつくられた。この形勢を見ては李立三ならずとも、誰しも革命の新高潮期が來たと思つ

たであらう。しかし長沙コムミユウンの失敗は赫々たる李立三コオスの光榮を泥土に委した。コミンテルン上海代表代表ミフの掩護の下に、陳紹禹、秦邦憲、何子述、王稼嵩一派のロシア留學生派は、猛然起つて李立三を攻擊し、遂に彼を失脚せしめた。黨あつて以來の政治家李立三も、コミンテルンを嵩にした留露派に抵抗し得ず、孤影悄然としてロシアに去つた。かうして李立三時代も清算されたが、この期間各方面に活躍した人材として、左の諸人は記臧を逸してならない。

蘇兆徵。廣東香山縣人。海員出身の優れた指導者で、支那最初の大規模の罷業である香港海員總罷業の首領であつた。五・三〇事件につづく廣東の對英ボイコット及びストライキ委員會の議長でもあつた。一九二五年全國總工會の議長に選ばれ、終身その任に在り、一九二七年三――六月武漢政府の勞働部長をつとめた。一九二七年十二月の廣東コムミユウンでは、選ばれてソヴエート政府主席となつた。一九二八年コミンテルン六全大會に支那を代表して出席、コミンテルン及びプロフインテルン執委に選ばれ、太平洋勞働組合書記局の創立委員にもなつたが、一九二九年二月病死した。

彭湃。廣東海豐、陸豐地方は、支那に於ける最初のソヴエート政府が樹立されたといふ點で有名であるばかりでなく、支那農民運動の發祥地として、忘れてならない地方である。彭は海豐の人、早大經濟科出身。在學中高津正道氏等と善く、建設者同盟の一員として活躍した。幾くもなく共産黨に入黨、農民問題通として黨内に重きを成し、武漢政府時代には、羅綺園、阮嘯仙、毛澤東とともに、農民運動に力を注ぎ、國共分離後、賀龍、葉挺兩軍の援助を得、一九二七年十一月海陸豐ソヴエートを樹立し、翌年二月まで持ちこたへたが、同政府顚覆とともに上海に遁れ、黨中央農民部長となつてゐるうちに、一九二九年就縛銃殺された。彼は公妻主義の宣傳、及びエロ班を活躍せしめたことでも有名である。

張太雷。中共青年團創立者として有名。江蘇人で天津北洋大學卒業。八・七會議で政治局候委に選まれ、廣東コムミユウンを指導し戰死した。

巨星毛澤東

李立三を攻擊し、それに取つて代つた陳紹禹は、安徽人で三十二歳。モスコー中山大學を卒業して一九二九年歸國、中央宣傳部の幹事から、江蘇省委となり、ミフの後援で黨總書記となつた男である。陳に繼ぐ領袖の秦邦憲は、江蘇常熟出身、まだ二十餘歳の青年で　矢張りモスコー派、今政治局書記として、陳をしのぐ勢力を得てゐる。張聞天は思美といふ號で、文獻方面に知られてゐる。上海人。今政治局員である。秦張二人の外、趙榮（兼職工部長）、王雲程、廖成雲等を以て中央政治局を組織してゐる。これに沈澤民、何子述、華少峯（華岡――中國大革命史著者）、楊尙昆（黨宣傳部長）、朱壽（組織部長）、陸定一（共青總書記）等を加へて、中央派と呼ばれてゐる。しかしいづれも李立三ほどの聲望も手腕もなく、萬事實力派たる毛澤東一派にけ落され、單にコミンテルンの電話機をつとめてゐるに過ぎない。

一九三一年十一月七日、江西省東南部の瑞金縣に設立された中華ソヴエート共和國臨時政府の主席として黨・府・區・軍を通じて最大の權力を振つてゐる毛澤東は、湖南湘潭の人で、本年四十歳の働らき盛りである。長沙師範在學中、すでに共産主義に歸依しマルクス主義研究會を起したりしたといふ。一九二〇年、李石曾、吳稚暉等の發起した留佛苦學生の一人として、李立三とともに渡佛し、經濟學を專攻したが、一年足らずで歸國し、一九二一年の黨一全大會には、湖南代表として參加した。一九二四年の國民黨改組に際し、彼は候委に擧げられたが、病氣で湖南に歸り、農民運動を專心研究した。一九二五年又廣東に出て來て、國民黨宣傳部長（汪兆銘）を代理し、傍ら政治講習班埋事農民運動講習所長、政治週報社長をやつてゐたが、その後兼職を罷めて農民運動講習所長專任となつた。國共分裂後鄉里湖南に歸つて農民運動を指導し、その經驗から、農民軍の必要を歸納し、三千のパルチザン隊を組織し、それと朱德軍との合流によつて、最初の共産軍が出來たのである。軍事には素人だが、常に大局に眼を注ぎ軍事冒險を戒しめて、共産軍今日の大を成した點、將に將たる器度なしとしない。

朱德、周恩來を左右に控へ、彭德懷、林彪、方志敏、孔荷寵等の實力派を率ゐ、江西四ソヴエート區を踏んまへて立つ彼の威力は、果然共産軍の大活躍として、最近の新聞紙上を賑はしてゐる。彼と國民黨軍の總帥蔣介石との鍔ぜり合ひは今後の面白い觀物

でなければならぬ。

長髮賊の亂を洪・楊の亂と呼ぶやうに、今日支那共產軍の活躍は、朱、毛の亂といはれ、朱毛以外に人がないやうに見えるが、勿論そんなことはあるべき筈はなく、まだ傳ふべき人材は澤山ある。代表的なところを拔いて見る。

賀龍。共產軍と土匪とは、隨分關係がある。毛澤東が農民黨を組織したときにも、先づ湖南南部の土匪周文、陳光保と聯絡し、それから江西西部の土匪袁文才、王佐を說服して、ともかく三千といふ基本軍隊を得たのであるが、賀龍の場合、彼自身純然たる土匪なのだからます〳〵面白い。彼は湖南桑植の土匪で一九一二年頃から根を張り、一九二一年頃には地方土匪團の巨頭として押しも押されもせぬ地盤を築きあげてゐたが、元來眼先きの利く男とて一九二五年には招撫を受けて四川建國軍第二師長になつた。それから國民革命軍に入り、張發奎の部下になり、河南で張作霖軍を擊破し、その功に依つて、一九二七年六月暫編第二十軍長に昇進し、七月江西省南昌に駐屯してゐたとき、例の國共分離となり、彼は共產軍に煽動せられ、朱德、葉挺とともに叛亂を起した（八・一南昌暴動）。これは二三日で失敗し、福建、廣東を遊擊し、最後に香港に遁れたが、ここで周恩來李立三に遇ひ、その紹介で正式に入黨し、鄉里湖南に潛行し、舊部下を糾合して共產軍を組織し、紅軍第二軍と稱し附近一帶を斬り從へた。さうしてそこで今日の鄂西ソヴエート區の基礎を築いた。後東進して武漢西方の梁山泊である洪湖を占領し、そこを中心に湘鄂西ソヴエート區を建設し、一九三二年までそこに頑張つてゐたのであるが、蔣介石の第四次討伐にもろくも潰え、段德昌とともに殘黨を率ゐて河南・陝西を遊擊し、一千六百哩の大遊擊線を描いてもとの古巢の鄂西ソヴエート區にたどりつき、再びそこを根據として、彼の故鄉の桑植を取り、近頃では東の方に進出を目論んでゐるらしい、紅軍中の一異彩である。

方志敏。小毛澤東といはれ、相當の組織力があり、文獻方面にも活躍してゐる男、江西弋陽の人で、上海大學出身。國共分裂當時は江西省農工部長であつたが、八・七會議から歸鄉して農民軍を組織し、朱毛の井崗山に倣ひ、磨盤山を根據として勢力を養ひ終に今日の江西東北區ソヴエートを組織し、その主席となつてゐる。なかなか眼端の利く男で、區內をガッチリと堅め、糧食問題などもチャンと解決し、相當な統率振りを見せてゐると。毛澤東に次ぐ政治家であらう。（『世界知識』一九三三・六）

第十二節　中共領袖譚

毛澤東と朱德

中國ソヴエートの中心人物毛澤東、共產軍の總帥朱德。この二人の經歷は、流石にもう知られてゐる。で、ここでは改めて彼等の經歷について述べず、共產黨組織の由來、及び一九二七——三一年の足掛け五年に亙る遊擊戰のことを記さう。

八・七會議後、毛澤東は鄉里湖南に歸つて、農民暴動を指導したが、その經驗に依つて、農民を基礎とする軍隊組織の必要を痛感した。そこで、秋收暴動失敗後、湖南省湘潭で三千の農民パルチザン隊を組織し、株州に侵入した。そこで張發奎の部下の林吟金（共產黨員）に遇つた。林はちやうど新兵募集中であつたのである。で、否應なしに林の部隊を併合し、ただちに醴陵に進擊し、江西省內に侵入したとき、これも張發奎の部下の警衛團長である盧德銘の指揮してゐた一軍に遭ひ、これをも合せ、雪達摩のやうに大きくなつて、忽ち萍鄉を攻め落し、次いで蓮花縣をも占領した。そこへ、江西省內の十餘縣を擾がしてゐた朱德軍が合體して、工農紅軍第四軍となつたのである。時に一九二八年四月。

ここに至るまでの朱德の遊擊線は、一九二七年八月南昌暴動を起點として八ヶ月、江西、福建、廣東、湖南の四省數千支里に及んでゐる。南昌暴動失敗後、彼は江西省南部の瑞金に遁れ、それから廣東の潮州、汕頭に延び、轉じて韶關に移つたが、敗殘の餘ほとんど軍を成さざる有樣であつた。それを救ひ上げたのが、第十六軍長の范石生。朱とは同鄉の雲南人だし、それにその當時は今日のやうに軍隊の系統がハッキリ判つてゐるではなし、范は何の氣なしに朱を拾ひ上げて團長とし、樂昌縣下の酥石に駐屯させた。ここは廣東、湖南、江西省境に位し、商業の盛んな地である。ここで朱德は破れた羽根をつくろひ、機會を窺つてゐたが、同年十二月の廣州暴動後、赤い軍隊だといふので、處分されさうになつたので、先んずれば人を制すとばかり、兵變を起して湖南に

入り、宜章縣を占領した。それが一九二八年の初め。それから西に入るつもりであつたが、思ひ直して再び江西、湖南を根據にすることとなり、宜章から酃石に引き歸し、掠奪を恣いままにした後、湖南に入つて汝城を占領した。このとき彼の兵力は、すでに三團以上となつてゐたので、ここではじめて軍を組織し、第四軍を名乘り、自から第四軍長となり、手はじめに桂東、酃縣を取り轉じて江西に入り、遂川、寧岡等の十餘縣を遊擊し、終に毛澤東軍と合したのである。

兩虎すでに合し、朱が軍長に毛が政治委員兼黨代表。血祭りに永新縣を占領してソヴエート政府をつくり、轉じて湖南・江西省境の大山である井崗山に上り、ここを大本營として、極力兵力の補充をはかつた。この山は西崗山ともいひ、江西西部と湖南東部の七縣に跨がる大山で、南支第一の大山である。

朱・毛の井崗山籠りは、一九二八年の冬までつづいた。この間、間斷なく政府軍(主として湖南軍)の攻擊を受けたが、ここに至つて終に支へず、山を下つて遊擊戰に移つた。朱・毛の井崗山下りといつて、共產軍發達史上有名なる出來事である。軍は大庾嶺を望んで南下し、江西の信豐、安遠・尋鄔に遊擊した。一九二九年一月、軍は瑞金を經て寧都に遊擊し、西北上して吉安縣下の東固に根を据ゑ、ここに江西全省ソヴエートを稱した。それからは、ここを根城として各地を遊擊し、廣昌・石城から福建汀州を取り、牢固たる勢力を江西南部に植ゑつけた。一九三〇年二三月頃贛州を攻擊したが下らず、北上して九月吉安を陷れた。吉安はいふまでもなく江西中部の大都會である。

一九三一年に至つて、朱・毛の勢力はますます增大し、就中張輝瓚軍の覆沒に依つて數項數十萬を得、孫連仲部、季振同、楊趙生の寧都兵變に依つて萬餘の兵力を得た。しかし吉安、東固を政府軍に奪回されたので、退いて瑞金に中國ソヴエート中央臨時政府を創立した(一九三一年十一月七日)。爾後今日までの朱・毛の動靜は、その都度わが新聞、雜誌に依つて報ぜられてゐるから、ここには贅しない。

陳紹禹とその一黨

中央總書記陳紹玉のことである。はじめ陳紹庭と聞かされ、それから陳紹玉だといふことになり、最近陳紹禹に一定された。私は、今まで陳紹玉としてゐたが、これから陳紹禹といふことに定める。

彼は安徽人で本年三十二歳。それで中共の總書記になつたといふのだから、誰でも彼を相當な人材だと想ふだらう。社會科學に深く理論を立ち、筆舌共に鋭い英俊少年を想像するだらうが、實は少しもそんな男ではない。それでゐて、なほ彼は相當な人材たるを失はない。すなはち立廻りのうまい點に於いて、はた又黨生活の惡い點を、隅から隅まで了得してゐる點に於いて、ソウトウなもので彼はあるのだ。

さて陳紹禹は、一九二五年に莫斯科中山大學に入學した。それまでは上海にゐて、ホヤホヤの國民黨員であつたのだが、中山大學に入るとすぐ中共青年團に入黨したのだ。彼はそこで副校長のミフに可愛がられた。ミフの全露共產黨に於ける地位は、當時まだ隨分低く、いはゆる最低幹部で、ただ支那問題に精通してゐるといふので、スタアリンから、ちよつと變つた奴だくらゐに思はれてゐたといふ。翌一九二六年に、ミフを中心とするコミンテルン代表團が支那に來たが、通譯が要るといふので、彼が隨つて歸國した。ところがその頃の支那は御承知の通りボロディンの全盛時代で、ミフなどテンデ問題にならぬ。中共の幹部なども、あまりいい待遇もしなかつた。陳紹禹にしてからが、口譯は張太雷に及ばず、筆譯は鄭超麟に及ばず、誰が彼をエライと思ふものか。この時の二人は、それこそ相憐れむといつた形で、數年ならずしてこの二人が、中共を占領するなどとは、想像するものすらなかつた。

不滿の二人が莫斯科に歸つて來る間もなく中山大學校長のラデックがスタアリンに罷めさせられ、副校長のミフが校長になつた。これが陳の運の開きはじめである。當時校内には、教務長アクルと、校内黨支部書記シトニコフとが爭つてゐた。教務派には瞿秀松、董亦湘、顧毅藪、周達明等があり、黨務派には沈澤民、張聞天、吳鍾、李俊之、卜世畸等がゐたが、そこへ校長ミフを擔いだ陳紹禹が、第三派として出現し、瞬く間に兩派をなぎ倒し、アクルとシトニコフの代りにコチユムフとバルマンが任命され、

陳も支部宣傳部長になつた。敎務派の董亦湘・顧穀聲等は、その後も依然ミフに陳には反抗し、內訌は大分長くつづいたが、黨務派の沈澤民・張聞天、卜世畧等は、完全にミフ派に降服し、ミフ・バルマン、陳紹禹・秦邦憲等が中大を壟斷してしまつた。これが一九二七年の冬のことであつた。

一九二八年の六全大會以後中央ではロボット總書記向忠發を押し立てて、李立三が全權を握つてゐた。コミンテルンの眼から見ると、どうも專橫に過ぎるやうである。そこでいはゆる李立三コオスを、打倒するために、莫斯科から人を出すといふことになつた。選に入つて、一九二九年支那に送られたのが、陳紹禹、張聞天、沈澤民、何之述等の二十八人であつた。陳は中央宣部傳の幹事になり、機會を窺つてゐるうち、黨內に羅章龍・何孟雄、王克全等の反李立三派があることを知り、これらの連中と連絡し、反李鬪爭を開始しかけたところを、李立三に探知され、「留意察看」で處分された。陳は吃驚して莫斯科に援助を請ふと、ミフが飛んで來た。さうして陳の黨籍を恢復し、却つて彼を滬東區委書記に、次いで江蘇省委書記に引上げた。これからミフ對李立三の明鬪となり、長沙事件の失敗（一九三〇年七月）後は、李立三の勢漸く振はず、一九三一年初頭、李立三路線は完全に肅淸され、ミフ派の黨權獨裁時代を招來し、一九三一年六月、總書記向忠發の刑死後、陳は中央總書記となり、一味の秦邦憲・張聞天・沈澤民等要職に就いた。

今、政治局書記として、陳紹禹をしのぐほどの權力を振つてゐる秦邦憲は、江蘇常熟の產れで、まだ二十餘歲の一靑年。蘇州工專出身で、中山大學に留學したことは前述の通り。二十八人組の一人として、一九二九年に歸國し、中共靑年團の總書記から、現職に轉じた。陳紹禹以上のしたたか者で、スツカリ實權を握つてゐる。最近の情報に據れば、彼は總書記を代理してゐるといふ。

張聞天は杭州人で三十四歲「思美」「洛甫」の雅號で、文獻方面に知られてゐる。文士上りで、瞿秋白・沈雁冰等の友人だといふ。莫斯科留學時代のイキサツは、陳紹禹のところで書いて置いた。今は政治局員。

沈澤民も莫斯科派の一人。四川人でまだ三十前。小說家茅盾（沈雁冰）の弟である。これも政治局員。

政治局にはこの外趙容（謝唐といふ別名がある。）、廖程雲、王雲程がゐる。趙は山東諸城產、三十餘歲。上海大學の出身で、江蘇省委組織部長、中央組織部祕書等をやつてゐた。廖程雲は江蘇人で、商務印書館の職工上り。王雲程は湖北生れで、これも工人上り。

その他陳紹禹派には孟容（陳紹禹の愛人で莫斯科出）、李作聲（安徽人、莫斯科派）、關向應（莫斯科派）、吳阿錦、杜作祥女士（莫斯科派）、楊尙昆（同等がある。

李立三

李立三はもう過去の人物であるが、最近兩國說も聞えるし、また彼の詳しい經歷も公けにされたことがないから、ここに補つて置く。湖南省醴陵の人。湖南大學卒業後、吳稚暉、李石曾の主唱した留佛苦學生となつて渡佛した。同學に毛澤東、蔡和森、曾埼、孫卓章等があつた。毛、蔡は李とともに共產主義者になり、曾は國家主義者、孫は社會民主主義者となつたのは面白い。李はストライキを起して里昂大學を去り、一九二一年に莫斯科東方大學に入り、趙世炎、何松林等に兄事した。一九二三年歸國、唐山ストライキを指導して、名聲一時に揚り「小莫斯科」と綽名された。國共合作後、京漢鐵路工會書記を以て、全國總工會組織幹事を兼ねた。李の本名は隆郅、ここに至つて李能至と稱した。その後又李誠と名乘り、譚平山、毛澤東の紹介で上海の國民黨黨事處工人科幹事となり、同時にはじめて李立三の名を用ひて共產黨系の工會書記をやつてゐた。五・三〇事件當時の李立三は、趙世炎（施英）何松林（汪壽華）の下で働いてゐた。北伐軍の武漢占領後、彼は漸く頭角を現はし、全總委員長蘇兆徵を看板とし、全總の實權を握つてしまつた。彼が黨の中樞に蟠踞するやうになつたのは、八・七會議以後のことである。

韓麟符

馮玉祥軍と中央軍の間に立つて、灰色的態度を執つてゐる孫殿英軍の祕書長に、韓麟符といふのがある。これが中共のもとの領袖韓麟符なのだ。熱河の富豪の子で、時の都統米振標の子の國賢とは、總角の交であつた。米家に劉馨といふ婢があつた。嬌小玲瓏天生の尤物であつたが、いつの間にやら年少風流の韓麟符と人目を忍ぶ仲となつてゐた。思ひは同じ國賢も馨に屬魂參つて、父の

都統にねだつて、彼女を北京の培華女學校に學ばせることになつた。卒業したら太々にしようといふ算段。ところが韓公子の方が米公子よりも敏捷で、驛が北京へ出て來ると、彼は先廻りして北京大學に入つてゐようといふす法、何にも知らない米公子の送つて來る金が、劉驛・韓の、中央公園や北海でのランデヴーの費用にならうといふ、まるで芝居のやうなことをやつてゐた。

そのうちに韓は、教授李大釗等の感化を受けて、マルクス主義研究會に入り、黨の後起の秀と騙はれることになつた。卒業後天津にやられ、そこで黨の工作に從事すること半年足らず、又北京へ舞戻つて、こんどは公然劉驛と同居し、女師大に通學させた。それから張家口にやられ、口外一帶の土匪の赤化に當つた。女をだますこともうまいが、土匪を丸めることも上手で、忽ち三千人ばかりの土匪の首領になり、黨の間で「口外王」の綽名を貰つたといふから、ソウトウのものである。

さうして北京に歸つて來ると、大事出來、米國賢の手が廻つて、彼と劉驛とが御尋ね者になつてゐる。色男憎くなつて逃げ廻り辛うじて上海に隱れたが、それでもチヤント劉驛を連れてゐたからエライ。劉女士は一層上手で、「色色御世話になりましたが、種種の都合で御別れせねばならなくなりました。今までこしらへていただいたもの、ここに御殘して置きます。」といふ置手紙に、教科書だの、鞋だの、香水の空瓶だのを一緒にして、北京の隱れ家に殘して來たといふから、女は罪が深い。

上海から廣東に行き、國民黨の中央執行委員候補になつた。さうして黃埔軍官學校で政治教官をやつたといふ。北伐軍の武漢占領とともに、彼も武漢に現はれ、民衆運動を牛耳つてゐたが、國共分離、八・七會議の後、天津に舞ひ戻つて地下運動に沒頭した。李大釗捕縛後は、北支共産黨の元老で、幹部派とは反りが合はなかつたが、ともかく獨自の地位を保つてゐた。その後韓運會といふ男の密告で、天津で夫婦で捕まつたが、「口外王」の威力なほ衰へず、各方面の運動效を奏して、いつの間にやら釋放され、孫殿英の平津代表となつてゐたが、たうとう軍に入り込み、祕書長になつて濟ましてゐる。孫軍は結局新疆に行くだらうが、韓もそこで實權を握ることにならう。劉女士は勿論離れずに隨いて行くことだらう。何しろ運のいい男だ。

賀龍と段德昌

共産軍に水滸傳的色彩を添へる土匪分子の第一人は、賀龍である。湖南桑植の土匪で、寄幫の龍頭大哥である。相當の土豪の家に生れたといふが、御定まり通り放埒無慚、一九一二年頃から根を張り、一九二一年頃には、地方土匪團の首領として、押しも押されもせぬ地盤を築いてゐた。一九二五年招撫を受けて、四川建國軍第二師長、それから國民革命軍に入り、張發奎の部下として河南で戰功を立て、一九二七年六月暫編第二十軍長に出世し、南昌に駐屯してゐたとき、例の國共分離となり、共産黨員に煽動され朱德、葉挺とともに叛亂を起した（八・一南昌暴動）。これは二三日で失敗し、葉挺とともに福建、廣東を遊擊し、散々失敗して香港に遁れた。そこに待ち構へてゐたのが周恩來と李立三、二人の紹介で正式に入黨し、故郷に歸つて一旗擧げようと、露人顧問アトリフスキイと一緒に上海に入り、漢口に潛行した。前述した通り、彼は寄幫の中幹部どころだから、潛行には都合がいゝ。漢口で黨の長江局とスツカリ聯絡を執り、さうして故郷桑植に歸り、附近一帶を斬り從へ、二ケ月ならずして紅軍を組織した（政治主任周逸群）。さうして今日の鄂西ソヴエート區の基礎を築いた後、東進して武漢西方の梁山泊である洪湖に據り、湘鄂西ソヴエート區を建設した。そこに彼は一九三二年まで頑張り、ロシア人顧問八人、政治人材として夏曦等を入れ、難攻不落と威張つてゐたが、蔣介石の第四次討伐にもろくも潰え、段德昌とともに殘軍を率ゐて河南、陝西、四川を遊擊し、一千六百哩の大遊擊線を描いてもとの古巢の鄂西ソヴエート區にたどりつき、留守に殘してゐた王炳南軍を合せ、再びそこを根據として故郷桑植を取り、近頃では四川の徐向前と聯絡すべく極力地盤を擴げてゐる。

賀龍がまだ洪湖に覇を稱してゐた頃、猛將段德昌の名が喧ましかつた。聞くと見るとは大違ひ、彼は女にせまほしき一美少年である。毛澤東と同郷の湖南湘潭の生れ、本年取つて二十九歳。小商人の伜だが、親戚に學資を出して貰つてどうにか中學を卒業すると、忽ち廣東に飛んで行つて、共青に入り、政治訓練班を卒業し、國民革命軍第八軍（唐生智）第一師（葉琪）政治部祕書になり、葉師長の氣に入つて、間もなく政治主任になつた。武漢政府時代には、第一師は宜昌に駐屯してゐたが、彼はその辯才で土地の民衆運動を牛耳り、その美貌を以て當國女學校の「女皇后」蕭麗霞といふ美人を得、わが世の春を謳つたものだつた。

そこへ國共分離となる。すぐ農民協會にもぐり込んで、農民遊擊隊を組織した。そのとき鐵砲僅かに三挺あつたきりとは、顏に似合はぬ贅太い漢子といふべしだ。それが半歲經たないうちに七八百となつたといふ。そのうち、矢張りこの方面で農民自衞軍を組織してゐた楊傑が病死すると、段はその部下を讓り受け、約二千人の集團となつて賀龍の許に投じ、名將の名を轟かすことになつたのである。

項英と張國燾

中國ソヴエートの副主席項英は、湖北黃陂（黎元洪の出生地）の產で、本年三十八歲。貧屋の小僧の出身である。二・七事件後共產黨に入り、下層工作を擔任した。顏色の惡い、痩せた小男だが、煽動にかけては天才で、忽ち異常の成績を擧げ、一九二六年上海總工會から漢口にやられ、湖北總工會黨團書記兼湖北省委となり、委員長向忠發を押し立てゝ、一切切り廻した。一九二七年上海に歸り、上海總工會黨團書記兼全總執委に出世し、李立三の心腹となつてゐた。李立三路線失敗後、彼は上海に見切りをつけて江西に入り、毛澤東に取り入り、瑞金政府成立とともに、中國ソヴエート中央政府副主席として、元老張國燾と肩を並べる身分となつた。

彼がこの地位を得たのは、しかし毛澤東に取入つただけのことではなく、チヤンと軍界に勢力を扶植してしまつたからである。すなはち彼は中央政府組織の命を受けて、上海から派遣されて來ると、先づ自から紅軍第八軍長を兼ね、さうして上海、漢口から舊部下（莫斯科軍政學校出で、工人糾察隊隊員となつてゐた連中）を呼び寄せ、それらの連中を各部隊に配屬し、牢固たる勢力をつくつた。今第二十軍長をやつてゐる陳毅なども、純然たる項英の乾兒である。

も一人の中國ソヴエート副主席張國燾は、江西吉安の世家の子で、北京大學の出身、陳獨秀時代から引きつづいての黨の幹部で今では元老の一人である。目下四川ソヴエート組織の重任を帶びてゐるらしく、四川の徐向前軍の中に入つてゐると信ぜられてゐる。

瞿秋白及び向忠發

李立三が「支那のスタアリン」といはれた時代、瞿秋白は、「支那のブハアリン」と稱せられ、黨內第一の理論家と推されたものだ。江蘇常州の人、北京の俄專から莫斯科東方大學に留學し、彭述之と同學で、一九二四年に歸國した。彭はブハアリンに私淑し、瞿はトロツキイ派の傾向があつたといふ。さて歸國して見ると、彭は陳獨秀の御氣に入りなので（後は一九三二年七月、陳獨秀と同時に捕縛された。）一躍して宣傳部長になつたが、瞿は學問は彭の上であつたが、何等の職も與へられず、上海大學の社會學教授をやつて御茶を濁してゐた。その後陳延年（獨秀の子）・李立三の後援で中央執委候補になり、一九二七年の五全大會で、やつと正式の執委になることが出來た。國共分離で陳獨秀が失脚すると、彼ははじめて得意時代に入り、李立三、向忠發と新中央（非常委員會といふ名で知られてゐる。）を組織し、八・七會議のとき、コミンテルン代表ロミナーゼの推薦で總書記兼政治局主席となつた。そこで例の盲動政策の實行となり、秋收暴動から廣州暴動に及び、着々失敗を重ねた。さうして一九二八年の六全大會では彼は衆矢の的となり、完膚なきまでにやつつけられた。その時彼を最も猛烈に攻擊したのが向忠發と李立三だつたといふからやり切れない。書獻子瞿秋白は、可愛想に一言の辯解も出來ず、總書記と政治局主席を向忠發に奪はれ、莫斯科代表團の一員としてロシアに駐まつた。後に李立三路線問題が八釜しくなると、彼はコミンテルンの命を受けて歸國し、その糾正に當つたが、結局李立三に捲かれた形で、一九三一年のはじめに失脚し、陳紹禹等の幹部派に對し、非幹部派の立場を取るに至つた。瑞金政府で教育人民委員にされたが、名義だけのことで、ズツと雌伏をつゞけてゐる。

畢竟彼は書齋の人で、名著「中國革命と中國共產黨」等の文獻に依つて、永久に記憶せられるであらう。

瞿秋白に代つて總書記になつた向忠發は、湖北人で漢陽兵工廠の職工上りで、二・七事件のとき、施洋（同事件の領導）の氣に入つて、その紹介で入黨し、その後湖北總工會委員長となつた男で、學問もなく、コミンテルンの命令を忠實に遵奉したので、總書記に取上げられたのだ。しかし彼も李立三に引きずり廻され、いい加減コミンテルンの心證を惡くした揚句の果てが、一九三一年六月逮捕銃殺されてしまつた。國民黨の譚延闓のやうな好々爺だつたといふ。

方志敏と邵式平

江西ソヴエート區は、範圍こそ小さいが、よく纒まつたソヴエート區として有名である。この區の領導者が方志敏、邵式平、周建屏の三人である。就中方志敏が最も有名であるが、彼は最近何かの理由で失脚し、邵式平がこの區の最高首領になつてゐるといふ噂である。

方志敏は江西弋陽の人で、上海大學の出身。國共分離の際には、江西省の農工部長であつたが、八・七會議後歸鄉して農民軍を組織し、朱毛の井崗山に倣ひ、鵝磐山を根據にしてソヴエート區を創立し、今日まで持ちこたへて來た。最近、多分軍事上の失敗から、邵式平に取つて代られたらしい。

邵式平は南昌民國日報の記者で、兼ねて同省委宣傳部の幹事であつた。新聞記者をやりながら、農民運動に熱中し、方志敏とも聯絡してゐたが、たうとう新聞を罷めて弋陽の農村に入り込み、方とともに農民遊擊隊を組織し、方を總隊長に、自から總參謀となり、各地に遊擊し、終に江西東北區ソヴエートを樹立した。遊擊隊は紅軍第十軍と改稱され、方が軍長に、邵がその政治委員となつた。

兩雄竝び立たず、內訌は大分久しかつたが、結局邵の勝となり、ソヴエート主席の地位も邵に奪はれ、軍長は周建屏のものになり、方志敏は今上海にゐると傳へられてゐる。

何孟雄と羅章龍

この二人の名前は、李立三路線問題のとき、しば〳〵御目にかゝつた。何孟雄は毛澤東と同鄉の湖南湘潭人。鄉里の高小を出たきりで、北京の叔父（國會議員をやつてゐた）を賴つて北京大學の傍聽生になつた。それが僅か十六歲のときだつた。當時の北京は赤化の搖籃、彼もすぐ赤化し、京漢鐵路工人の間にもぐつて運動をやり、年は若いが一方の領袖と立てられた。一九二七年頃上海に現はれ、江蘇省委兼區委書記、上海總工會の經濟鬪爭部長となつた。しかし非常に率直な男なので、誰とも衝突するので、正式の中委にもなれず、候補執委になつただけだつた。李立三には最初から反感を持ち、李立三路線反對を呼號して、その名一時顯はれたが、卑怯な幹部派に密告され、一九三〇年十一月逮捕された。

羅章龍も反立三派の領袖である。湖南瀏陽の人で、本年三十三歲。大地主の家に生れ、北京大學の哲學系を卒業した。在學中李大釗の紹介で入黨、主として北方で工作し、一九二八年に中共中委となり、全總の常委を兼ねてゐた。

陳紹禹が莫斯科から歸つて來ると、羅は何孟雄、王克全等を率ゐて陳と聯絡し、李立三路線を打倒した。さうすると陳は、今度は羅一派を迫害し、羅、何、王、徐錫根等の黨籍を除いた。彼はこれに屈せず、非常會議を率ゐて幹部派に對し苦鬪三年、いはゆる「羅章龍右派」の活動、相當觀るべきものがあつたが、一九三三年四月二十七日に及んで、同志三人とともに捕縛され、三民主義に轉向して釋放された。

黃平その他の轉向派

向忠發刑死後（一九三一年六月）、國民政府の共產黨員羅織はますます猛烈で、羅綺園、羅章龍・黃平（中蘇中委）・余飛　徐錫根（中蘇中委）胡鈞鶴（同）胡大海（全總青年工人部長）、袁炳輝（江蘇省委）、陳享洲（山東特委）等が捕縛された。羅綺園は毛澤東、彭湃、阮嘯仙と竝稱される農民問題の權威で、捕縛されても轉向しなかつたが、羅章龍以下は皆轉向した。羅章龍は別とし、黃平以下の連中を、共通自新派といつてゐる。

この中で人材とすべきは黃平である。彼の名が我等の耳朶に觸れたのは、一九二七年十二月の廣西ソヴエート政府に、外交人民委員として登臺してからである。廣東人ではじめフランスに留學し、後莫斯科東方大學を出た。彼の兄も姉も皆留學生で、しかも博士だといふ。彼も語學の天才で、英、佛、獨、露の四國語に通じ、中共有數の才人である。一九二五年廣東區委、工人部長ボロディンの通譯をやつてゐた。國共分離後歸京し、廣東省委、工人部長となり、廣州暴動で廣州ソヴエートの外交人民委員となつた。暴動失敗後莫斯科に遁れ、一九三〇年歸國、一九三一年中蘇中委・一九三二年上海に歸つて中委候補に擧げられ、江西省委書記を

兼ねてゐたが、同年十二月中央の命で北方工作指導中、天津官憲の手で逮捕され、一月ならずして轉向した。

華少峯と劉少奇

華少峯は華岡ともいひ「中國大革命史」の著者である。浙江紹興の人。中央宣傳部長から河北省委書記となり、今は北平にゐる筈だ。劉少奇は黄豪又は蔡季平と變名してゐる。湖南、三十九歳、莫斯科大學出。既に全總委員長。（『東京』一九三三・九）

第十三節　「赤豹」毛澤東傳

「毛澤東は、支那人ぢやない。渡邊政之輔だ」筆者に、かう、眞面目にいつてきかせた人がある。「姓は朱、名は毛、彼の率ゐる共產軍は、……」などと、――これは、ほんとうの話だ。ウッカリすると、本場の支那でも、何も知らぬ民衆は、さう考へてゐたかも知れない。今日、支那共產軍の主力として、朱・毛軍の名は世界的に知られてゐるが、數年前までは、神祕的な存在とまでは行かなくても、それに近いものであつたことは爭はれない。從つて毛澤東の經歷なども、サッパリ判らなかつたものだが、その後、共產軍の勢力增大に連れ、彼の一擧一動が、全世界の注目を惹くやうになり、彼の輪廓も、大體ハッキリして來てゐる。もともと國共合作時代には、代理宣傳部長をやつたり、農民運動講習所長を勤めたりした男だから、決して素狀の知れぬ筈はないのだ。そこで、その時代に、彼を識つてゐた人間が出て來て、彼の逸話を書いたり、人物を論じたり、この二三年に、さうした記述が五ッ六ッ現はれた。それを材料にして、書いて行くつもりだが、いづれもうしばらくしたら、又書き直さなくてはなるまいと思つてゐる。といふのは、これらの材料中、まだ少し腑に落ちぬものもあり、彼の寫眞についていつても、二年前に見たのは、やせて頰骨の飛び出た奴だつたが、ごく最近見たのでは、眞丸るに肥つて、肺病患者らしいところはちつともない。まるで別人のやうだ。こんな具合ひだから、取り敢へず今得られる限りの資料に據つて書いて置く。

產れは湖南の湘潭、行つて見たことがないから何ともいへぬが、杜甫の詩に、窄靈岸といふのがあり、水に臨んで絕壁數丈その底の五色の石、鮮明にして白沙霜雪のごときが見え、赤岸は朝霞のごとしといふから、いはゆる山紫水明の鄕たることは間違ひない。ここの產れだといふことは、各說みな一致してゐる。大地主の出だとか、反對に、ごく貧乏人の子だともいふが、そこのところは分らぬ。が、ともかく、少年にして長沙第一師範に學んだことは確實だ。ここで彼ははるかにロシア革命を聽き、更に、北京大學に起つたその反響を聽いたのである。北京大學で陳獨秀、李大釗兩教授を中心として、張國燾、韓麟符等の左傾學生が「マルクス主義研究會」を組織した一九一八年には、彼も同學の有志を糾合して「マルクス學會」をつくつたのであつた。ロシアの評論家、アル・ハマダンに據ると、彼は學內に於ける活動だけでは物足らず、街頭に立つて盛んに宣傳してゐたといふことだ。

ここで、彼の年齡を推定して見る。ある資料に、彼は本年（一九三六年）四十三歳だとある。さうすると、一九一八年には、二十五歳でなくてはならぬが、師範の學生としては、年を取り過ぎてゐるやうだ。北京大學にゐた張國燾が、このとき二十歳、その師の李大釗にしてからが、まだ二十八九だつたといふのに、一師範生たる毛が二十五歳といふのは、少し解せぬが、貧乏人の子かなにかで、入學が遲れたといふやうなことがあるかも知れぬから、このままにして置く。

年長だつたせゐでもあらうか、隨分猛烈に牛耳つたらしい「平和な學校だつたが、彼が來てからは、波だつ海のやうに、全學生がメチヤメチヤにいきり立つた。」と、彼の傳記作者の一人が書いてゐる。「湖南王」の綽名が、この頃すでについてゐたといふし、彼といふ男は、ノッケから、相當のしろ物だつたんだ。

長沙師範をいつ頃卒業したのか、その邊、サッパリ判らぬ。彼に關して、最初に書かれた資料では、長沙師範卒業後、北京大學に入つたとなつてゐるが、これは誤傳である。李石曾等の發起した留佛苦學生として、李立三等と一緒に行つたといふ說もあつたが、これにも疑問がある。李立三の渡佛は、一九二二年だし、その前年の一九二一年の七月には、中國共產黨第一次全國代表大會が開かれ、毛が長沙代表として出席してゐるからだ。この大會では、陳獨秀が委員長に、周佛海が副委員長、さうして張國燾が組織部長になつてゐるのに、毛はまだ役附きになつてゐないところを見ると、彼の當時の地位が判る。要するにこのときの中共は、

北京大學系が主流で、湖南系は傍流だつたのだ。だが、間もなく、毛獨得のネバリ强い策動がはじまり、一九二四年、中共と國民黨との提携が成立したときには、彼はすでに中共の中央委員であり、國民黨內に在る中共フラクションの實權を握つて居り、國民黨第一期の候補中央執行委員となつたのである。フラクションの責任者は、譚平山だつたが、ちよつとハデなところがあるばかりで、その後・根抵のない男だし、經歷からいつて譚に次ぐ林祖涵は、好々爺に過ぎなかつたし、峻峭深酷な毛の敵ではなかつたのだ。しかし、彼に取つて氣の毒だつたのは、中共の「家長」である陳獨秀が、北京大學系を偏愛し、湖南系を虐待したことだつた。陳は毛に對し、「浙江が落伍してる。君が行つて、組織し直して呉れると好都合だが。」と、態よく追つ拂ひ策を講じたものだ。流石の毛も、これには弱つたが、「少し頭を痛めてるんで、上海にゐてユックリしたい。」と逃げ、首尾よく上海執行部組織部（國民黨中央執行委員會の）の祕書で、百二十元の月給にありつくことになつた。この當時、中共の工作人員は、二十元くらゐしか貰つてゐなかつたさうで、それに比ぶれば、よほどいいわけだ。

上海環龍路四十四號の上海執行部では、葉楚傖が組織部長で、その下に何世楨、孫鐵人が居り、中共系からは惲代英、沈澤民、陳碧嬭女史（彭述之の妻）がゐたが、毛はその双方から憎まれ、何の權利も與へられず、孤立してゐたが、例の煽動力で、間もなく下級黨員の間に勢力を扶植し、兪秀松、徐白民、朱義權等を爪牙として、葉楚傖と對抗し、ほとんど葉派を覆がへさうとしたのは、流石に凄かつた。しかし、そのために黨費二千元を費消したために、急轉直下毛の敗戰となり、一九二四年の十一月、湖南湘潭に歸り、約十ヶ月間、同地と長沙の間に蟄居し、農民問題の研究に當つた。これが、後に大變役立つた。

一九二五年九月に、彼は又廣東に現はれ、譚平山を脅迫して、たうとう宣傳部長代理（本任は汪兆銘）にありついた。一九二六年一月の國民黨二全大會では、依然候補中央執行委員に當選し、宣傳部長代理の外、中央農民運動講習所長、政治週報所長、中央政治講習班理事を兼ねた。宣傳部長としては、彼は例に依つて湖南同鄕人を引入れ、汪兆銘系を徐々に逐ひ出し、沈雁冰（今時めいてゐる作家茅盾のこと）や、アヂ演說で當時第一人者だつた蕭楚女の外は、全部湘潭人で固め、「宣傳部ぢやない。湘潭同鄕クラブだ。」と、惡口いはれたくらゐ。――舅の李某を圖書館主任にして、書籍購入費をゴマカしたり、支離滅裂の「五・四運動宣傳大綱」をこしらへて、張太雷から小ッピドクやつつけられると、それを根に持つて張を廣東區委員から追拂つたり、「國民運動小叢書」の編輯費五千元を着服して、一冊も出版しなかつたり、麻雀をやつて、沈雁冰とたつた五仙のことで大議論をやつたり、他愛もない「黨官僚」の一日一日を送つたものだ。ただこの間にも、農民運動の研究を怠らず、それから、有名な新聞好きで、朝から晩まで、何かしら新聞を讀んで、時勢の動きを睨んでゐたことは、流石だと、アトから回想される。

そのうちに、國民黨の實權を握る蔣介石と、共產軍との間に隙が出來、一九二六年の三月二十日に、共產派の謀叛が「中山艦事件」となつて現はれ、これに反發した蔣が、五月、「黨務整理案」を中央政治會議に提出可決。その結果、共產派の部長はその椅子を失つた。毛もその地位を奪はれたので、農民運動講習所に一味を集中し、蕭楚女を教務主任にして乾兒の養成に全力を注いだ。次いで北伐となり、武漢政府時代（國民黨左派と共產派のブロックには、北方農民運動の視察から、遲ればせに武漢に入り、中共農民部長になつたが、ドチラかといへば不遇だつた。廣東時代が、彼の前期の黃金時代だつたんだ。

ここまでが彼の前半生といへるだらう。一九二七年だつたから、ちやうど彼の三十歲までだ。この年の七月、國共兩黨は完全に分離し、その八月七日、九江で中共更生の會議が開かれた。指導者は、ボロディン、ロイ去つた後を受けたコミンテルン新代表、印度籍黨員ロミナアゼで、蘇兆徵、李立三、向忠發、毛澤東、張國燾、方志敏等が出席し、日和見主義を清算し、支那ボリシェヴイキ化の開始を決議した。有名な八・七會議であるが、會議後、毛は鄕里に歸り、秋の收穫を目指して、農民暴動を組織、指導した。いはゆる「四省秋收暴動」中、毛の指導した湖南のそれが、最大の成績を擧げたが、全體としては、勿論失敗だつた。しかしこの失敗は、毛に多大の教訓を與へた。すなはち支那の革命は、結局農村革命であり、それには農民を基礎とする軍隊が必要だといふことだつた。

往年の「黨官僚」毛澤東に、この自覺が生じたとき、彼ははじめて緊張した。彼の後半生は、ここに出發點を見出す。別人のや

うになつた彼は、先づ湘潭で農民パルチザン隊三千を組織した。一說に據れば、湘潭ではなく、平江・瀏陽地方の農民自衞軍で、余賚民、蘇先俊・盧德銘・陳浩等の率ゐてゐたものだといふ。又組織の地點についても、江西の銅鼓だとする說が本當のやうだ。ともかくこのパルチザン隊を率ゐて、湖南の株州、江西の萍鄕、蓮花地方を遊擊し、省境七縣に亘る大山である井崗山の土匪、王佐・袁文才とも聯絡が出來たのが、一九二八年の一月、そこへ江西南部十數縣を遊擊してゐた朱德軍が現はれ、二月、毛の農民パルチザン隊と國民黨軍隊崩れの朱德軍とが永新地方で合流し、中國工農紅軍第四軍を組織し、朱が軍長に毛が政治委員になつた。これが、眞正の意味での支那共産軍の濫觴である。特に一九二八年二月から四月までの間である。

朱、毛が井崗山に覇を稱したとの報道が擴がると、所在に、これに響應するものが出來、智龍・彭德懷・黃公略・許繼愼・鄺繼勛、蔡成熙、方志敏等の十四軍七萬五千の共産軍が出來、一九三〇年七月の長沙コムミューンを經て、その勢ひはますます强くなり、その遊擊戰に依つてソヴエート區域が擴れ、一九三一年十一月には、江西の東南隅瑞金に、第一次中國ソヴエート代表大會が開かれ、中華ソヴエート共和國臨時中央政府が樹立され、毛澤東が主席に擧げられた。

一九三二年には、ソヴエート區域は江西・福建、浙江、湖南、湖北、安徽、河南、四川各省に擴がり、共産軍の實力も三十餘萬に達し、正に黨軍の極盛時代を現出したが、一方蔣介石の討伐も、回を重ねる毎に巧妙になり、一九三三――四年の第五回討伐で共産軍の本據瑞金が陷落し、共産軍は一路西漸し、現在では左表のやうな情勢になつてゐる。

(一)陝・甘ソヴエート區。陝西北部、甘肅東部、二十數縣に及ぶ。領導者は毛澤東、リトロフ少將、彭德懷、林彪、鄧發　徐海東、劉子丹等で、合計兵力三萬。本年二月から四月にかけ、山西西部及び南部を荒した共産軍は、すなはちこの部隊である。

(二)川・康ソヴエート區。四川成都の西方、西康との省境地方七八縣がその勢圈で、領導者は朱德・徐向前、張國燾、羅炳輝・董振堂、何畏・陳昌浩等。兵力三萬以上・四萬に近い。

(三)贛・蘇軍。湖南極西部の湘鄂西ソヴエート區にゐた賀龍・蕭克軍は、昨年十一月以來西遷行動を起し、本年一月貴州に侵入し、目下雲南北部を遊擊してゐるが、恐らく川・康ソヴエート區に入るものと觀られてゐる。想定兵力二萬。

(四)その他。鄂豫皖區（湖北・河南・安徽省境）に高俊亭軍六千。江西・福建・浙江地方各地に殘留してゐる項英、陳毅・徐彥剛、劉英、粟裕等のいはゆる殘匪が一萬五千くらゐあらう。

支那研究者の右翼である私が觀ても、想定兵力十一二萬はある。この雄厚な兵力を提さげて、總帥毛澤東――陰險蛇のごとく、敏捷狐に似た彼が、今後いかなる動きを見せるか？　山西をちよつと荒しただけで、眼前見るやうな混亂を起し、山西の中央廂服などいふ、驚くべき政治的影響を與へてゐる。毛の鋒先きが、緩遠――內蒙古に向けられたらどうなる？　北支赤化共同防衞といふ、國際的大經綸を、すでに天下に公けにしてゐる日本は、默つてゐるわけに行かなくなるだらう。我等の關心はここに於いて、この「赤色の豹」毛澤東の一擧一動に集中せざるを得ないのである。（『世界知識』一九三六・六）

第十四節　毛澤東印象記

これは藍衣社系の雜誌「社會新聞」に「彼林」と名乘る匿名記者――恐らく中共からの轉向者――が書いたのを譯したものである。

去年の秋、日本の或る大雜誌が最近百年間の支那十大偉人の投票をやつたことがある。當選したのが洪秀全、曾國藩、李鴻章、康有爲、梁啓超、孫文、袁世凱、陳獨秀、蔣介石、毛澤東の十人だつたといふ。アノ、毛澤東がねえ。だが、日本人だけではないパリの「ユマニテ」もかつて毛澤東の傳を載せ、「中國無産階級の偉大なる領袖」と、大書したさうだ。たしかに、國際間における彼の聲望は、すでに陳獨秀に取つて代つてゐるのだ。

彼を知つてゐるものから見れば、これほど意外なことはない。私は彼の同僚だつたし、同じ室に住み、同じテーブルで、何ヶ月も一緒に飯を食つた仲だが、彼のどこがエライのか、今でも見當がつかないのだ。

一九二四年の夏、そのとき、私は杭州の或る工場の職工だつた。ストライキで馘首され、革命情緒を沸らせつつ國民黨上海執行委に手紙を出し、入黨を要求した。それの返事に、毛澤東といふ署名があつた。彼は私の紹介人となつて、入黨させて呉れ「嚮導」だとか、「新青年」だとか、種々の宣傳書類を送つて呉れた。かうして彼との交通がはじまり、彼が中共中委であり、國民黨の中委候補であることを知つたのである。

はじめて會つたのは、翌一九二五年の冬。私は黄埔軍官學校にゐた。毛が中央宣傳部長代理として就任したと聞いたので、大急きで大東路三十號の中央黨部に駆けつけた。左側の二階が宣傳部。汚ならしい、破れ寺のやうなところに、籐の椅子が何脚か並べてあり洋服を着た二人の男が無駄話をしてゐた。その中の一人が陳春圃で、汪兆銘夫人陳璧君の弟だつた。

「毛部長」は、留守です。もう歸つて來るでせうから、御待ちになつて下さい。」

――淡灰色の、愛國布の大褂兒を着て、帽子も被らず、長い、亂れた髪の男が、ソソクサと入つて來た。布の靴を穿いてゐるがそれには二つも三つも穴があいてゐる。顔色の惡い、まるで病人見たいな男、奥の室に入ると慌だしく新聞を讀んでゐる。宣傳部のボーイかなんかだらうと思つてゐると陳春圃が「あなたは毛部長に、御會ひになるんでせう?」と、アノ男が毛部長、毛澤東だつたのだ！　ゲッソリしたが、誰も梅蘭芳のやうな顔を持つわけには行かないと思ひかへして、勇を鼓して奥の室に進んだ。

「〇〇です。いつも御世話になつてゐます。」

「〇同志ですか。よくいらつしやいました。」

耳を刺す湖南なまり、ヂッと見詰めて、然し唇には微笑を浮べてゐる。この微笑が、すこし、第一印象を修正した。

「宣傳部の仕事は忙がしいでせう。」

「ナニ、大したことはありませんよ。實は、あまり興味がないのです。僕は今農民問題を研究してゐます。三億二千萬の農民が、起ち上るのでなければいはゆる革命は、一個の農民問題です。」

それから滔々と農民問題の講義をはじめた。二時間あまりも續いたか。この初對面が機緣になつて、私は宣傳部に轉じ、しかも彼の家に同居することになつた。

彼の日常生活の出鱈目さ。毎日正午でなければ起きない。といつても、寢てゐるのではない。醒めてはゐるのだか、起きないで新聞を讀んでゐるのだ。それから、起きても新聞、便所でも新聞、人力車の上でも新聞、朝から晩まで新聞を讀んでばかりゐて、本職の宣傳の方は少しもやらない。歯がゆくなつて、宣傳部改革案を持ち出したら、「餘計なことをするな。」と、頭ごなしにやつつけられた。

ボルシェヴイキの首領が、こんなことでならうかと思つた。全く、彼には領袖の風格はない。小さいことで、よく喧嘩をする。ある時、沈雁冰（今の有名な茅盾）、蕭楚女、毛、私の四人で麻雀をやつたら、僅か五仙のことで、毛と蕭は、十分間も口論した。

同郷觀念の強いことも、彼の缺點だ。湖南人以外は、まるで眼中にない。個性が強過ぎる。自分のやつたことは全部正しく、他人のやつたことは皆惡い。領袖慾があり過ぎる。理論家でもない。煽動家でもない。文章も下手だし、講演も出來ない。私の眼から見れば、單なる一個の官僚でしかなかつた。ただ長所と思はれるのは、組織的能力と、克明に新聞を讀んで、社會事象をよく見てゐることだ。新聞だけでなく、あらゆる雜誌、單行本はもとより、流行歌のやうなものまで、遍ねく眼を通した。彼はよくかういつた。

「どんなツマラヌ出版物でも、賣れてゐるといふだけで、我々はそれに注意しなければならぬ。どんなに賣れない書物でも、社會にはいくらかの影響を及ぼしてゐるものだ。」代理宣傳部長としての半年間、彼はほとんど何等の成績を擧げなかつた。さうして二中全會後、彼も私も、同時に宣傳部を離れ、彼は暫らく農民運動講習所長をやり、間もなく北方農民運動の視察に行つた。

一九二七年の武漢政府時代には、彼は依然農民運動講習所長たつたが、この方面の人材の缺乏が、彼に幸ひして久しからずして中央農民部長を兼ねるやうになつた。大分エラクなつたな、矢張りどこかいいところがあるのだらうと思つた。時々會ひに行つた

が、結果は依然失望だつた。相變らず個性が强く、その癖、やはり一日中ダラリとして、すこしも緊張しない。誰だかいつてゐたが「永久の病人」だ。

こんな男、毛澤東が、湖南に歸つて農民運動をやり出したと聞いて、何が出來るかと冷笑してゐたのだが、忽ちの間に共產軍をつくり、雪達磨ののやうに見る見る擴がつて行つたのには實際吃驚した。今日では、彼は中國ソヴエート中央執行委員會主席であり、世界的に有名な人物になつてゐる。アノ毛澤東が、ねえ。だが湖南入り後の彼を知らない私には「彼がこれに値ひしない」と斷定する資格はない。或は湖南入り後は、彼ははじめて「緊張」したのかも知れない。先達ても檳榔鎭で、火夫の服裝をして、大演說をやつたといふことだ。演說も上手になつてゐるのだらう。（『世界知識』一九三四・九）

第十五節　瞿秋白傳

福建省西南隅、江西省境に近く長汀縣がある。もと汀州といつたところで、共產軍花やかなりし頃は、中央ソヴエート區の關門だつた要害の地であるが、――その共產軍が、中央軍の第五回討伐に抗し切れず、赤色首都瑞金一帶を拋棄して、一路西漸し去つてから、約半歲後、一九三五年の三月末には、この地方は、上杭縣から武平縣にかけて、鍾紹葵の率ゐる保安第十四團（團は、わが聯隊に當る）が駐屯して「殘匪」の掃蕩に當つてゐた。「殘匪」といふのは、共產軍が本據江西を拋棄するに當つて、戰略上の必要のために、江西、福建、浙江、安徽方面に殘留させたパルチザン隊のことで、ソヴエート中央執行委員會副主席項英を總指揮者とし、パルチザン隊としての性質上、出來るだけ小さく分裂し、各地に出動して中央軍を牽制した。その總數、約三萬五千といはれたが、主力軍退出から、半歲經つた頃には、一萬五千から二萬くらゐになつてゐたと思はれる。

パルチザンといへば、我等は、例の「尼港事件」を想ひ出すのだが、支那パルチザンも相當のもので、多年鍛へあげた脚力を利用して、變幻出沒の妙をきはめるので、その掃蕩に當つてゐる中央軍側も、駐屯地にテレッとしてゐるわけには行かない。鍾紹葵の第十四團も、絕えず受持區域を游擊してゐたが、ちやうど長汀縣と上杭縣の中央水口といふ、この邊でのにぎやかな町の西五支里ばかりの路潭地方で、一隊のパルチザンに遭遇した。約一連（中隊）の兵力だつたのでわけなくこれを追ひ散らし、相當數の武器を鹵獲し、俘虜も七八名あつた。その中に、林祺祥といふ、三十七八の醫者、陳秀英と名乘る看護婦、人質として共產軍に拉致されてゐた巡禮の妻、周玉蓮といふ名の姙婦があつた。呑氣な鐘は、彼等の白狀を少しも疑はず、一先づ水口に護送して、監禁して置いたところが、彼の部下の兵士に、もと共產軍の兵士だつたものがゐて、巡禮の妻、周玉蓮と名乘つてゐる姙婦は、ソヴエート中央執行委員會副主席項英の妻の張亮であると密告した。對質の結果張も仕方なく自白したが、林祺祥と陳秀英の身分は判らないだが、ともかく然るべき代物だらうと見込んで嚴重に、監視してゐるうちに、長汀の第三十六師から、

「兆徵縣ソヴエート主席を捕縛したところ、彼は、ソヴエート中央執行委員、兼中央政府教育人民委員會主席であり、かつては中國共產黨總書記（書記長）でもあつた瞿秋白等が、水口で捕虜になつたと陳述してゐる。先般貴團からの報告にあつた路潭での俘虜といふのが、どうもそれらしいから、きびしく訊問の上白狀したら、ただちに身柄を長汀に護送して貰ひたい。なほ、兆徵縣ソヴエート主席の陳述に據ると瞿等を保護してゐた共產軍は、いづれもモーゼル銃を持つてゐたといふことだ。」

といふ電報が來た。今更吃驚して、林祺祥と陳秀英を訊問したところが、瞿等も觀念して、スラスラ白狀した。林は瞿秋白であり、陳秀英は、ソヴエー中央執行委員・兼中央政府司法人民委員會主席梁柏臺の妻で、ソヴエート中央執行委員、兼黨中央婦女部長の要職にゐた周月林であつた。共產軍が西遷を決定したとき、ソヴエート中央では、瞿は肺病であり、張亮は姙娠してゐるし、到底强行軍に堪へられまいから、ソヴエート區を離れ、福建省龍巖縣地方に潛入するがよからうといふので、この二人と、周月林それから、ソヴエート中央執行委員會主席毛澤東の最初からの同志で、黨第一回大會に、毛と一緒に湖南を代表して出席した何叔衡（ソヴエート中央執行委員）も、六十歲の老年だからといふので、一緒に行くこととなり、一行の護送係として、龍巖出身の鄧子恢と、永定出身の某が同行した。鄧はソヴエート中央候補執行委員で、今は少し不遇だが一九三〇年頃は、福建ソヴエート主席として、

飛ぶ鳥をおとしたこともあり、この邊の地理をよく知り、方言にも通じてゐるからだ。かくて一行は、龍巖を志し、モーゼル銃を持つた一連の兵士に護られて、前記のごとく、路潭地方に現はれたところを第十四團に包圍され、利かぬ氣の何叔衡は、抵抗したため射殺され、瞿等は俘虜となり、スパシコイ鄧子恢だけは、逃亡に成功した。

自白に依つて以上の事實が判つたので、鐘は彼等を長汀に護送し、そこで、共産軍から投降した兵士等を證人として、首實檢の結果、間違ひなしといふことになつて、第三十六師本部の獄に投ぜられた。龍巖に在る第二區綏靖司令部から、軍事委員會長蔣介石に伺ひを立てた後、その命令で、六月十八日長汀中山公園で銃殺された。

銃殺の朝、特務連連長（中隊長）廖祥光が獄中から瞿を連れ出し、中央公園で寫眞を撮らせた。彼の覺悟は、もうきまつてゐたらしく、撮影が終つて銃殺命令を示したが、割合に平氣であつた。「何か遺言はないか？」と聞くと、「未定稿の詩が一つある。」といつて、筆と紙とを求め、次のやうに書いた。

「六月十七日夜、夢の中で山路を歩いてゐると、夕陽が明滅して、寒さがしみじみと迫る。唐詩の「夕陽明滅亂山中。」の一句が浮び、それに引き出されて、一詩を得た。

夕陽明滅亂山中。
落葉寒泉聽不同。
已忍伶俜十年事。
心持半偈萬緣空。」

「眼底、烟雲過ぎつくるの時、正にわが逍遙の處である。」

「これは詞讖でない。獄中の言志である。」

「秋白」と署名して筆を拋ち、與へられた白乾酒（燒酒）を一杯、うまさうに飲み乾した後、刑場に曳かれ、ロシア語でインタナシヨナル歌を微吟し、手にはシガレットを持ちながら、微笑しつつ彈丸を飲んだ。中共隨一のセオリスト、瞿秋白は、かくしてその三十八年の短かき生涯を終つたのである。

瞿秋白の本名は瞿霜で、その「霜」から「秋白」といふ筆名を考へついたのだが、終にはそれで通つてしまつた。一八九八年に、江蘇省武進縣（すなはち常州――蘇州と鎭江の中間に位する名邑。）に生れた。その家は、「代々書香あり。」といはれる讀書子の階級で、明末から清末までの三百年間、官吏を出し、祖父だつたか、曾祖父だつたか、光緒年間に某省の布政使をやり、最後には巡撫になつたし伯父は浙江省蕭山縣の知縣であつたが、彼の父親は不肖の子弟であつたらしく、鴉片のみで、一家の生産を事としなかつた。一九一一年の辛亥革命は、彼の一家に致命的打擊を與へ、ことに大黒柱である伯父の死は、ほとんど一家を離散せしめた。甲斐性のない父親は、出奔を以て責任をのがれ、母親は秋白を頭に、五人の子供を背負つて、常に質屋通ひをしながら、それでも秋白を常州中學に入れ、ともかく卒業させたからエラい。しかし實喰ひするものも盡き、二進も三進も行かなくなつて、一夜縊死を遂げた。幸ひ伯父の家では、從兄が北京の陸軍部に勤めてゐたので、それを頼つて北京に行き、北京大學の試驗に合格した。ちやうどそのとき外交部が俄文專修館（ロシア語學校）を開設し、學資が要らないのみならず、卒業後はロシア公使館の隨習領事（領事見習）にするとか、或は東支鐵道の職員にするとかの特典があつて、從兄の世話にもあまりならなくていいので、すぐに轉校した。一九一七年の夏であつた。

この當時北京には、新文化運動の總本山として、北京大學が輝かしい存在を示し、學界をリイドしてゐた。一九一八年春には、同學内の左傾學生張國燾、韓麟符等に依つて「マルクス主義研究會」が産れ、同大學教授李大釗を總帥として、共産運動に發途したが、「俄專」では瞿秋白が、これに應じて、鄭振鐸、鄭世英、耿濟之等の同志を糾合して「新衣會雜誌」を出した。だがこの當時の秋白は、まだコムミユニストではなく、トルストイに傾倒する一文學青年だつたし、鄭振鐸のごときも、後「文學研究會」の領袖となり、今日作家として、批評家として鳴らしてゐるやうに、俄專系」の運動は、最初は文學的黎明運動だつたのである。とこ

ろが、翌一九一九年の五月四日、有名な五・四運動が起ると、それがやや社會運動的に傾き、鄭振鐸よりも、瞿の方が、この方面の指導者として有能なことを示した。事實、「俄專」の代表として、秋白の名は、學生界に普ねく知られたのである。（彼の遺した自傳『多餘の話』に據れば、五・四運動の後、彼は遂に「マルクス主義研究會」に加入したと。）

一九二〇年彼は「俄專」を卒業した。隨習領事になるとか、東支鐵道に入るとかいふ考へは、當然もうなくなつてゐた彼に、想ひがけないいゝ地位が提供された。當時北京一流の新聞であり、新思想の紹介に大童であつた「晨報」から、モスコー特派員になれといふ誘引である。この新聞は、梁啓超、林長民等のいはゆる「研究系」といふ政團の機關紙で、その點ちよつとイヤな氣もしたが一年二千元の收入は、一學生としては、辭退するのは可笑しかつた。彼はむしろ喜んで赴露し、その途中から、若々しい感激の筆を振つた。筆者も當時北京にゐて、彼の通信文を面白く讀んだ一人である。

モスコーに着いた秋白は毎日黑パンをかぢりながら、ロシア及びロシア革命に關する眞實を報道した。彼のロシア語の力は「俄專」在學中、すでにトルストイを飜譯し得たほどであつたから、モスコー着後第一日から、特派員としての仕事をするのに不便はなかつた。眞黑になつて書いた。その當時のロシアを報道したものとしては、彼の通信は、支那に於ける唯一のものであるばかりでなく、事によると世界的に價値があるかも知れない。彼の特派員生活は、一九二〇年八月から、約一年だつたと思はれるが、その文名は、もはや全支那的であつた。だが彼が張太雷――中國共産青年團書記――の紹介で、終に中國共産黨に入黨すると、晨報は彼の職務を停止した。しかし衣食に窮することはなかつた。一九二二年秋、東方勤勞者大學の「中國班」が開設されると、彼は助教授として、六十餘人の支那學生を指導することとなつたからである。

彼のモスコー生活は、翌一九二二年秋で打切られた。中國共産黨の首領陳獨秀がモスコーへやつて來て、その滯在中彼が通譯の任に當つたが、陳は、「ロシアのことも、もう大分研究しただらうから、歸國して中共に貢獻して呉れないか」と、そこで陳、張太雷とともに北京に歸り、間もなく上海に移り、一九二三年六月の中共第三次全國代表大會で中央執行委員に當選、同じ年、國民黨領袖孫右任をかついで、彼と鄧中夏とが中心となつて上海大學を創立し、教務長（教頭）兼社會學系主任になつた。この大學は、優秀な共産分子を多數輩出したことに因つて有名である。次いで一九二四年一月、中共と中國國民黨との合作が成立すると、國民黨第一次全國代表大會で、彼は候補中央執行委員に指名されたのである。

二十七歳の若さで、中共中央委員、國民黨中央委員候補、上海大學教務長。相當花やかであつたし、それに獨身と來てゐる。――結婚は一度したが、妻の王氏とは、僅か半歳ばかりで死別したといふから、當時は獨身だつたに相違ない。――異性の崇拜者が出て來ても、それは不思議でも何でもない。ただその崇拜者が、すでに他人の妻だつたに拘はらず、秋白との戀愛のために、夫と離婚し、改めて秋白と結婚し、しかも三人の間の友情は變らないといふ廣告を新聞に出したといふ點で、當時有名であつた。

上海大學は、無論男女同學だつたが、その女學生中で、一頭地を抜いた才媛に、沈楊之華といふがあつた。沈家に嫁入つた楊氏の女、名は之華といふ意味である。夫の沈剣龍は、國民黨の政客で、浙江派を牛耳つてゐた沈定一（字は玄廬）の長男である。一九二〇年の中共創立大會には、沈定一も發起人の一人として出たほどで、國共兩黨に跨る要人であつた。一九二四年に楊之華が上海大學に入學すると、沈剣龍も上海美術專門學校に入る。定一は定一で、これも上海大學の講師として自由講座を受持つ。同じく中共同志のこととて、慕爾鳴路三七二號に一軒を借り、二階に瞿秋白、施存統、その妻王一知、張太雷の四人が住み、階下は沈の一家――定一、剣龍、楊之華、その小さい娘、定一の妾王華芬――が占領してゐた。剣龍は美術愛好者といふだけで、何の取柄もない平凡な公子。それに引代へ秋白は、時の潮に乘つた論壇の流行兒。之華が剣龍を離れて、秋白の懷ろに飛び込むまでには、半歳とはかからなかつた。その結果、「民國日報」紙上に現はれたのが、次ぎの三つの廣告であつた。

> 沈剣龍・楊之華啟白。一九二四年×月×日我等は愉快に婚姻契約を解除する。但し友誼關係は依然として保留し、相互に敬愛する。